
IS 《インフィニット・ストラトス》 —雪風—

マーズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス

IS―雪風―

【Nコード】

N9066Q

【作者名】

マーズ

【あらすじ】

現兵器最強のIS『インフィニット・ストラトス』。何故か女性にしか扱えないISの登場により女尊男卑の世界が変わった。そんな中、ISが使える二人目の男として突如IS学園に現れる主人公。誰よりも空を愛し、そして飛ぶ事が好きな彼が繰り広げる日常と非日常の二重螺旋。

彼が見出す真の戦う理由は……そして守るべき存在は……。

出来るだけ投稿するつもりですが、作者の自己満足でできていますので、出来には自信がありません。ご了承ください。

キャラ設定を編集し直しました（9／14）

IS設定

時雨（正式名称——アイギス・ハイマニューバ・カスタム）

龍が使う専用IS。高機動戦闘と全領域戦闘をコンセプトに開発された技術実証機。

米国で開発されていた第三世代軍用IS『アイギス』をサルベージし、再設計した機体。そのため、『アイギス』時代の『他の追従を許さない超スピードで、敵勢力下に侵入。大火力を持って敵主力及び敵施設を無力化。そして、圧倒的な機動力で他のISを排除する』という開発コンセプトも実現させるため、ベーシックの機体に様々な武装を装備出来る換装システム、『マルチ・ウェポンズ・アタックメント・システム（MWA S）』を搭載している。しかし、汎用性を高めたせいで、武装ユニットを装備していないベーシックでの戦闘能力は極端に低い。

機体の着色は藍色がメイン。白・黄・赤が各所に塗られているが、藍の色が目立つ。

『時雨』と言う名は龍が付けた愛称。

時雨・性能評価型

テストモデル

第一話での時雨。主兵装や後付武器が未完成な機動テストモデル。

背中にはメインの発動機『可変パワーウィング』、両肩に副機動翼の『サブウィング』、腰に『サブスラスタ』、両脚部に『マルチ・クラスタージェット』を装備している。

武装は初期装備——ワイヤーアンカー、ストライク・ノヴァ、ビームブーメラン×2、チャフミサイル6門×2

時雨・高機動戦闘型ファスト・バック

本来の時雨。（変更点、非固定浮遊部位・腰のサブスラスタ・武装の追加等）

性能評価型と違い、両肩の非固定浮遊部位は多目的複合武装機動翼『タクティカル・ウィザード』に。

腰のサブスラスタは半固定式対空迎撃ビーム機銃『ラミントン』を搭載した『マルチ・ブースター』に変更されている。

武装等が完成した事により、以前よりも格段に出力・火力・機動力が向上している。

初期装備に変更はなし。

多目的複合武装機動翼『タクティカル・ウィザード（戦術魔法）』

通常は、サブウィング同様、機体の推力を担当するが、名の通り武装も内蔵している。

機動翼先端には可変出力ビームカノン『ツヴァイ』を1門ずつ。

機動翼前面は近接特化対艦刀『ツイン・クレイモア』。対艦刀として使用する際は収納されている柄がとび出てくる。使用時には刃（機動翼）前面にプラズマを凝着させ、切れ味とリーチを向上させる。勿論実体剣としても使用可能。また、対艦刀モードでも『ツヴァイ』は発射可能。

さらにツインクレイモアを一つに合体させた大型対艦刀『バスターソード』というモードもある。クレイモアよりも一撃の破壊力は高いが、燃費が悪く龍自身は殆ど使わない。

『マルチ・ブースター』

基本はサブスラスタ同様、機体の姿勢制御、及び推力偏向を担当

する。このユニットは腰に装備されているが、半固定式である程度の可動域を持つ。

そこに内蔵されているのが、後方迎撃や牽制を目的とした小口径ビーム機銃『ラミントン』。これも半固定式で180度全ての方向に射線をとる事ができる。ただ、あくまで牽制用なので威力はさほど無い。

時雨・強襲重武装型

パンツァ・バック

九話にて時雨に実装された重武装型。

時雨の開発コンセプトと矛盾するような仕様だが、その総火力は平均的なISの数機分に匹敵する。

高機動戦闘型とは比較にならない、複合物理装甲を装備。それに合わせて余分なスラスターやブースターは外され、要所要所に可変出力スラスターを装備している。

また、複合物理装甲には、何重にも対レーザー・粒子ビーム気化塗料コーティングが施されており、光学兵器などの直撃を受けてもこの塗料のおかげで傷もつかない。また、各部の装甲にはマイクロミサイルベイが多数内蔵されており、それら全てを戦術データリンクシステムによって誘導する事ができる。

背部の可変パワーウィング三基も二基が取り外され、残り一基も出力調整がなされている。

ブリーナク

また、右肩の付け目には、連射型電磁投射砲を装備。

両肩のタクティカル・ウィザードも取り外され、右肩には、自動防御追加装甲。左肩には、爆発式の反応装甲とその内側に大口徑荷電粒子砲を装備する。

オート・デ
ローエン
クリン

後付武装

五十口径アサルトライフルと六連装グレネードランチャーを複合した実弾射撃武装『ブレイズ・バレット』。

アサルトライフルの下部にグレネードランチャーを装備したオリジナル装備。

多仕様ビームカノンライフル『ライトニング』

これ一丁でサブマシンガンのような連射、スナイパーライフルのような精密射撃、全てを行える多機能ビーム銃。

銃口は四つのバレルで構成されており、連射・狙撃で形状が変化する。

大出力メガビームランチャー『ボルティクス』

未完成の大出力大口径ビーム砲。完成後は背中の三基のパワーウィングの中心に装備される予定。

元々は広域殲滅戦仕様の大出力ビームランチャー。余りの威力と使い勝手の悪さに開発中止、お蔵入りした兵器。時雨開発当初、レイラが掘り起こし再開発。時雨への実装を進めている。

使用する際には『ライトニング』と接続し、さらにジェネレーターと直結させる必要がある。

本編の第四話にて急造仕様の試作型が登場する。

大口径散弾銃『ヘルハウンド』

四話にて登場する散弾銃。ショットガン

口径さえあれば、スラッグ弾以外の実包も装填できる。ショットシェル

近接武装複合型自動拳銃『アーヴァンク』

四話にて登場する自動拳銃。

マシンピストル
フルオートマチック
セミオートマチック

実弾だが、全自動式・半自動式の機能があり、任意で変更可能。

また、銃身下部には耐ビームコーティングを施された刀身を備えられており、近接での打ち合いもできる。

六連機関砲『フレズベルク』

口径35mm六連装型のガトリングガン。

時雨の後付装備の中では二番目の重武装（一番目はボルティクス）。使用する際は、右腕もしくは左腕のハードポイントにマウントする。片手でも構えられるが、かなりの重量と反動があるため、銃身がぶれやすい。

物理装甲内臓六連装レーザー機関砲『フレズベルグ？』

ガトリングガン

強襲重武装型の左腕に装備されているシールド装甲の裏に装備された六連装レーザーガトリングガン。

ISのエネルギーを消耗するが、任意でエネルギー率を調整できるので燃費はいい。

フアーン

量産型第二世代IS。

背中には大出力の単発ブースターを装備。また、ノズルは三次元推力偏向ノズルになっている。さらに機動翼が左右に一基ずつ搭載されている。

優れた空力制御装置と推力制御装置によって、技量のないパイロットでも三次元機動を行える。

また、物理装甲が少ない分機体が軽く、同世代の中ではトップクラスの機動力を有している。

機動力を生かした格闘戦闘機動が得意。しかし、ガード性能や後付装備の収納数不足なのが原因で世界シェアは四位。

現在、ファーンの次世代機に当たる『ファーン？（ファーン・ザ・セカンド）』の開発が進行中。

オリキャラ設定

龍・S（不知火）・ラインフォード

本作のオリキャラ主人公。

黒い瞳に、セミロングの漆黒の髪をゴムバンドで一縛りにしている。身長は一夏よりも少し高い程度。

性格は基本的にお人好し。文句は言うが、なんやかんや言って人を助けてしまうタイプ。だが、自分の中にある譲れないもののためには一步も引かない意思がある。

特技は物騒でナイフ投げ。姉から伝授されたの腕は動く獲物でも百発百中……らしい。物騒な特技だが、趣味は読書で意外と普通。

過去ブリュンヒルデの名を冠され、『金のブリュンヒルデ』と呼ばれたマリアーナを義姉に持ち、義祖父に不知火財閥創設者『不知火・源一郎』を持っている。しかし今でこそ家族はいるが、元は孤児で実の家族は一人もいない、孤児だったところを不知火財閥の孤児院に拾われた。

第1回モンテ・グロッソ大会で一夏や千冬と出会い、第2回モンテ・グロッソ大会で一夏と共に『謎の組織』に攫われる。

その後、些細なきっかけでIS適性があることが判明し、マリアから直々に教育を受ける。一夏の入学に合わせIS学園に編入することになる。

アスラ
阿修羅

龍の中にいるもう一つの人格。いつもは表に出てこないで龍の言葉にも答えないが、何故かここ最近をよく現れている。

性格は荒っぽく、戦い方にもその性格が反映されている。そのため、身体を顧みない戦い方をするので大概その後ベッド行き。

アスラ
阿修羅の方が力があるのか、いつも龍の意識を押しつけて身体のコ

ントロールを奪い取っている。龍と違い、何かを知っているようだが……。

マリアーヌ・ラインフォード

主人公の義姉。

金髪碧眼に腰近くまで伸びるウェーブのついた長髪をしている。さらに巨乳。

愛称は『マリア』。公では財閥で義祖父の手伝いをしている“仕事の出来る女”だが、私では異常なほど義弟を溺愛する“重度で重症なブラコン”。

マリア本人も孤児で不知火財閥の孤児院で幼少期を過ごした。龍とは孤児院で会ってからのずっと姉弟の関係。ソフィアとも孤児院で会い、互いに姉妹の様に暮らしていた。

龍のIS学園行きには難色を示しており、かなり義弟の事を心配している。

不知火・源一郎

龍やマリアたちの義祖父。

天下の不知火財閥の創立者であり、現IS委員会でも顔が利く大物。でも只のエロ爺（龍談）。

一代で世界でも屈指の多国籍企業を立ち上げ、その企業は民間でありながらISの保有を許されている。

龍やマリアたち孤児院の子の義祖父をやっているが、勿論所帯持ち。龍と同世代の孫娘がいる。

レイラ・レイター

主人公のIS『時雨』の開発責任者。

水色の髪をツインテールにして留めている。目は髪と同じ水色。通称『童顔幼女レイラちゃん』（命名は龍）。中学生……下手をするともっと年下に見られてしまうほどの童顔で、身長が低い。だが、それでも一応今年で二十歳らしい。非常に怒りっぽい、IS技術者としての才能はピカイ。現在は不知火財閥のお抱えIS研究者として『時雨』と量産型ISの研究・開発の指揮を執っている。

ソフィア・ベルクストレーム

北欧出身で肌は白く、栗色のショートヘアーに青い瞳。彫刻のように整った顔付きをしている。

口が上手く、言い負かすのが得意……というか好き。ソフィアに掛かれば龍やマリア……不知火・源一郎ですら口喧嘩では敵わない。龍にとっては姉貴分、マリアにとっては双子の姉妹の様な存在。

龍たちと同じで孤児院出で現在はSSSに所属し、GTIの新型ISのテストパイロットを任されている。IS操縦の腕は一流。マリア以上に仕事の出来る女。そして巨乳。

オリキャラ設定（後書き）

キャラは話が進みに合わせて増やしたり、一部編集する予定です。

その他の設定

不知火財閥

世界でも五本の指に入る多国籍大企業。創設者は『不知火・源一郎』。

工業製品だけでなく、軍需関係の製品も多く製造しており、分野や多岐にわたる。

また、ISを独自研究開発を行っており、IS開発者『レイラ・レイター』等優秀な人材を複数抱えている。

龍が使うIS『時雨』も系列の民間軍需企業『グローバル・テクノロジー・インダストリーズ（GTI）』製であり、現在、時雨の戦闘データを基に量産型ISの研究開発に着手している。

また、龍の義姉マリア・ヌが所属する民間軍事プロバイダー『不知火・セキュリティ・サービス』も系列の会社の一つで、実質的な不知火財閥の『プライベート・ミリタリー』である。

その他の設定（後書き）

今後、本編の進行に合わせて編集予定。

第一話〜IS学園〜

IS——正式名称『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツだ。開発当初、『白騎士事件』を発端に世界に圧倒的な力を示した。当時の軍事バランスはたった一機のISによって崩壊し、ISの軍事転用、各国の軍事抑止力の要として運用されるようになる。

そして現在、ISの軍事利用は国際法『アラスカ条約』で硬く禁じられ、ISは『スポーツ』の一つとして使われている。馬鹿げている……。

ISには戦闘機以上の機動力、戦車では比較にならない装甲、戦艦の火力を越す武装……どれをとっても近代兵器とは一線を引く『究極の機動兵器』の地位を築いている。そして、ISはなぜか女性にしか反応しない。つまり、最強の兵器を動かせるのは女性だけなのだ。

男尊女卑の世界は一瞬で女尊男卑の世界に変わった。

「別に男尊だろうが女尊だろうが、俺としてはどっちでも構わないけど」

ISの力を自分の力だと勘違いしている者は嫌いだ……。

《まもなくIS学園前——IS学園前に止まります。お出口は右になります》

荷物を背負う。モノレールが止まり、ドアが開く。駅の外には広大な土地に並ぶ近代的な建物の数々が見える。

IS学園——アラスカ条約に基づいて日本に設置されたIS操縦者育成用の特殊国立高等学校だ。

「これからどうなるか……」

校門前に立った龍は学園を目にしてそんな事を口走った。

「ま、なるようになるかな」

彼はIS学園の門をくぐった。

広い学園内を散策しながら校舎を目指す。本当は授業の始まるまでに到着して手続き等を終わらせておきたかったが、生憎乗っていた飛行機が天候不順で二時間遅れてしまい、今は9時過ぎ。授業が始まっている時間だ。

「『時雨』が使えたのならここまで来るのに数時間で済んだが……流石にISで不法入国するわけにも行かないか」

自身の左腕を見てそう呟く。そこにはグローブの状態で待機モードになっている専用IS『時雨』がある。

その時、上空で爆音が轟いた。見上げてみると青いISと白い翼を持つISが学園上空を飛行している。青いISが降下し、校舎の影に消える。どうやらグラウンドがあるようだ。さらに青いISに続くように白いISも降下してくるが、どうも様子がおかしい。

「……………突っ込むな」

次の瞬間、物凄い轟音と共に砂煙が舞い上がった。

「まあ、減速無しに地面に突っ込めばそうなるわな」

だが、パイロットには大したダメージは無いだろう。ISには優れた慣性制御システム『パッシブル・イナーシャル・キャンセラー』、パイロット・機体の保護を目的とした『シールドバリア』と『絶対防御』が搭載されている。衝突時の慣性は殆どがキャンセルされ、衝撃波もシールドバリアによって弾かれる。IS本体には傷どころか砂汚れもつかない。

グラウンドに出ると砂埃の合間から見事なクレーターを見る事ができた。その周りには授業中の生徒（女子だけ）がいる。皆ISの操縦のため専用のスーツを着ているので体のラインが強調されている。目の保養にはなるが……………正直女子が30人もそんな格好をしていたら目のやり場に困る。

「ん？」

クレーターを作ったISパイロットの顔が見える。

「アイツか……………相変わらずそうだな」

先程よりも幾分柔らかい表情を浮かべると龍・S・ラインフォー

ドは足を勧めた。

やらかしてしまった……!!。白式を使ってグラウンドにクレターを作ってしまった織斑一夏は心の中でそう叫んだ。

「馬鹿者。誰が地上に墜落しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」

「すみません」

周りの女子達はクスクス笑いで瀕死の状態になっている。

とりあえず姿勢制御してホバリングしてみると、自分のしでかした事がよく分かった。

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやっただろう」

腕を組み、目じりを吊り上げなら幼馴染の箒が待っていた。しかし、教えたね……あれで教えたつもりなのか？

昔と違って冗談も言うようになったんだな、箒……。

「貴様、何か失礼な事を考えているだろう」

女とはとても感のいい生き物だ。

「大体だな一夏、お前と言う奴はいつも……」

「大丈夫ですか、一夏さん？ お怪我はありませんか」

と、そこにセシリアが駆け寄ってきた。

「あ、ああ、大丈夫だけど」

「そう、それは何よりですわ」

安心したのか、楽しそうに笑うセシリア。先日は俺のことを嫌っているように思えたのだが、この変化は何なのだろう。女心と秋の空と言う言葉があるが、天気よりも遥かに読めない……この言葉を作った奴出て来い。

「……ISを装備していて怪我などするわけが無いだろう」

「あら、篠ノ之さん。他人を気遣うことは当然。それがISを装備していても、ですわ。常識でしょ？」

「お前が言うか、この猫かぶりめ」

「鬼の皮を被っているよりはマシですわ」

箒とセシリアの間に激しい火花が飛んでいる………ように見える、何故だが……。

「まったく、女の嫉妬とは恐いものだな」

「何だと（ですって）！？」

箒とセシリアが声の主に向かって怒鳴り散らそうとするが、その主を見て動きが止まる。一夏も声のした後の方を見る。

「しかし、一夏も罪作りだな。気をつけないと夜な夜な背中から刺されるぞ」

肩に荷物、手にアタッシュケースを持った黒髪の青年が立っていた。

「えーと」

どうやら、突然現れた男の方は自分の事を知っているようだが、どうも思い出せない。覚えがあるのだが……。

「どうやら、覚えていないみたいだな。ま、久しぶりだし仕方ないか」

俺が覚えていないのは分かっていたようだが、その表情は少し残念そうだ。

「龍だ、不知火・龍」

「あ…」

名前を聞いた瞬間、思い出した。

「龍、本当に龍なのか！？」

「ああ。やつと思ひ出したか、バカ一夏」

拳を突き出す親友は昔のそれと変わらない笑みを浮かべた。

一夏と拳を交わす龍。

「でも、何で龍がここに……」

当然の疑問を投げかけてくる一夏。

「ああ、それは……」

！ 殺気！？

刹那、電光石火の早業で龍と一夏の頭に千冬の『出席簿』が命中した。

「貴様ら、いつまで喋っている？」

そこにはジャージ姿の織斑千冬が立っていた。

「千冬さん……久しぶりに会って早々これは無いでしょう」

「龍、事前の連絡なら今日の7時には学園に着いている筈だが？」

「乗っていた飛行機が天候不順で二時間以上遅れたんです。決して俺の責任では」

千冬の釣り上がった目が鋭く光る。

「――すいません。連絡ぐらいいは入れるべきでした」

「当然だ、馬鹿者。今からお前の紹介をするさっさと穴から出て来い」

そういう千冬は状況の飲み込めない筈とセシリアを怒鳴り散らして穴の外へ追いやった。

「相変わらずそうだな、千冬さん」

「そうか？」

「俺からしたら」

「ふうん。龍、学校の中じゃ織斑先生って言わないと『アレ』を食らうことになるからな」

「出席簿ね、凄まじい破壊力だな」

「やられた所がタンコブになっている。」

「また食らわないためにもさっさとここから出るぞ。一夏、ISを展開してくれ」

「？ ああ」

白式を展開する一夏。

「ほいパス」

「のわっ」

一夏に持っていた荷物を投げ渡す。身軽になった龍は軽やかにジャンプをして穴から飛び出た。

「調子は良いようだな」

「まあ、程ほどに。昔に比べたら少し丈夫になったかと」
千冬の言葉に龍はお茶を濁した。

「おい、龍。人を荷物運びに使うなよ」

「丁度良かったんでな。ついでだからそのまま持っていてくれ」

「ついでって……分かったよ、たくっ」

文句を言いながらもちゃんと荷物を持っていてくれる一夏。昔からコイツはこういう奴だ。

「全員、整列しろ」

散らばっていた女子が整列する。ISスーツを着ているので健康的で女性らしい艶やかな肌が目に入る。例えるならスクール水着だろうか。殆どの女子が太ももを露出させている。程よく締め付けられた女体には豊満な双丘が……。

パアンッ！

「自己紹介しろ、ラインフォード」

「――了解」

正確に先程と同じ場所を狙われた。だが、悲しいかな。こういった事を考えるのは男の嵯峨なのだ。

「本日を持ってIS学園に編入する事になった。龍・S・ラインフォードです。見れば分かると思いますが、男です」

「きゃ……」

「きゃ？」

「――「キャ――！！！！」」

グラウンドどころか学園中に響くくらいの喚起の叫びを上げる。

「男子よ！ 二人目の男子！！」

「しかも内のクラスよ！！」

「美形！ 織斑君よりもカッコイイ――！！」

クラスの女子達が騒ぎまくる。このような状況には慣れていないせいか、全く付いていけない。

「あー、騒ぐな。静かにしろ！」

心底面倒くさそうに千冬がぼやく。仕事とはいえ、女子高生の乗りが鬱陶うつとうしくて仕方が無いのだろう。

「み、皆さん。お、落ち着いてください」

千冬と一緒にいるもう一人の女性の教師が騒いでいる女子達を注意するが全く効果が無いようだ。

「全員、今は授業中だ。色々こいつに聞きたいことはあるだろうが、それは後にしてくれ。授業を再開するぞ。山田君」

「は、はい！」

真耶が持っているリモコン？のようなもののスイッチを入れると学園上空に黄色いリング状の画像が立体投影された。

「織斑君、オルコットさんは今から上空にあるリングを順に潜っていつでももらいます。数は30個。それをリングの番号順に通り返してください。そして全て通り返けたところで……」

グラウンドの上に先程のリングよりも二回り小さいリングが現れる。

「あの小さいリングを通過し、完全停止をやってもらいます」

「うわ、あんな小さいリングを通り返せるのかよ……」

「十分だろう、ISよりも一回りは大きい」

龍の言うとおりの最後のリングはISよりは大きい、一夏からしたら小さいようだ。

「織斑、オルコット。上空のスタート位置に向え」

「分かりましたわ」

セシリアはISを展開する上空に上がっていた。

「おい、さっさと上がれよ」

一夏に持たせていた荷物を回収する。

「分かってるよ」

一夏も遅れて上昇する。

「ラインフォード」

「何ですか、織斑先生？」

「お前も上がれ」

「は？」

「惚けるな。その左手……ISだろう」

「……」

千冬の視線が龍の左手に注がれる。

「マリアから聞いている。使えるのだろう」

「――姉さんから聞いているのなら、分かっているでしょう。このISは」

「構わん、使え。もし問題になってもこちらで処理する。お前はすでにこの学園の生徒だからな」

「生徒ね……」

「教師の言う事は聞け。分かったらさっさとしろ」

「――分かりましたよ、荷物お願いします」

そういうと、龍は左手を胸に持っていき、目を瞑った。

来い時雨……。

次の瞬間、待機状態だったISが量子変換により瞬時に展開される。全身を覆うISの装甲の色は藍。背中に三基の可変パワーウィング、腰に半固定式サブスラスタ、両脚にマルチクラスタージェット、両肩に非固定浮遊部位のサブウィング。全身に搭載された複数の推進器から彼のISがスピードを重視した機体だと分かる。

「えー！！ ラインフォード君、もうIS持ってるの！？」

「うっそ！！ 専用機！？」

「いいな」

女子達がそれぞれに羨ましそうな声を上げる。

「では、後ほど」

刹那、ISを纏った龍は天に舞い上がった。

「え、ラインフォード君。すでにISを……」

龍がISを持っていることを知らなかったのか、啞然としている真耶。

「ああ、まだ公にはされていないがな……本人と同じく」
「どういことですか？」

「色々とワケありな奴なんだ。アイツは」
そう言うのと千冬は空を見上げた

上空で待っていた一夏とセシリアが驚いた顔をして出迎えてくれた。

「あ、あなた専用ISを既にお持ちですか？」

「ああ、先日ロールアウトした新型機だ」

「龍にもISが用意されたのか？」

「そんなところだ」

《三人とも聞け、スタートから60秒以内にここに戻ってこい。コ
ンマ一秒でも遅れたらグラウンド50周だ》

「60秒か……」

「龍、何だか楽しそうだな」

「まあな、空を飛ぶのは嫌いじゃないからな」

「随分と余裕そうですね」

「余裕そうじゃない、余裕なんだよ。専用機持ち」

「私はセシリア・オルコットと言いますの。専用機持ちでも随一の

……」

「一夏、どんなに遅くても50秒は切れよ」

「ど、努力するよ」

「聞いていますの!？」

「聞いていない」

「馬鹿にしていますわね!？」

「そのつもりはないがな。聞く必要が無いと思ったただけだ」

「なっ、何ですって……!!」

《いつまで喋っている? 三人ともスタート位置に付けて》

「そこまで自我自賛するなら、この程度のレースわけないだろう?」

「当たり前ですわ、身の程を知りなさい」

《皆さん、用意はいいですね。では、用意……スタート!!》

真耶の掛け声と同時に三機のISが飛翔する。

「なっ」

「あれだけ、大口を叩いていた割にはゆっくりとしたスタートダッシュだな」

セシリアの前に悠然と出る龍の藍色をしたIS。

「どこまで着いて来れるか見物だな」

そう言うのと、龍は背中の三基の可変パワーウィングの出力をミリタリーにまで上げた。最初のリングは山道のような形で配置されている。龍は自身の運動エネルギーをロスしないためにリングの縁ギリギリを飛行する。後方のセシリアも何とかそれに食らい付く。一夏は完全に出遅れている。

次のリングは俗に言う180度ターンだ。それもかなり旋回半径は小さい。今、龍の出している速度でコーナーに入ったら遠心力により外に押し出されてしまう。が、龍は減速無しでコーナーに侵入。脚を前に出し、両脚に搭載されたスラスタと背中の三基のスラスタで発生する遠心力を殺し、高速ターンを決める。

普通なら死んでるな……。

通常なら余りの力にパイロットが圧死してしまうところだが、ISに搭載されたPICにより発生する力が相殺される。が、それでも殺しきれない力が龍の体に掛かる。それでも顔色一つ変えず龍はその力に耐え抜き180度ターンをクリアした。この段階で既にセシリアとは100m以上の差が出来ている。

「少し、大人気なかったかな？」

セシリアも何とか180度ターンを決めようとするが、どう見てもオーバースピード。最短コースから大きく外れてしまう。

その後も『スプリットS』や『シャンドル』、『ベクタード・スラスト』等の航空機が使うマニューバを披露しながら次々とリングを通り抜けていく。

そして、ラストのグラウンド上空のリング。高高度から降下してきた龍は最後のリング通過と同時にウィングのスラスト・リバーサを使って急制動。見事に完全停止までやってのけた。

「30秒か。悪くないタイムだ」

それに遅れること、それに遅れること12秒。息の上だったセシリアもゴール。そして……

「59，48秒。本当のところはグラウンドを走らせたが……今回は見逃してやろう」

「有り難うございます……」

三位でゴールした一夏は項垂れていた。

「まあ、そう落ちこうな」

「一番でゴールした龍に慰められても嬉しくない」

「贅沢な奴だな。今のオルコットにそう言った言葉を掛けて欲しいのか？」

「――遠慮しとく」

「賢明な判断だ」

セシリアは鬼のような形相で龍の事を睨みつけていた。

「あ、あなた一体なんですか！？ 何であんなにISの扱いが上手いのですの！？」

「ISと言うよりも空を飛ぶことが上手い……なんだがな」

「どちらでも構いませんわ！！」

「はぁ……」

確かに男である自分がここまでISの性能を引き出せば気にもなるか……だが……。

「言ってもどうせ分からないだろうな」

本当の事を言っても今のセシリアには到底理解できないだろう。余り他人の力を借りるのは趣味ではないが仕方ない。

「俺のファミリィネームから見当は付かないのか？」

「ファミリィネーム？」

「あれ、そういえば、ラインフォードって……」

「もしかして第一回モント・グロッソ大会で織斑先生と互角に渡り合った……」

「まさか、マリアーヌ・ラインフォードのラインフォードですよ！？」

「ああ、俺はマリアーヌ・ラインフォードの弟だ」

「「え〜！！！」」

「――義理の弟だけど、な」

小さくそう付け加えるが、騒いでいる女子達の耳には聞こえなかった。

「そういえば、マリア姉って元気にしているのか、龍？」

「ああ、相変わらずだ。お前や千冬さんによろしくと言っていたよ」

「そっか。久しぶり会いたかったな」

女子達が騒いでいる横で龍と一夏は昔話に花を咲かせていた。

「マリアーヌ・ラインフォードの弟……こんな男が……人を馬鹿にしてあざ笑うような非道な男が」

「随分と酷い評価だな、おい」

「納得がいきませんわ」

「お前が納得しようがしまいが、事実が事実。受け入れるんだな」

「お、織斑先生！ 彼が言っていることは……」

「事実だ。ラインフォードはマリアの弟だ。第一・二回モント・グロッソの時にはマリアと共に会場にも来ていた」

「懐かしいですね」

「そういえば、龍と始めて会ったもモント・グロッソだったな」

「そういえば、そうだな」

「そ、そんな……」

全てに絶望したような顔をするセシリア。どうやらマリアの事を敬愛してたらしく、ショックが大きいようだ。

「まあ、現実なんてそんなもんだ。元気出せよ」

余りに可哀想に見えたのか、龍が励ましの声をかける。

「くっ、情けを掛けられるなんて………屈辱ですわ！！」

逆上するセシリア。

「こうなったら、決闘ですわ!!」

「――どこをどう考えたらそんな結論に至るんだ？」

「お黙りなさい!! 決闘といったら決闘ですわ!」

このような何も言ってもセシリアは引かないだろう。どうも手に負えない。

「織斑先生」

困った時の神頼み……ならぬ先生頼み。

「面白そうだな。山田君、午後から空いているアリーナはあるか」

「は、はい。今日は第三アリーナが空いているはずです」

「よし、午後からオルコットとラインフォードによる戦闘実習を行う」

「ち、千冬さん」

「パアンッ!!」

「織斑先生と言え」

「はい……」

出席簿の角は硬い。

「でも、俺は嫌ですよ。何でこんな自尊心の塊みたいな女と勝負なんてしないといけないんですか？」

「不服か？」

「不服と言うよりもこんな理由で飛ぶのが嫌なんですよ。それに……」

龍は声を伏せながら千冬に耳打ちした。

「俺の『時雨』はまだ未完成で実戦等のテストは全くやっていないんです」

「何か問題があるのか？」

「火器兵装をコントロールするFCSとISのハイパーセンサーとのリンクが出来ていません」

「つまり、火器は使えないと？」

「そうです。ついでに後付武器がまだありません」

「なら肉弾戦で何とかしろ」

「流石に肉弾戦は分が悪いかと……」

「文句の多い奴だな、初期装備はあるだろう」

「まあ、ありますけど……」

「なら問題ない」

そう切り捨てると千冬はセシリアの方に確認をとる。

「どうだ、セシリア？ コイツは『貴様のような自尊心の塊女なんて眼中にない』と言っているぞ」

「ほう……どうやら、徹底的に痛めつけなければならないようですわね」

対抗心と言うより怒りの炎を燃やしまくるセシリア。それよりも千冬さん、俺の言った事を脚本して言うのは止めてください。

「よし、話が纏まったところで授業を再開するぞ」

何事も無かったかのように再開される授業。午後からの行われる決闘の事を考えると憂鬱になりそうだ。

午前の授業が終わった所で龍は用意されていた部屋に荷物を置き、制服に着替えた。だが、こういった服を殆ど着た事がない龍にとって制服は堅苦しくて仕方が無いようだ。胸の部分のボタンを一つ留めないで少しラフな状態にする。

「しかし、来て早々何でこんな事になるかな」

着替え終わったところで腰に付けていたベルトを付け直す。ベルトには皮製のポーチがぶら下がっている。中身は戦闘用のナ……ゴホン、護身用の武器がしまっている。

「待たせたな、一夏」

「いや、そんなに待ってないし」

部屋の外では一夏が待っていた。

「龍、飯はどうする？」

「朝から何も食べていないからな。ただ学食に行っても落ち着いて

食べれないだろうし」

「なら、購買で何か買ってくるよ。教室で待って置いてくれないか？」

「分かった、悪いな一夏」

「気にするな、教室の場所分かるか？」

「ああ、地図は持っている」

「じゃ、後で」

一夏と分かれた龍は手の地図を頼りに一年一組のクラスを目指した。暫く校舎の中を歩くと、目的に着いた。

「一年一組……ここだな」

中から女子の話し声が聞こえる。一夏と自分を除いたら全員が女子なのだから当然といえば当然だ。

地図を終うと龍は教室のドアを開けた。

龍と分かれた一夏は急いで食堂まで行き、二人分の菓子パンを購入した。昼休みが始まってすぐに買いに来たため、好きな物を買う事ができた。

「よし、後は教室に戻るだけだな」

さっさと持っていけないと空腹の龍が怒り出すだろう。今の龍はそうでもないようだが、昔は空腹になるとよく不機嫌になっていた。「よし！」

教室に向おうとして一つある事を思い出した。今は昼、そして一年一組の生徒は午前中ずっとI Sの訓練をしていた。当然、女子達は昼飯の前に制服に着替えるだろう。男である一夏や龍はアリーナの空いている更衣室で着替えるが、女子は普通教室で着替える。

「あ……」

一夏の顔から血の気が引く。自分はその事を重々している。だが、一名その事を知らない者がいる。

この時間なら女子達はまだ色々やっているはずだ。着替えとか着

替えとか……e t c。

その中に龍が入ってしまったとすれば……待っている結末は一つ……。

「間に合ってくれ!!」

本日最速で教室に向う一夏。

その頃、龍は今までの人生の中である意味最大の窮地に立たされていた。

「み、皆、とりあえずお、落ち着かないか？」

すり足でちよつとずつ後ろに下がりながら龍は引き攣った顔でそう言った。

「どうしたの、ラインフォード君？ そんな顔をして」

女性らしい柔らかで細い腕が伸びてきて龍の腕を捕まえる。声をかけてくる女子達は皆聖母の様な穏やかな表情をしているが、目が……目が笑っていない。

「この事はどう考えても俺が悪かった。ちゃんと謝罪もするし……だから、一旦外に行ってもいいかな？ 男である俺がこれ以上この場にいろのは――」

後もう少しで背中ドアに手が届く。だが、右手に感じた感触は金属の冷たい感じではなく、暖かくそして柔らかいものだった。

ガクガクと後を振り向いて見るとそこには下着姿のクラスメイトが満面の笑みを浮かべて立っていた。どうやらこの感触は彼女の胸に触ったときのものだったらしい。慌てて引っ込むが右手が彼女に囚われる。

「ラインフォード君、どこに行くつもりだったのか？」

少し首を傾け、可愛らしく聞いて来るが、その背後には人ならざるオーラが漂っている。

「い、いや……」

あっという間に周りを包囲される。これで逃げ場は無くなった。

「ラインフォード君、私達あなたと色々お話したかったんだよ」

「そ、そうなのか」

「うん。ダ・カ・ラー——今から一杯お話しない？」

「わ、悪いが、今はちょっと」

何とか押さえられている手を振りほどこうとするが、彼女らは腕に体を押し付けてくる。柔らかくも弾力のある感触が……

「ダメだよ、逃げたら。ちゃーんとセ・キ・ニ・ンとってもらわないと♪」

さらに押し付けられる女体、女性特有の甘い匂い、耳元で囁かれる甘い声。普通なら嬉しいはずのそれらが、地獄の拷問のように感じられる。

「ラインフォード君」

何故だか、この一言が死刑執行のように聞こえた。

「龍——!!」

階段を駆け上がり、教室の前にたどり着いた時、廊下には『モノ』が転がっていた。

「りゅ、龍？」

近づいてもう一度、声をかける。

「い、一夏……か……?」

龍はたった数分間でボロ雑巾のような酷い有様に変わり果てていた。

「だ、大丈夫か？」

「……………なわけあるか」

龍の首が廊下に落ちる。

「龍——!!」

10分後、所変わってここは校舎屋上。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

会話も無く、淡々と進む食事。この場にいるのは龍・一夏・箒・セシリアの四人だ。

どうしたものか……。

先程意識を取り戻した龍はこの後どうするか悩んでいた。

「篠ノ之、オルコット……」

「何だ？」

「何ですか？」

「「『スケベ大魔王』」」

「……………」

教室の中で何が起きたのか、想像に難くないだろう。

「わ、悪かった。この通りだ」

頭を下げ、土下座をする龍。

「謝って済む問題か！」

「そうですね、謝って済むのならこの世に警察というものも存在しなくてよ」

「うっ」

御もっともな返答に言葉が詰まる。

「全く不埒な方ですわね！　このような愚弟をお持ちのマリアーヌ様が可哀想ですわ」

「男子たるものがこんな変体趣味を持っているとは……もはや救いの余地無しだな！」

各々に罵声を上げながら食事をする二人、午前中見せたあの不仲からは考えられない息の合い方だ。

「覗いてしまったのは本当に悪かった。だが、決して覗こうとはしていない。あれは事故だったんだ」

「何を証拠に？　現に覗いたではありませんか！」

「もう少し上手く嘘を付くんだな！　この変体」

弁解の余地は微塵も残っていない。

「……せめて『スケベ大魔王』だけは勘弁してくれないか？」

「ふん、公然と覗きする者には一番お似合いですわ」

「貴様の名前などこれで十分だ」

聞く耳も無い。

「一夏、この事の原因はお前にもあるぞ」

「す、すまない」

「人に責任を擦り付けるのか！？」

「一夏さんに一体何の責任があると言うのですか！？」

鬼のような形相を浮かべる二人。

「お前、随分とこの二人に好かれているようだな」

「そ、そうなのか？」

「ああ、しかも二人ともお前の事がす…グウ！？」

「な、何を言っているのだ！？」

「そ、そうですわ、冗談を言うもの大概にしてください！？」

龍の言葉を妨げるためか、口の中に箸の箸とセシリアのフォークがぶち込まれた。見事な早業だった。

「お、お前ら！！ もし先に食材がなかったら喉に刺さっていたぞ！」

口と喉が痛むのか涙目の龍が抗議を上げる。

「お、お前が悪いのだろう！！」

「そうですわ、こちらの気も知らないで！！」

顔を真っ赤にして抗議する二人。

「さっさと言うこと言っとかないと横から持っていられるぞ、いいのか？」

「な、何を知った風に！？」

「あなたに関係ないですわ、このスケベ大魔王！！」

言い争う三人、だが若干一名その話についていけない者がいた。

「えーと、何だったんだ？」

こうして一波乱あった昼休みは終わった。

昼休みを終え、セシリアとの決闘……もとい戦闘訓練の時間となった。龍は第三アリーナのピットの中で発進の準備を進めていた。

「龍、来て早々やらかしたそうだな？」

「…………もう既に聞いているんですか？」

「ああ、クラスの女子から苦情が来てな。皆かなり怒っているぞ」

「笑い事じゃないですよ……」

「自業自得だ。入る時にノックぐらいしていれば、こんな事にはならなかったのにな」

「うっ」

千冬の言うとおり、入る時にノックの一つでもしていれば最悪の事態は避けることが出来たかもしれない。

「後は自分の力で何とかしろ。この勝負についてもな」

「どうしろって言うんだよ……」

重い溜め息を付きながら、龍はバイザー型ハイパーセンサーのHUDを見ながら機体をチェックしていく。

「イギリスの第三世代型IS。その一号機『ブルー・ティアーズ』か」

ライブラリーから必要なデータをダウンロードする。流石に相手の情報無しに戦うのは分が悪い。

「アイツの狙撃の腕はかなりのものだぞ。気をつけろよ」

「いいのか、俺のピットの方にて。オルコットの方にてやれろ」

「い、いや。昼の事は俺も悪かったと思っているからさ」

「…………それになんで篠ノ之までここにいる？」

「べ、別にどこにしようとするの勝手だろう」

大方一夏に付いてきたのだろう。

「龍、準備は出来たか？」

「一応は…………幾つか不安要素はありますが、戦闘に支障は出ないで

しょう」

「よし、全員カタパルトから離れろ」

千冬の指示で一夏たちがピットに戻る。

《ラインフォード君、準備は大丈夫ですか？》

「お気遣い無く、いつでも大丈夫ですよ」

リニアカタパルトにISを固定する。

「リニア出力規定値を突破、射出準備完了、カタパルトオールグリ
ーン。『時雨』出るぞ！」

射出と同時にアリーナ上空へ上がる。

「来ましたわね、この外道」

「…………だから、悪かったって言っているだろう」

上空で待っていたセシリアのいきなりの罵声。言い返す気力も段々失せてきた。

「お黙りなさい！ この勝負に私が勝ったらあなたは私の奴隷、いいですわね？」

「奴隷ね、このご時世に似合わない古臭い言葉だな」

「今の内に吼えていなさい。すぐに格の違いを見せてあげますわ」

「そうかい、なら俺が勝ったら『スケベ大魔王』は撤回してくれ。」

許してくれとは言わないから」

「そうですね、あなたが勝てたらの話ですけど！」

《警告、ロックされています》

セシリアの持つスターライトMK？が火を噴く。狙いは正確に右肩の非固定浮遊部位型のサブパワーウィング。龍は体勢を変えずに脚部のクラスタージェットと背中の中三番可変パワーウィングを瞬時に点火、機体を左にスライド移動させる。レーザーの奔流が機体擦れ擦れを流れ過ぎる。

「勝負は始まったばかりだ。慌てる必要も無いだろう」

シールドエネルギー減少なし、物理ダメージなし、各部スラスタ

―動作異常なし。

「しょ、初撃を避けられるなんて……」

余程自信があったのか、避けられるとは思っていなかったのだらう。

「どうした、一発で終了か？」

「くっ！　今のはワザと外したのですわ」

「なら、今度は当てるんだな」

スターライトMK？を構え直すセシリア。龍は各部のスラスターの出力をミリタリーに上げる。

先に動いたのは龍だった。三基のパワーウィング、肩のサブパワーウィング、腰のサブスラスター、脚のクラスタージェットが瞬時に点火。

「スタンド・マニユーバ」

次の瞬間、セシリアの視界から龍が：ISが姿を消した。

「えっ？」

「上だ」

いや、龍は一瞬でセシリアよりも高い高度、頭上に移動した。

「！　逃がしませんわ」

だが、セシリアも馬鹿ではない。すぐに特殊無反動旋回で龍を狙い打つ。その場に止まる一零停止により正確な射撃を可能となる。

三発のレーザーを龍に向かって放たれる。だが、龍は上昇からすぐに下降に変更、上昇によって位置エネルギーが運動エネルギーに変わる。

「俺が上を取る前に攻撃するべきだったな」

猛スピードで降下しながらバレルロールとベクタード・スラストで回避する。

「は、速い！！」

攻撃の手を休めないセシリアが毒づく。龍は次々と来るビームを回避しながらセシリアに肉薄する。だが、セシリアとの距離を詰めるかと思えば方向転換、アリーナの縁を飛行するコースを取る。

「一発でも当てたら褒めてやる」

「ば、馬鹿にしてすまわね!!!」

セシリアは肩に搭載された四機のBTを起動させ、全包围攻撃に転じた。

「す、すげー」

「あのセシリアの狙撃を全弾回避している」

「ま、奴の実力からしたらこの程度造作もないだろう」

ピット内で試合を傍観していた一夏達が驚きの声を上げる中、千冬だけはそれを知っていたような口振りだった。

「千冬姉、龍の事知っていたのか？」

「バアン!!!!」

「ああ、マリアとは偶に会う事があったからな。その度、奴の自慢話を聞かされたよ。マリアは弟馬鹿だからな」

「織斑先生と同じですね」

「バアン!!!!」

「山田先生、ラインフォードとオルコットのエネルギー残量は？」

「は、はい、ラインフォード君は殆どエネルギーを消耗しています。あれだけの高速戦闘をしているのに……」

「当然だろ。奴の機体はそれに特化した機体だからな。オルコットの方はどうだ？」

「ダメージを受けていないので、オルコットさんもさほど消耗していません。ただ乱射しているせいでラインフォード君よりも消耗が激しいです」

「オルコットの奴、完全にラインフォードのペースに嵌められているな」

ピット内の画面を睨みつけながら千冬は自分の生徒を戦いを眺めていた。

「な、何故当たらないのです!!」

「攻撃がワンパターン過ぎるんだよ」

先程からBT四機とセシリアのスターライトMK?の計五門の射撃を回避し続ける。セシリアは龍の反応速度が一番遅いラインを選択し、BTで攻撃してくる。だが、これは龍が仕込んだ罠。

龍は逆に反応速度の遅いところをセシリアに印象付け、攻撃がそこから来るように仕向けた。セシリアは見事にそれに嵌っているのだ。

「それに未来位置の読みが甘い。狙撃手としては二流……いや三流か」

「何ですって!?!」

スターライトを乱れ撃つセシリア。だが、龍は最初から分かっているかようにそれを回避していく。

「しかし、いつまでもこうしているのな……」

そろそろ回避するだけという単調作業にも辛くなってきた。しかし、反撃しようにもこちらのFCS等といった火器管制は未完成。射撃戦は分が悪い。というか、射撃武装が無い。

今あるのは初期装備、つまり『時雨』自体に内蔵された武器だけだ。

「あっ」

そこで思い出した。一つだけ誘導型の兵器——ミサイルが装備されている事に。さらにそのミサイルの特性から考えてFCSのコントロールは無くても何とかなる。

「——使ってみるか、チャフ・ミサイル」

脚部装甲が開き、中から超小型ミサイルが出てくる。

「起爆タイマーセット」

入力したデータを各ミサイル転送する。

「ファイヤー!」

バレルロールと同時に多方向にランダム発射する。

「ミサイル!？」

セシリアは発射されたミサイルを見てBTで撃ち落とそうとするが、ミサイルが一発もBTはおろかセシリアの事も狙ってこない。

「あら、どこを狙っていますの?」

「いや、これでいい」

発射から10秒後、全てのミサイルが自爆する。それと同時にアリーナ全体が黒煙に包まれる。龍は黒煙の中に姿を消す。

「煙幕? この程度、ISのハイパーセンサーには関係ないですわ!」

セシリアはスターライトMK?を構え直す。

「えっ?」

どこを見ても龍の機影が見当たらない。

「どう言う事ですの?」

《チャフ・ミサイルって言ってな。コイツは攻撃にも使えるが、こういう風に敵の視界を奪う事もできるんだよ》

オープン・チャンネルでセシリアに先程のミサイルの事を教える。

「だから、何なんですの!？」

セシリアも黒煙に包まれる。

《ハイパーセンサーが効かないだろう? この黒煙を構成する特殊ナノマシンが一時的にISの制御系を狂わせるんだよ。さらにこの黒煙は帯磁性でな。ECMの効果もあるんだよ》

「だからハイパーセンサーが……!」

《ただ難点なのが、この黒煙の中にいる間しか効果が無い事とこの効果範囲にいる間は自身のISにも弊害をきたすって事。後は効果時間が短いってところかな》

「あら、いいのですの? 私に手の内をばらして」

《フェアじゃないからな。それに知ったところでオルコット、お前に何が出来る?》

「くっ……でも、この中ならあなたも手が出せませんよ」

《そうとも限らないさ》

黒煙の中からワイヤーが飛び出てきて、セシリアの右手に巻き付く。

「センサー類が使えないならアイボールセンサー、自分の目を使えばいいだけさ」

右手のワイヤーは龍の右手から伸びている。ワイヤーアンカー、拘束や攻撃などに利用できる『時雨』の初期装備の一つだ。

「右腕取ったぞ」

左手をスターライトMK?を握る押し当てる。

次の瞬間、セシリアの右手が吹き飛んだ。

「くっ!」

右手から肩にかけて捻じれるような衝撃が走る。その痛みに耐えながらセシリアは近接装備インターセプターを展開しワイヤーを切りると龍から距離を取り、黒煙から飛び出る。

「はあ…はあ…」

右肩から下に力が入らない。先程の攻撃でスターライトMK?も落としてしまった。黒煙が晴れていく。どうやら効果限界時間のようだ。

「辛そうだな、オルコット」

黒煙の中から悠然と龍が現れる。

「いったい何をしましたの？」

「コイツのことか？」

龍は自身の左手の手の平を見せる。そこには放射線状の溝が付いた武器が付いている。

「コイツは零距离戦闘時、敵のマニピレーターや機体の部分破壊を目的とした『ストライク・ノヴァ』っていう兵装だ」

「エネルギーを圧縮し一点集中で打ち出す。カタログスペックでは重戦車の装甲でも一撃で貫通する程の威力だ。ただ零距离じゃないと効果が無いがな。燃費も悪いし」

「大した威力ですわね」

右手を庇うセシリア。その表情は痛みに耐えるものだ。

「両腕の装備は製作者の趣味の要素の方が強いんだがな。意外と実用性がある事が今回で分かったよ」

「私のことを……余り舐めないで欲しいですわ!!」

龍の下に残っていた黒煙の中から四機のBTが飛び出てくる。

「やるじゃないか!!」

すぐにスタンド・マニューバに移行する龍。

「BTは四機だけではなくてよ!!」

セシリアは腰に付けた二機の弾道型BTも発射した。

「! ミサイルを仕込んでいたとはな」

ビーム攻撃を回避しながらミサイルの相手をするのは無理がある。龍は両肘についてある突起物を引き抜くと、体の遠心力を使ってそれらを投げ飛ばした。

「ブーメラン!？」

プラズマの刃が追尾してきたミサイルを切り落とす。

「まだあるぜ!」

ベクタード・スラストで一番近いBTに近づくと回し蹴りを食らわせる。BTは後方に下がって回避する。が、龍の足先からプラズマ刀が飛び出てBTを両断する。

「仕込み刀! あなた、一体いくつの武器を隠し持っていますの!？」

毒づきながらも誘導型BT…ミサイルを連射する。自立型BTは龍の動きを拘束するように布陣させる。

「さて、そろそろファイナールと行こうか」

戻って来たブーメランを構え直すと龍はミサイル群に向かって突っ込んだ。

ミサイルが龍目掛けて飛んでくる。

今だ!!

ISのスカート部分から赤い火の玉のような物が散布される。それと同時に龍はエネルギーを一気に使い瞬時加速を使ってミサイル群の中を抜ける。ミサイルは龍のISをロストし、欺瞞信号を出す

火の玉に次々と命中していく。

「ど、どうして!?!」

「チャフだよ、少しは空戦について知っておけ!」

瞬時加速でセシリアに肉薄した龍。セシリアはインターセプターで応戦するが、格闘スキルが高くないセシリアは二太刀でインターセプターを弾き落とされる。

ブーメランの刃が伸びてロングブレードほどになる。十字に打ち込まれた斬撃によりセシリアの体勢が崩れる。龍はご自前の機動力でセシリアの背後に回ると足の仕込み刀で背中の弾道型BTを破壊した。

「ま、まだですわ!」

残った三機のBTで反撃に転じるセシリアだが、龍はそれすら許さなかった。BTが攻撃態勢に入る前にブーメランを投げ、右手のワイヤーを伸ばす。ブーメランはそれぞれにBTを切り裂き、ワイヤーは最後のBTを捕縛。ワイヤーを伝って高圧電流がBTに投げれこむ。強力な電流を食らいBT内の電子部品がショートする。

「ああ……」

セシリアの顔に絶望が広がる。

「悪いな……」

左手のストライク・ノヴァがセシリアの腹部に決まる。

『試合終了。勝者――龍・S・ラインフォード』

ストライク・ノヴァの一撃により打ち上げられたセシリアは重力に従って自由落下する。意識が散漫になっているのか、ISの展開も解けていく。

「! オルコット!」

龍は落下していくセシリアの体を空中で受け止める。

「すまん、やり過ぎた」

苦痛でセシリアの顔が歪む。シールドバリアと絶対防御でパイロ

ットであるセシリアの体は保護されているはずだが、零距离での攻撃は体に響いたようだ。

「わ、私が負けるなんて……」

「……今は喋らない方がいい。すぐにピットに戻るぞ」

龍はセシリアを抱え直し、ピットに戻った。

「ラインフォード、オルコットは大丈夫か？」

千冬が逸早くセシリアの状態を確認する。

「軽い打撲が幾つか、目立った外傷はありませんが、右手から右肩のダメージが大きいようです。彼女を」

龍は待機していたストレッチャーにセシリアを寝かせる。

「セシリア、大丈夫か!？」

「い、一夏さん……無様な姿を見せてしまいましたわね」
運ばれていくセシリアに付き添う一夏と箒。

「……」

龍は無言で運ばれていくセシリアを眺めていた。

「どうした、龍？ 代表候補生であるセシリアに勝って嬉しくないのか」

「………すいません、手加減するべきでした」

「それをオルコットの前で言ってみろ。ISで撃たれる程度じゃすまないぞ」

「………すいません」

もう一度、謝辞を述べるとISを収納すると、ピットの奥にある更衣室に引っ込んだ。

「――その言葉はいったい誰に当ててのものだ？」

千冬の言葉が冷たいピットに響いた。

「俺は何をやっているんだ」

更衣室のロッカーを殴りつける龍。

「俺はここにいる奴らを………なのに俺は……」
ロッカーが余りの力に変形する。

「俺は守るために来たんだぞ……!」

まるで血を吐くような……心からの叫びのように聞こえた。

夕方、龍は見舞いのため、セシリアが寝ている保健室に向った。幸い検査の結果、軽い打撲と擦り傷程度、心配だった右手も関節を少し痛めた程度で無理をしなければ大丈夫だそうだ。ただ、一週間は射撃訓練を禁止となったらしい。

「…………どの面下げて会えばいいのか」

向こうから売ってきた勝負とはいえ、あそこまでやる必要は無かった。火器兵装が使えないからといってやっていい事と悪い事がある。

「……………」

そんな事を考えているとあつという間に保健室にたどり着いてしまった。

「ハア………」

一回深呼吸。

「よし」

ドアをノックする。今日得た教訓だ。

《どうぞ》

中から女性の声が聞こえる。

ドアを開けると、白衣の女性がカルテの整理をしていた。

「あら、こんな時間に誰かと思えば、君か」

どうやら保健の先生にも顔が割れているらしい。

「彼女なら奥のベッドで休んでいるわ」

先生は立ち上がるとカーテンで仕切ってある一角に指差した。

「オルコットさん、お見舞いの人が来ましたよ」

「誰ですか？」

「ふふ、中々の美形ね」

「！ 一夏さん！？」

カーテンが勢いよく開かれる。

「一夏じゃなくて残念だな」

「あっ……」

龍はベッドの横にある椅子に腰を下ろすと持っていた果物籠をセシリアに渡した。

「手ぶらで来るのどうかと思ったからベタに果物の見舞いだ」

「あ、ありがとうございます」

素直に受け取るセシリア。

「……」

「……」

暫し無言が続く。龍の目に包帯の巻かれたセシリアの右腕が映る。

「すまなかった」

先に口を開いたのは龍だった。

「な、何のことですか？」

「全てだ、昼の事も試合の事も……」

「昼の事は別にして……あなた、まさかわざと試合に負けるおつもりでしたの!？」

「い、いや、そういう意味じゃない。ただ、理由はどうあれ怪我をさせた。その事を謝っている」

「べ、別にこの程度問題ありませんわ!」

そう言うが、右手を振り上げた時、痛みが走った。

「イタッ!」

「怪我人は大人しくしているものだ」

捲れたシーツを掛け直す。

「――私、あなたに全く刃が立ちませんでした」

「……」

勝った自分から何を聞いてもセシリアにとってそれは同情にしか聞こえないだろう。

「あなた、いったい何処であれだけのIS操縦技術を学んだのですか？」

「ISの基礎は姉さんから学んだ。だが、それ以外の……今日見せ

た高機動戦闘については独学……いや経験からの応用だ」

「経験……？ そんなもの一体何処で」

「俺がこの前までいた仕事先でな」

「どのような仕事を？」

「……………」

「お話できないような事ですか」

「別に疚しい事じゃない。そうだな……………来るべき時がきたら、話すさ」

「今は話す気は無いと……………」

「そうだな、今度、オルコットが俺から一本取ったら話してやってもいい」

「あ、あなた、この期に及んでまだ馬鹿にしていますわね」

「いやだからさ、そのつもりはないって」

「私にはそう聞こえます」

「そうやってすぐに感情をむき出しにするから、今日の試合だってあそこまで読まれてボコボコされるんだよ」

「な、何ですって!？」

「——お前、俺が徴発して攻撃を誘導していたの、気づいていなかったのか？」

「……………まさか、試合中の!」

「マジで気づいていなかったのかよ。あんな徴発に乗せられる様じゃ、オルコット、冗談抜きで三流狙撃手だぞ」

「ううう……………」

反論できないのか、黙りこむセシリア。でもその目は龍を睨みつけている。

「そう睨むな。後半はそれ程悪くなかったぞ」

「それもどうせ、冗談でしょう」

「いやいや、本当に奇襲攻撃は見事だった。俺もあれには冷や汗を掻いた」

「あなたが言っても説得力に欠けますわ!！」

……と言ったところでセシリアのお腹が鳴った。

「……………」

「……………」

暫し沈黙。

「ふっ」

先に限界が来たのは龍だった。

「わ、笑わないでくださる!？」

「ああ、悪い。だが、確かに腹は減ったな」

そういうと龍は果物かごの林檎を一つ取ると、保健の先生から果物ナイフを借りた。

「林檎剥きなんて久しぶりだな」

そう言いながらも慣れた手つきで皮を剥いていき、あっという間に8等分された林檎ができた。

「ほら」

切った林檎を借りた皿に載せ、セシリアに差し出す。

「い、いただきますわ」

大人しく林檎を食べるセシリア。その顔は林檎のように真っ赤だ。
「割と元気そうで良かったよ。長居するもの悪いしそろそろ戻るよ」
そう言うと、龍は立ち上がった。

「お大事にな、オルコット」

「お、お待ちになって……」

帰ろうとする龍の背中を呼び止めたのはセシリアだった。

「わ、私の事はセシリアでよろしくてよ」

「? 良いのか、名前呼びで」

「本人が良いと言っているのだからいいのですわ」

「そうか、なら俺の事も龍か不知火と読んでくれ」

「不知火?」

「龍・S・ラインフォードのS、俺の日本でのファミリーネームだ。
いや正しくは名字と言うべきか」

「そうですねの……では龍さん、約束通りあの不名誉なあだ名は取り

下げますわ」

「有り難うセシリア。今日はホント色々すまなかったな
そう言って龍は保健室を後にした。」

第一話〜IS学園〜（後書き）

原作を何度も読み返して書いてみましたが、やっぱり小説を書くのは難しいです。感想等がありましたしたら、ぜひ書いてください。次話も頑張って早く出すのでどうかまたの閲覧を……。

第二話〈学園の日常〉

窓から眩しい朝日が差す。

「朝か……」

むくつと起き上がる龍。だが、目は起きていない。

「眠いな……」

再び布団に潜る。俗に言う二度寝だ。

朝、食堂では一年生から三年生の生徒が一斉に朝食を食べていた。全寮制であるIS学園では食事時になるといつもこのような感じの混み様になる。一夏はいつも通りに箒とセシリアに食事を取っていた……二人は単純に付いてきたただけだが。

「セシリア、もう右手は大丈夫なのか？」

「はい、明日には包帯を取ってもいいと言われましたわ」

「そうか、良かったな」

「しかし、あれだけ大口を叩いてた割りに昨日の試合は、惨敗、だったな」

「な、何を……！」

バンとテーブルを叩いて抗議するセシリア。

「ラインフォードに全くダメージを与えられなかったではないか。それに奴は火器は使わなかった」

「うっ」

箒の的確な反撃に言葉が詰まるセシリア。

「ま、まあ、二人ともとりあえず朝食食べないか？　せっかく作ってくれたのに冷めたら勿体無いだろう」

喧嘩になりそうな雰囲気を感じてか若干顔を引き攣らせながらそう言った。二人は睨み合いながらも一応席に付いた。朝の時間は短い。早く食べなければ、恐い寮長がやってくる。

「朝から無駄に元気が有り余っているようだな」

「龍、おはよう」

「ああ、おはようさん。席、いいか？」

「ああ、構わないぞ」

龍はスペースに余裕がありそうな筭の横に座った。ちなみにセシリアと筭は一夏を挟むように座っている。

「眠そうですね」

向かいのセシリアが龍の様子を見てそんな感想を述べる。

「時差ボケだ。二日前までアメリカにいたからな」

本当に眠そうな顔をしながら日替わり定食の味噌汁を啜る。

「はあ、久しぶりの味噌汁……体に染みるな」

「？ 只の味噌汁だろ」

「数年前にこの国を出てからは日本食を食べる機会なんて滅多になくてさ。矢張り生まれ故郷の味が一番だ」

先程よりは目が覚めたのか、口調にも力が入る。

「それよりも龍。髪縛らなくていいのか？」

「ああ、どうやら寝惚けていたみたいだ」

龍の後髪は長い。筭やセシリアほどではないが、首の下辺りまであるセミロングだ。

「縛って差し上げましょうか？」

「ああ、頼む」

龍から髪留めのゴムを受け取ると、セシリアは龍の後に周り、肩に広がっていた後ろ髪を束ねる。

「はあ、サラサラ……」

セシリアが感嘆の声を上げる。

「よく言われる。昔は姉さんがよく三編みとか勝手にしてたな」
セシリアは慣れた手つきで龍の髪をゴムで止める。流石女子。

「ありがとう、セシリア」

「どういたしまして、龍さん」

「……」

「……………」

一夏と箒の箸が止まる。

「どうした、二人とも？」

「龍もセシリアもいつから名前と呼ぶようになったんだ？」

「あっ」

昨日の事を思い出したのか顔を赤くするセシリア。

「？……………なるほど！ セシリアが龍の事をズッ！？」

「彼女の事を思うなら、それ以上言うな」

昨日のデジャブが起きる。龍が口に運ぶ途中だった出汁蒔き卵を一夏の口に押し込んだのだ。

「昨日、セシリアの見舞いにいった時に、龍か不知火で呼んでくれと頼んだんだよ。ラインフォードの名は余り好きじゃないからな」

「不知火？」

「俺の日本での名字。篠ノ之も好きに呼んでくれて構わないぞ」

「そうか……………では龍と呼ぼう。ラインフォードは些か長すぎて不便だったのだ」

「俺も偶にそう思うよ」

「私の事も好きに呼ぶがいい」

「なら……………箒で」

「な、何故名前なのだ！？」

「好きに呼べて言ったのは箒だろう？ それに外国暮らしが長かったせいか、名前呼びの方が違和感が無くていいんだよ」

「うう……………好きにしろ！」

「そうさせてもらうさ」

龍は食事に戻る。

「そういえば、龍なぜ昨日の試合では火器を使わなかったのだ？」

「そうですね。私も疑問でしたの」

ご飯を食べていた龍の箸が止まる。

「別に言ってもいいが……………セシリアは聞かない方がいいぞ」

「何故ですか？」

「ショックを受けるから」

「「「ショック：？」」」

「それでも聞くか？」

「ええ、それに私がショックを受けると言うのも納得がいきませんし」

龍は箸を茶碗に置いた。

「――何故、俺が火器を使わなかったのか。理由は簡単、使えなかったからだ」

「使えない、火器が？」

「そうだ」

「一夏の零落白夜のように近接武装しかないのか？」

「いや。俺のIS『時雨』、正式名称『アイギス・ハイマニューバ・カスタム』は高機動戦闘と全領域戦闘をメインとしたISだ。零・近・中・遠距離はもちろん。狙撃戦もできる」

「では、武器はあったのですか？」

「いや、後付武器はまだロールアウトしていない。今の『時雨』の武装は初期武器だけだ」

「えっ！？」

「さらに付け加えるなら、その初期武装も未完成だ。主兵装がまだできていない」

「はぁ！？」

「もつと付け足すなら、機体自体も未完成だ。主兵装ができていないから、稼働率は60%にも満たない。動力系統も完成と同時に調整し直すから、出力も出が悪い」

「未完成にも程がありますわ！！」

「だから言っただろう、ショックを受けるって」

俺は知らんぞ、と言う顔で味噌汁を飲む龍。

「わ、私は未完成のに負けましたの？」

「安心しろ、全てのISは今だ未完成だ」

「フオローになってませんわ！」

マジでショックを受けているセシリア。可哀想なくらいショックを受けている。

「ああ、泣くなセシリア。後でデザート奢ってやるから」

「泣いていませんわ、でもデザートは奢っていただきますわ」

「………1000円以内で頼む」

「考えておきますわ」

今月の龍の懐はお寒くなりそうだ。

「――さて、俺はもう食べ終わったから先に行く。早く食べないと鬼の怒りを買うことになるぞ」

龍が立ち上がると同時に千冬が食堂に入ってくる。

「さっさと食べろ！！ 食事は迅速かつ効率よく、だ」

慌てて残りを食べる三人。

「時間もないからな、急げよ」

「分かってたなら教えろよ！」

「何で俺が……時間ぐらい自分で確認しておけ」

一夏達を残して龍は先に食堂を後にする。

授業が始まって早々厄介な話が持ち上がった。

「織斑先生、クラス代表は織斑君よりも不知火君の方がいいと思うんですけど」

「あ、私もそう思います」

「不知火君、織斑君の時と違ってオルコットさんに圧勝したもんね」
何やら、不穏な空気がする。

「俺もクラス代表は龍がいいと思います！」

「俺は辞退しますよ。それにこの様子だともう一夏に決まっているようだし。変更は面倒でしょう？」

「なるほど、面白そうだな」

面白いかどうかで物事を決めないでください。

「こいつよりもラインフォードがいいと思うのはどれぐらいいるん

だ？」

一斉に皆が挙手する。ちゃっかり一夏も挙げているが、それは拳という名の言葉で黙らせる。

「篠ノ之とオルコットは反対か？」

「わ、私が一夏さんを代表に推したんですからここでそれを曲げるわけには」

「わ、私は今更変えるのは面倒だと」

素直に一夏を推していると言えない、複雑な女心が手に取るように見える。

「織斑先生、反対意見もあることだし、ここは――」

少し考える仕草をした千冬は箒とセシリアに何かを耳打ちした。

「さて、もう一度、採決を取るぞ」

クラスの女子が一斉に手を挙げる。何故か、箒とセシリアまで手を挙げている。

「龍さんは一夏さんと違って私に勝ちましたし」

「クラスの事を考えたら、龍の方が良いしな」

「賛成多数だな」

「ちょ、ちょっと待ってください！ 幾らなんでも横暴でしょう！？」

「何、私に対して文句があるのか？」

「大有りですよ。俺はやりませんよ、そんな面倒なこと。それに一夏、お前俺に押し付ける気にいるだろ」

「うっ」

「そ、それなら！」

「何ですか、山田先生？ 見ての通り取り込み中です。邪魔しないでください」

「ううう……」

龍に睨まれた真耶は泣き出しそうな顔をしながらも何とか話を続ける。

「お、織斑君とラインフォード君で試合をやって改めて決めれば……」

…」

「だからですね、山田先生」

「よしそれでいいだろう。三日後、織斑とラインフォードの試合を行い、それを見て最終決定とする。異議のある者は？」

「「「いません！」」」

龍以外全員が声を揃えて千冬の提案に乗る。

「ちょっと待ってください！」

「では、授業を始める」

龍の抗議を黙殺すると千冬は何事もなかったように授業を始めた。

授業終了後、龍は千冬に食って掛かった。

「千冬さん、俺はやりませんよ！」

「バアーン！！」

「織斑先生だ」

出席簿、それは凶器である。

「――織斑先生、俺はやりませんよ、クラス代表は」

「試合の結果を見て決めると言ったはずだが？」

「――八百長はいいですか？」

「バアーン！！」

「今の聞かなかったことにしよう」

「ありがとうございます――」

「ラインフォード、試合までに一夏を鍛えておけ」

「何故ですか？ それに三日後と言うのも」

「今日から三日間、二・三年生の合同戦闘訓練がある。自習用のアリーナが一つ開いているだけで他は使用中だ。それに三日もあれば、お前のISの調整もできるだろう」

「それについては製作者次第ですが」

「なら、間に合わせるんだな。言っとくが手加減は許さんぞ。やる以上は全力を尽くせ」

それだけ言うと、千冬は職員室へ戻っていた。

「――理不尽だ」

龍の心の叫びが空しく廊下に響いた。

昼休み、龍は食堂に一夏を呼び出した。

「――と言うわけで、一夏。これから三日間お前を鍛え上げる。さつそく今日の放課後からやるぞ」

「……龍、もしかして怒ってるのか？」

「俺が？ 何について？ 怒っているんだ？」

龍は笑顔でそう言った。だが、手に握るスプーンがグニヤリと曲がる。

「り、龍……？」

「どうした？」

スプーンに続いてフォークまでもが無残に変わっていく。

「い、いや。何でもない……」

「そうか。ちなみにお前に拒否権は無いからな」

無言で龍が「拒否するなら、お前もこうなるぞ」とスプーンとフォーク（だった物）を見せる。

「はい……」

「分かればいい」

食事に戻る龍。今日の昼飯は龍がホットケーキセット、一夏が日替わり定食だ。意外なことに龍は甘い物が好きだったりする。本人は否定したがるが。

「い、一夏を鍛えるのは私の役目だ！」

「いいえ、この私が！」

何処からともなく沸いてきた一夏ハーレムの二人。

「すっこんでろ、三流剣士に三流狙撃手」

「箒、お前に射撃スキルや射線の読み方、その回避等の技能を一夏に教えられるのか？」

「うっ」

「セシリア、お前もだ。格闘スキルは勿論、間合いを詰められた時の対処法等教えられるのか？」

「うっ」

「俺は全領域戦闘のスキルを持っている。どの領域でも的確なアドバイスが出来る」

「で、でも一夏さんの指導の約束は私の方が先でしてよ！」

「いや、私の方が先に約束した！」

抗議を続ける二人だが、龍の目を見た瞬間、その勢いを削がれた。「お前らしい加減にしろ。俺はかなり不機嫌なんだよ」

どこまでも冷たい、感情の見えない目。その目に睨まれた筈とセシリアは刹那、背中に冷たいものが走るのを感じた。

龍は二人から視線を外すと、右手で自身の顔を覆う。

「兎も角、試合までは俺がこいつを鍛える。三人で教えたんじゃ効率も悪いからな。試合が終わった後はコイツを煮るなり焼くなり好きにしろ」

「わ、分かった」

「た、確かに三人で教えたのでは効率は良くないですわね」
席に座りなおす筈とセシリア。テーブルに重苦しい空気が流れる。

「一夏。放課後、第二アリーナに来い」

「わ、分かった」

「二人も来ていいが、見ていだけになるぞ」

「構いませんわ」

「そうだな」

それだけ言うと、龍は自分のお盆を持って立ち上がった。

「龍、まだ残っているぞ」

「食欲がないんだよ。食堂の人には悪いけどな」

龍はテーブルを後にした。

龍が去った後、一夏達は肩に入っていた力を抜いた。

「な、何ですの、彼……凄く冷たい目をしていましたわ」
先程の龍の目を思い出したのか、身震いするセシリア。

「昔、何度か龍が切れた事があったんだけど、今のはまだマシだぞ……」

一夏は龍と暮していた頃を思い出していた。

「昔？ 確かモント・グロッソで会った事があると言っていたが……」

「ああ。その後、一年ぐらい龍は俺ん家で暮していたんだよ」

「何故ですか？」

「第二回大会の後、千冬姉、IS関係の事で一年ぐらい家を空けていたんだよ。で、その間、色々面倒を見てくれたのが千冬姉の親友でもあり、龍の義姉のマリア姉なんだ」

「つまり、一夏は龍とその姉と三人で暮していたのか？」

「ああ、でも一緒に暮していたのもその一年ぐらいだ」

その後、音信不通。姉のマリアとは偶に挨拶程度の連絡はあったが、龍からのものは殆どなかったはずだ。先日再開した時、久しぶり過ぎて一瞬龍の事だと分からなかった。雰囲気や体格が変わった事も原因だが……。

「お前達、何を湿気た顔をしているんだ？」

「あ、千冬姉」

「バアン！！」

「織斑先生だ」

「すいません、織斑先生……」

お盆を持った千冬は一夏に拳骨を与えると、先程まで龍が座っていた位置に座った。セシリアと箒がかなり居づらそうにしている。

「織斑先生も昼食ですか？」

お盆に載っているのはきつねうどんのようだ。

「ああ、私も人だからな、食事ぐらい取る」

本当に人だろうか……三人の頭の中でそんな事を考えた。

「バアン！！」

バアン！！

バアン！！

馬鹿三人に降り注ぐ鉄拳の嵐。

「織斑、ラインフォードから話は聞いたか？」

「は、はい。今日の放課後から訓練するって言っていました」

「そうか、ついでだ、篠ノ之、オルコット。お前達もラインフォードからアドバースを貰え」

「な、何故、私達もなんですか？」

「簡単なことだ、アイツが一年の中で一番の実力者だ。お前たちが束で掛かってもしラインフォードは苦もなく勝つだろう」

「そ、そんなはずは……」

「オルコット、昨日奴の実力を身をもって体験したのに分からないのか？」

「うっ。た、確かに機能の試合では遅れをとりましたが、一年の中で一番と言うのは……」

「今信じられなくとも三日後には理解できるだろう」

食堂を後にした龍は気晴らしのために学園内の庭園に来ていた。

この学園は無駄に敷地が広いため、アリーナやら校舎がやたらと多い。そして、それ以外の空いたスペースには庭園と行っても差し支えない手入れの行き届いた庭が広がっている。

「何をやっているんだ、俺は……」

側の木陰に腰を下ろして龍はそう呟いた。

「――あの二人には悪い事をしたな」

先程の事を思い出すと自分が情けなくて仕方がない。確かに不機嫌ではあったが、彼女達に当たる理由にはならない。昔からそうだった。咄嗟に沸き起こる感情にブレーキを掛けられない……いや、ワザと掛けない。

「何も変わっちゃいないな」

分かっているはずなのに何故か出来ない――しようとしなない。

「昨日のセシリアの事に続き、これじゃ先が思いやられるな」

自嘲気味そう呟く龍。

「だ〜れだ？」

突然視界が黒一色に変わる。

「はい、制限時間は10秒」

普通に考えて人の視界を妨げているのは女子だろう。というか、この学園には男が二人だけだからそれしか考えられない。

「4:3:2:1:0:はい、時間切れ」

女の子の柔らかい手が顔から離れる。後を振り向くと何故か扇子を持った女子生徒が立っていた。

「……誰だ？」

龍は立ち上がると適度な距離を取り、謎の美少女に聞き返した。

「う〜ん、新生だから私の事は知らなくて当然か」

首もとのリボンから彼女が二年生である事が分かるが、それよりも気になる事があった。

（気配がまるでなかった…）

いくら物思いにふけていたからといって周りへの警戒心を解いてはいない。だが、彼女の接近は愚か、ここまで近づかれていた事にも気づかなかった。

（コイツ、只の生徒じゃない）

龍の本能がそう囁く。

「あら、そんなに警戒しなくてもいいじゃない」

龍は腰に下げたポーチに手を伸ばす。

「もう一度聞く、お前は誰だ？」

ポーチの中に収納されたナイフの柄を掴む。

「ふふ、私はこのIS学園の生徒会長を務める更識楯無よ。龍・S・ラインフォード君。それとも不知火・龍君と呼んだ方がいかしら」
終始笑みを浮かべる楯無。

「何故、生徒会長はここに？」

「あなたがここで暇そうにしてたから」

「――わざわざ気配を殺して？」

「あら、もしかして気づいていなかったの？」

ナイフを袖の中に隠し、いつでも首の動脈を狙えるようにする。

《別に勝負してもいいけど、今はやめた方がいいわよ》

《！ どうやって俺のプライベートチャンネルを……》

プライベートチャンネルで話しかけてくる楯無。龍のプライベートチャンネルは通常許可のない者とは通信が繋がらないようプログ
ラミングされている。もちろん、楯無と会ったのは今が初めて。だ
が、通信許可を出していないのに通信が繋がっている――これは彼
女が相当なハッキング技術を持っていることを指す。

楯無は扇子で庭の端を指す。丁度食事を終えた女子達が散歩して
いる姿が見える。彼女の言うとおり、ここで騒ぎを起こすメリット
はない。

《着いてきなさいな。生徒会室にご招待するわ》

《……茶は出るんだろうな？》

《勿論、生徒会に一人お茶を淹れるのが上手い子がいるわ。あなた
もきつと氣にいるわよ》

《――分かった、更識会長》

《ふふ、では……》

手を差し出す楯無。

「女性をリードするのは殿方の役目でしょ？」

「……」

龍は無視して先に歩き出した。

「馬鹿やってないで早く行かないと時間なくなりますよ」

「そんな態度をする子には……こうだ！」

いきなり龍の右腕に抱きつく楯無。

「さ、エスコート、エスコート」

「……はぁ」

溜め息を着きながら龍は再び歩き出した。右腕に抱きつく楯無と

一緒に。

「粗茶ですが、どうぞ」

「ご丁寧にどうも」

出されたお茶に口を付ける。

「……美味しいですね」

「あら、有り難うございます」

「いえ、お世辞とかじゃなくて本当に美味しいですよ」

「でしょう？ 虚^{うつほ}ちゃんの淹れるお茶、私もお気に入りなの」

「虚？」

「私のことです。私は三年生の布^{のほ}仏^と虚^{うつほ}。生徒会の一人です」

「自己紹介する必要は無いと思いますが、礼儀として……一年の龍・S・ラインフォードです」

「何だか、私のときと対応が違わないかしら？」

「気のせいですよ」

お茶を飲み干すと龍は前に座る楯無に疑問を投げかけた。

「更識会長、わざわざ生徒会にまで俺を呼んだ理由は何ですか？」

「そういえば、まだ何も言ってなかったわね」

「ええ、布仏先輩のお茶が美味しい事意外は……」

楯無はティーカップを置くと一枚の紙を龍に差し出した。

「——何ですか、この書類は？」

「見て分からない？ 生徒会へ入るための書類♪」

「ここに呼んだ理由はこのためですか？」

「そうだよ」

龍は頭痛を覚えた。先程の事もあり、彼女が只者でないのは確実。ここへ連れてこられたのも自分の秘密を追求する事だと思っていた。だが、蓋を開けてみれば、この有様、完全に脱力した。

「理由を聞いていいですか？」

「それは自分が一番分かっているんじゃないかな？ 不知火……君」

含みのある笑みを浮かべる楯無。

「私としても優秀な人材の子には生徒会に入って欲しいからね」

扇子には『四面楚歌』と書かれている。先程までそんな物は掛かれていなかったはずなのだが……。

「どうするの？ 私としては君がどっちをもっても構わないけど」

「――」

龍は無言で書類にサインした。

「有り難う、細かい手続きはこっちでやっておくわ」

「流石にここで裏の人間と喧嘩したくありませんからね」

「あら、分かっちゃったの？」

「あなたと会ってから、ずっとライブラリーで調べさせてもらいました」

龍は楯無に合ってから今までISのデータリンクを使い、ネットワーク上で『更識楯無』について調べ上げていた。

「対暗部用暗部……あなたも俺と同じ様ですね」

「そうみたいね、不知火財閥のエース君」

「……」

「……クスッ。あなたとはこれから仲良く出来る気がするわ」

「どうですかね、同族嫌悪と言う言葉もありますが……」

それだけ言うと龍は席を立ち、生徒会室を後にした。

「――油断できない人だな、更識会長は」

教室に戻る途中、龍はポツリとそんな事をもらした。

そして、放課後。

「遅い！！ 一夏、白式なら俺のスピードに付いて来れるはずだ！」

「早すぎるんだよ、お前が！」

高速でアリーナ内を飛び回る龍。一夏はその後ろに何とかくっついて付いているが、接近する事ができない。

「お前は無意識の内にブレーキをかけているんだ。兎も角、このス

スピードに慣れろ！ 格闘スキルしかないお前にはこのスピード感が
必要不可欠だ。セシリア、もっと正確に撃て。下手な鉄砲数打ち当
たらない状態だぞ」

《や、やっていますわ》

B Tからの全包围攻撃が龍を狙い撃つ。だが、龍は一夏を振り切
りながら、同時にB Tの攻撃を捌いていく。ISのハイパーセンサ
ーは人間の視界を格段に拡張する事ができるが、その視野に写る全
ての攻撃を認識し、回避するのは並大抵の訓練では出来ない。

「箒、ヘッド・オンだ。俺の頭を押さえてみせろ！」

「お、おう！」

正面で『打鉄』^{うちがね}の近接ブレードを構える箒。龍は高速で箒に詰め
寄ると推力偏向瞬時加速で箒の視界から消える。

「えっ」

「下だ、これぐらいの動き見切れよ！」

脚の仕込み刀で箒のブレードを弾くと、がら空きの腹部に左手の
衝撃発生装置『ストライク・ノヴァ』を撃ち込む。エネルギーは絞
つてあるが、姿勢を崩すには十分の威力だ。

「うわー!!! 箒退け!!!」

龍を追っていた一夏が箒に激突する。

「何をやっている一夏!!!」

「わ、悪かったって」

言い争っている二人の体にワイヤーが巻きつけられる。

「「え？」」

「チャンスですわ！」

動きがないと見たセシリアが一斉にB Tで衝撃する。

「お前ら、全員馬鹿だな」

龍は瞬時加速を後方に行い、縛り上げた二人から距離をとる。同
時にワイヤーに引っ張られ、一夏と箒は龍のいた位置に移動する。
「あっ」

コンマ数秒後、セシリアの放った十数発のビームが一夏と箒に命

中する。クルクル回りながら二人は仲良く墜落する。

「い、一夏さん!!」

「あゝあゝ、面白いぐらいに命中したな」

龍は地上で言い争う三馬鹿を眺めながら深い溜め息をついた。

「お前ら、馬鹿にも程があるだろう」

「「「すいません」」」

仁王立ちする龍。正座をして説教を受ける三人。なかなか笑える絵面だ。

「一夏、お前には最初に推力偏向瞬時加速を教えたはずだが？」

「うっ」

「セシリア、前も言ったが、BTの扱いが下手だ。射線を読まれることを前提に位置取りしないと当たらないぞ」

「はい……」

「箒、お前もお前だ。折角お前のテリトリーで戦ってやったのに逆に一本取られてどうする」

「ぐう……」

「ここまでお前らが無能とはな、恐れ入ったよ。これでISを使いこなしている気分に浸っているというのにも驚いたが」

言葉も出ない三人。

「はあ、今日はこれぐらいで終わろう。お前らも適当に休めよ」

馬鹿三人を残してアリーナを後にする龍。

あの三人なら仲良く復習でもするだろう。あれだけ尻を叩けば少しはマシになるはずだ。更衣室で着替えていると一夏の悲鳴が聞こえてきた。また良からぬ事を言って二人の逆鱗に触れてしまったようだ。

「彼女らよりも一夏の方が問題か……」

特に女性関係の方で……。

「さて、こっちもやる事ならないと……」

携帯端末を取り出すと龍はある電話番号に連絡する。

《私だ》

映写されるリアルタイム通信画像には童顔の女性が写っている。

「こんばんは、レイラ主任。いやそっちなら、おはようか」

《リユーか、『アイギス』に問題でも起きたか？》

「いや、時雨の調子に問題はない。それとアイギスって呼ぶのは止めろ」

《貴様のISを作ったのはこの私だぞ》

「でも、今使っているのは俺だ。それに『アイギス・ハイマニューバ・カスタム』は長すぎるんだよ」

全くもってその通りだと思う。

《はぁ、もういい。で、用は何だ？ お前のことだ、用事も無しに連絡などしないだろう》

「その通りだ。実は主兵装の『タクティカル・ウィザード』と後付武器全てを二日以内に送って欲しい」

《二日以内だと？》

「出来ないか？」

《出来なくはないが、動力やらFCSの調整がある。お前一人では無理だぞ》

「そんな事は分かってる。三日後にどうしても時雨の完全形態をお披露目する必要があるんだ。詳しくは聞くな」

《さっそくそっちに行って問題を起こしたか？ まったくマリアと違って短絡的だな》

「うっさいぞ、童顔少女レイラちゃん」

《その呼び方をするな！！》

「はいはい。で、どうなんだ、出来るのか出来ないのか？」

《出来るに決まっているだろう。私を誰だと思っている》

「無い胸を張っても威厳もクソもないぞ」

《小さいだけでちゃんとあるわ！！》

「なら、頼むぞ。予定が決まったら連絡くれ」

《ま、待て！ まだ話が――》
通信を切る。

「…………ま、怒っていたようだが、別に問題はないな」
携帯端末を片付けるとISスーツを脱いで汗を拭く。

「ヤッホー、不知火君♪」

と、そこに突然楯無が現れる。

「！ ノックぐらいしてください！！」

慌ててズボンを穿く龍。

「あら、女の子みたいな反応ね」

「――至極普通の対応化と」

「それにしてもよく鍛えていそうな体だね。無駄な贅肉全然ないし」

「人の体をじろじろ見ないでください」

楯無が龍の手で背中をなぞるように撫でる。

「どうしたの、この背中の傷？」

「…………只の古傷です。それよりも離れてください。服が着れませ
ん」

人の背中を観察する楯無を引き剥がすと龍は手早くシャツと制服
を着る。

「背中だけじゃなくて腕や腰もあったね。随分危ない事しているみ
たいけど？」

「あなたには関係ありません。余り度が過ぎるようでしたら、俺も
それなりの対応をしますよ」

袖口からナイフの刃を見せる龍。

「ふふ、私もそんなに馬鹿じゃないわ」

笑みを浮かべる楯無。含みのある笑みがいやらしい。相手の真意
が読めない状況で相手に手玉に取られているのは実に不愉快だ。

「用が無いなら俺は部屋に戻ります」

「用ならあるわよ。さっきあなたの正式な生徒会入りが決まったか
ら、さっそくお仕事」

「…………」

休めるのは当分先のようなのだ。

「ゴメンなさいね。入学式やら行事があるといつもこういうなのよ」

「もういいですから、口より手を動かしてください」

生徒会室で龍は大量の種類の整理を手伝っていた。

「会長、これは？」

「ああ、それはそっちの束に入れて。不知火君、次これね」

「はい」

手際よく種類を捌いていく龍。生徒会長の楯無ほどではないが、この手の作業には慣れていくようだ。

「すいません、不知火君。入学早々こんな事を手伝わせてしまって構いませんよ。それに理由はどうあれ、今の俺は生徒会メンバーですから」

「そうそう、虚。だから別にこき使ってもいいのよ」

「……………」

「お嬢様、余り彼を苛めるのは」

「あん、お嬢様って言わない。それと苛めているわけじゃないわよ」

「？ お二人の関係ってなんですか？ 浅からぬ関係に見えますが」

「私の家『布仏家』は昔から代々『更識家』に使えてきている家柄なんです」

「なるほど、だからお嬢様ね」

「そう言う事なの。不知火君、手が止まっているわよ」

楯無に促され、作業に戻る。時々、虚に入れてもらった紅茶とお茶請けを貰いながら、黙々と作業を進める。とそこに……………」

「お姉ちゃん、お腹すいた。お菓子ちょうだい！」

クラスメイトの……………女子が一人現れた。

「あ、不知火君だ。こんな所で何してるの？」

「見て分からないか？ 書類整理の手伝いだ」

クラスメイトであるのは覚えているが、名前が出てこない。龍は

人の名前を覚えるのがあまり得意ではない。

「本音、今日は放課後、書類整理をするって言って置いたでしょう？」

「はへっ？ そうだったけ？」

龍の茶菓子を奪い取り、ボリボリ食べていた本音と呼ばれたクラスメイトは首をかしげた。

「まったく、この子は……」

あなたを抑える虚。どうやら、いつもこんな感じようだ。

「本音！ 人のお菓子を食べてはいけません」

虚の拳が本音の脳天に直撃する。

「ううう……本気で殴った！」

「まだ、叩かれないの？ そう、分かったわ」

「うう、ごめんなさい」

「ちゃんと反省しているの」

「してる。ちゃんとしているから」

長い袖をパタパタさせる本音。どうも反省しているようには見えない。

「ゴメンなさいね、不知火君。本音、不知火君に謝りなさい」

「はーい、ごめんちゃん、しらぬ」

「し、しらぬ？」

「不知火君だから、しらぬだよ。しらぬだから知らぬ！ 何ちやって！」

一人笑う本音。龍は無言で書類整理に戻った。

「本音！」

本日二発目の虚パンチが炸裂する。

「はいはい、二人ともそれぐらいにね」

楯無に宥められ、やっと落ち着く二人。

「お二人はご姉妹で？」

「ええ、私が姉で、こっちが妹の本音」

「ええー！？ しらぬ、私の事覚えていないの」

「顔は覚えていたが、名前まで覚えていなかった。というか、来て二日の人間にそこまでの事を要求しないでくれ」
龍は深いため息を付いた。

「有り難う、不知火君。おかげで早く済んだわ」

「本当にそうですね。明日まで掛かると思っていたのに……今日中に片付きましたから」

「私も頑張ったよ」

「いや、特に何もしていないから」

本音の発言に突っ込む龍。

「やっぱり、不知火君を生徒会に入れたのは正解だったわ」

「そうですね。ついでに一夏もどうですか？ 少なくともその菓子食いよりは役に立ちますよ」

「しらぬ、ひどい！」

本音が抗議をあげるが黙殺。

「そうだね、考えておくわ。虚、確か冷蔵庫にケーキがあったわよね？」

「はい、本音取ってきて」

「はーい」

ケーキを切り分け、その一つに口を付ける。

「美味しいですね。ホイップも甘すぎず、スポンジケーキもしっかりしています」

「そうですね。虚の紅茶とケーキのセットは最高なのよ」
楯無も年相応の女子高生らしい表情になる。甘いものには目が無いらしい。

「さて、ケーキも食べたし。そろそろお開きにしましょうか」

ケーキが食べ終わった所で解散となった。

「あれ、しらぬ、寮はこっちだよ」

「少し夜空を見てから寮に戻るよ」

「あ、私も一緒に」

「本音、邪魔をしないの」

「ああ、お姉ちゃん！ 耳引っ張らないで」

「じゃあね、不知火君。またよろしくね」

引きずられていく本音と引きずる虚、それと楯無を見送った後、龍は校舎を出て空を見上げた。

「やっぱり、周りが明るいから見えにくいな」

庭の芝生の上に寝転がると龍は只空を眺めていた。左手を天に伸ばす。

「昔は遠いと思っていた空が今は近く思える」

時雨……お前が翼をくれたからだ。

「こんな時間に何をしている？ 寮を出ていい時間帯ではないぞ」

「織斑先生ですか。あなたこそ、こんな所でどうしたんですか？」

「こんな時間に外にいる不届き者を説教しにな」

そう言いながらも千冬は龍の横に腰を下ろした。

「いいんですか、説教しなくて」

「残念ながら今は勤務時間外でな」

「そうですか」

「どうだ、ここでの生活は？」

「悪くないですよ。ただ毎日女子の相手をしないとイケないのには疲れますけど」

「贅沢な奴だな、さっさと彼女でも作れ。より取り見取りだぞ」

「残念ながら、その予定はこの先ありませんよ。それに……」

……誰もこんな化け物と一緒にいたいなんて思わない。

「それよりも千冬さんの方はどうなんですか？ 一夏も心配してますよ、きつと」

「手のかかる弟が自立してから、考えるさ」

一夏、早く自立しろよ。千冬さんが行き遅れるぞ。

「お前、かなり失礼なことを考えただろう」

「気のせいですよ」

「――マリアは元気にしているか？」

「ええ、昔と変わらずに……」

「そうか――マリアには第二回モント・グロッソで世話になったからな」

「――あの事件の事ですか？ 俺と一夏は攫われた」

思い返される記憶……第二回モント・グロッソの決勝戦、第一回同様、織斑千冬とマリアーヌ・ラインフォードとの決勝戦の形になっていた。誰もが期待していたこの試合。その試合前に俺と一夏は攫われた。

誤解がないように訂正しておくが、抵抗はした。

明らか敵……に見えた男どもが入ってきた瞬間、姉から習い中だったナイフ投げで相手の牽制。その隙に相手の股間を蹴り上げてやった。その方法で二人まで床に倒したが、一夏が捕まり、俺は男に殴り飛ばされ、気絶。

次に目を覚ましたのは病院のベッドの上、起きた瞬間 I S スーツの義姉に抱きつかれた。体の傷に響いてから辛かったが……。

「ああ……ふふ、お前は覚えていないだろうが、お前を助けた時、マリアは号泣していたんだぞ」

「そうなんですか？ 俺は誘拐されてから病院のベッドで起きるまで意識が全くありませんでしたから、覚えていませんが」

「――誘拐されていた間の事は本当に何も覚えていないのか？」

「全く綺麗サッパリと。事が終わってから『奴』が手間を掛けさせるな、て文句言ってきましたが」

「そうか……その方がお前にとって楽だ」

「何か言いましたか？」

千冬が何かを呟いたように聞こえたが声が小さ過ぎてよく聞こえなかった。

「何でもない、気にするな」

そう言う千冬は立ち上がる。改めて眺めてみるとやはり千冬は凛として現代の女性そのもののように見える。

「余り長く外にいるなよ。4月とはいえまだ夜は冷える」

「分かっています。もう少ししたら戻りますよ」

校舎に戻る千冬。どうやらまだ仕事があるらしい。教師の仕事ご苦労様です。

「――さて、俺もそろそろ戻るか。……へ、へくしゅん！」

千冬の言うとおり、さっさと戻っていた方が良かったようだ。

第二話〈学園の日常〉（後書き）

二話目、更新しました。

今回はちよつとした雑談で構成されています。次話では、一夏と龍の試合をメインに書くつもりなので戦闘がメインになると思います。

第三話 翼の名は『時雨』

天気の良い朝だ……気分は最悪だが……。

ベッドから体を起こした龍の表情は硬い。試合の話が出てから三日。今日がその試合当日だ。

「試合当日になったが……武器が届かない!!」

そう……。先日、時雨の開発主任こと童顔少女レイラちゃんに新しい武装を頼んでおいたのだが、未だにそれが到着しない。

「あの時、少し弄ったのが悪かったのか……?」

今更後悔しても遅い。

「放課後は一夏達のトレーニング、その後に生徒会の手伝い……」

ISの調整すらまともに出来ていない。千冬から本気で戦えて言われているが、今の時雨では本気を出すのは難しい。

「――愚痴っても仕方ないか」

今日は朝からISの操縦訓練。授業中は一夏やセシリアもフォロ―をしなくては……。

服を脱ぐとISスーツを着てその上に制服を着る。一時間目からの時はこれで時間短縮をする。この三日間で学んだ事の一つだ。

授業早々、千冬は二人に今日の試合の話をした。

「ラインフォード、織斑。今日はお前達の試合だが、準備は出来ているのか?」

「は、はい。一応は」

「ラインフォードはどうだ?」

「……ノーマコメントで」

目を逸らす龍。

「三日もあって何も用意できていないのか?」

「仕方ないじゃないですか!! 放課後は三人のトレーニングに生

徒会の手伝い。ここ数日、そんな毎日ですよ。どうやって時間の掛かるISの調整をしろと？」

「はあ、もういい。後付武器の方は何とかなったのか？」

「――開発主任からの連絡がありません。予定通りなら昨日の内に到着しているはずなんですか……」

「全く……では先日と同じ状態なんだ？」

「はい、少しスラスターの出力調整をした程度です。誤解ないように付け足しておきますけど、俺だって本来の時雨で勝負したいんですよ」

「そんな事は言われずとも分かっている」

深いため息を付く千冬。溜め息をつきたいのはこちらもそうなのだが……。

「試合は今日の午後、第三アリーナで行う。それまで可能な限り調整しておけ」

「努力します……」

「そうしろ――では、授業を開始する！ 専用機持ちは各班の指導に当たれ」

千冬の掛け声で授業が始まる。龍もクラス的女子達の指導する。ここ数日、こうやって指導していたせいか、今では龍のIS講座は一番人気となっている。受講する女子は『セシリアよりも遥かに説明が分かりやすい』だとか『細かい所までよく教えてくれる』とか『織斑君よりも色々良いから』等の理由で龍の指導を受ける。頼りにしてくれるのは嬉しいのだが、いかせん、日に日に人数が増えているのでとてもじゃないが捌き切れない。

そのため、適当に女子達を言いくるめ、半数以上を一夏に押し付けて事なきを得ている。被害を被っている一夏は地獄だが。

《――リユ、聞こえているか!?!》

突然、プライベートチャンネルに通信が入る。相手は三日前に連絡してから音信不通だったレイラだ。

《レイラ……頼んでおいた武器、届いていないんだが?》

《ふん、使うのは今日なのだろう?》

《ああ、だから間に合いこないだろう。そっちのラボからこっちまで空輸しても12時間は掛かる》

《その点は問題ない。後、0030でIS学園の上空だ》

「はあ?」

思わず最後の言葉が口から漏れる。周りでISの操縦訓練をしているクラスメイトの女子が首を傾げる。

龍は時雨を展開し、上空に上がる。バイザーに搭載された超遠距離光学スコープと広域警戒レーダーを使って周辺を調べる。

「……………これか」

海上から飛行してくる飛行体——戦闘機にして大きい……………恐らく輸送機の類だろう。だが、その速度は音速を突破している。只の輸送機でここまでの速さを出せる機は殆ど存在しない。

「織斑先生、念のため、生徒全員に警告を」

《どうした?》

「派手な方法でプレゼントが到着するようです」

先程の通信からきっかり30秒。音速飛行をする輸送機がIS学園上空を通過する。数秒のタイムラグの後、学園のグラウンドにも衝撃波が届く。グラウンドの女子達が悲鳴を上げる。

「あれは……………不知火財閥の」

機体が発するIFFのコードに龍は覚えがあった。

《リ्यू、物資を下ろしたい。一時的に着陸できるスペースはあるか》

《こっちで誘導する。とりあえず、速度を落として》

旋回してきた輸送機がノズルを使って下方に推力偏向。VTOL機と同様に機体を制御しながらグラウンドに着陸する。

「まったく、こんな方法で運んでくるとは……………」

着陸した輸送機を眺めながら龍は溜め息を付いた。このIS学園に理由はどうあれ輸送機で乗り付けたのだから、後で確実に問題になる。

下部のメタルボックスがパージされる。あの中に龍の品物は入っているようだ。機体から白衣を着た小柄女性が降りてくる。

「リユー、一週間ぶりぐらいか？」

「正確には五日と半日ぶりだ。レイラ」

彼女が龍が待っていたレイラ主任のようだ。

「ラインフォード、これはどう言う事だ？」

千冬が問い詰めにやって来た。

「どうもこうも俺が聞きたいぐらいですよ」

龍も流石にこんな方法で運んでくるのは想定外だったのだ。

「レイラ。このIS学園にこんな乗り付けたするなんて……会社を社会の敵にするつもりなのか？」

国際条約と日本憲法で守られているIS学園。通常、外部の人間もこういった物資も公の手続きを踏まなければ、IS学園に入ることは出来ない。

「問題ない。日本の領空に侵犯する前に即決で許可を貰ってある。30分間は居られるぞ」

「そんなに居なくていいからさっさとあれを片付けてくれ」

龍が指差す方向には音速輸送機がある。

「む、お前のために音速輸送機まで使ってやったのに」

「YC-16。わざわざ試作機を引っ張り出さなくても……」

「丁度、トライアルの最中でな。そのついでに運んでもらった」

これがついでなのか？

「レイラ主任！ 離陸します、離れてください」

「おう、ここまで運んでくれて感謝するぞ」

音速輸送機が離陸する。上空まで上がるとすぐに横推力に切り替え、外洋で飛び去る。

「ラインフォード、あの箱は何だ？」

「時雨の追加武装です。これを運ぶためにわざわざ輸送機まで使ったそうです」

「邪魔だ、さっさと退かせ」

「はい……」

だが、あのサイズを一人で運ぶのは少々骨だ。

「おい、一夏、手伝え」

「お、おう」

一夏に手伝いを運び二人がかりでメタルボックスをグラウンドの真ん中から端へ運ぶ。後でアリーナ内にあるピットに運ばなければ。

「ね、ねえ、不知火君。あの子一体誰？ それにさっきの飛行機も」

「それにこの箱一体何？」

大量に群がってくる女子達。突然現れて変な箱を落としていけば気にもなるか。

「彼女は俺のISの開発主任、この箱はISの後付武器と追加武装」

「さっきの飛行機は……」

「ただの輸送機」

龍は手短に説明する。

「ちょ、ちょっとお待ちなさい、龍さん！！」

「？ 何だ、セシリア」

セシリアが肩を掴んでくる。

「あのコンテナ、不知火財閥のマークが入っていますわよ！？」

セシリアの指さす方向にはメタルボックス側面に描かれた不知火財閥のマークがある。

「――それがどうした？」

「慌けないでくれませんか！？ 不知火財閥と言ったら世界的にも有名な大企業じゃないですか！？」

「そうだな」

「慌けないでください！！ 何故あなたが不知火財閥と繋がりがあ
るのですか！？」

セシリアが首を掴んで左右上下に振ります。

「ちょ、ちょっと！ おち、落ち着けて！！」

若干青い顔をした龍は何かセシリアを引きはがそうとするが、
悲しい事にジタバタさせた手がセシリアの豊満な胸部に当たってし

まう。

「あっ」

「キャ、キャ——！！！」

「グホッ!?」

セシリアの張り手が龍の頬に命中する。

「どこを触っていますの!?!」

「聞くだけのためにここまでする方が悪い!!!」

頬を抑える龍。かなり効いたようだ。

「関係ありませんわ!!!」

右手にISの狙撃銃スターライトを構えるセシリア。初弾は既に装填済み、安全装置も解除済みだ。

「て、おい!!!」

止める間もなく、放たれるビームの奔流。龍はISの左肩の浮遊部位を急展開、サブウィング表面にシールドバリアを展開し、ビームは上空へ反射する。

「危ないだろう!? 生身の人間もいるんだぞ」

龍の言うとおり、周りにはISスーツしか着ていない女子が何人もいる。そんな中でビームをぶっ放すなんて正気の端ではない。だが、言い換えれば、そこまでセシリアが怒っていると言うこと。胸を触ってしまった罪は深いようだ。

「問答無用ですわ!!!」

人間の急所を正確に狙ってくる。この三日間の指導は無駄ではなかったようだ。今身を持って体験しているのでよく分かる。

「だから止めろって言っているだろう!?!」

ビームを反射しながら、龍は右手のワイヤーアンカーを発射。セシリアのスターライトを捕らえると高圧電流を流し込み、機能を殺す。

「また、私のスターライトを……!!!」

悔しそうにするセシリア。ここ三日間で俺が破壊したセシリアの武装……スターライト二丁、BT6機、ミサイル型のBT25発……

…。

「あ、あなたのせいで本国から苦情が来たんですよ!!」

そりゃ、三日間でこれだけ壊せば、文句も出るわ。壊したのは俺だけど。

「言っとくけど、お前が弱いからだからな」

決して俺が悪いワケではない。多分……。

「くっ」

言い返せないのか詳しそうにするセシリア。俺の実力を身をもって知っているだけあって文句は言えないらしい。

バアン!!

バアン!!

「馬鹿者ども、許可なく戦闘をするな」

「す、すいません……」

「何故、俺まで……」

千冬の最強武器『主席簿』の角が命中。相変わらず、骨の髄まで響く威力だ。

「リュー、こっちに来てから馬鹿になっていないか？」

真顔でレイラがそんな事を聞いてきた。

「……」

問答無用で脳天に鉄拳を振り落とす。

「イタッ! 暴力反対だぞ!!」

「知るかボケ」

暴れるレイラの頭を押さえる龍。レイラは子供のように（見た目も子供だが）腕を振り回すが、龍に届かない。

「ねえ、しらぬー、この子誰さん？」

本音が首を傾げる。確かに先程の説明では不足気味だが……。

「私の事を知りたいのか？」

「おう、知りたい知りたい」

「そうか、ならば教えてやろう」

レイラはゴホン…と咳払いすると殆どまな板の胸を張った。

「私は不知火財閥系列民間軍需企業『グローバル・テクノロジー・インダストリーズ』のＩＳ技術開発部最高責任者『レイラ・レイター』だ！」

「――何高々に発言してるんだよ」

頭痛を覚える龍。

「不知火財閥って言ったら、あれだよな？」

「そうそう、確か世界でも有数の大企業……」

不知火財閥……世界でも五本の指に入る多国籍大企業。工業製品だけでなく、それを作るための施設や機械等も自社の生産ラインで製作している。

それ以外にも軍需……重火器や弾薬等といった装備に戦闘機や重戦車、さらには軍艦までも自社で作ってしまうほどの工業力を有している化け物のような企業。当然、ＩＳの開発権利も持っており、コアも数機保有している。レイラはその不知火財閥お抱えのＩＳ研究者なのだ。

「奴の使っているＩＳも私が開発したのだ」

奴とは勿論龍のことである。

「て、事は不知火君も……」

「ちよっと待って！　名字が不知火って事は……」
バレた……。

「何だ、リユー。まだ何も言っていないのか？」

「――タイミングが無くってな」

「――どう言う事！？」「――」

女子に包囲される龍。訳を話さないと開放してはくれないだろう。「お察しの通り、俺は不知火財閥の創設者『不知火・源一郎』の身内だ……一応、な」

「――「え〜〜〜！？」」「――」

「身内ではなく、ま……」

「レイラ、余計な事は喋るな」

レイラの口を塞ぐ龍。端から見たら幼女に手を……ゴホン、小さな

妹を抱き抱えるような状態だ。

「お前達、いつまで喋っているつもりだ？ さっさとISの起動訓練でもしろ！」

「「はい！」」

千冬の鶴の一声によって集まっていた女子達が散っていく。

「さて、ラインフォード」

バアン！！

バアン！！

バアン！！

「お前は何度授業妨害したら気が済むんだ？」

「す、すいません、織斑先生」

「まったく……放課後、反省文を提出しろ。一万字以上でだ」

「はい……」

うな垂れる龍。

「リュウ、気落ちしているところで悪いが『アイギス』を貸せ」

「時雨を？」

「機体がないと調整ができんだろう」

「分かったよ。織斑先生。レイラとメタルボックスを第三アリーナのピットに運ぶので少し抜けます」

「分かった。10分に戻って来い。一秒でも遅れたら、授業終わり一人でIS全機を片付けてもらう」

「はい……」

龍にとって今日は厄日のようだ。

昼、第三アリーナのピットでは、龍とレイラの二人が時雨の新たな武装の装着、調整を行っていた。

「腹減った……」

結局。十分で戻ってこれなかった龍は昼一人で四機ISを片付けた。その後、昼食を取る暇も無く、時雨の調整。

「文句を言っていないで早くプログラムの初期化をを済ませろ。試合開始まで後十分もないんだぞ」

「分かっているけどさ……」

腹の虫が鳴りっ放しだ。

「さて、これで『マルチ・ブースター』と『タクティカル・ウィザード』の調整完了だ」

「こっちもプログラムの初期化完了だ。次は？」

「後付武器のチェックでもしておけ。私はその間にFCSとセンサー類の調整を終える」

「はいよ」

龍はメタルボックス内から武器を取り出す。武器にはまだ所有者の登録を終えていないので、まずはその登録。それが終わった所で、十数種ある武器から二つの武器を量子化^{インストール}してISの拡張領域^{バースロット}に保存する。

「それだけでいいのか？ 幾つかデータ取りしたのがあるのだが」

「自分で試射もしていない武器は使わない」

「だが、拡張領域にはまだ余裕があるのに」

「パイロットの意見は聞くものだが、レイラ主任」

「ふん、言われんでも参考程度にはする——よし、これで調整は完了だ。火器についてもセンサー・リンクとFCSが使えるようになったから、問題なく使えるはずだ」

ISのバイザーに接続していたケーブルを引き抜く。各部に繋がっていた調整用のケーブルもページされる。

先日までの時雨にはあった違和感が無くなっている。本来の状態になったためだろう。

「注意しておくが、完全に調整し切れているとは言えないからな。戦闘中にイメージと物理的な差が出るかもしれない」

「了解、肝に銘じておくよ」

「それと『アレ』は使うなよ」

「——心配性だな、レイラは」

「ち、違うわ！ 私はテストパイロットの方で心配してだな……」
「分かってるよ」

機体をカタパルトに接続する。

「時雨の本当の姿を見せつけてやれ」

「勿論そのつもりさ」

龍がカタパルトから打ち出される。

「よ、待たせたな、一夏」

「いや、そんなに待ってないよ」

アリーナの上空には既に一夏がISを展開し、近接特化ブレード『雪片式型』を構えていた。

「それが本当の龍のISか？」

「ああ、時雨・高機動戦闘型。本来の時雨の姿だ」

両肩と両腰の兵装を新たなものに変えた時雨。

「一夏、俺を殺す気で来いよ」

「言われなくても」

龍も肘のビームブーメランを引き抜く。プラズマ刀が形成されていく。

《両者、試合を開始してください》

試合開始を告げるベルが鳴り響く。

「先手必勝!!」

先に動いたのは一夏。エネルギーを使って急加速。近接戦闘に持ち込む腹積もりだ。

「……………」

ラビット・スラスト

龍は十八番の推力偏向瞬時加速でISを一瞬で右へスライド移動させる。一夏もその動き合わせて追ってくる。

訓練の成果はあるみたいだな……。

この三日間の訓練は無駄ではなかったようだ。一夏にはこの三日間射撃に対する回避方法と間合いの詰め方。後、高速の動きに慣れ

させる訓練をやらせた。

とても三日間でものに出来るものではないが、ある程度は形になっている。

「簡単に潰れたんじゃ、殺^やりがいがない！」

突っ込んでくる一夏の雪片式型をプラズマ刀で弾く。龍は全身のスラスターを吹かして一夏に詰め寄ると両手にビームブーメランを構えた。

「クソッ！」

一夏は雪片で龍の斬撃をいなししていくが、二太刀と一太刀では手数^二の差があり過ぎる。

「どうした、一夏？ 動きに切れが無いぞ」

「――舐めるなよ、龍――！」

振り下ろされる龍のプラズマ刀を剣ではなく、腕のシールドバリアで受ける。その隙に雪片で片方のブーメランを切り落とす。

龍は冷静に切り落とされたブーメランを捨てると、もう片方を一夏目掛けて投げ飛ばした。

「当たるかよ！」

弾き落とされるブーメラン。勢いづいた一夏は再び龍との距離を詰める。

「自分に流れがあると思うのはいいが不用意に突っ込み過ぎだ」

龍の右手に粒子が集まり、一つの形を作り出していく。

「俺に射撃兵装が無いと思ったのか？」

量子化された複合銃『ブレイズ・バレット』を構える。

「なっ！？」

「今更、遅いわ！」

発射される三発のグレネードランチャー。回避に移る一夏だが、避けきれない。

「うわぁ！！」

盛大に爆発する。

「一夏、これで終わりじゃないぞ」

左手に量子化される可変カノンライフル『ライトニング』。
両肩の『タクティカル・ウィザード』の可変ビームカノン『ツヴ
アイ』。

両腰の『マルチ・ブースター』のビーム機銃『ラミントン』。

「文字通り蜂の巣にしてやる」

計七門の重火器が業火を上げる。

「一夏さん、何をしてますの!？」

「一夏、何をしてる! 早く距離を詰めろ!！」

画面に映る一夏と龍の戦いを見ていた箒とセシリアが怒りの声を上げる。

「はぁ、凄いですね、ラインフォード君。この前の試合と動きが全然違います」

真耶が感嘆の声を上げる。

「あれが本来の奴の戦い方なのだろう」

千冬はそこまで驚いていないようだが、弟がいいようにやられているのを見るのは嫌なようだ。

「織斑君のシールドエネルギー300を切りました!」

「ラインフォードは?」

「500を切った辺りです。あれだけの機動とビーム兵器を使っているのに……」

「当然だ、奴は任意でビームの出力を調整して必要以上エネルギーを消費しないようにしている」

ピットにレイラが現れる。

「えーと、レイラ:ちゃん?」

セシリアがレイラの逆鱗に触れる。

「ムカツ——!! ちゃん付けするな!! 私はこう見えても二十歳だ!!」

「す、すいません!」

慌てて平謝りする。だが、レイラ……『こう見えても』と言う事は自分が幼く見える事に自覚があったんだな。

「はあ……しかし、相手の――白式つと言ったか。私の『アイギス』にあそこまで善戦するとは、流石といったところか」

「当然だ、一夏が乗っているのだからな」

「そうですわ、一夏さんなら」

「……」

皆が画面に映る二人の戦いはさらに激しさを増していた。

「さて、そろそろ限界か？」

「……」

龍の問いに一夏は無言で返した。一夏のエネルギー残量は235。それに対して龍の残量460。

「接近したくても出来ないと言うのは辛いだろうな、一夏」

「お前にだけは言われたくない！」

先程から一夏は龍に接近しようとは何度も仕掛けている。だが、その度に龍は腰のラミントンや肩のツヴァイでそれを牽制。一夏が距離をとれば、ライトニングのスナイパーモードで狙撃。接近を許したと思えば、マシンガンモードのライトニングとブレイズ・バレットの斉射。どの間合いでも龍は的確に一夏にダメージを与えていた。そろそろ仕掛けてくるか。

一夏のエネルギー残量では後一回の攻撃に力を注がなければ勝利は難しい。ここで守りに徹したら、ジリ貧になり、空しく負けることになる。それはアイツも分かっているだろう。

「使うか、『零落白夜』……」

だが、一夏には一発逆転の切り札がある。単一仕様特殊能力『ワンオフ・アビリティ零落^{らくびやく}白夜』。自身のエネルギーを攻撃に転じる『諸刃の剣』。だが、その一撃は相手のシールドバリアを貫通し、絶対防御を強制的に発動させる。絶対防御はパイロットへのダメージを防ぐ代わりにシールド

ルドエネルギーの大部分を消費する。

その一撃が決まったら、正直勝負がどっちに転ぶかは分からない。

「一夏、来ないならこっちから行くぞ！」

ライトニングのバレルをマシンガンモード《ショートバレル》に変更し、各部スラスタを点火。

ブレイズ・バレットのグレネードを発射。一夏はそれを回避する。龍はグレネードの広範囲に一夏がいるのを確認すると、ライトニングで自らグレネードを打ち落とした。

「うおっ!？」

最大効果範囲ではないが、体勢を崩すには十分だ。

続けてライトニングをグレネードモードに。ブレイズ・バレットを収納すると、ライトニングを両手に構え、両肩・腰の砲門を一夏に向ける。

「これで終わりだ」

ライトニングに連動して放たれる四門のビーム砲。爆風の衝撃から立ち直っていない一夏に回避する術は無い。

「まだだ!!」

「なっ!？」

爆煙の中から一夏が現れる。あれだけの斉射を浴びてまだ動けるとは……。

「引導を渡してやる！」

ライトニングを構え直し、一夏に狙いを定める。大出力のビームが一夏を襲う。

「甘いぞ、龍！」

雪片の放つ光に一段と磨きが掛かる。刹那、放たれたビームの奔流が雪片に当たり、霧散する。

「何っ!？」

これは流石に予測の範疇を超えていたのか、龍の顔に明らかな焦りが出る。

「貰った!!」

振り下ろされる雪片式型の一振り。

動きがスローモーションのようにゆっくりに見える。龍は両手にホールドしていたライトニングを捨てる。量子変化して収納するために余計な思考を裂く訳にはいかない。

ガァー——！！

金属同士が衝突するような高い音が響く。

「えっ？」

一夏の渾身の一撃は……龍の翼によって妨げられた。

「なるほど、『零落白夜』か……流石は『ブリュツヒルデ』が使っていた単一仕様特殊能力だ。まさかシールドバリアだけじゃなく、ビームまで切り裂くとは……」

左肩にあった非固定浮遊部位の柄を握り、一夏の雪片を受け止めていた。

「そのユニット。射撃兵装が付いているだけだったんじゃ……」

そう、龍が構えているのは左肩の非固定浮遊部位である『多目的複合武装機動翼』。
イカル・ウィザード
スラスト・ウィング
アンロック・ユニット

「コイツはな、機動翼であると同時に射撃・格闘・防御の機能を搭載した時雨の主武装なんだよ」

一夏の雪片からあの輝きが消える。どうやら、『零落白夜』の限界時間のようだ。

「『タクティカル・ウィザード《戦術魔法》》……これがコイツの名だ。ちなみに今の状態は近接格闘モード《クレイモア》って言うんだよ」

「ご丁寧にも……」

討ち合った状態で膠着する二人。

「どうした、自慢の『零落白夜』はもう使わないのか？」

「つ、使いたくてもエネルギーが無いんだよ！」

先程の一撃に大部分のエネルギーを割いてしまった一夏。残量は余裕で100を切っている。

「そうか、残念だな」

徐々に押し返される一夏。

「くっ」

「あ、言い忘れた」

「な、何をだ？」

「クレイモアじゃなく——」

龍の左手が右肩に伸びる。

「——ツイン・クレイモアだったよ」

右肩にマウントされていたもう一つのクレイモアが一夏の鳩尾に叩き込まれる。

「グホッ！」

体勢の崩れる一夏。龍は両手のクレイモアを合わせ構え直すと、スラスターを使って体を回転させる。ツイン・クレイモアの前面にプラズマが凝着する。

「チェスト——！！！！」

遠心力の乗った大剣の一撃を雪片で受け止める一夏。だが、当然のごとく、そのパワーを受け止めきれず、地に叩きつけられる。

地面が割れ、土煙が上がる。

《試合終了、勝者——龍・S・ラインフォード》

「……」

ツイン・クレイモアを両肩に戻す。

煙が止む。一夏はまだ立っていた。雪片を支えにしているが、あの一撃を受けても立っていた。

「……いい勝負だった、一夏」
手を差し出す龍。

「結局、負けちゃったけどな」

一夏は差し出された手をしっかり握った。

「というわけで、織斑君、クラス代表決定おめでとう!!」

「おめでとう、織斑君〜!!」

パン、パンパーン!! クラッカーの嵐。一夏の顔は紙吹雪塗れになる。

「……どうして、俺が？」

「試合の結果から判断してそう決まったんだろ」

何食わぬ顔でジュースを飲む龍。

「俺は試合に負けたぞ」

「俺も気になったから千冬さんに確認とったが『私がいつ勝った方を代表にすると聞いた?』聞き返された」

「……けど、龍の方が強いのにさ」

「安心しろ、狙われたのはお前だけじゃない……」

龍は心底嫌そうな顔になる。

「それと不知火君、副クラス代表決定おめでとう!!」

パン、パン、パンパーン!!

先程よりも断然多いクラッカーにより龍の黒髪が個性的な色に変わる。

「……………こう言う事だ」

「ははは……」

「笑うところじゃないぞ……」

力なく笑う一夏。うな垂れる龍。

試合の終わった放課後、一年一組の面々はクラス代表・副代表主任パーティを食堂を借りて行った。

試合の後、クラスの女子に強制連行。龍としてはさっさと部屋に戻って一休み。その後、反省文を書くつもりだったのだが、予定が狂ってしまった。

「いやー、これでクラス代表対抗戦も盛り上がるね」

「そうそう、織斑君に不知火君がいれば、鬼に金棒だよね」

「ほんとほんと」

「このクラスになれてよかった」

「ほんとほんと」

女子達が相槌を打ちながらお菓子に舌鼓を打つ。

「人気者でいい気分だな、一夏」

「本当ですわ、一夏さん」

箒とセシリアが不機嫌そうな顔をしてジュースを飲む。飲むのはいいが、音を立てて飲むのは少し行儀がよくないと思う。

「俺、何かした…?」

ギロ!

二人に睨まれた一夏は萎縮して黙りこくった。この唐変木バカが……。

「はいはい、新聞部です。現在話題の新入生、織斑一夏君と龍・S・ラインフォード君の特別取材にきました」

周りの女子達が盛り上がる。一夏と龍は盛り下がる。

「あ、私は二年の黛薫子まゆずみかおるこ、よろしくね。新聞部副部長を務めています」

何故だか、名刺を渡される。しかもちゃんとしたものだ。

「ではさっそく、クラス代表になった織斑君! 今の気持ちをどうぞ!」

携帯型のボイスレコーダーを突きつけられ、返答に困る一夏。次は確実に自分が狙われるので今の内にネタを考えておかなければ。

「え……と、とりあえず頑張ります」

「えい、もつといいコメント頂戴よ。『俺に触れるとヤケドするぜ!』とか」

「ふっ」

余りに一夏に似合わない台詞でつい笑いが漏れる。一夏がそんな事を口にしたら、真夏に雪が降るほどの珍事だ。

「龍! 笑うなよ」

「だったら、もう少し気の利いたコメントをするんだな」

「そうそう、織斑君、他にないの?」

「俺、不器用なんで」

「うわ、前時代的！」

それについては少し同感だ。

「仕方ない、じゃあ、織斑君のコメントは適当に捏造ねっぞうしておくから」

「おいおい、捏造は不味いだろう」

マスメディアが情報を隠蔽するな。

「じゃあ、不知火君、クラス副代表に選ばれた今の気持ちは？」

「特に感想も何もないが、バカで無鉄砲な一夏のサポートをすると思うと気が重い」

「おい、龍！ バカで無鉄砲って誰のことだよ！？」

「お前だ、バカ。プラス唐変木も付けてやろう」

「うーん、面白かったけど、やっぱり不知火君のも捏造ね」

「おい！ さっき捏造するなと」

「大丈夫大丈夫、ちゃんとカッコよくまとめるから」

そういう問題ではないと思うのだが。

「それじゃ、ちょっと写真取らせて。注目の専用機持ち、新聞の一面ネタできるし」

写真を撮る理由に若干の不満を感じなくはないが、とりあえずカメラの前に立つ。

「うーん、ちょっと入りきらないな。二人とも肩組んでくれない？」

「よし、龍肩貸せ」

「何が悲しくて男と方を組まないといけないんだよ」

「文句言うなよ」

渋々肩を組む龍。

「それじゃあ、取るよー35×51÷24は？」

かなり無茶振りの暗算だ。

「えっ、2……」

一夏、真に受けるなよ。

「ぶぶー、74，375でした」

カシャ！

シャッターが切られる。

「て、何で皆いるんだ!？」

あの一瞬でカメラに映るため、クラスメイト全員が集結していた。
「折角、撮ってくれるわけだしね」

「そうそう、気にしない、気にしない」

女子の行動力とは凄いものだな。

「一夏、いい加減離れろ」

肩に掛かった一夏の手と同時に片足も払う。

「うおっ!？」

支えを失った一夏はあろう事か箒の方に倒れ掛かる。

「織斑君、大胆!!」

「い、一夏さん!？ 何をしていますの!？」

椅子に倒れこんだ二人。箒の上に一夏が乗りかかるような体勢。
誤解を招きそうな状態だな。

「な…なっ…!!？」

「ご、ゴメン、箒!」

「一夏さん! 何で箒さんを押して倒したのですの!？」

「ち、違う!! これは龍が…」

一夏は龍を指差すが……。

「あ、あれ？」

龍の影も形もない。

「龍さんがどうしたのですか! この期に及んで人に罪を擦り付けるおつもり!？」

「ちくがくうく!!」

一夏の心の叫びは空しく食堂に響いた。

パーティを抜け出した龍はレイラと合流し、グラウンドに来ていた。

「いいのか、パーティを抜け出して」

「いいんだよ。餌に一夏を置いてきたから問題ない」

迎えのへりを待つ二人。

「織斑一夏か、お前危なく一本取られかけただろう？」

「ああ、時雨が今の状態でなければ、負けていた」

「中々見どころのある奴のようだな、織斑一夏は」

「ああ、千冬さんの弟なだけはある」

「お前はマリアの弟だしな」

「……そうだな」

程なく迎えのへりがやってくる。

「リユー、戦闘データは遂次こっちに送ってくれよ」

「分かっている。心配するな」

「それと何があっても『ハイ・マニユーバモード』は使うなよ！」

「――分かっている」

小言を言うレイラをへりに押し込む。

「何か機体に問題が起きたら、すぐに呼ぶんだぞ。いいな？」

「はいはい、分かったから」

離陸するその時まで、口うるさかった。

「……さて、いつまで隠れているんですか？」

「あら、ばれてた？」

木の陰から楯無が現れる。

「そう何度も後ろを取らせませんよ」

「そう。残念」

扇子に『残念無念』の文字が並ぶ。

「何しに来たんですか、更識会長？」

「うん、カッコイイ試合をした不知火君をお茶会にお誘い♪」

「――本当のところは？」

「ふふ、資料整理のお誘い」

「はあ、分かりました、会長」

龍が休めるのはまだ先になりそうだ。

第三話く翼の名は『時雨』く（後書き）

一話・二話に比べて書くのに時間がかかりましたが、自分なりに納得のいく出来になったと思っています。

次話で原作の第一巻後半をまとめようと考えています。
まだまだ書いていくので楽しみにしてください。

第四話　クラス対抗戦

厄介な一日が終わった次の日。クラスは一つの話題で持ちきりだった。

「ねえ、聞いた？　新しい転校生の話」

クラスに入るなり、噂好きの女子が話しかけてくる。

「転校生？　この時期に珍しくないか」

一夏がもつとも疑問を言う。

「しかもその転校生、中国の代表候補生らしいよ」

「中国の代表候補生……」

一夏や周りの女子は分かっているが、恐らくこの転入の原因、一夏と自分であるのはまず間違いない。何せ、自分たちは男でありながらISの操縦ができる希少生物。どの国家・団体も喉から手が出るほどその情報を欲している。

通常なら、殆どの情報は公正に公表される。それが国際条約の規約だからだ。だが、一夏の場合は少し勝手が違う。男でありながらISが使える、さらにその原因も不明。男であるため、今までの基礎概念は当てはまらない。

一夏を何処の組織の所属とするか、この問題は下手をすると外交問題にまで発展する爆弾だ。

そして、龍自身も。公に姿を現した今、そうそう思い通りに動けなくなっている。バックに大企業『不知火財閥』の影を見せ、身内には織斑地冬と同じ『ブリュンヒルデ』を冠された義姉『マリアーヌ・ラインフォード』。義祖父に『不知火・源一郎』。ある意味、一夏よりも注目の的になる。

「…………さて、どうするか」

考えてみたら、問題が山積みだ。これでは仕事に支障きたす………
…アイツの護衛の任務に。

「ん？　しらぬー、どうしたの？　そんな眉間にしわ寄せて」

「気にするな、これは生まれつきだ」

「そうかな？　そうそう、しらぬくはどう思う、中国の代表候補生」

「さあ、興味の引かれる話題とは思えないが……」
内心少し心配の種ではあるが……。

「中国のISには興味があるな。代表候補生の専用ISは第三世代だろうし」

「どんな奴がきたんだろう」

「あら、私の存在を今更ながら危ぶんでの転入かしら」

いや、恐らく無い……と龍は心の中で突っ込んだ。

「このクラスの代表と言うわけではないのだろう？　そこまで騒ぐ必要も無い」

いつの間にか、箒も現れる。どうやら、女の子は噂話が好きなようだ。

「ま、専用機持ちのクラス代表は一組と四組だけらしいし、問題ないだろう」

「そうそう。織斑君、ガンバってね」

「不知火君もガンバってね」

「一夏は兎も角、俺は分かんがな」

あくまで俺は副。つまり、一夏の代わりだ。病欠でも起こらない限り、仕事を回ってこない。

「――余裕ぶっていられるのも今のうちだからね」

ドアの方から声が聞こえた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には勝てないからね」

若干、聞き覚えるある声だ。

「鈴……？　お前、鈴か？」

「そうよ、中国代表候補生。凰・鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

ファン・リンイン……。

「鈴、何格好付けているんだ？　すげー似合わないぞ」

「んなっ……！？　なんて事言うのよ、アンタは！」

「あっ」

二人のやり取りを聞いて思い出した。鳳・鈴音^{ファン・リンイン}。第二回モント・グロッソの後、一夏の学校に一年ほど通っていた頃会った一夏のセカンド幼馴染だ。

「大体、アンタはいつも……」

鈴の目線が一夏の後。龍に注がれる。

「久しぶりだな、鈴。覚えてるか？」

「え、えっ？」

目を擦る鈴。

「あ、アンタはもしかして龍？」

「それ以外の何に見えるんだ、お前の目には？」

「アンタはいつ性転換したの！？」

「……」

龍の顔から感情が消える。

シュッ、シュッ！！

「ひっ！？」

鈴の顔横にナイフが二本刺さる。

「少し見ないうちに面白い冗談を言うようになったな、鈴」

さらに三本の手投げナイフを見せつけながら、龍は笑った。クラス全体が凍りつく。温厚だと思っていた龍がこんな事をしでかせば、固まるのは無理ないが……。

「な、何よ！　男のアンタがいれば、そう考えても……ひっ！？」

三本のナイフが鈴の足下に刺さる。

「何か、言ったか？」

龍を怒らせると……怖い。

「お前達、いつまで騒いでいる！　もうショートホームルームの間だぞ」

タイミングがいいのか、悪いのか、鬼教官こと千冬が現れた。

「凰、邪魔だ、退け」

「す、すいません……」

逃げ腰の鈴。どうやら、千冬のことを苦手らしい。

「ライنفォード、このナイフをさっさと片付ける。それと無闇に学校を傷つけるな」

「すいません」

龍も先程投げたナイフを回収する。

「い、いい、一夏！ 昼にまた来るから逃げないでよ！！」

「さっさと戻れ」

「は、はいっ！」

千冬に睨まれ、猛ダッシュで教室に戻る鈴。アイツは昔のまま『バカ』のようだ。

「それから、ライnfォード」

「何ですか？」

「反省文を提出しろ、字数は二万字以上だ」

「……………」

……これでは、人のことは言えない。

昼、一夏と箒、セシリア、それと本音他数名のクラスメイトと一緒に食堂に行く。

「それにしても鈴が代表候補だったとは……」

「驚きか？」

「まあな、それよりも龍の切れ具合の方が凄かったけど」

「お前も味わうか？」

袖から現れるよく切れそうなナイフ。

「え、遠慮しとく」

「そうか……ま、元氣そうで良かったよ。突然の転校だったしな」

「そういえば、そうだな」

雑談を交わす二人。その後に怖い顔をした箒とセシリア。さらに

後に興味津々の本音たち。

午前中の授業中、箒とセシリアはモグラ叩きのモグラと化していた。何せ、鬼教官千冬の授業で余所見はするわ、話は聞かないわ、変な妄想に走るわ……見ていて楽しかったが。

確か、5、6回は千冬の出席簿を食らっていた。さらに真耶の注意は両手の指では足りないぐらい。

恋は女を磨くが、馬鹿にもする。

ここ最近の二人を見ているとしみじみ思う。しかし、彼女らを責めるのはある意味筋違いだ。

（元を辿れば、コイツが原因だからな）

横の一夏を眺める。二人の気持ちどころか周りの女子の事も分かっていない。唐変木の中の唐変木。

「苦勞するな……」

「何か言ったか、龍？」

「いや、何でもない」

食堂に着いた一団を……

「待っていたわよ、一夏！」

お盆を両手に持ったツインテール娘が待ち構えていた。

「鈴、邪魔」

「ちよつと……！」

鈴を押しよける龍。何せ、鈴が立っていたのは券売機の前。そんな所にいられたんじゃ、食券が買えない。

「鈴、そこに立っていたらみんなの邪魔になるって」

「うっ、分かってるわよ」

ちなみに鈴の昼食はラーメンだ。

「麺伸びるぞ」

「う五月蠅いわね、アンタを待っていたんでしょうが！ 何でもつと早く来ないのよ！？」

ああ、ラーメンの汁が……。

「鈴、暴れるのは構わないが、ラーメンがこぼれるぞ」

食券を買い終えた龍が鈴の頭を叩く。今日の昼は牛丼と味噌汁のセットだ。

「あっ」

「はあ、とりあえず、席取るぞ。話はその後だ」

食券を食堂のおばちゃんに渡す。鈴は先に席を取りに行く。

今回の配置は一夏・龍・鈴の三人と隣のテーブルに残り全員。

「それよりも何で龍がここにいるのよ？」

「さて、何ででしょう」

七味唐辛子をかける。牛丼に七味は欠かせない。

「…………ホントに男よね」

「…………」

鈴のラーメンに胡椒こしょうを振り掛ける。

「あっ!？」

「ああ、スマン。手が滑った」

牛丼を口に運ぶ。程よく七味が効いて実に美味だ。

「そんなにかけていないから許容範囲だろう？　それにお前、胡椒いつもかけていたし」

「そ、そうだけど……」

納得がいかないのか、不服そうな顔になる鈴。

「そ、それよりも何でアンタがいるのよ!？」

「そこの一夏と似た理由でな」

「バカとは何だよ、龍!」

「バカをバカと言って何が悪い？　昨日もパーティのドサクサに紛れて箸を押し倒していただろう？」

「あ、あれは……!」

「一夏——!!　アンタそれ、どういう事!？」

鈴がテーブル越しに一夏の襟元を掴む。

「ち、違う!　俺は何も……」

「アンタの意見は聞いちゃいないのよ!」

一夏の首が面白いほど揺れ動いている。龍はそれを横で眺めなが

ら茶を啜している。呑気なものだ。

「そういえば、一夏胸触っていたな」
炎に油を撒くのも忘れない。

「いゝちゝかゝ！」

「り、鈴……」

一夏の顔色が徐々に青くなっている。

「ま、一夏をこかしたのは俺だけ……」

今更事実を言っても後の祭り。一夏の顔色は青から紫へ……。

「おい、一夏を放せ！！」

「一夏さん、大丈夫ですか！？」

とそこに箒とセシリアが乱入。一夏を巡って新旧同士の醜い争いが始まる。

「部外者はすっこんでて！ これはあたしと一夏の問題なの！」

「お前こそ、その手を放せ！！」

「そうですね、大体同じクラスでもないのに図々しく一夏さんと仲良くして、あなたこそすっこんでいなさい！！」

白熱する両者。

「ね、ねえ、しらぬ〜」

「布仏、啞え箸をしながら話すな、行儀が悪い。あとで虚先輩に報告しとくぞ」

「ああ、ごめんなさい。あ、しらぬ〜、私の事も名前呼びして〜」
「気が向いたらな、で、何のようだ？」

「彼女って何者？ しらぬ〜とおりむ〜は知り合いみたいだけど」

「鈴は昔一夏と同じ学校に通っていたんだよ。一時期、俺もその学校に通っていたな。その時に知り合った。一夏は小学校の頃からの付き合いらしい」

「なるほど、他には？」

「アイツにとって箒が『ファースト幼馴染』で鈴が『セカンド幼馴染』って感じだな。あつ、鈴ってのはアイツの愛称みたいなもんだ」
「へえ〜」

「しかし、代表候補生として戻ってくるとはな……ちょっと驚きだ」
三人はまだ言い争っている……自分達の下に気を失った一夏が
いるのも忘れて。

放課後、龍はアリーナに残っていた武装の試射を行っていた。
バアン！！

発砲音がアリーナに響く。続けて葉莢やつきょうが地面に落ちる。

「……………」

バアン！！

バアン！！

バアン！！

続けて三発連射。

「……………悪くない、使えそうだな」

新しい弾倉マガジンに付け替え、再度銃を構える。

「……………」

トリガー
引金を引く。

バアン！！

バアン！！

バアン！！

今度は弾倉内の実包カートリッジを全弾打ち切る。十数発の弾丸がターゲット
を撃ち抜く。

「ビューー、いつ撃つても全自動式はスカツとするな」

目の前のターゲットは全て80～100点を打ち抜いている。

近接武装複合型のマシンピストル『アーヴァンク』。先日レイラ
が運んできたメタルボックス内に収納されていた武装の一つだ。

拳銃といってもIS用に口径はより大口径のものに改良され、全
自動式の機構も組み込まれている。もちろん半自動式セミオートマチックとしても使用
可能だ。

銃身下部に取り付けられた近接戦闘時用のブレードには耐ビーム

コーティングが施されており、プラズマ刀やビームでも受け止める事ができる。

射程距離と命中精度に少し不満が残るが、近・中距離仕様と思えば……まあ納得はいく。

「さて、一夏の方はどうかな？」

隣のアリーナでは箒とセシリアが一夏を鍛え上げている。先日言ったことを実演しているようだ。

「ま、仲が良い事はいいいことだ」

一夏の悲鳴が聞こえてくるが……。

「……死にはしないだろう」

聞こえてくる悲鳴……ゴホン、雑音を聞き流しながら、龍は次の試射に移る。

手に取ったのは大口径の散弾銃『ヘルハウンド』。
ポンプアクションにより実包が薬室に装填される。

「……………」

ターゲットに狙いを定める。

バアーン！！！！

打ち出されるスラッグ弾。ターゲットの半数以上に命中する。

「はやり、反動が大きいな……」

龍はISのPICとハイパーセンサーによる補正を切って試射を行っている。手動で射撃を行った方がその武器の癖を見やすいからだ。勿論、補正を加えた時の射撃も行う。

「使いどころを選ぶが……」

悪くない威力だ。実弾であるところも信頼性が高い。

「時雨はビーム兵装が多いからな。後付装備は実弾で固めるのもいいかもしれない」

メタルボックスには大型重火器がまだ残っている。

「……………ま、用意するに越した事はないか」
意味深げに龍はそう呟いた。

長かった試射も終わり、龍は寮に戻る事にした。辺りは既に日も暮れ、電灯と星の光しかない。

奥の道を人影が走り抜ける。

「あれは……」

小柄で低い背丈、揺れる二束の髪。

「鈴！」

「龍……？」

鈴がその足を止める。

「アンタ、こんな時間に何してるのよ？」

「お前こそ、何で全力疾走しているんだ？　女が歩き回る時間じゃないぞ」

「質問を質問で返さないでよ」

「俺は第二アリーナでずっと後付装備の試射をやっていたんだよ」

「ふう〜ん」

「お前は？」

「……」

口を閉ざす鈴。だが、怒っているのは読み取れる。

一夏の奴、鈴を怒らせるような事でも言ったな……。

「とりあえず、歩きながら話そう」

「そうね……」

寮への道を歩く二人。鈴は終始下を向いたままだ。

昔を思い出すな……。

一時期、一夏や鈴たちと学校に通っていた頃、怒った鈴をこうやって宥めたものだ。

「ねえ、知ってる？」

「何をだ？」

「……一夏が女子と寝食を共にしている事」

「そう言う事か……」。

「知っているよ。箒のことだろう？　俺は個室だけど、アイツは部

屋割りの都合で相部屋になったんだとさ」

「一夏の奴、幼馴染ならいいとか言ってるさ！」

あの馬鹿は……。

「その話を聞いてぶち切れたと？」

「そうよ!!」

犬歯を抜き出しにする鈴。女としてどうかと思うぞ…。

「もう分かっていると思うが、箒もセシリアも……ついでに他の女子も一夏を狙っているぞ」

「言われなくなったら分かるわよ！ あたしだって……」
そこで鈴の顔が赤くなる。

「あたしだって……」

昔も同じ台詞セリフをよく聞いたな……。

「皆まで言わなくても分かるよ」

「……」

「で、何か考えはあるのか？」

「え？」

「アドバンテージは箒の方が大きいぞ？ セシリアは新参者だからまだ何とかなるが……今の内に手を打つといったほうがいいんじゃないか？」

「そ、そうだけど……」

鈴は行き当たりばったりで生きている節がある。考えるよりも行動——といった感じだ。よく言えば『実践主義』、悪く言えば『考えが足りない』だ。

「はあ、少しはその小さい頭を使え」

「小さい言うな——!!」

「事実だ——それよりも一夏は『幼馴染ならいい』と言ったんだろう？」

「そ、そうよ」

「お前も幼馴染だろう？」

「あっ」

龍の言いたいことが分かったのか、鈴の顔が変わる。

「後は自分で考えろ」

「サンキュ、龍!!」

先程と同じように全力疾走する鈴。

「昔のまんまだな」

鈴にちよっとした助言をする……昔と分らない自分の立ち位置。
龍は懐かしさをかみ締めた。

だが、翌日……。

「は？　鈴が怒った？　何で？」

「それが分からないんだよ」

龍は一夏から昨日の夜起きた事を聞いた。ちなみに今は朝食中、
珍しいことに一夏ハレームの方々は別の席で食べている。本当に珍しい。

今日の飯は龍が『鮭の塩焼き定食』に、一夏が『日替わり定食B』
と何故かハンバーグだ。

「お前、いったい鈴に何を言ったんだ？」

「な、何も言っていないって。昔の約束の話をしたら突然怒り出してひっぱ叩かれたんだよ」

「約束？」

「小学校の頃な、鈴が『料理の腕が上がったら、毎日酢豚を……』
て内容の約束したんだよ」

「『毎日酢豚を……』の後は？」

「確か『食べさせてやる』……だったような」

「……で、それを言ったら？」

「叩かれた」

一夏の右頬は手形がくつきり残っている。

「はぁ」

箸を置いて龍は深い……深いため息を付いた。

（この朴念仁が……）

鈴の約束は日本で言うところの『毎日味噌汁を作ってる』……まあ、皆まで言わなくても分かるだろう。

「そりゃ、鈴も怒るわ」

窓際のテーブルに目をやる。そこには不機嫌オーラを全開で放出して黙々と塩ラーメンを食べている鈴の姿があった。

目が少し赤いところを見ると、恐らく昨晚泣いていたのだろう。

（コイツは……）

擁護する気も庇う気も完全に失せた。最初から殆ど持っていなかったが。

「一夏……」

「ん、何だ？」

「馬に蹴られて死ね」

鈴の思いを代行して一夏に一発入れる。唐変木も度を超すと罪だ。「お前、クラス対抗戦までには仲直りしておけよ。私情を勝負に持ち込むな」

「わ、分かっているよ」

……本当に分かっているのだろうか。

それから約二週間、ろくな事が無かった。毎日のように文句を『俺』に言う鈴。何も理解していない朴念仁には頭を悩まされ、筭とセシリアからは二人の事を追及される。

俺は一夏では無いのに、何故こんな苦勞をしなければならないのだ。理不尽すぎるのではないのか？

生徒会室に逃げても会長から笑顔で渡される書類の山。唯一心が和むのは虚先輩が出す紅茶を飲んでいる時ぐらいだ。しかし、生徒会に入り浸るようになって幾つか副産物も手に入った。例えば、学園内の警備セキュリティへのアクセスコード。これにより施設内の電子ロックはある程度解除できるようになった。

また、学園のデータバンク。生徒会メンバーとなったおかげで閲覧許可が下りた。

その他に更識会長と虚先輩たちと仲良くなったこと。頼りになる先輩ができると言うのは案外心強いものだ。目も保養にもなるし……。

そして、やって来たクラス対抗戦当日。初戦からいきなり『一夏対『鈴』』という組み合わせだ。

「運がいいのか、悪いのか……」

「いや、俺としては運が悪い」

「そりゃ、鈴に謝るところか、日に油を注ぐような真似したんだからな。自業自得だ」

一夏サイドのピット。そのカタパルトで龍と一夏は話していた。

「鈴に『胸』の事をいうなんてお前勇氣あるな。そこだけは褒めてやるよ」

「全然褒められている気がしない……」

うな垂れる一夏。

「しかし、鈴のISも格闘型とはな。ま、合っていると云っちゃ合っているけど」

ISのHUDヘッド・アップ・ディスプレイに表示された鈴のIS『甲龍』シエンロンのカタログスペックに目を通す。

「先日の俺との試合やセシリアとの勝負とは勝手が違うからな。鈴アイツの近接格闘スキルは今の一夏よりも上だ」

「そうだろうな、昨日この目で見たよ」

「そうか、とりあえず平常心を崩すなよ。相手も一応人間なんだ、隙はできる」

「努力するよ」

一夏に助言を施すと龍はカタパルトを後にする。入れ違いに箒とセシリアが入ってくる。どうやら、この二人がやって来たから龍は場を空けたようだ。

ピットを離れた一夏は観客席で試合を観戦する事にした。

（確かここを上れば、観客席の端に出たはずだ）

階段を上る。その時階段の影から何かが飛び出してきた。

「！」

龍は見に染み付いた条件反射でそれを避ける。それと同時に袖からナイフを抜き取る。

「流石は不知火君だね」

「更識会長」

階段の壁から現れたのは楯無だった。壁から出てきたのは彼女の扇子だ。

「こんな所で人に襲い掛かってきて、いったい何をするつもりだったんですか？」

「ふふ、聞きたい？」

怪しい笑みを浮かべる楯無。

「いえ、遠慮しておきます」

障らぬ神に祟りなし…だ。

「暇なら試合でも一緒に観戦しませんか？」

「なら、お勧めの場所があるわ。付いてきて」

楯無の後に付いていく龍。楯無の案内でたどり着いたのは観覧席の上ゲストルームの一つだった。

「あら、不知火君。いらっしゃい」

中に入ると虚が紅茶と茶菓子を用意していた。部屋の中には紅茶の良い香りが満ちている。

「途中で会ったから連れてきたわ」

「すぐに不知火君の分も用意しますね」

「すみません」

虚に礼を言うと龍は近くのソファに腰を下ろした。ゲストルームだけあって中のソファや机等はどれも高級そうだ。

「会長、幾らなんでもこれは職権の乱用だと思いますよ」

「いいのいいの、ちゃんと許可は貰っているから」

向かいのソファに腰を下ろした楯無は脚を組むと虚の紅茶に舌鼓

を打った。

（この人は……）

無意識かそれとも意識してなのか……。

（色気があり過ぎる……）

目の前の太ももは白く染み一つ無い、そして……柔らかそうだ。

「はぁ……」

自分が彼女に対してそんな思考を持ってしまるのが情けない。

「そんなに気になるなら……障ってみる？」

「ぶっ!？」

紅茶に口を付けた龍が吹いた。

「女性の太ももをそんないやらしい目で見ると……不知火君も男よね」

「すみません……」

「不知火君なら別に障ってもいいけど？」

「冗談でもそんな事を言わないで欲しいですね」

「あら、本気のつもりだったんだけど……」

「……もう少し男に対して警戒心を持ってください」

龍は楯無に助言……というか懇願した。

「さぁ、そろそろ試合よ。元氣出して」

元氣をなくしたのは他でもない楯無のせいなのだが……。

アリーナを見ると、一夏と鈴が上空に上がっている。

「あれが中国の第三世代型IS『甲龍』（アンロック・ユニット）か」

特徴としては両肩の非固定浮遊部位だ。スパイクの付いた浮遊部位には一基ずつ砲門のようなモノが付いている。さらに背中には大型の近接装備。カタログスペックによれば、『双天牙月』と呼ばれる青龍刀らしいが、異様にでかい。一振りで人間など簡単に両断できそうなほどだ。

《両者、試合を開始してください》

試合開始のベルが鳴る。

先に動いたのは一夏。一気に距離を詰めると雪片式型を構える。

鈴は片手で双天牙月を振り回し、それを防ぐ。

スピードは兎も角、単純なパワーなら鈴の方が一枚上手のようだ。

「この勝負近接戦闘でも一夏の方が不利だな」

「現状を見れば……ね」

鈴はもう一振りの双天牙月を構える。一夏は雪片で攻撃をいなし
ているが、徐々にシールドエネルギーを削られている。

「一夏なら……」

ここで流れを変えるために距離を開ける。

龍の読み通り、一夏は一旦鈴から距離をとるようなコースを取る。

だが、鈴がそれを見逃すはずが無い。甲龍の非固定浮遊部位が上下
アンロック・ユニット
にスライドして砲門が剥き出しになる。砲門が光ったと思ったら、

次の瞬間、一夏の体勢が崩れた。

「あれは……」

「彼女の I S 『甲龍』 に搭載されている第三世代兵器『龍砲』」

「知っています。データバンクで閲覧しました」

『龍砲《龍砲》』……空間に圧縮を掛け、その余剰で発生する衝
撃を砲弾として利用する……衝撃砲の一種だ。

「砲身も砲弾も肉眼で目視できない兵器。中々使い勝手のいい兵器
を持っているな、中国の連中は」

「さらに砲身の斜角の制限がほぼ無い。パイロットの技量次第では
全方位への攻撃が可能だわ」

龍と楯無が解説している間、一夏は連続で撃ち込まれる衝撃弾を
必死に避けていた。

「始めて味わう衝撃砲をよく避けるな、一夏の奴」

「流星は織斑先生の弟ね」

だが、ダメージは確実に蓄積しているこのままでは距離を詰める
事もできず、ジリ貧になるのは間違いない。

「流れを掴むには……」

「零落白夜ですね。ただ問題なのが出どころですけど、今の一夏
では距離を詰めるのは厳しい」

「そうね」

一夏は龍砲の連続射撃を何とか回避している。先日までの一夏ではここまで上手く回避することは出来なかっただろう。龍との試合やトレーニングが効いているようだ。

「不知火君が織斑君の立場なら、どうでる？」

楯無が唐突にそんな質問をしてきた。その目はいつもの会長の目ではなく、戦いを知っている目だ。

「一定の距離を開けて衝撃砲を撃たせ続けます。衝撃砲は確かに対応しにくい兵器ですが、次弾発射までのタイムラグが大きい。どこかでリズム崩すはずです。その隙を突いて零落白夜を叩き込みます」

「なるほど……でも接近するまでに衝撃砲で牽制されるんじゃないかしら？」

「イグニッション・ブースト瞬時加速。接近時に使用すれば、反撃される前に懷に飛び込めます」

「瞬時加速。奇襲戦法の一つだね」

「今の一夏なら瞬時加速を使えるはずですよ」

ここ一週間、一夏はそれをマスターするためにかなりの時間を割いていた。龍自身も高速時の体感とその対処の仕方を教えてやった。龍にとっては慣れっこな世界だが、一夏にとっては始めての世界だ。感覚をつかむのにも随分苦労していた。

「さて、どうでる？ 一夏」

鈴の周りを飛び回る一夏。鈴が一瞬判断ミスをする……一夏はその一瞬を付いて一気に加速した。

「決まるわね」

一夏の一撃が鈴に届く瞬間、アリーナ全体に大きな襲撃と爆発音が鳴り響いた。

かなり強い衝撃だ。

「一体何が？」

何らかの攻撃がアリーナに着弾し、爆煙を上げた。それだけは分かる。

「更識会長、虚先輩、大丈夫ですか？」

「ええ、一応ね」

「私も大丈夫です」

二人とも大丈夫のようだ。

「しかし、今の攻撃は？」

《緊急時大発生、緊急時大発生。試合は直ちに中止。生徒は速やかに退避してください》

警報が鳴り響く。観客席には緊急時用の防護隔壁が展開され、龍たちのいるゲストルームも隔壁が降りる。

《千冬さん！ 一体何が起きたんですか！？》

プライベート・チャンネルを千冬に繋げる。

《ラインフォードか、こちらでも完全に把握していない。何者かがアリーナの遮断シールドを貫通して侵入してきた》

《遮断シールドを？ セキュリティが甘すぎるでしょ。中の二人は？》

《二人は生徒が退避するまでの時間を稼ぐと言っている》

《何をしているんですか！？ すぐに二人のピットに戻してください！！》

《これはお遊戯じゃなくて実戦なんですよ！》

《そんな事は分かっている。だが、あの二人はやる気だ。お前も喋っている暇があるなら生徒の非難誘導をしろ！ 生徒会の一人だろ》

乱暴に切られる通信。

「心配なら心配だと素直に言えばいいのに……」

失ってからじゃ遅いんですよ、千冬さん……。

「不知火君、現状は？」

「――アリーナ内に国籍不明機アンノウンが一機侵入したそうです。一夏たちはそいつの足止めをすると、千冬さんから生徒会は避難誘導を行え

との命令が来ています」

「分かった。とりあえず、下の観客席に行きましょう。虚！」

「はい」

「不知火君、二人が心配なのは分かるけど、生徒の非難も急がない

と」

「はい…」

楯無の言っている事ももつともだ。

「あれ？」

ドアを開けようとした虚が首を傾げる。

「虚、どうした？」

「ドアが……」

「！ 退いてください、虚先輩」

龍がドアのロックを解除するが、うんともすんとも言わない。

「…………セキュリティがハッキングされている」

龍は頭部のバイザー型ハイパーセンサーを部分展開すると、耳横のユニットから接続ケーブルを引っ張り出し、ドア横の端末に接続した。

「不知火君、分かるの？」

「ええ、何とか。どうやらセキュリティに誰かが侵入してアリーナ内の出入り口を全てロックしているようです」

HUDに表示されるのは防犯カメラに映る観客席の生徒達。出入り口が塞がっている事に気づいた生徒達が騒ぎはじめている。このままでは混乱を起こすのは間違えない。

「何とか解除できる？」

「ここでは無理です。メインコントロールルームのメインサーバーに有線できれば、話は違いますが……そんな呑気な事をやっている暇ありません」

龍は腰のベルトに下げている小道具を手にした。

「何をするつもり？」

「目には目を歯には歯を、ハッキングにはハッキングをつてね」

龍が持っているのは小型のハッキングツールだ。ケーブルで端末とISに接続。HUDに表示されるデータを次々と処理していく。

「二人ともドアから離れてください」

二人が離れたところで、龍は端末をショートさせた。それと同時に

にドアのロックが外れる。

「セキュリティからここだけを分離させました。ドアの機能を全て殺したんで手動で開けられます」

そう言うのと龍はドアの取っ手を掴んで右に引いて人一人通れる分だけ開けた。

「先輩達は下の生徒をお願いします。会長、これを」

楯無に渡したのは先程使ったハッキングツールだ。

「端末に繋がれば、ロックが解除できるように設定しておきました」

「分かったわ、織斑君たちの方は頼んだわよ」

「はい」

楯無たちと別れた龍は最短ルートでアリーナの外を目指した。本当は隔壁を破壊していきたかったのだが、アリーナの隔壁は強固な物理装甲にISのシールドバリアと同質のシールドを展開しているので並の攻撃では穴を開けるどころか傷も付かない。なので歯がゆいが、迂回するしかない。

いったんアリーナの外に出れば、上空から侵入できる。上空にも遮断シールドが展開しているが、邪魔になる観客も隔壁も無い。時雨の武装で突破できるはずだ。

（おい……）

突然、龍の頭の中に声が響く。

（阿修羅？）

（面白そうな事になっているが、お前、奴らを助けるつもりか？）

（当然だ、それより久しぶりに現れたと思ったらいきなり何だ！？

お前の相手をしている暇は無いんだよ）

（そうだな、俺もお前と呑気に話す気は無いさ……）

力が抜けたように膝を折る龍。左手で壁の手すりを掴み、何とか体を支えているが、顔は苦しいみに耐えろような表情に変わっている。

「あ、阿修羅……き、貴様……」

龍の声が途切れる。一瞬龍の体から力が抜けて前に倒れこむ。

「……：久しぶりに出てきたんだ。少し使わせろよ」

床に手を付き、体を支える龍。だが、何かが違う。

「安心しろ、龍。ついでにあの二人も助けてやるさ……」

立ち上がる龍はいつもの漆黒の瞳ではなく、血のように深い赤だった。

アリーナ内では一夏・鈴が連携をとりながら侵入してきた^{アンノ}国籍不明機^{ウシ}のISに対峙していた。

「くそっ……！」

敵の攻撃を回避しながら一夏は毒づいた。

相手はISにしては珍しい^{フル・スキン}全身装甲だ。

通常、ISの装甲はかなり絞って作られている。操縦者の動きを阻害しないためでもあるが、根本的に意味をなさいからだ。ISには絶対防御にシールドバリアが搭載されている。余程強力か大質量の攻撃でなければ、ダメージは与えることが出来ない。勿論、防御に特化した機体なら物理シールドを搭載しているタイプも存在する。だが、全身が装甲に包まれていると言うのは異質だ。

さらに、あのISに搭載されているエネルギー兵器も異質だ。両手と両肩に計四門あるビーム砲。肩のビームは^{ワイド・レンジ}拡散での攻撃ができ、両手のビーム砲の威力はセシリアのISを軽く凌駕する。

「くらえ——！！！」

鈴の衝撃砲の援護を受けて一気に懷に飛び込む。が、奴の巨大な腕に吹き飛ばされる。

「一夏、離脱……！」

「お、おうっ！」

敵は攻撃を避けた後、すぐに反撃に転じてくる。2mを越す巨体で暴れまわるように両腕を振り回し、ビーム方を乱射してくる。無茶苦茶にも程がある。

「ああもうっ、面倒くさいわね——！！！」

焦れた鈴が衝撃砲を展開、撃ちまくる。だが、敵ISはその巨大な腕で衝撃弾を弾き落とす。これでもう七度目のトライだ。いい加減、こちらもエネルギーが厳しくなってきた。

「……鈴、あとエネルギーはどれぐらい残っている？」

「170ってところね」

鈴のかなり削られているが、一夏よりはマシだ。やはり、白式の仕様ではこの勝負分が悪すぎる。

「厳しいわね、現在の火力でアイツのシールドを突破して機能停止させるのは確率的に一桁じゃない？」

「ゼロじゃなきゃいいさ……」

「呆れた、確率がデカイ方がいいに決まっているじゃない。アンタってよく分からないところで健康第一っていうかジジ臭いけど、基本的に宝くじを買うタイプよね」

「うっさいぞ……」

鈴はああ言っているが、一夏は宝くじを買った事がない。さらに言うなら、賭け事も弱い。中学時代、龍と五反田ごたんだに何回奢らされた事か……。

「――で、どうするの？」

「逃げたきや、逃げてでもいいぜ、鈴」

「なっ!？」 馬鹿にしないでくれる!？ あたしはこれでも代表候補生よ。尻尾巻いて逃げるなんて笑い話にもならないわ」

セシリアも前に似た事を言っていたな……もしかしたら、代表候補生の採用基準は自尊心プライドなのかもしれない。

「そうか――じゃあ、俺もお前の背中くらいは守ってみせる」

《言うようになったじゃないか、一夏》

突然、オープンチャンネルに通信が入る。

「龍？」

《会話を花を咲かせるのはいいが、今は戦闘中だ。鈴、余所見をするな》

「わ、分かっているわ…ひっ!？」

鈴の鼻先をビームがかすめる。

《馬鹿が、集中しろ。一夏、お前もだ》

「わ、分かっている………ちょっと待て、龍は一体何処にいるんだ？」

《お前らの頭上だ》

一夏たちのいる上空に時雨を展開した龍がいた。

《遮断シールドを突破するのに少し掛かる。それまで踏ん張ってろ》
「分かったわ」

「お、おう……なあ、龍」

《………》

「何かあったのか？」

一夏は龍の口調に何かを感じた。いつもの龍ではない、何かを……。

《——さあな》

通信が切れる。

「一夏、何しているの！ 龍が来るまで持ちこたえるわよ」

「分かってる！」

だが、今は敵ISの方が問題だ。一夏は龍に対して感じた違和感を忘れることにした。

龍……は上空で一夏たちの戦いを眺めながら、遮断シールド突破方法を思案していた。

「遮断シールドがレベル4に……普通の武装では突破は無理か」

遮断シールドはISのシールドバリアと同質のものだ。だが、観客席を保護するためにその出力はISのそれよりも高い。それがレベル4にまで上がっている。

「普通の武装なら………」

右手に展開されたのは可変ビームカノンライフル『ライトニング』。

「早速『コレ』を使うタイミングが来るとはな……龍の几帳面さがいい方に転んだな」

時雨の背中には見慣れぬ武装が一機装備されている。三基の可変パワーウィングの間にマウントされている『それ』は巨大な砲門だった。

「『ボルティクス』展開」

『ボルティクス』……先日、レイラが持ち込んだ武装の一つである試作型大出力大口徑ビーム砲だ。元々は重武装型のISに搭載される予定だった広域殲滅戦用重ビームランチャーなのだが、余りの反動・燃費の悪さ・エネルギーチャージ・砲身の冷却などが問題となり開発中止となった。

しかし、時雨の開発当初、レイラがこのお蔵入りした重火器を掘り起こし、当時問題だった箇所を改良、試作品を再開発した、それが『ボルティクス』だ。

固定されていたアームが展開し、『ボルティクス』が右肩の上を通り、右腕の上に移動する。

ドッキング
「接続」

ボルティクスの下部にライトニングが接続、固定される。

「ジェネレータ接続、エネルギー急速チャージ」

HUDにチャージ率が表示される。姿勢制御と制動に必要なエネルギー以外は全てにチャージに回す。

フルパワー
（最大出力で撃つのは無理だな）

チャージする時間もないし、何よりフルパワーで撃ったら砲身が耐えられない。

（だが、遮断シールドを貫通するには十分……）

チャージ率を80％に設定。チャージ終了まで後20秒。

一夏たちは何とかISの攻撃を回避し、足止めをしていた。

「一夏あ——！！」

「箒!? 何をしているんだ!?!」

だが、そこに箒の声が響き渡った。どうやら、中継室からその声を流しているようだ。ちなみに。箒はナレータと審判を一撃で気絶させて中継室に侵入している。

「男なら……男ならその程度敵に勝てなくてなんとする!!」

再び箒の澄んだ声が響き渡る。ハイパーセンサーでその顔を拡大してみると、肩で息をして額には薄っすら汗を掻いていた。ピットから中継室まで走っていたのだろう。その表情も怒っているような焦っているような不思議な形相だ。

だが、この行為が敵ISの興味を引いたのか、両腕の高出力ビーム砲が箒のいる中継室に向けられる。

「まずい!」

スラスターを展開、瞬時加速。敵ISに肉薄するが、敵の方が早い。

「箒!」

《退け!!》

考えるよりも先に体が反応し一夏はその場に急停止した。同時に敵ISからビームが放たれる。だが、そのビームの奔流は天より降ってきた一筋の光の刃によって両断された。

「んなっ!?!」

「うそっ! 遮断シールドを突破して!?!」

光の刃はそのままビームを切り裂きながら敵ISに命中、凄まじい衝撃波と爆風を起こした。

光の刃は時雨のボルティクスから放たれた大出力ビームだった。時雨の放った一撃は遮断シールドを軽々貫通し、敵のビームを切り裂いていた。

「クッ!」

だが、それを制御する彼には余裕が無かった。最大出力でないと

はいえ、全開の80%での発射。試作品である砲身は発熱に悲鳴をあげ、強制冷却装置が限界に達する。姿勢制御と反動制御のために背中の三基の可変パワーウィングは勿論、全身のスラスタは全開だ。

（はやり、試作品じゃあ砲身も電装系統も耐え切れないか）

さっきも言った通り、ボルティクスは威力を追求したばかりにお蔵入りした不良品。レイラが改良を加えたとはいえ、それは時雨の性能を利用したに過ぎない。

一番の問題だった反動制御を時雨に任せているだけで、砲身の冷却機能や電装にはまだまだ問題があった。

（砲身の熱量増加、限界か）

エネルギーラインを全てカット。背中のアームをパージ。右手のホールドも解除。

遮断シールドが再形成される前にアリーナ内に突入する。後方でオーバーロードしたボルティクスが爆発する。

「しぶとい奴だ」

ボルティクスの射撃を受けても奴はまだ動いていた。遮断シールドでエネルギーが減衰しているとはいえ、直撃すればISでも只ではすまない。それだけの威力がある。

「お前に恨みはないが……」

両手に構えるのは口径30mmを超える六連装機関砲『フレズベルグ』。

航空機に搭載されるクラスの機関砲をIS用にしたフレズベルグは重戦車の装甲も蜂の巣にする威力がある。

「死んでもらう」

引金を引くと同時に、六連装の銃身が唸りを上げる。

爆風にせいで目視は出来ないが、赤外線レーダーと熱源レーダーには、はっきりと機影が見えている。

ISの補正を受けながらフレズベルグを連射する。これだけの弾丸の雨を食らえば、シールドバリアだけでは防ぎきれまい。

HUDに銃身の熱量限界を告げる警告が表示される。

引金を戻し、銃身の放熱を行う。だが、この間も隙を作るつもりはない。両脚部装甲展開、チャフミサイル、準備……レディファイア発射。

八発のミサイルが赤外線誘導により敵機に着弾する。

「お、おい、龍……幾らなんでもやりすぎじゃ」

「面白い事を言うな、一夏。奴は俺達に対して銃口を向けてきた。それは明らかな敵意だ。なら殺すしかないだろう？」

「こ、殺すって……」

「殺^やらなきゃ、こっちが殺られるぞ、鈴」

冷却を終えたフレズベルグを量子化、収納する。

「まあ、まだ殺しきっていないがな」

タクティカル・ウィザードをツインクレイモア・モードに。さらに二振りのクレイモアを接続し、バスターソード・モードに。

左手には先日使用した大口径散弾銃『ヘルハウンド』。

「ちっ、あれだけの弾丸の雨を叩き込んだってのに、丈夫なやつだ」
敵ISは今だ健在、装甲に多少の損傷が見られるが、どれも有効だとはいえない。

敵ISは彼に対して銃口を向けた。発射されるビームをバスターソードで両断する。

「いいね、ゾクゾクしやがる……」

時雨に施されている各部スラスターのリミッターが一段階解除される。

「てめえのような奴に本気を出す気はさらさらねえが、格の違いと
いうのを見せ付けてやるよ」
イクニッション・ブースト

瞬時加速で一気に肉薄、体を捻りその遠心力をバスターソードに送る。

「おらあ——！！！」

バスターソードを叩き込まれた敵ISの右肩から下が天を舞う。

(こいつは……)

さらに零距离でヘルハウンドを打ち込む。胸部と頭部の装甲がス

ラッグ弾によって吹き飛ばされる。

「龍!？」

「ウソ……」

一夏と鈴が悲鳴近い声を上げる。

「……………」

片手でポンプアクションを行い実包^{シヨットシユル}を装填する。

「よく見ろ、奴の肩の付け根を……」

「えっ……?」

先程の一撃はISごと操縦者の肩を跳ね飛ばしていた。だが、ISの肩には人間の肉^{それ}がなかった。代わりにあったのは……。

「あ、あれって……」

「機械……?」

火花を散らす配線と漏れているオイル。

「遠隔操作……いや、独立稼動に近い機構を積んでいるのか」
リモート・コントロール スタンド・アローン システム

冷静に敵ISを分析する傍ら、一夏と鈴は明らかに狼狽していた。
「ありえないわよ! 世界中の研究者が研究しても未だに出来ないのよ」

「現実を受け入れろ。現にあのISに人は乗っていない」

右腕を切り落とされ、胸部と頭部にダメージを負いながらなお稼動している敵IS。

「――確実に殲滅する」

脚部の装甲が展開、チャフミサイル^{フルバースト}全弾発射。数十発のマイクロミサイルが敵ISに襲い掛かる。敵機は両肩のワイドレンジビーム砲でそれを撃ち落とす。

その隙に瞬時加速で敵に接近。爆風の中から飛び出ると同時にヘルハウンドをぶち込む。続けてヘルハウンドを投棄、複合銃『ブレイズバレット』を展開。ヘルハウンドで体勢を崩すした敵にグレネード弾と実弾の追撃を与える。

さらにスラスターを使って回転。同時にバスターソードのスラスタ―も同時点火、刀身にプラズマ粒子が凝着する。

「切り裂く！」

一撃必殺の斬撃は敵ISの腹部に命中。そのまま胴をISごと両断する。

「うっそ……」

「一撃で両断するなんて……」

一夏と鈴が信じられないと言いたげな顔でこちらを見てくる。だが、そんな事を無視してオープン・チャネルをピットの千冬たちに繋いでいた。

《敵ISを殲滅。人的被害なし》

《ら、ラインフォード君、大丈夫ですか？ け、怪我は？》

《ラインフォード、そんな事よりも貴様、何をしたのか分かってい
るのか？》

《アンタこそ、良かったのか？ 俺が現れなかったら、あの二人は
死んでいたかもしれないぞ？》

《お前は……》

《アンタの判断が間違っていたとは言わないが、その甘い判断がい
つか一夏たちを殺す事になるかもしれないぞ》

《ラインフォードではないな》

《だから何なんだ？ 織斑千冬》

《あの時の——！》

一方的に通信を切る。

「さて、久しぶりにストレスも発散できたし、そろそろ奴に返すと
するか。『コイツ』も『俺』も今バレていい存在じゃないしな」

張り詰めていた緊張の糸を解いた瞬間、HUDに敵にロックオン
されている警告が表示される。

「！」

振り向くと上半身だけ敵ISが残った左腕のビーム砲を向けてい
た。しかも最大出力形態バースト・モード。すでにエネルギーチャージは完了してい
る。

「龍——！！」

一夏が雪片式型の零落白夜を展開して敵ISに突っ込む。バスターソードを構え直し、それに続く。

ビームの奔流が時雨を包む。光に包まれながらもバスターソードの一振りと零落白夜発動の雪片式型の一撃が敵ISの装甲を切り裂くのを感じた。

「う……」

体に痛みを感じ、意識が覚醒する。

「ここは……」

見覚えがある――セシリアの見舞いにいった時の……。

「保健室……？」

外を見ると既に日が沈み、夜の帳が折り始めている。

「どういうことだ……？」

自分の右腕を見ると包帯が巻かれ、点滴が刺さっている。

（確か、クラス対抗戦で……）

「……あっ！」

廊下で意識を失い、それ以降の記憶が無い。

「気が付いたか？」

「千冬さん……」

いつ間にか、カーテンの隙間から千冬が現れる。

「状況は……？ 一夏達はどうなりました？」

痛む体に鞭を打ち、龍は体をベッドから起こした。

「落ち着け、事態は既に収拾がついている。織斑と凰は無事だ。生徒達も全員無事だ。更識たちが上手く誘導してくれたおかげでな。生負傷したのはお前だけだ」

千冬はベッド脇の椅子に座る。

「……侵入したISは？」

「完全に機能停止した」

「……そうですか」

「――龍、一つ聞く」

名字ではなく、名前で自分の事を呼ぶ……顔を見なくても分かる今の千冬の顔は戦士のそれだ。

「戦闘中のお前は『お前』だったのか？」

龍はその言葉を聞くと、腕に刺さっていた点滴の針を抜き、掛けられていた制服を取った。

「さあ、言っている意味がよく分からないんですが？」

「――」

「今日は疲れました、部屋に戻ってもいいですよね？」

「――分かった、今日は休め」

「そうさせてもらいます」

制服を肩にかけ、龍は保健室を後にした。その後姿を千冬はジッと見詰めていた。

背中ドアが閉まる音を聞いてから、龍は歩き始めた。

「阿修羅……^{アスラ}いったい何のつもりだったんだ？」

「――」

「……いつも通り、だんまりか」

龍は右手を強く握り締めた。途端に右腕に痛みが走る。どうやら、筋を痛めているようだ。

「――阿修羅、今回の事は何も言わない……だが、邪魔はもうしないでくれ。これは俺の戦いなんだ」

龍の言葉は誰もいない廊下に空しく響いた。

今の言葉はいったい誰に当てての言葉だったのだろう。

第四話くクラス対抗戦く（後書き）

第四話、何とか形になりました。

次話を楽しみにして方々遅くなってすいませんm（　　）m。

主人公の隠された秘密の片鱗が少し現れましたが、これは次回、あの程度の補足を加えて説明する予定です。

次回は現在ヒロイン予定の彼女が登場です！。今から結構楽しみだったりします。個人的にはラウラも好きですが……。

第五話くボーイ・ミーツ・ボーイく

六月、夏に入ってきたため、毎日が暑くなってきた。

「もらった!!」

「なっ!!? ここで必殺技のコンボかよ!!」

母国……日本に戻ってきたてはや一ヶ月強。IS学園に編入、すぐに専用機持ちと試合。その後、一夏とも試合。さらにはクラス対抗戦でのゴタゴタ。

「何の!!」

「おっ、下下上右右のカウンターコンボ!??」

クラス対抗戦でのゴタゴタ——人的被害が無かったのは幸いだっ
た(若干一命を除く)。だが、あの乱入により、対抗戦は中止とな
り、一夏と鈴の試合も無効試合となった。

「ガードキャンセルからのコンボだど!??」

「どうだ!!」

乱入してきた国籍不明のISは学園内の研究室で解析ラボされたらし
い。だが、余りに破壊されすぎていたため詳細なデータを抽出でき
なかったそう。誰が原因かはわざわざ言わなくとも分かるだろう。
その後、敵ISの破壊を敢行した首謀者は千冬からは三時間にも
渡る『ありがたいお言葉(説教)』、さらに国際IS委員会の胡散
臭そうなおっさん連中との五時間を越す『楽しい世間話(尋問)』
を受けた。

しかも『世間話(尋問)』は一日だけではなく以降何日も行われ
た。流石にストレスと我慢が限界に達した彼は三日目に委員会の人
間を説得(脅迫)し、開放してもらった。

「ああ!!」

「よっしゃ、俺の勝ち!!」

どうやら、格ゲーをやっていた二人の勝負もついたようだ。

「まだまだだな、一夏」

「くそっ、もう一度だ、弾！」

「一夏、これ以上やっても恥をかくだけだぞ」

「うっ」

愛読中のSF小説『戦闘妖○雪○』を読んでいた龍は目の前の一^カ夏を見て溜め息を付いた。

「大体、ISの訓練で鍛えているんだからもっと反射神経を使えよ」
「や、やってるよ」

「どうだか……一夏の代わりに相手をしようか、弾？」

「それはいいけど……お前、その腕で出来るのか？」

「問題ない、痛みはもう無いからな。医者も後少ししたら包帯を外していいと言っていたし」

龍の右腕は先日の対抗戦で受けた傷のため包帯が巻かれている。

最近では細胞活性化治療やクローニングの技術が発達し、大怪我を負っても単時間で治療ができるようになった。傷跡も余程の傷でなければ、残らないらしい。だが、龍はちょっとした事情があるため、その治療を受けていない。そのため、自然治癒力に任せた右腕の怪我はまだ治りきっていなかった。

「よし、勝負だ、龍」

「実力の差を見せてやるよ」

テレビ画面を睨みつける二人。試合開始だ。

そして、五分後。

「ま、これが実力差と言うものだ」

「……」

当然の事だが、龍の圧勝だった。弾は言葉が出ないのか啞然としている。

「龍、強いな……」

「当然だ、ISの格ゲーで負けるなんて恥さらしを俺がするわけないだろう」

ちなみに今龍たちがやっているゲームは日本のとあるソフト会社が発売したIS／VSという格闘ゲームだ。ISのデータは実際に

存在する第二回モント・グロッソのISとそれ以降に開発された第二世代型IS・量産型ISが入っている。

龍が使ったのはGTI製の量産型第二世代IS『ファーン』。第二世代の中でもかなり優秀な機体で、安価で安定した性能、高い格闘戦性能、同世代機の中でもトップクラスの機動性が評判を呼び、世界シェア四位を誇る。

「でも、『ファーン』でスピードはあるけど、装甲がな……」

名機ではあるが、スピードを重視した機体は打たれ弱いと言う弱点も持っている。

「まあな……だが、機体の機動力を生かせば、初期第三代機にも遅れはとらないぞ。何せ、自社の機体^{ウチ}だからな」

龍は再び読書に戻る。

「そういえばさ、IS学園での生活はどうよ、二人とも？」

「どういう意味でな？」

「何とぼけているんだよ、メールから察するに楽園じゃないか」

「大多数の男については……な」

龍の目が一夏に注がれる。

「?……つうか、龍と鈴が転校してきてくれてよかったよ。話し相手少なかったから」

「分かったか、弾……」

「よく分かった。一夏は相変わらずなんだな」

「このままじゃ、鈴や他の女子達の思いが報われることは無い」

「そうだな、鈴も可哀想に……」

「とか、言いながら弾、一夏がそっち方面で落ち着くのを願っているだろう？」

「な、何の事かな？」

「お前も苦勞が絶えないからな……もっぱら、蘭ちゃんの事で明らかに弾の顔に焦りと狼狽が現れる。確かに一夏の前で言うネタではないかもしれないが、朴念仁の一夏が聞いても真意にはたどり着けないだろう。」

「ん？ 何で蘭のことで苦勞が絶えないんだ？」

「お前は一切気にしないでいいぞ、一夏！！」

焦りだす弾。端から見ていると非常に愉快だ。

「うん？」

首を捻る一夏。

「一夏、可愛い妹を持っている弾は氣苦勞が多いんだ。そこら辺を追求するのは止めてやれ」

「あ、ああ」

中途半端な返事だが、一応は納得したようだ。

と、そこに階段を上ってくる音が聞こえた。音が軽いから恐らく……。

「お兄！ さっきからご飯できているって言ってんじゃん！！」

読みどおり弾の愛しい妹、五反田蘭（したんだらん）だった。

「早く食べに……」

蘭がドアの前で固まる。IS学園でもそうだが、女子という生き物は男のいない……例えば、自宅とかではかなりラフ——というか目のやり場に困る服装をする。

具体的に言うなら、今の蘭のようにショートパンツにタンクトップ等機能性重視の服装が多い。他にも薄手の服やら下着を着ないなど……。最近暑くなってきたので皆ブラジャーを外している。そのせいで胸元がよく見える……一言付け加えるが、ワザと見ているわけではない、偶然見えてしまうのだ。

もはや、目の保養を通り越して目の毒だ。そして、そんな格好をされたら、目がいってしまうのは男の宿命……嵯峨とも言える。

寮の廊下で女子の胸に目がいってしまった、それに相手の女子が気づいて慌てて胸を隠した時の氣まずさといったら……女子は顔を赤くしながらもチラチラこちらの様子を見ってくるし、正直泣きたくなる。

だが、一番始末に置けないのはその後『見てみたいの？』とか『さ、触ってみる？』とか聞いてくるときだ。男に対する免疫が少な

過ぎるとはいえ、そんな事を言った後にどんな事になっても文句は言えないと思う。

ゴホン、少し話が逸れてしまった。

「い、一夏さん!？」

蘭が慌てて自分の体をドアの影に隠す。ラフな格好を一夏に見せたくないのだろう。しかし、一夏だけじゃなく、俺の存在にも気づいて欲しい。

「ど、どうしてここに？ 全寮制の学校に行っているって……」

「ちょっと用事があったから、ついでに龍と一緒に遊びに来た。蘭、久しぶり」

「りゅ、龍さん？」

「やっと気づいたか、少し傷付いたぞ、蘭ちゃん」
服を調えた蘭がドアから出てくる。

「お、お久しぶりです。龍さん」

「ああ、久しぶり、元氣そうでよかったよ」

現在中三の蘭とは昔一夏たちと遊んだ仲だ。その頃よりも身長が伸び、体付きも『女』らしくなっている……これなら結構モテていることだろう。本人は誰かさん一筋だが……。

「あれ、でも何で龍さんがここに？」

「俺もコイツと同じでIS学園に通っているんだよ」

口で説明するのが、面倒なので左手だけISを部分展開してみせる。因みに学園以外でのIS使用がばれた場合、只ではすまない。ま、ばれたらの話だが……。

「へえ、それがお前の専用機……だったけ？」

「ああ」

弾が感心したように呟く。蘭の方は龍がIS操縦者であることに驚いてまた固まっている。

「それはそうと蘭ちゃん、女の子ならもう少し静かにドアを開けたほうがいいぞ」

蹴り破るとは……とまではいかないものの、脚で開けるのはどう

かと思う。

「す、すいません。龍さん」

恥かしそうに方を縮める蘭。恥らう乙女の姿だ。

「そ、そういえば、い、一夏さん。昼食まだですよ？　一緒にどうですか？」

「おう、いただくよ、有り難う、蘭」

「は、はひい」

顔を赤くして返事をする蘭。声が若干裏返っているが……。

「じゃ、じゃあ、下で待っているので……！」

慌てて部屋を後にする。恐らく部屋着から普段着へ着替えるのだろう。

「俺については何もしか……」

昔からそうだ。蘭の目には何故か一夏しか映らない。仕方ないとは思っているが、たまにイラッとする。

「龍も食っていつてくれ」

「有り難う、弾……蘭ちゃんも相変わらずなんだな」

「いや、寧ろ悪化した」

「らしいな……」

昔は一つ上の友達的な扱いだったが、今のやり取りはそれよりも酷いものだったような気がする。

「すまないな、龍」

「いいさ、悪いのは全てアイツだ」

何も気づかないでゲームを片付けている一夏。

二人は重い溜め息を付いた。

五反田家の一階は食堂になっている。名前は『五反田食堂』。龍も短い間だが、ここによく食べに来た。

「おっ」

下の食堂に降りてみると蘭は既に席について食事を取っていた。

何と行動の早い。

席には三人分の定食が置かれている。

「げっ」

弾が露骨に嫌そうな顔をする。

「お兄、何かいやな事があるなら、一人で外に食べに行ってもいいよ」

「聞いたか、おい？ あれが実の兄に言う言葉か？」

「知らん。お前のところの兄妹喧嘩をこっちに持ち込むな」

龍は弾を無視して席に座る。一夏もそれに続く。弾も渋々といった雰囲気ですべてに座った。

蘭の向かいに龍、龍の隣に一夏、弾は蘭の隣、という配置だ。

「弾のところの定食を食べるのも久しぶりだな」

「そうだな、龍は一年ぶりぐらいか？」

「もうちょつと長いが……ま、そんなもんだな」

席に置いてある割り箸を取る。

「いただきます」

「「いただきます」」

各々食事に手を付ける。

「そういえばさ、蘭」

「は、はい!？」

一夏に対して過剰反応を起こす蘭。見えて少し面白い。

「服替えたんだな、どこか出かけるのか？」

「えっ？ え、え」と……」

「……馬鹿が」

こういった時、一夏の鈍感さがしみじみ実感させられる。

蘭は先程までのラフな格好から今時の女の子が着そうな可愛らしい服に着替えていた。アップしていた髪は綺麗なロングストレートに変わり、服装は夏らしい白のワンピース。脚にはレースの付いた黒ニーソックス。かなり男心を擦られる。

「あつ、デートか？」

ダンッ!!

「違いますっ!!」

一夏の勘違いを蘭は全力で否定する。しかし、テーブルを叩くことは無いと思う。

「ご、ごめんな……」

「い、いえ。兎も角デートではないので」

「う、うん」

「兄としては違って欲しくなかったんだけどな」

「弾、それ以上言うと、実の妹に滅されるぞ」

龍が指す方向には鬼の形相を浮かべた蘭がいた。

「蘭ちゃん、女の子はそんな顔をするものじゃないだろう」

「うっ、すいません」

「弾も妹と仲がいいのはいいが、過保護すぎるのもどうかと思うぞ」

「ちよっと待て! 俺達が仲がいいだど!」

「龍さん、それは勘違いです!」

「全力で否定する当たり怪しいけどな」

龍は二人を放って食事に専念する。

「そ、それはそうと、一夏さん、学園での生活はどうですか?」

蘭は苦しくなってきたのか、話題を変える。

「入った当初は大変だったけど、まあ何とかなってるよ。相部屋の相手が箒で助かったしな」

「えっ?」

「箒ってアレだよな、お前のファースト幼馴染?」

「ああ」

「お、同じ部屋……い、一夏さんが他の女性と……」
ガタンと音を立てて蘭の座っていた椅子が倒れる。

「い、一夏さん! 同じ部屋という事は……し、寝食も共に?」

「あ、ああ。大体は」

「あっ」

ショックを受けたご様子の蘭……ご愁傷様。

「そういえば、龍は誰と相部屋なんだ？」

「俺は一人だ。幸い俺が転入した時に空き部屋があったんでな。悠々自適に暮しているさ」

「残念だったな、龍」

「別に……俺としては自分の部屋でぐらい異性に気を使わないでいたいからな」

毎日、女子を相手をしなければならぬのだ。自室にるときぐらい息抜きがしたい。

「――決めました」

立ったまま蘭が何かを呟く。

「私も来年ＩＳ学園を受験します！」

「はあ！？　ちよっと待て蘭……グホッ！？」

立ち上がった弾の顎に飛んできたお玉が命中した。ちなみに投げたのは五反田食堂の長である五反田源――弾たちの祖父だ。

「弾、大丈夫か？」

龍は床で顎を押さえている弾を見下ろす。

「え、でも蘭が通っている学校ってエスカレーター式だろう？　しかもかなりの名門だって」

「大丈夫です。私の成績なら余裕です」

「推薦を狙っているなら、無駄だぞ。ＩＳ学園は筆記と実技の入試テストを受けないと入れない」

龍が蘭の発言に訂正を加える。

「その兄と違って勉強していますから筆記は問題ありません」

「りゅ、龍……実技ってＩＳを使うんだよね？」

弾が下から這い上がってきた。なんと早い回復だ。

「ああ、適性が無ければ、この段階で落とされる。倍率もかなり高いからな、適正の低い子は大概落ちる」

「それも問題ありません」

蘭のポケットから出てきたのは一枚の紙切れ。

「これは……政府が無料でやっているＩＳ簡易適正試験の結果か」

「何!？」

「その通りです」

「で、評価が――Aか。簡易とはいえ、この結果だと……入試も狙えなくは無いか」

「ま、マジなのか、龍」

「こっちは現役ISパイロットだぞ、ある程度は予想できる。簡易適正試験の内容は分からないが、IS学園レベルなら何とかなるだろう」

企業や国家で採用される実機パイロットでは、この程度のレベル話にもならないが……と龍は思ったが、口には出さなかった。言っても一夏のことしか頭がない蘭には何も通じないだろうし、ただ流れるままにISに乗り、皆を守りたいなど言っている単純バカに本心を理解する事はできない。

言い方は悪いが、IS学園を目指す子も学園に入学した子もISをお遊戯か何かと勘違いしている。龍自身は全く違う価値観を有しているが……。

「で、ですから一夏さん。その時は先輩としてぜひご指導を……」

「おう、いいぜ」

決まってもいない未来を約束するのはどうかと思う。

「ほ、本当ですね!？ ウソじゃないですよね!？」

「あ、ああ、本当だぞ」

「約束ですよ!」

「あ、ああ」

一夏との約束が余程嬉しいのか、蘭は明らかに舞い上がっていた。恐らく蘭ビジョンでは周りにお花畑が出来ている事だろう。

「おい、蘭今になって志望校を変えるなんて……」

ギロツ!!

弾の抗議も蘭の殺気の籠った視線によって黙殺される。

「で、では一夏さん。ゆっくりしてってくださいね」

だが、先程の事が恥かしくなったのか蘭は食器を片付けに行った。

「あ……」

弾の顔に絶望の二文字が浮ぶ。

「一夏、一年以内に彼女を作れ」

「はぁ？」

「いいから、一年以内に作れ。いや、今すぐ作れ！」

弾は一夏の首を掴んで命令……いや、頼み込んだ。

「弾、悪足掻きはしない方がいいぞ。時間と労力の無駄だ」

一通り食べ終わった龍がお茶を飲みながらそれを諭す。無駄だ
ど……。

「お兄^{にい}」

いつ間にか戻って来た蘭。

「お、おおう、ど、どおおした？」

蘭の目を見たのか、恐怖に顔を引き攣らせる弾。今の蘭の目を見たら自然な反応だろう。何せ、蘭は顔では笑いながら、目では修羅を浮かべている。正直、女がする顔じゃない。

『余 計 ナ コ ト ヲ ス ル ナ』

声も出ていないし、口も動いていないが、確かに蘭はそう言った……殺気オーラを使って。

「――」

完全に固まる弾。

「で、では一夏さん。失礼します」

そそくさとこの場を後にする蘭。

「前途多難だな……」

食堂には龍がお茶を飲む音だけが響いていた。

そして、その日の夜。食堂に行ってみると同じクラス的女子達が集まって何かを話していた。断片的に聞こえてくる話によると、話している内容は今度の学年別トーナメントに関係する事みたいだ。
まだ、期間があるとはいえ、皆それなりには気にしているのだろ

う。

だが、次の瞬間、龍は己の耳を疑った。

「でも、本当なの、優勝すれば、織斑君の彼女になれるって」

「しかも織斑君だけじゃなくてラインフォード君とでもいいらしいよ」

……これだ。

龍自身は全く見に覚えのない話だ。だが、目の前の女子達はそのことで楽しそうに、だが、真剣に話し込んでいる。

「ええ、どちらか選べるのなら、私は不知火君にするけどな」

「知らないの？ ラインフォード君がこの学園に着てから玉砕した女子の数」

「確か、裕に三十人は超えていたよね……」

「最近じゃ落ち着いたけど、入った当初は毎日凄い数のラブレターが靴箱に入っていたんだって」

「でも、不知火君。ラブレターの返事した事がないよ。大概、送ってきた子に返しているし」

蛇足ながら、ここで少し龍の私生活に触れておこう。

女子達の話していたように龍はラブレターの大半……というか全てを送り主に返却している。女子達は龍が尋ねてくると『もしかしたら……』期待するが、自分のラブレターと一緒に返される無慈悲なお断りの一言を聞いて各々ショックを受ける。

龍自身は一々返しに行くのは面倒だと思っているのだが、一応好意を寄せてくれた相手という事で直接会って断っている。

——話が逸れてしまった。

龍は真意を確かめるべく、女子達の話している中へ突入した。

「いったい何の話をしているんだ？」

龍の言葉を聞いた瞬間、女子達の顔から血の気が引いた。

「ぜ、全員、退避……！」

散り散りに逃げ出す女子達。だが、龍は冷静にそれに対処し、一番足の遅い一匹を鹵獲した。

「さて、これで友軍の助けは望めないな」

「し、しらぬ」

捕まった一匹は布仏本音だった。

「さあ、さっきの話を洗いざらいはいてもらおうか」

テーブルに座らされた本音。その前には刑事ドラマでよく見るカツ井が置かれていた。

「裏は取れているんだ、さっさとはいちゃまった方が楽だぞ」

「ダメよ！ 不知火君に知られちゃ全部パーよ！！」

「そうよ、頑張って耐え抜くのよ！！」

隣の席では逃げ延びた女子達が本音を応援していた。龍はその一団に睨みを効かせ、黙らせる。

「し、しらぬ。見逃して」

「アホか、ここで見逃したら厄介な話がさらに広がるだろうバン！

テーブルを叩く音が響く。

「さあ、先程の話のソースは一体誰だ？」

「うう……」

「何で優勝賞金が俺の彼女の座なんだ？」

「ううう……」

「――虚^{うつほ}先輩に、日頃の布仏の授業態度を全て話してもいいんだな？」

「ず、ずるいよ、しらぬ」

「だったら、早く言え」

「うううう……」

龍の揺すりに耐え兼ねないと言った感じの本音。

「だ、ダメよ！ ここで折れちゃ！」

「そうよ、戦うのよ、本音！！」

女子からのエールも強くなる。

「仕方ない……」

飛び切りの方法で揺するしかない。

「もし、話してくれたら……」
本音が顔を上げる。

「布仏の事を名前呼びしてもいいぞ」
龍が女子を名前呼びしているのは今のところセシリアと鈴。後は
虚先輩ぐらいだ。

「ええ——、ホント!？」

案の定、本音はこのネタに飛びついた。

「ああ」

「じゃあ、話す」

「ああ、ダメ——!!」

「本音!？」

割と早く折れた。

「一夏と箒が？」

「そう、部屋の前で大声で……」

カツ丼を食べながら本音は説明した。

掻い摘んで言うと、本音たちは先日一夏と箒が部屋まで話しているのを盗み聞きしていたそう。で、その時箒が『学年別トーナメントで優勝したら、付き合ってもらおう!』と言ったらしい。

それを本音たち（殆ど本音一人の単独犯だが）が根も葉もない偽情報を付けてクラスどころか学校中に言いふらしたそう。そして、
今に至る……。

「面倒な事をしやがって……」

「うう……ごめんなさい、不知火君」

「ゴメン」

龍の怒りを感じた共犯者の女子二人は深々と頭を下げた。

「うまうまつ」

本音は一人カツ丼を頬張っていたが……。

「……」

龍は黙って本音の頭を殴る。

「イタアッ!？」

「とにかく、俺の名前はもう出すなよ、いいな？」

「「はい…」」

「は〜い〜」

本音の頭に二発めが落ちる。

「うう…」

「だが、一夏については好きなようになってもいいぞ」

「え、でも……」

「あの唐変木にはいい刺激になるだろう。ああ、俺はダメだからな、さっきも言いたけど」

「いいのかな……」

「いいんだよ、その方がトーナメントも盛り上がるし」とか言っているが、龍は只単に一夏を売っただけだ。

「そんじゃ、俺は部屋に戻るよ。噂話もほどほどにな」
食堂を後にする龍。

翌日、いつも通りのホームルームだったはずのそれは……突然崩れ去った。

「ええとですね、今日は何と転校生を紹介します！」

「「「えええっ!？」」」

山田先生こと真耶がホームルーム早々そんな事を言った。

「騒ぐな、静かにしろ」

千冬の声も余り効果が無い。流石は噂好きの乙女達。自分達の情報網を抜けてやってきた転校生の話、驚きもするし、喜びもするだろう。少々度が過ぎているが……。

「それじゃ、入ってください」

教室のドアが開く。

「失礼します」

騒いでいた女子達が静まり返る。

だが、それも当然だろう。何せ、入ってきた転校生は『男』だったのだから。

「デュノア、自己紹介がしろ」

「はい」

教卓の前にたった転校生は礼儀正しく起立すると自己紹介を始めた。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れな事も多いと思いますが、宜しくお願いします」

にこやかにそう挨拶を済ませる。

どうということだ？

一夏や自分と同じISを操縦できる男が今日の前にいる。だが、そう易々とIS操縦が出来る男が出てくるはずが無い。

（フランスから——と言っていたな）

この言葉から判断して彼はフランスの代表候補生であろう。そして名字……。

（デュノア社の人間か……）

龍自身も不知火財閥の人間であるため、ライバル企業の情勢は嫌と言うほど把握している。

現在、世界シェア三位のISを開発した企業こそがデュノア社。ちなみに不知火財閥系列で開発されたISのシェアは惜しくも四位に留まっている。まあ、不知火財閥はIS開発以外の技術開発を掛け持ちしているので仕方ないといえばそうなのだが……。

（——真意は読めないが、警戒するに越した事はないな）

そこで龍は自分に注がれる視線に気づいた。

「ええと、龍・S・ラインフォード…君だね？」

何故か俺に話しかけてきた。

「ああ、龍と呼んでくれて構わない、デュノア」

「じゃあ、僕の事もデュノアじゃなくてシャルルでいいよ」

「——ああ分かった、シャルル」

改めて見てみると、シャルルは中性的な顔付きをしている。そし

て、人懐っこそうな顔でこちらに笑みを振りまいている。髪は濃い金髪、それを後で三つ編みにしている。男にしては華奢で肩幅も狭い。

女のような男……龍の第一印象だ。

「!」

龍は周りの女子達が徐々に熱を持っていることに気づいた。

「シャルル、耳を塞いでおいた方がいいぞ」

「えっ？」

一応、警告はした。

「「「きゃあああっ!!」」」

一年一組の中で局地的ソニックブーム（奇声・歓喜）が巻き起こった。流石は美しい十代の女子、凄まじい威力だ。耳を塞いだ程度じゃあ意味も無く、焼け石に水だ。

「男子、三人目の男子よ!」

「しかも同じクラス!」

「地球に生まれてよかった!!」

最後のはよく分からないが、喜んでいるのは確かなようだ。

「あー、騒ぐな、静かにしろ」

本日二回目の千冬のお言葉、流石に聞いたようで喋っていた女子が一斉黙る。

「はあ、本日は二組とI S実習を行う」

「各人は速やかに準備を終え、第二グラウンドに集合。それから織斑、ラインフォード」

「「はい」」

「同じ男子同士だ、デュノアの面倒を見てやれ」

「はい」

「分かりました」

「それでは、解散」

そそくさと千冬と真耶が教室を出て行く。

「君が織斑君だね? はじめまして、僕は……」

「シャルル、自己紹介は後にしろ」

一夏に自己紹介をするシャルルを止め、手を引き教室から脱出する。クラスの女子達は男がいる事もお構いなしに着替え始めるので、すぐに脱出しなければ、『覗き魔』のレッテルを貼られてしまう。

「えっ？ ええっ！？」

いきなりな事でシャルルも混乱しているようだ。

「一夏、何をノロノロしている。もしかして着替えを覗きたいのか？」

「ち、違う！」

龍はワザと女子にも聞こえるように言ってやった。

「ええっ！？ 織斑君そんな事を！？」

「あ、でもそれはそれで……」

「織斑君ってエッチなんだね」

「ご、誤解だ」

慌てて弁解する一夏。そんな事をする暇があるなら、さっさと教室から脱出する方がいいというのに。

「すぐに脱出しないと『覗き魔』のレッテルを貼られるぞ。あそこの一夏のように……」

「う、うん……。分かった……」

返事をするシャルルの顔は少し赤みが刺しているように見受けられた。

「とりあえず、移動するぞ。俺達が着替えるのはアリーナの更衣室だ」

「うん」

二人は早歩きで教室を後にした。

「ちょ、ちょっと待てよ！！」

一夏を見捨てて。

「龍、さっきのはなんだ！？」

「お前の覗き行為を白昼の元に晒したただけだ」

「だから覗きはしてない!」

龍たちは廊下を歩いて……いや、走ってアリーナを目指していた。無論、廊下を走ってはいけません。

「? どうした、シャルル?」

龍はシャルルの手を引いて移動していた。

「えっ、何かな?」

「顔が少し赤い。体調が悪いなら保健室に案内するが」

「だ、大丈夫だよ! 気にしないで」

「そうか……一夏、そこを右だ! 向こうは逃げ場所が無い」

「おう」

「ねえ、二人とも」

「何だ?」

「何でさっきから何度も角を曲がったりしてるの?」

「それは……だな」

シャルルの疑問に答えようとするが、角を曲がった瞬間、龍の足が止まった。

「あれ?」

「……こういう事だからだ」

龍たちの進路上に幾人もの女子がバリケードを作って待ち構えていた。

「あ、いた!」

「噂の転校生よ!! 皆集まって!!」

「もう説明しなくとも分かったと思うが……」

続々と集まる女子。このままでは退路を絶たれてしまう。

「ノロノロしていたら、身動きができなくなるからあんな事をしていたんだ」

後を振り向いてみると、既に女子が集まっていた。

「りゅ、龍、どうする?」

「俺が聞きたいぐらいだ。ちっ、いつもならこのルートで撒けた筈

なのに、読まれたか……」

ジリジリと寄ってくる女子。先程よりもさらに数が増えている。

「ラインフォード君みたいにカッコイイのいいけど、デュノア君みたいに守ってあげたいタイプもいいよね」

「見て見て、ラインフォード君とデュノア君手握っているよ!」

「絵になるわね……」

迫ってくる女子の目が怖い……。シャルルのそれを感じ取ったのか、手だけでなく、袖の方まで掴んでくる。

ここで捕まるわけには行かない。捕まれば、確実に遅刻することになる。前回一夏のせいで捕まった時はチャイムが鳴っても拘束されていた。

だが、この包囲を突破するのは容易な事ではない。

(仕方ない)

手段を選んでいる場合ではない。早くしなければ、逃げられるものの逃げられなくなる。

(許せ、友よ)

心の中で一応謝罪しておく。

「一夏……」

「何だ、いい案浮んだのか!？」

藁をも掴む思い……といった感じの一夏。だが、一夏に与えられるのはこの場を打開できる妙案ではなく、戦場の厳しさだった。

「おとり 囚役頼む!!」

尻を蹴り飛ばし、女子の一団に一夏を捧げる。

「って、おい!？」

「織斑君を捕まえろ!!」

「織斑君が自ら捕まりにきてくれたわ!」

女子の注意が一瞬一夏に集中する。

「今のうちだ!」

「えっ、でも織斑君が……!」

「尊くない犠牲だ。切り捨てろ」

シャルルの手を引いて崩れた包囲陣を突破する。後ろでは一夏がもみくちゃになっている。羨ましい奴め……自分はそうなりたくないが……。

「無駄に時間をロスしたな、急がないと」

アリーナの更衣室にたどり着いた二人。勿論、一夏はいない。

「で、でも良かったのかな？」

「いいんだよ。それよりも早く着替えろよ。もう時間が無い」

「う、うん……」

中途半端な返事だと思ったが、構っている余裕はこっちにも無い。何せ、集合まで五分を切っている。

腰にぶら下げている無骨なベルトを外す。変なもの（もっぱら武器とハッキングツール）が付いているせいでやたらと重い。続いて上を脱ぐ。

「あ、ああ……」

シャルルが変な声を上げる。

「？ どうした、早くしろよ」

シャルルは何故か後を向いていた。

「き、気にしないで……」

めっちゃ気になるが……。

「――俺は終わったから先に行くぞ」

「えっ？」

驚いたように振り向くシャルル。

「は、早いね」

「制服の下に着込んでいたからな」

「そ、そう……」

「お前も早く着替えたほうがいいぞ。何せ、担任の千冬さんは鬼よりも鬼らしい人だからな」

「そ、そうなんだ」

「時期にお前も分かるさ。平穏な高校生活を送りたいのならあの人は逆らわない事――」

「ど、どうしたの？」

「――いつの間に着替えた？」

シャルルはISスーツに着替えていた。だが、その所要時間がありえないほど短い。二言喋っている間……時間にして30秒足らず。特技や隠し芸で披露できるレベルだ。

「……………」

「そ、それより、龍のスーツって変わっているね」

「あ、ああ。特注だからな」

龍のISスーツは少し変わっている。両腕は殆どスーツに包まれていて右手以外は肌が露出していない。左手は待機状態の時雨があるので指先しか出ていない。脚も殆どがスーツに包まれている。因みに女子は大概水着のように露出度が高い。

「不知火財閥の？」

「何だ、知っているのか」

龍の着ているISスーツは自社の特製だ。

「うん、公式発表もされているしね。突然だったけど……」

そう言うシャルルのISスーツもデュノア社のISスーツのリメイク版だったりする。

「ま、企業には色々厄介な事があるんだよ。同じ企業に属するお前なら少しは分かるだろう」

「うん……そうだね」

二人の間にしみりとした空気が流れる。

「さて、グラウンドに行くぞ。流石にそろそろまずい」

「うん」

更衣室を出てグラウンドに向う。

グラウンドに出てみると、鬼（千冬）が腕を組んで待ち構えていた。

「遅い、一体何をしていた？」

「途中、少しトラブルがありました……でも集合時間ギリギリセーフですよ?」

時間的には間に合っているが……。

「何を言っている? 常に五分行動に決まっているだろう」
千冬の中では遅刻のようだ。

「……織斑はどうした?」

「俺達のために犠牲になってくれました」

「……」

「——と言うのは冗談で今頃、女子に囲まれてウハウハでしょう」
「何が、ウハウハ……だ!!」

「おう、一夏。早かったな」

「龍、よくも人を囲に使ったな」

一夏の顔には複数の引っ掻き傷がある。どうやら、死に物狂いで逃げてきたみたいだ。

「いや、よく囹役をこなしてくれた。捨て鉢にならなくて良かったよ」

あっさり生還した仲間を切り捨てる龍。

「お、おーまゝえ」

「ふ、二人とも喧嘩は……」

バアーン!×3

「ささっと並べ、馬鹿者ども!」

「「はい:」」」

三人は頭を抑えながら列の端に並んだ。

「スーツに着替えるだけなのに随分と掛かりましたわね」

「ああ、原因は一夏が他の『女子』と戯れていたからさ」

「ほう、一夏さん……」

「一夏、アンタまた何かやらかしたの?」

「ち、違う! 俺は何もしていない!」

「龍さんの話では女子と戯れていたんですって」

「はあ? アンタ、バツカじゃないの!?!」

一夏に詰め寄るセシリアと鈴。だが、二人は自分達の後に鬼がいるのに気づいていない。

「――安心しろ、バカは私の目の前に二人いる」

二人の肩がビクツと跳ね上がる。

「「ひいっ!!!」」

後を振り向いた二人が悲鳴を上げる。

バァーン!×2

愚かな者たちだ。

本日の訓練は一・二組による合同演習だ。そのため、いつもの倍人数がいる。

「くう……。何かと言うとポンポン人の頭を……」

「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

先程千冬からのありがたいご指導を受けた馬鹿×2は涙目になりながら頭を抑えている。しかし、鈴の奴、一夏の事を呪う気なのだろうか、まるで呪詛を唱えているみたいだ。

「今日は戦闘を実演してもらう。活力がみなぎっている十代女子もいることだしな――凰、オルコット前に出ろ!」

「ええっ!?!」

「何故、わたくしまで!?!」

「専用機持ちは早く始められるからだ。いいから前に出ろ」

渋々二人は前に出た。

「だからといって何故わたくしが……」

「一夏のせいなのに、何であたしが……」

聞こえる聞こえる……二人の愚痴がよく聞こえる。一夏の奴は耳を塞いでそれを聞き流している。

「お前ら、少しはやる気を出せ……アイツに良い所を見せられるぞ」

「「はっ」」

「流行、ここはイギリス代表候補生。わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね!」

「ま、格の違いを見せるいい機会よね! 専用機持ちの」
流石は千冬。飴と鞭の使いどころを心得てらっしゃる。

「で、対戦相手はどちら? 鈴さんが相手でも構いませんが……」

「ふふ、こっちの台詞。^{セリフ} 返り討ちよ」

「慌てるな、馬鹿ども。対戦相手は……」

キイイーン!!

そこに空気の切る音が響く。上空を見上げると、黒い何かが落下してきていた。

「あああっ!? どいてください!!」

このままでは直撃コース。龍は一夏を蹴り飛ばすと、時雨の両脚・両腕・胸部を部分展開した。

龍はそのまま、高速落下物を受け止めると、脚部のクラスタージェットで制動。PICを全開にして慣性を殺した。

「――何をしているんですか、山田先生?」

何と落下物はISを纏った真耶だった。本人はクルクル回りながら落下したので目を回している。

「ら、ラインフォード君!」

「教師ともあろう者が、クルクル落下して――教え子である生徒に助けられるなんて、笑い話にもなりませんよ」

「はわはわっ!? す、すいません!!」

慌てて離れる真耶。だが、その後には一夏が立っていた。

「うおっ!」

「きゃっ!」

倒れる二人。

「――このラッキースケベが」

一夏は真耶の上に倒れこんでいた。しかも胸を掴んでそこに顔を押し付けている。見方次第では一夏が押し倒しているようにも見えなくは無い。

「お、織斑君……」

「す、すいませ——ひっ!？」

慌てて体を起こした一夏の横擦れ擦れにビームが発射された。勿論、放ったのは……。

「ホホホホ……。残念です、外してしまいましたわ」

……セシリアだ。しかも青筋を浮かべている。

ガシャッ!

今度は鈴のようだ。ISを展開し、その手に投擲も出来る近接武装『双天牙月』そうてんがげつを構えている。双天牙月は合体させる事でブーメランのようにぶん投げることが出来る。そう、丁度今の鈴が構えているように……。

「いっ!？」

「一夏っ!!!」

唸りを上げながら双天牙月は投げられた。丁度、一夏の首の位置だ。

「うおっ!？」

紙一重でそれを避ける一夏。だが、悲しいかな、ブーメランというのも……。

「——帰って来るんだよな」

方向転換してきた双天牙月が再び一夏を狙う。一夏はまだ立ち直っていない。

「はぁ……」

龍は右手に複合銃器『ブレイズバレット』を展開と同時に射撃。

双天牙月の端を狙う。

バァン!!

バァーン!!

ガン!!

双天牙月が地面に突き刺さる。しかし、おかしい。龍は一発しか撃っていないのに発砲音がもう一つあった……。

振り向くと真耶が上半身だけを起こし、腰だめにアサルトライフ

ル『レッドバレット』を構えている。

(まさか、あの体勢で撃ったのか?)

ISのハイパーセンサーと射撃制御を使えば、精密射撃はさほど難しくない。勿論、それ相応の射撃訓練と射撃スキルがいるが……。しかし、上半身だけ起こした体勢で双天牙月の端を撃ち抜くとなると話は変わってくる。

その体勢では射撃時の衝撃を逃がし切れないので狙いがずれてしまう。それなのに精密射撃を出来たということは彼女の實力そのものを表している事と同義である。

「織斑君、大丈夫ですか？」

「は、はい……」

「そうですか、良かったです」

一夏や周りの女子達はまさか山田先生が……と思っているのか、呆然としている。

「ラインフォード君、見事な射撃です」

「いえ、山田先生もお見事です。流星はIS学園の教師、見直しました」

「こう見えても山田先生は元日本代表候補生だからな、今くらいの射撃は造作も無い」

「む、昔のことです、それに候補生止まりでしたし……」

恥かしいのか、顔を赤くする真耶。しかし、代表候補生と言うのは驚いた。人は見かけによらないものだ。

「さて、小娘ども、いつまで惚けているつもりだ？ さっさと準備しろ」

「え、あの二対一で……？」

「いや、流星にそれは……」

「安心しろ、今のお前達ならすぐ負ける」

千冬の『負ける』と言う言葉が気に障ったのか、その目に闘志をたぎらせる。

「では、はじめ！」

千冬の号令と共に上空へ上がる三人。

千冬の言うとおり、セシリアと鈴ではまず勝てないだろう。教師の実力を見誤っているだけでなく、自分達は『強い』と勘違いしているのだから。

「大丈夫か、山田先生」

「お前、心配する方を間違えているぞ」

「いや、だってさ、二対一だぞ」

「――この勝負を見ていたら、その理由もよく分かるさ」

グラウンド上空ではいよいよ生徒対教師の勝負が始まろうとしていた。

第五話くボーイ・ミーツ・ボーイく（後書き）

予定以上に字数が……と言う事なので一旦ここで切らせていただきますm（　　）m

ヒロイン予定のシャルロット（男装）が登場！

原作どおりで進めようかと思いましたが、龍とシャルロットの話を入れたかったので、アニメ版の話の流れにしました。なので、ラウラの登場は少し先です。

龍の秘密についてはまだ書けるような状態ではないので数話先になるかもです。

ご意見・ご感想があれば、ぜひお願いします。m（　　）m

第六話　ルームメイトはブロンド貴公子

上空に上がった三人。

「手加減はしませんわ」

「さっきのは本気じゃなかったしね」

「い、行きます！」

先に動いたのはセシリア。スターライトMK?で山田先生を狙撃。先生はそれを三次元機動で回避。セシリアは続けてBTを四機射出。オールレンジ及び全包围攻撃に切り替える。

その隙に鈴が近・中距離まで接近衝撃砲を展開する。だが、先読みされ射線軸上から逃げられる。

「流石だ……」

龍は頭部のバイザーに搭載されている広角カメラからの映像を鑑賞する。

「さて、今の間に――そうだな。デュノア、山田先生が使っているISの解説をして見せろ」

「は、はい」

空中で起きている戦闘を見ながらも、シャルルはしっかりと口調で説明を始めた。

「山田先生のISはデュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』第二世代最後発の機体ですが、初期第三世代機にも劣らない性能を有しています。安定した性能と高い汎用性、豊富な後付装備が特徴の機体です。現在世界シェア三位で、七ヶ国でライセンス生産、十二ヶ国で正式配備されています」

「ああ、一旦そこまでいい。終わるぞ……」

千冬が話を切る。

上空に目を移すと、セシリアが回避機動をとり、鈴と激突していた。そこに山田先生のグレネード弾が叩き込まれる。

「ラインフォード」

「何ですか？」

「このままではグラウンドに穴が出来る。止めろ」

「手段は？」

「問わん、やれ」

「了解です」

時雨の脚部装甲を展開、チャフ・ミサイル……準備……レディ発射。ファイア

四発のミサイルが地上に落ちてくる二つの影を捉える。

ドッカーン！！

四発全てセシリアと鈴に着弾。二人が持っていた落下のエネルギーが相殺され、地面叩きつけられる程度の速度にまで減速する。

顔面から地面にヘッドスライディングをかます二人。かなり痛そうだ。

「りゅ、龍さん、一体何のつもりですか！？」

「人に向かってミサイル撃つなんて何を考えているのよ！？」

「あのまま突っ込んでいたら地面にクレータが出来ていた。俺はそれを未然に防いだんだぞ、罵声を言われる筋合いは無い」

「そういうことだ」

パンパンと手を叩いて千冬は皆の意識を切り替える。

「次にグループになって実習を行う。リーダーは専用機持ちがやる事。では別れろ」

女子が一瞬で、一夏・龍・シャルルの下に殺到する。

「織斑君、教えて！」

「私も私も」

「不知火君の操縦技術を教えて欲しいな」

「ラインフォード君、一番最初に……」

「デュノア君、私にも教えて」

「デュノア君の操縦技術見せて欲しいな」

群がる女子。対応に困る状況だ。一夏もシャルルもどうしていいのか分からないようでアタフタしている。

千冬は自分の浅慮に気づいたのか、それともこの状況に対してな

のかは分からないが、深い溜め息を付き、頭痛でもするのか、頭を抑えた。

「出席番号順で各グループに入れ！　もう一度、もたつくようなら全員グラウンド100周させるぞ」

群れていた女子が雲のように霧散する。1分後、五つのグループに綺麗に分かれた。最初からこうしていれば良いものを……。

「最初からそうしろ、馬鹿者ども」

千冬も同意見のようだ。

「やった、織斑君のグループ♪」

「名字のおかげ、お母さんありがとう」

「よし、不知火君と一緒にだ」

「デュノア君、分からないことがあったら、何でも聞いていいよ」

「うわぁ、セシリアか、さっきボロ負けしてたからな……」

「^{ファン}鳳さん、よろしくね。織斑君と不知火君のこと教えてね」

各々不満もあるようだが、何とか纏まったようだ。

最初こそもたついたが、訓練自体は滞りなく進んだ。そして昼。訓練に使用したISを片づけることになったのだが……。

『男が三人でもいれば、大丈夫でしょ』

『そのようなことは殿方がやることでは？』

『男子たるもの、この程度問題ないだろう』

上から鈴、セシリア、箒のお言葉だ。

結局五機のISは全て一夏、龍、シャルルが運ぶことになった。しかし、「デュノア君にそんなことさせられないよ！」と言い、シャルルが運ぶ分は体育館系女子が運んでいった。

さらに、龍の分は「訓練してくれたお礼」と言い、同グループの女子が運ぶのを手伝ってくれた。勿論、龍もISを運んだが……。因みに、一夏は一人寂しくISを運んだ。人徳のない奴め……。そして、昼。一夏に呼ばれ、龍とシャルルは校舎の屋上に来ている。

た。

そこには何故か弁当を持参し、腹の探り合いをしている一夏ハレムの三人がいた。

「——おい、一夏」

龍は一夏に殺気を込めた視線を送る。

「どうした？」

「何故、俺とシャルルをこの場に呼んだ？」

どう見ても場違いだ。

「いや、みんなで食べた方がいいじゃん。それにシャルルはまだ学園^コに来たばかりだから、食堂とか分からないし」

「そうだが……」

一夏的には気を使ったつもりなのだろう。だが、箸達の様子を見る限り、それは只の邪魔にしかならない。

「はあ、シャルル……肩身は狭いが、我慢して一夏に付きやつてくれ」

「う、うん……でも——」

シャルルの目線が箸達に移る。

「——本当に僕達が同席していいのかな？」

「その疑問は無意味だぞ、シャルル」

買ってきたウーロン茶を飲む。

「で、さっきから気になっていたんだけど、箸、何で弁当が二つあるんだ？」

一夏が箸の持つ二つの弁当を指差す。

「そ、それは……」

慌てて弁当を背中に隠す箸。

「箸、コイツには直球で言わないと伝わらないぞ」

「うう……」

暫しの葛藤の後、箸は一夏に青い弁当箱を渡した。

「きよ、今日弁当を作った時に余りが出たのでな。捨てるのももったいないからお、お前の分も作ってやったぞ！」

回りくどい言い方をしないで、一夏おまえのために作ったんだ——と言え
ばいいのに。

「おう、マジか！　ありがとう、箒」

「！」

それを見た鈴、セシリアが慌てだす。

「一夏。はい、これ！」

今度は鈴が持っていたタッパーを一夏に放り投げた。

「おう、酢豚だ！」

「そ、前食べたいつて言っていたから」

「ありがとうな、鈴」

照れ臭そうにする鈴。

「コホン——一夏さん、わたくしも今朝たまたま偶然何の因果か早く起きましてこういうものを用意しましたの」

セシリアは膝の上に乗せていたバスケットを開いた。中には中々美味しそうに見える（あくまで見えるだけの）サンドイッチがぎっしり入っていた。

「おう、サンドイッチか」

「はい、たくさんあるので遠慮せずに食べてください」

あつという間に、三つの料理が一夏の前に揃った。

「じゃあ、セシリアのから」

たまごサンドに手を伸ばす一夏。そして口に運ぶ。

「んぐっ！？」

一夏の顔色が緑↓青↓紫↓赤と変わっていく。味は——言わなくとも伝わるだろう。

「いかが？　どんどん召し上がってくださいな」

「え、ええと後で貰うよ」

全身の汗腺から脂汗をかきながらも一夏は笑顔で返事をした。人がいいにも限度があるぞ、一夏……。

セシリアには悪いが、このままでは一夏の身が持たない。

「セシリア、悪いが俺にも一つくれないか？」

「え？ 構いませんが」

龍がそんな事を言ってくるとは思わなかったのだろう。セシリアは驚きつつもバスケットを差し出した。龍はそこからハムサンド（らしき物体）を一つ取った。

「お、おい龍……」

一夏が何かを言う前に龍はそれを食べた。

「……………」

龍の顔から表情と言う表情が消え去る。

「だ、大丈夫？」

シャルルが横から顔を覗いてくる。

「……………」

龍は右手の物体をじっと見つめた。龍自身も料理はそれなりにする。だが、人に自慢できるほどの腕前でもないので、料理の批判は余りした事がない。だが……これについては例外だ。

（ハムサンド……だな、見た目は）

だが、味はカオスだった。何故かハムサンドなのに甘い。それもそんじょそこらの甘さじゃない。例えるなら、口の中に氷砂糖を何個も放り込んだような……。

だが、その後に来た追撃にはさらにカオスだ。甘さの後に来たのは辛さ。唐辛子やラー油、ハバネロ、豆板醤、とにかくこの世に存在する全ての辛いものを集約したような辛さだ。

一夏が虹のように顔色を変えたのも納得だ。これは人の食べる料理ではない。いや、生物が摂取するべきではないものだ。

「――セシリア、一つ確認するが……」

「何ですか？」

「――味見はしたか？」

「料理本と同じ様に作りましたから、していませんが……」

料理初心者がよくやる大きな間違い。

「――後学のためにも自分の料理はちゃんと味見した方がいいぞ」

「……言われて見ればそうですね」

セシリアは自分の作りだした手料理（殺人料理）を口にした。

「○×◇△●××▽—————!?!」

言葉にならない言葉、成る程こういった声をそういうのか。

セシリアは青い顔をし、口元を押さえながら階段の方に走っていた。

「お、おい龍!」

「一夏、善意は時として悪意に変わる事を理解しておけ」

「だ、だからって」

「虚像を張るのもいい加減にしろ。現実はやい内に見ている方がいいんだよ」

龍は残りをウーロン茶で流し込んだ。貰ったものなので一応は食べきった。

「龍の言う通りよ。大体アンタだって青い顔してたじゃない」

「うっ」

「どちらにしろ、俺には関係ない。後はセシリアがどうするかだ」
龍はパンパンと手を叩いて空気を着替えた。

「とりあえず今は飯だ。貴重な昼休みを雑談で終わらすには勿体無いだろう」

そういうと龍は教室から持ってきた自分の弁当をシャルルに押し付けた。

「え、龍?」

「それは食べておいてくれ」

「で、でもこれは」

「どうも食欲が無くてな。ああ、食べた後感想を聞かせてくれるとありがたい」

それだけ言うと、龍は屋上を後にした。

「いっちゃった……」

シャルルの手には龍が置いていった弁当。

「アイツがいいて言ったんだから食べちゃえば？」

「うん……」

鈴の言うとおり、貰った以上は食べないと龍に悪い。

「わぁ……」

龍が作った弁当は一段目にチャーハンが二段目におかずが入っていた。彩りもよく、野菜のバランスもいい。

「む、中々上手いな」

箸が覗き込んでくる。

「龍も料理できるわよ。アイツ、結構細かい作業得意だし」

「俺よりも上手くなったかもな」

蓋についているスプーンを取る。

「いただきます」

チャーハンを口に運ぶ。

「——美味しい」

冷えていてもしっかりチャーハンの味がする。米も水っぽくなくパラパラ。

「龍は何故かチャーハン作りが上手いんだよね」

「そうなんだ……」

確かに弁当でこの味が出せれば、出来立てはもっと美味しいだろう。もう一口食べる。

「美味しい」

自然と笑みが零れた。

屋上を離れ、庭の方まで来ていた。木陰もあるし、人目の殆ど無い。

「さて……」

木に背中を預けると時雨のバイザーを部分展開し、接続ケーブルを引っ張り出した。それを自分の携帯端末に繋げる。

「衛星通信……クリア」

いくつかの外国サーバーを経由し、龍は回線接続の準備をする。

「……よし」

準備が出来た。

プライベート・チャンネルの回線を開く。

《あら、あなたから通信を繋げるなんて珍しい事もあるものね》

「お久しぶりです、小隊長。いえ、今はソフィア大尉と言った方が適切ですか」

HUDには北欧系の女性が写っていた。龍の知り合いのようだが……。

《あなたに大尉呼ばわりされると違和感しかないわね》

「ではいつも通りに――ソフィアさん」

《で、リユー。あなたがSSS（不知火・セキュリティ・サービス）所属の私に連絡を取ってきたと言う事は何かトラブルかしら？》

彼女はソフィア・ベルクストレーム。不知火財閥のプライベート・ミリタリーである不知火・セキュリティ・サービス（SSS）のISS実動部隊所属のテストパイロットだ。

北欧出身で肌は白く、栗色のショートヘアに青い瞳。彫刻のように整った顔付きをしているせいか感情の起伏が少ないように見える。龍とは古い付き合いで、小さい頃から義姉のマリアと一緒に面倒を見てくれた人でもある。

「話が早くって助かります。実は折り入って頼みたい事があります」
《言ってみなさいな》

「――今日、フランス代表候補生が転入してきました。名前は『シヤルル・デュノア』、男です」

《――なるほど》

ソフィアの目が鋭いものに変わる。

「ソフィアさんにはデュノア社及びフランス政府の動向を探って欲しいんです」

《それについては本社に通さないと何とも言えないわ。何せ、デュノア社は自社のG T Iの商売敵だから》

「なら、『シャルル・デュノア』について調べてください。戸籍データに何らかの改竄があれば、それをネタにフランス政府とデュノア社に揺さぶりを掛ける事もできます。何せ、『彼』はフランスの代表候補生ですから」

《相変わらずね、あなたのそう言うところ嫌いじゃないけど……》
「言っときますけど、これは仕事に支障をきたさないためでもあるんですよ」

慌てて弁解する龍。

《分かっているわよ……でも、少しはデュノア社に対する僻みもあるでしょう？》

「うっ……」

痛いところを点かれ、言葉に詰まる。

「——じゃあ、ソフィアさん、情報収集の方お願いします」

これ以上話を長引かせるとまたソフィアに言われそうだ。

《分かったわ、調べておいて上げる。あなたも無理は程ほどにしないさ》

通信が切れる。

「——後は連絡待ちか」

端末を外し、バイザーを収納する。

「教室に戻るか」

予鈴が鳴る。午後からの授業開始まで後五分しかない。

午後の授業も終わった放課後。龍はさっさと寮の部屋に戻って調べものをするつもりでいた。

「ラインフォード君」

「何ですか、山田先生」

ホームルームも終わり、クラスメイト達が部活に行ったり、寮に戻ったりしている中、龍は呼び止められた。

「お引越しです」

「はあ!？」

思わず変な声を上げてしまった。

「――午前中のアレで急上昇した先生の株が、今の一声で大暴落しましたよ」

「ええっ!？　そ、そんな……」

いきなり泣き顔になる教師。

「い、いや、真に受けなくても……」

それを慰める生徒。

（普通なら、逆じゃないか？）

落ち着いたところで山田先生が説明を始めた。

「つまり、シャルルが俺の部屋に来る事になったから、その引越し作業を手伝えと？」

「はい……」

「『お引越しです』と言う前に説明して欲しかったですね」

「すいません……」

教師と生徒の立場が入れ替わっているように見えるのは気のせいだ……多分。

「…分かりました。で、シャルルは？」

「多分、ラインフォード君の部屋に――」

「後は俺の方で何とかしますから」

それだけ言うと龍はそそくさと教室を出て行った。

「ああ……」

教室には空気を掴む山田先生だけが取り残されていた。

「よいしょっと……」

シャルルは黙々と荷物の入ったダンボールを部屋の中へ運んでいた。私物が多いわけではないが、寮暮らしをする以上、ある程度の物が必要になる。

「わあっ!？」

足下が見えなかったせいでドアの所にある段差に足先を引っ掛けてしまった。シャルルは今大きいダンボールを持っている。その状態で崩れた体勢を立て直すのは無理だ。

「っと」

傾いた体が誰かに支えられる。背中に誰かの手の平を温かみを感じる。

「危なかったな、シャルル」

「龍？ ど、どうしてここに？」

「ここは俺の部屋でもあるからな」

そう言うと龍はシャルルの持っていたダンボールを取ると部屋の中へ入っていた。シャルルも遅れて中に入る。

「俺は窓際のベッドを使っているから、シャルルは廊下側になるけどいいか？」

「うん、大丈夫だよ」

「よし、そんじゃ残りの荷物を運んでくる。シャルルはその荷解きだ」

「で、でも……」

「その方が早く済む。それに荷物の整理が済まないと俺もゆつくりと部屋で休めないしな」

その後、二人はテキパキと整理を続け、夕方にはシャルルの荷解きも大体が片付いた。その後、二人は食堂で夕食を食べ、部屋で戻った。

「今日はありがとう、龍」

「構わないさ、同居人として当然の事をしただけさ」

龍は部屋に備えられている簡易キッチンで紅茶を入れ、先日買っておいたお茶請けを取り出す。

「紅茶とクッキーだ。夕飯の後だし、これぐらいで足りるだろう」

「ありがとう」

嬉しそうに紅茶を受け取るシャルル。ヨーロッパ出身だから紅茶の方がいいだろう——と言う判断は正解だったようだ。個人的には

緑茶やウーロン茶の方が良かったのだが、それではシャルルが落ち着かないだろう。何せ、始めて日本に来たのだから。

「龍も紅茶好きなの？」

「嫌いじゃないな。まあ、俺が紅茶を飲むようになったのは義姉の影響だけだ」

龍の脳裏に金髪の女性が浮ぶ。ヨーロッパ生まれらしい義姉は昔から紅茶が好きだった。その影響で龍は紅茶用のティーセットを持っていた。

「お姉さん？ それって……」

「名前ぐらいは聞いたことがあるだろう？ 『ブリュンヒルデ』の名を冠された双壁の一人——マリアーナ・ラインフォードのことは……」

「う、うん……」

「何だ、何か言いたげな顔だな」

「こんな事を聞くのは失礼だと思うけど……」

「別に構わない、気になるから早く言え」

シャルルは口ごもりながらも続けた。

「本当に姉弟なの？」

「——」

龍はカップを机に置いた。シャルルは龍の雰囲気が変わったのを感じてはやり聞くべきではなかったと自分の行いを後悔する。

「姉弟か——ま、疑問に思っても仕方ないかな」

「ご、ごめん……」

「いや、気にするな。よく聞かれるしな」

龍は言葉を選びながら、先程の問いに答えた。

「結論から言うと言義理とはいえ、姉さんと俺は姉弟だ」

「うん」

「姉さんが自立する時に俺を引き取ってな。その時に姓を貰った」
「どういうこと？」

龍の言い回しが気になったのか、シャルルは疑問を投げかけた。

「何だ、知らないのか？」

「え、何を？」

「……いや、こっちの話だ。気にするな」

「う、うん……じゃ、龍は何で『不知火』の姓も持っているの？」

シャルルはここに来てからずっと持っていた疑問を龍にぶつけた。

「ああ、その事か」

「お、教えてくれるの？」

「別に隠す事でもないしな——俺が不知火の姓を名乗っているのは恩返しのためなんだよ」

「恩返し？」

「ああ、昔……いや、今もか。とりあえず、俺は不知火財閥に返さなきゃならない恩義が腐るほどあるんだ」

「じゃあ、その恩返しのために不知火の姓を名乗っているの？」

「簡単に言えばな。俺が不知火財閥で開発されたISを持っていることから、俺の目的は判断できるだろう？」

「データ取りのため？」

「大方は……な」

含みのある言い方、シャルルは気になったが、これ以上聞くのは悪い気がした。

「ま、気になる気持ちも分からないわけじゃないが、俺にも色々事情があるんだ。そこら辺は察してくれ」

「うん、分かった」

龍はそう言うと言を切った。

「さて、この話は終了。シャルルさっさとシャワーでも浴びてこい。汗掻いているだろう？」

「それじゃ、先に使わせてもらうね」

荷物の中からジャージを取り出すシャルル。どうやら、寝巻きのようだ。

「——覗かないでね」

「何が悲しくて男のシャワーを覗かないといけないんだよ」

「ご、ゴメン！」

慌ててシャルルがシャワールームに引っ込む。時々、シャルルの挙動に不審な点が見られるのは気のせいだろうか。

「――シャイな奴なのか……何か裏があるのか」

シャルルがシャワールームに引っ込んだのを確認すると、龍は机の引き出しを開いた。中には愛用のオートマチック銃にその弾薬、龍が愛用するナイフ、その研ぎ石等が入っていた。因みに下の引き出しには手榴弾にサブマシンガンも入っていたりする。

「シャルルが来たから手入れがし難くなるな」

喋りながらも龍は慣れた手つきでハンドガンの手入れを進める。銃口の掃除に油さし……。武器は手入れを怠るとすぐに不具合をきたす。続けて携帯しているナイフの手入れ。ナイフも定期的に刃を研いでやらないと切れ味を維持できない。

「……」

ジッと刃を見詰めたら、研ぎ石で表面を研ぐ。また刃を見詰める。そして研ぐ。その繰り返し。黙々と手入れを進める。

と作業をしていたら携帯端末に通信が入ってきた。一旦作業を止め、確認する。

「――レイラからか」

相手は時雨の開発主任レイラ・レイターだった。

（予備パーツの件かな）

先日の国籍不明機^{ボギー}の試合襲撃事件。龍自身は軽傷で済んだが、後付装備のボルティクス及びライトニングは大破。時雨本体にも幾つか破損した。翌日、半ば私物化している研究室^{ラボ}で時雨の修理をしたが、思った以上に各部のパーツが消耗していた事が判明。急遽レイラに追加の予備パーツを頼んだのだが――。

「おーまーえーはバアアッカアアか――！？」

――と怒鳴られた。レイラが言うには、俺が頼んだ消耗部分のパーツは全て金属疲労や過熱などといった過負荷が掛からない限り破損するはずのない部分らしい。龍もそのことには気づいていた。だ

が、過負荷をかけるような事をした覚えはなかった。定期メンテナンスは欠かさずやっていたし、実験機である時雨は過度の負担に耐えられないものテストパイロットとして十二分に把握していた。

だが、主観ではそうでも客観は違うものだ。他人から見れば、時雨を壊したのは他でもない『龍』なのだから。

（まったくいい迷惑だ）

愚痴っても仕方ないが、そうせずにはいられない。誰かに溜まっている鬱憤^{うっぷん}を全て聞いて欲しい。そう思うことが最近増えていた。だが、同時に自分の知られたくない部分を見せることに恐怖感も抱いている。

（まったくこれじゃまるつきり餓鬼^{ガキ}じゃないか）

気持ちを切り替え、通信に出る。余り待たせると宥めるのが面倒になる。

「よ、レイラ」

できるだけいつも通りの口調を意識する。

《そっちは随分と気楽そうだな、龍。こっちは新型機の開発に先行量産機のテスト運用と猫の手も借りたいほどの忙しさなのに……》

「実際に猫の手を手を借りたとしても役に立たないだろうな」

《五月蠅い！ 言葉のあやだ、あや！！》

剥きになるレイラ。全く短気な奴だ。

「そんな事分かってる。それにレイラなら、どうて事ないだろう」
《当然だ！！》

相変わらず無い胸を張るレイラ。

「パーツの消耗についてはすまなかった」

《反省しているならいい。それにユニットやパーツの消耗は予想していたしな》

「そう言ってくれると助かる」

《だからって壊していいとは言っていないからな！」

「分かっている。俺だってそこまで馬鹿じゃない」

《ふん、当然だ》

「――で、注文のパーツはいつ届く？　このままじゃ稼働率を落とざるを得ないんだけど……」

《数日中に届くように調整してある。だが、幾らパーツを交換しようとも根本的な解決にはならない》

「そんな事は分かっている。だが、このままじゃ稼働率が落ちだけじゃなく、戦闘にも支障をきたす」

《一度、会社の開発研究室^{ラボ}に戻して、完全なオーバーホールをした方がいいんだがな》

「それは却下だ。何かあった時に対応できない」

《だがな、技術実証機であるアイギスはその特性上……》

「起動後は定期整備をしている」

《付け焼刃にしかない事はパイロットであるお前が一番よく分かっているだろう？》

レイラの言い分は正しい。只でさえ、ピーキーで融通の利かない時雨は本来学園に持ち込めるような機体ではない。元々は軍用ISであり、レイラによって再開発された時雨は軍用であった頃の名残である圧倒的な戦闘力と技術実証機としての新技術を搭載した機体だ。

「――だったら、どうすればいいんだ？」

《ふん、先日やっとロールアウトした新装備がある。それに換装すれば、負担の大きい高機動戦闘型よりも稼働率は安定するだろう》
「武装なら事足りている」

《詳しくは今から送るカタログスペックを参照してくれ。――どうやら、私はお邪魔らしいしな》

「おい、レイラ!？」

《またな――》

通信が切られる。

「何なんだ、全く……」

送られてきたデータファイルを携帯端末内に保存する。時間が空いた時に見ればいいだろう。どうせ、実物が届くまで時間が掛かる。

ナイフ研ぎを再開する。思っていた以上にレイラと喋っていたようだ。早くこれを終わらせなければ、シャルルがシャワーから戻ってきてしまう。

「――さて、今日はこれぐらいにしとくか」

――と、そこで気が付いた。己の後に立っている何かに……。

「――シャルル」

シャルルが立っていた。髪の毛から水滴が落ちる。中々色気のある姿だ。俗に言う水も滴る何とやらだ。

「上がっていたのか」

「う、うん……」

シャルルの目が龍の手元に注がれる。

「シャ、シャワー空いたから」

「お、おう、分かった」

服とタオルを持って龍はシャワー室に逃げ込んだ。

シャルルは困っていた。

シャワーから上がり、体を拭いていたら龍の話し声が聞こえてきた。どうやら、誰かと電話しているようだ。邪魔するのも悪いと思っ
て少し中で様子を見ていたが、少ししたら龍が不機嫌になった。その後、龍が怒鳴って電話が切れた。切れる直前、電話の相手と目
があってしまった。相手の肩に気を使わせたのは間違いない。

「悪い事をしたかな……」

髪の毛の水気をとりながら、シャルルは少し罪悪感を感じた。

「でも――」

シャルルの視線が龍の机に注がれる。

「――銃……だよね？」

机の上にあるのは間違いなく銃だ。シャルルもISの火器を使っている
ので銃自体は見慣れているが、人が使う本物の銃を間近で見たことは殆どない。

「それに――」

ナイフ……だよね？

龍は随分真剣にナイフの手入れをしていた。しかも一つ二つではなく、机の上にあるだけで十刀程ある。かなり怖い……何故、一生徒があんな危険なものを平然と所持しているのか。

「もしかして……」

シャルルは頭を振って自分が想像したシーンを忘れようとした。

「――気にしないことにしよう」

十分後、龍がシャワー室から出てきた。

「――机の上には触っていないよな？」

「う、うん」

龍は机の上の危険物を引き出しの中に直した。ナイフはポーチの中にしまう。

龍がシャルルの方に向き直る。どうやら、視線が気になったようだ。

「あっ、ごめん」

「いや……悪いな、こんな物騒なものを見せちゃって。護身以外で使う予定はないから安心してくれ」

それは……安心していいのだろうか？

「何でそんなのを……」

「この銃は馬鹿騒ぎが好きな同僚からのプレゼント。ナイフは姉さんからのプレゼントだ」

「お、お姉さんから？」

「ああ。姐譲りのナイフ投げが得意だな。そのせいだ」

「ナイフ投げ？」

「見せてやろう」

そういうと龍は一冊の本を机の上に立てた。部屋の端に立つと人差し指と中指の間にナイフを持った。

「……………」

龍の右手が振り上げられる。刹那、机の本にナイフが突き刺さっ

た。

「ま、こういうことだ」

シャルルは驚きで声も出ない。

「慣れれば、シャルルもできるぞ。やってみるか？」

「――龍、それ教本だよ」

「あっ」

穴の開いた教本を見て少しうろたえた龍の姿は少し面白かった。

そんなこんなで深夜。色々あったせいかシャルルも龍もさつさと就寝する事にした。

（ね、眠れない……）

布団の中でシャルルは何か寝付こうと必死に格闘していた。因みに龍は部屋の電気を消してからすぐに眠ってしまった。

（うう……今日は一日で色々あり過ぎたよ）

疲れてはいるが、インパクトの多い事があり過ぎて妙に目が冴えてしまっている。これでは中々寝付けない。さらに、すぐ側に龍が――男がいるというこの状況が異常な緊張感をシャルルに与えていた。

（ど、どうしよう……）

古典的な羊を数える方法も既にした。確か500を越えた辺りで数えるのを諦めた。

寝返りを何度もしている。

（龍はもう寝ちゃっているよね）

隣に目をやると、龍の背中が目に映った。

（――お休み、龍）

…

……

………

カサッ。

（！ な、何？）

どうやら、浅い眠りに入っていたようだ。だが、その眠りも今の物音で途切れてしまった。

「――龍？」

隣のベッドに龍の姿は無かった。

（トイレかな？）

ヒュー――。

部屋の中に風が流れ込んできた。ベランダが開いていた。寝る前は閉まっていたはずなのに……。

「あれ…龍？」

外を見ると、龍の後姿が目飛び込んできた。

（こんな時間に寮を出ちゃダメなのに）

上着を手に部屋を出るシャルル。

寮を出ると庭の方に向かう。龍がそっちの方に行っただからだ。

「龍――！」

「――お前か」

振り向いた龍の顔は月明かりのせいでよく見えない。

「寮に戻ろう。見つかったら怒られるよ」

龍の手をとろうとした時、シャルルは龍と目があった。

「あつ……」

だが、目があつた瞬間、シャルルは言い表せないような恐怖感を覚えた。

（い、いつも龍じゃない？）

無意識の内に龍から距離をとるシャルル。

「そう怖がるな。別にとって食ったりしないさ」

シャルルの手首を掴む龍。

（あ、あれっ？ 龍の瞳は黒じゃ……）

月明かりで微かに見える龍の瞳はいつも漆黑ではなく、血のような赤い瞳だった。

「――しかし、アイツも馬鹿だな。近くに敵かもしれない奴を置い

たままにするなんて」

「えっ？」

「それに意外と鈍感ときている。普通は気づくだろうに……」

馬鹿にした顔……きつと今話している『アイツ』のことだろう。

『アイツ』が誰なのかは分からないが。

「……しかし、俺も甘いな」

次の瞬間、シャルルは首筋に痛みを感じた。

（ええ……）

体から力が抜け、意識が薄れていく。

「さ、お姫様はもう寝る時間だ」

朝、カーテンの隙間から朝日が零れる。

「んっ……」

机の時計を見る。

（7時前、起きなきゃ……）

と、思考が働いた瞬間、シャルルはベッドから飛び起きた。

（き、昨日……）

鮮明に思い出される昨日の出来事。

「りゅ、龍——！！」

「ん、呼んだか？」

首にタオルをかけた龍が洗面台の方から出てきた。

「おはよう、顔洗ったらどうだ？ 目が覚めるぞ」

「じゃ、じゃなくて……」

「ああ、シャワー浴びたいのか？ 別に使っても大丈夫だぞ」

「ち、違う！ そうじゃなくて昨日……」

「昨日？ ああ、だから、あの武器は護身用だって……」

「そ、そっちじゃなくて夜に……」

「夜？ 昨日はさっさと寝ただろうが。寝惚けているのか？」

昨日龍から感じた刺すような気配が感じられない。

「……………」

龍の口調に変なところは見えない。逆に慌てているシャルルの方が変に見える。

「どうした、調子でも悪いのか？」

心配そうな顔をする龍。

「——な、何でもない。少し寝惚けていたみたい」

「顔を洗ってこい」

龍から渡されたタオルを受け取ると、シャルルは洗面台に引っ込んだ。

「————夢：だったんよね」

シャルルは自分にそう言い聞かせた。

（そう、きつと少しリアルな夢だったんだ）

そう夢だ。だから首筋に感じる僅かな痛みもきつと気のせいだ。

そうシャルルは自分を納得させた。

第六話くルームメイトはブロンド貴公子く（後書き）

ご意見・ご感想があれば、ぜひお願いします。

第七話〈新たな転校生〉

いつも通りのショートホームルーム……だったはずなのだが――。
「ええと、昨日に続いてですが、また転校生がやってきました」

（何だ、このデジャブは……）

そう思ったのは恐らく龍だけではないだろう。

教卓には一人の女子生徒が立っていた。綺麗に伸びた銀髪に、右目には赤い光が宿っている。小柄だが、中々可愛いと思う。だが、何故か左目には少女には似合わない無骨な黒い眼帯。さらにIS学園の制服をまるで軍服のようにカスタマイズしている。IS学園の制服は生徒が自由にカスタマイズしていいことになっているが、彼女のようなカスタマイズをしている子はこの学園に二人とないだろう。

（只の趣味……いや、それはないな）

彼女から感じられる戦士の香り……それは龍にとって慣れしたんだ匂いと寸分違わなかった。

「……ラウラ、挨拶をしろ」

「はっ、教官」

千冬に対して敬礼をする。直立不動のまま見事に決まった敬礼だ。「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一生徒だ。私の事は織斑先生と呼べ」

「了解しました」

（なるほど、軍人か……）

彼女が軍人ならば、彼女に対して感じた違和感にも説明が付く。IS保有国では大概ISを『兵器』として研究・運用している。そのため、各国の軍隊にはISの運用を専門とした特殊部隊が多く存在する。中には違法擦れ擦れの極秘部隊等も……。彼女もそういった部隊から引き抜かれてきたのだろう。

（そして、千冬さんの事を『教官』と呼ぶ……出身国はドイツか）

千冬はとある事情で昔一年ほどドイツにいたことがある。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

クラスメイトたちの沈黙。普通なら続けて自己紹介があるものだが、いつまで経ってもそれがない。

「あ、あの……以上……ですか？」

「以上だ」

もう話す事はないらしい。山田先生は泣きそうな顔になっている。教師なのだからもう少し頑張って欲しいが……ラウラ相手では分が悪いだろう。

ラウラの視線が一夏のそれと交わった。

「！ 貴様が――」

ラウラが一夏の席の真横まで来ると手を振り上げた。

（コイツ……）

このモーションから考えられる事は一つしかない。

バシッ！

振り上げられたラウラの腕を龍は掴んだ。

「！ 何のつもりだ？」

ラウラの視線が一夏から龍に変わる。

「悪いが、親友が叩かれるのを黙って見ているわけにもいかなくな

「……………」

「……………」

無言のやり取り……。

ラウラの手が懷に伸びる。

「止めとけ」

龍の言葉にラウラの手が止まる。

「お前が懷に忍ばせてある銃ものを抜き取るよりのも俺の方が早い」
龍はラウラから見える位置で袖からナイフを抜き取った。

「！ お前何者だ？」

「しがない高校生……とだけ言っておこう」

含みのある笑みを浮かべる龍。

「ラインフォード、ボーデヴィツヒ。席に座れ」

千冬の注意によって二人はようやく席に付いた。その後、千冬は手短に今日のIS実習についての説明を行い、ショートホームルームを終わった。今日は朝から座学が待っている。

土曜日である今日は授業が昼までしかなく、午後から龍たちはアリーナでIS自習をすることにした。時雨の調整をしていた龍がアリーナに入ると、一夏にあれやこれやと怒鳴る箒・セシリア・鈴の姿があった。どうも一夏の指導をしているようなのだが、いかんせん、三人とも人に“教える”というのを知らない。

「こう、ズバーンとやってから、がきんっ！…どかんっ！…と言う感じだ」

「何となく分かるでしょ？ 感覚よ感覚…：はあ？ 何でわかんないのよ、馬鹿」

「防御の時は右半身を斜め上前方五度に傾け、回避の時は後方へ20度反転ですわ」

上から箒・鈴・セシリアの順だ。

（こいつら、とことん人に教えるのが下手くそだな）

龍は変な意味で感心していた。

「一夏！」

とそこに救世主が現れる。

「ちょっと相手してくれる？ 白式と戦ってみたいんだ」

「シャルル、分かった。と言うわけだからまた後でな」

箒たちはかなり不満そうだ。無言で一夏を責めている。

「龍も後で手合わせしてくれる？」

「いいぞ、一夏勝ったらな」

「うん、任せて」

シャルルは笑顔で返事をした。

アリーナに人だかりが出来ていく。注目の専用機持ちが手合わせをするのだから、気にもなるだろう。

「シャルルのISは『ラファール・リヴァイヴ・カスタム?』……自社のカスタム機か」

シャルルのIS『ラファール・リヴァイヴ・カスタム?』はデュノア社製第二世代IS『ラファール・リヴァイヴ』をカスタマイズした機体だ。

物理装甲と基本装備をそぎ落とした代わりに、各部に増速・姿勢制御用のスラスタを増設、拡張領域を二倍にまで増やしている。通常ISの後付装備は三つかそこら、多くても五つ程度だ。だが、リヴァイヴの場合、大容量の拡張領域によりその総数は20を越すらしい。その武装を多さには驚くが、それを有効に扱えるかどうか別問題だ。

「さて、シャルルの腕前はどんなものかな……」

幾ら武装が多くてもそれを使いこなせるかどうかパイロットの技量次第。この勝負でそれが見えてくるだろう。

「行くぞ!」

「いつでもどうぞ」

一夏が雪片で切りかかる。シャルルは左腕に装備された唯一の物理装甲シールドでそれを防ぐ。続けて近接用のナイフを展開、一夏を牽制すると上空に飛び上がった。一夏の上を取ったところでシャルルは武装の中からサブマシンガンを展開。

(――上手いな)

シャルルは上空で一夏よりも高い位置をキープしながら、速射性能がいいサブマシンガンで着実に一夏のシールドエネルギーを削っている。空戦の鉄則は相手よりも高い高度を得ることだ。高い高度を得る事により、位置エネルギーが増加する。位置エネルギーが多いと言う事は運動エネルギーが多い事と同義なので、運動エネルギーを多く持っている機体はより複雑で早い機動を行う事ができる。

ISにとっては微々たる差だが、より高度な三次元機動を行う場

合、この差が勝敗を分ける事もある。

一夏の斬撃を回避したシャルルはサブマシンガンからアサルトライフルへ持ち替えた。数秒後、一夏のシールドエネルギー残量がゼロに達し、シャルルの勝利となった。

「お見事、シャルル」

「あ、ありがとう龍」

恥かしそうに顔を赤く染めるシャルル。時たま、彼が女に見えてしまうから不思議だ。

「龍、次いいかな？」

「ああ、いいぜ」

龍は時雨を展開する。

「一夏のようにはいかないぞ」

「うん」

睨みあう二人……先に動いたの龍。

ブレイズ・バレットを展開、ターゲットインサイト。発砲と同時に跳躍、シャルルの頭を抑える。シャルルも龍の攻撃を防ぎながらサブマシンガンを両手に展開、龍を牽制。龍も腰だめのビーム機銃『ラミントン』で牽制しつつ、両腕にホルドしたブレイズ・バレットで狙撃。

「やるな、シャルル」

「龍こそ」

喋りながらも二人の間にはビームと弾丸が飛び交っている。シャルルは弾切れとなったサブマシンガンを収納すると右手に近接ナイフ、左手にPDW（個人防御火器）を展開する。

（近接で仕掛けてくるか？）

龍はシャルルの動きを読んでブレイズバレットからマシンピストルのアーヴァンクへ武器を変える。急接近してくるシャルル。ナイフをアーヴァンクで受け止め、超至近距離で大口径ショットガン『ヘルハウンド』をぶち込む――それが龍の考えたシナリオだ。

だが、シャルルはあろう事か右手に持つナイフを投擲した。

(ナイフはフェイク!?)

シャルルが近接での打ち合いをしてくると思っていた龍は一瞬対応が遅れる。その隙をシャルルは逃さなかった。右手にもPDWを展開すると、近距離で両門を斉射。

龍もアーヴァンクで応戦するが、マシンピストルとPDWでは弾数の差があり過ぎる。アーヴァンクを収納し、可変ビームカノンライフル『ライトニング』を展開。マシンガンモードで再び応戦。さらに武器を変えながら可変パワーウィングを逆噴射、全く姿勢を変えないで推力偏向瞬時加速(急後退)した。

シャルルもそれに合わせて接近。龍はラミントンとライトニングで迎撃。両者とも一步も引かず、三次元格闘機動戦闘にもつれ込んでいく。

「はあ、二人とも凄いな」

「ふーん、結構やるじゃない、シャルルも」

「確かにそうですわね、龍さんの動きにもしっかり張り付いていますし」

「というか、龍の方が押されていないか？」

地上で二人の戦いを観戦している一夏・鈴・セシリア・箒は龍の動きがおかしいのに気づいた。

「言われてみれば、龍の動き……切れがないわね」

「そうですわね、私と戦った時の方がまだいい動きでしたわ」

「調子でも悪いのかな？」

「そういえば、この前の対抗戦襲撃事件以降、ISが本調子じゃないって言っていた」

「だからか……」

上空の戦いは激しさを増していた。

PDWからショットガンに持ち替え、連続射撃を続けるシャルル。
(龍、こんなに強いなんて……)

すでに後付装備の幾つかは弾切れとなっている。只の手合わせで、ここまで武器を消耗するのは始めてだ。龍の三次元機動にも驚かされるが、何より凄いのは“卓越した操縦技術”と“判断の早さ”。ナイフを凶にしたフェイントもその後の騙しも素早くそれに対応し、すぐさま反撃してくる。

龍のIS操縦技術はこのIS学園でもトップクラス——シャルルはそう確信した。

だが、龍と撃ち合っている間に違和感を覚えた。最初の頃に比べて動きに軽やかさ……切れがなくなっていた。

(本調子じゃないのかな?)

だが、それを理由に手加減をするつもりはない。手加減をして勝てる相手ではないし、その行為自体相手に失礼だ。

そんな事を考えていたら、龍が一気に接近してきた。すぐに応戦するが、龍は瞬時加速でシャルルの懐にまで飛び込んだ。

「この間合いなら……!」

タクティカル・ウィザードのクレイモアモードで近接格闘戦を仕掛けてくる龍。シャルルはその攻撃を左腕の物理装甲で受け止めるが、完全に衝撃を殺しきれない。

「なら……!」

右手のショットガンを龍に向ける。龍も左手にヘルハウンドを構える。

「……………」

「……………」

両者、相手の顔に銃口を向けたまま、膠着……。

「——どうやら、相打ちみたいだね」

「そうみたいだね」

双方武器を納める。

見事な演習を見せた二人を一夏達が出迎えた。

「すごいな、二人とも!!」

「おい、一夏。お前もできるようにならないとダメなレベルだぞ？
これは」

「俺は無理だって」

「そりゃ、基礎を抑えていないからな」

「基礎？」

「火器と射撃スキルについてはシャルルの方が長けているだろ。そ
ちに聞いてくれ」

「え、え〜とね。一夏が勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把
握してないからだよ」

「そうなのか？ 一応分かっているつもりだったんだが……」

「う〜ん、知識として知っているだけって感じかな？ 僕と戦った
時も全然間合いを詰められなかったよね？」

「うっ………確かに。イグニッション・ブースト 瞬時加速も読まれたしな」

「お前の武器は雪片式型の一振りだけ、つまり超近接戦闘特化型だ。
だからこそ、お前は近接戦闘以外の……例えば、今話している射撃
武器に関する知識をより深く理解しておく必要がある」

「うん、龍の言うとおりの。そうじゃないと対戦じゃ絶対に勝てない
よ」

「特にお前は瞬時加速に頼りすぎている面があるからな。軌道も読
まれやすい」

「あ、でも瞬時加速中に無理に方向を変えたりしちゃダメだよ。機
体に掛かる負荷とか空気圧とかの関係で体に負担が掛かる事がある
から……最悪骨折とかも」

「俺は、時雨のトライアル中のミスで危なく内臓破裂しかけた」

「なっ!？」

一夏の顔に動揺が走る。流石に内臓破裂はショックが大き過ぎた
ようだ。

「ああ、安心しろ。普通はパイロット保護機能が働くからそこまでの事は起きない……多分、な」

「そ、そうか」

「それよりもお前は射撃についての知識をちゃんと理解しているのか？」

「い、一応は」

「射撃武器の使用経験は？」

「ない」

「……そうだな。百式には拡張領域の空きはないから、後付武器もないし」

龍は唸りながら考えを巡らした。

「――よし、シャルル。手伝ってくれ。こいつに射撃訓練を付ける」
龍はアリーナに備えられているターゲットマーカーアンロックを起動させ、シャルルは自身の武器の使用許可を一夏に発行した。

「火器管制装置《FCS》は……無いな、やっぱり。おまけにセンサー・リンクも無いときやがる」

「じゃあ、手動マニュアルでやるしかないね」

「そうだな、まずは銃の構え方と射撃姿勢からだ」
龍は後付装備のブレイズバレットを展開する。

「一夏、気合入れろよ。今日中に射撃スキルを叩き込んでやる」

「お、おう……」

構え方も知らない一夏に位置から教えるのは骨が折れたが、以外と飲み込みが良かったせいか、一時間もすれば、ターゲットマーカーに命中するようになった。

「お疲れ様、一夏」

「あ、有り難う。シャルル……」

一夏は地面に座り込みながら、シャルルが持ってきたスポーツドリンクを受け取った。

「この程度でバテるとは……鍛えがなってないぞ」

龍は一夏の隣で貸し出していたブレイズ・バレットの動作チェックをしていた。

「しかし、一夏がこんなに早くマーカーに当てられるようになるとは思わなかったよ」

一夏が先程まで射撃演習をしていたマーカーには撃ち抜かれた痕が残っている。

「次の機会には無人機ドローンを使ってより実践的な演習をやるか」

「ま、まだするのか？」

「当たり前だ。それとも何か？ お前はあっちの専属指導員の方がいいのか？」

龍の指差す方向には一夏の専属指導員ハーレムの三人がいた。

「……いや、やっぱいい」

一夏の顔が若干引き攣っている。

「懸命だな。お前は暫く休んでろ。この状態で彼女達の相手をする気力はないだろう」

「わ、悪い……」

力なく座り込む一夏。どうやら、龍が思っている以上に一夏は消耗していたようだ。

「さて……」

手の空いたところで、龍は時雨の自己診断データに目を通した。

（やはり、手持ちの予備パーツだけでは機体性能を維持できないな）

シャルルとの演習中、龍は時雨の反応に違和感を覚えた。いや、違和感と言うよりも“ズレ”だ。

（ここまでイメージと差が出ると、問題だな）

感覚と実際の動きとの僅かなズレ。だが、より高度な戦闘時にこのズレは勝敗を……そして静止を分ける事になる。

（レイラの言うとおり、本格的なオーバーホールも兼ねて新武装にした方が……）

「ねえ、龍」

「あ、シャルルか。どうした？」

「龍のISってどこか調子悪いの？」

「そう感じたのか？」

「う、うん。戦っている時に動きの切れがなくなったから」

龍が思っている以上に時雨の消耗は激しいようだ。シャルルや周りの人にも時雨の変調がばれている。

「ちょっとな。だが、今度新装備に一新する予定だ。その間に高機^コ動戦闘型のオーバーホールのする予定でな」

「新装備？ この前、レイラって人と話していた事？」

「ああ、近日中に届く予定だ。届いたら見せてやるよ」

とシャルルと喋っている所にアリーナの女子達の声が響いた。

「何だ？」

「龍、あれ……」

シャルルの指差す方向には一機の黒いISが鎮座していた。

「あれは……ラウラ・ボーデヴィツヒ」

ISを着用しているのはあのラウラだった。

（という事はあのISはドイツ製の？）

ライブラリーを照合する。

（ドイツの第三世代型IS——量産化の目処は立っていないと聞いていたが……先行量産型か？）

ラウラの視線が一夏と龍に注がれる。

「おい」

オープン・チャンネル
開放回線で声が飛んでくる。

「何のようだ？」

「——龍・S・ラインフォード。お前は後だ」

ラウラの視線が一夏に注がれる。

「……なんだよ」

「お前も専用機持ち出そうだな。ならば、話が早い——織斑一夏、私と戦え」

「イヤだ。戦う理由がない」

「お前に無くとも私にはある」

ラウラは明らかに一夏に敵意を向けている。

「……三流兵士だな」

龍の呟きに反応したのかラウラの表情が険しいものになった。

「なんだと？」

「聞こえなかったか、ド三流？ お前の事だよ」

一夏の前に出た龍は不敵な笑みを浮かべながら続けた。

「朝の事もそうだが、公私混同は軍人としてどうかと思うぞ？」

「……っ……」

「お前の任務は大方、そのISの実戦データ収集だろう。こんな馬鹿馬鹿しい事に時間を割いていいのか？」

「貴様……」

ラウラは右肩にマウントされているレールカノンの安全装置セイフティを除する。

「気が変わった。まずは貴様からだ！」

レールカノンの砲口が龍を捕らえる。刹那、砲口から火が噴出す。

龍は左手の衝撃波発生装置インパクト・ノックアウトにシールドエネルギーを集約。前面にピンポイントで高出力シールドバリアを展開、砲弾を上空へ受け流した。

それを見たらラウラはすぐさま次弾を装填するが、すぐさま龍に向けていた砲口を別の方向に向けた。

「シャルル」

「龍、大丈夫！？」

「安心しろ。指向性のシールドバリアで直撃は避けた」

シャルルはラウラにアサルトカノン『ガラム』を向けた。

「こんな密集空間でいきなり砲撃するなんて、ドイツの人は随分と沸点が低いんだね」

「フランスの第二世代型アンティークごときで私も前に立ちふさがるとは……」

「未だに量産型の目処も立たないドイツの第三世代型ルークよりは動けるだろうからね」

互いに睨みあう二人。

《そこの生徒、何をしている！！》

どうやら、アリーナの当直をしている教師に見つかったようだ。

「――今日はこのぐらいにしてやる」

ISを収納し、ラウラはアリーナを出て行っていた。

「……シャルル、さっきは助かった」

「いいよ、それよりも本当に大丈夫なの？」

「ああ、俺は。それよりも時雨の方が問題だな」

砲弾の直撃を見事に防いだまでは良かったものの、おかげでインパクト・ノヴァにはかなりの負荷を掛けてしまった。一度、研究室で整備をしなければ……。

「シャルル、そろそろ閉館時間だし上がるか？」

丁度閉館時間前、上がるにはいい頃合だ。

「うん、じゃあ僕は先に行ってるね」

「ああ、俺も後から行く」

シャルルはアリーナの更衣室に向う。シャルルが学園に着てからというもの、何故かシャルルは一夏や龍と一緒に着替えるのを避けている。今みたいに先に着替えたり、一緒の時は部屋で着替えたり……個人の趣向をとにかく言うつもりはないが、どうも怪しい。

（ま、今のところそれ以外に目立った点はないし。当面は問題ないだろう。それよりも――）

龍はラウラの去っていた方を見た。

（彼女の動きの方が問題だな）

一夏に対しての敵意もそうだし、先程の事で自分に対しても憎悪を深めている。

（彼女の事も含めてまたソフィアさんに調べてもらうか）

「面倒な事になったな……」

龍は天を仰いだ。

更衣室で先に着替えを終えたシャルルは長椅子に座りながらボーと考え事をしていた。

「……………龍って一体何者なんだろう」

不知火財閥の関係者……………あのマリアーヌ・ラインフォードの義弟……………。

「でも、龍が学園に入るまでは一切そんな情報は無かった」

龍に関する情報はあらゆる面で不足している。学園に入る前までの経歴も何の因果で不知火財閥の関係者になったかも何故マリアーヌ・ラインフォードの義弟を名乗っているのかも……………。

それに今朝の事、ラウラとのやり取り。あの時は動揺していたから全く話が分からなかったが、今考えてみたら、何かが変だった。そして今日の演習……………龍の強さは同じ一年の中でも飛びぬけているのは明らか。

龍・S・ラインフォード——彼は一体何者なのか。

「……………龍……………」

「呼んだか？」

「ひゃっ!？」

シャルルの肩が蛙のように飛び上がる。

「漫画のような反応ありがとう」

面白かったのか龍は少し方を震わした。

「はう……………」

一方シャルルは恥かしさで顔が赤く染まった。

「待たせて悪かったな」

「う、ううん。そんなに待ってないから……………りよ、寮にもどろつか？」

「ああ、そうだな」

寮への帰り道を歩く二人……………極自然に龍の隣を歩くシャルル。

「ねえ、龍。今度の休みの日。町に買い物に行かない？」

「買い物？」

「うん」

「そうだな……………ちょっと今は忙しいから、学年別トーナメントの後

ぐらいなるけど」

「うん、それでいいよ」

「じゃ、そんな時は声かけてくれ」

「うん！」

シャルルは何故だかこの一時を楽しく感じた。だが、そんな至福の時はすぐに終わるものだ。

「龍君♪」

突然後から声が聞こえた。振り向いてみると二年の女子が立っていた。

「会長、わざわざ気配を殺して現れるの止めてください」

「そう怒らないでよ」

「いや、怒っていませんけど……それよりも此間まで“不知火”って呼んでいたのに何故今は“龍”って……いっ!？」

楯無が履いているヒールが龍の靴にめり込む。

「レディに詮索なんて紳士のすることじゃないわよ、ふふっ」

妖艶な笑みを浮かべる楯無。だが、楯無と面識のないシャルルは少し警戒気味だ。

「ああ、シャルルはあった事がなかったな」

「こちら、自称『学園最強』を名乗る我らが生徒会長——」

「更識楯無よ、よろしくね。因みに自称じゃなくて名実共に学園最強だから」

「あ、はい。僕はシャルル・デュノアです。こちらこそ差し出された手を慌てて握る。」

「うん、いい子ね。お姉さん、あなたのような子好きよ」

「——会長、いつから両刀使いになったんですか？」

「ふふっ」

「いっ!？」

ヒールの先が靴の中へ埋没していく。

「龍君からも色々聞いているわよ。ISの操縦技術が高いそうね」

「あ、有り難うございます」

「か、会長。そろそろ……」

「あら、ゴメンなさいね」

ここでやっと楯無の細くて長い足が離れた。龍は座り込んで足をさする。

「……で、会長。何ようですか？」

「楯無って呼んでっていつも言っているじゃない」

腰を曲げて龍と目線を合わせる。腕を胸の前で組む。そのせいで楯無の大きな双丘が強調される。

「……楯無会長。用件は？」

「まあ、許してあげるわ」

龍の顔は赤くなり、それを見て楯無も微笑む。

「……」

仲が良さそうな二人……。

「……じゃあ、俺達は帰るんで」

シャルルを連れて帰ろうとする龍。

「ちようと、折り入って相談したい事があるのよ、今後の学園について」

「……」

楯無の言葉に龍は露骨に嫌そうな顔で返した。

「詳しくは生徒会室で話すわ」

楯無は龍の腕を掴むとそのまま抱き込んだ。龍の腕が楯無の胸の間に埋もれる。

それを見たシャルルは心の中から溢れてくる“黒いもの”を留める事ができない。

「と言うわけだから、シャルル君。彼を借りていくわね」

「悪い、シャルル。先に戻っておいてくれ」

そのまま、龍は楯無に引っ張られながら校舎の方に行ってしまった。

「ああ……」

シャルルの手が空気を掴む。

(龍……)

先程の話から考えて龍も生徒会の一人なのだろう。そう考えれば、仕方ないと思うのだが……。

「何もあんなベタベタしなくたって……」

先程の楯無の振る舞いとそれを気にする風も無かった龍。思い出すだけで少し不快だ。

「ふんっ」

止めていた足を進める。だが、すぐにその足は止まった。

(………何でこんなに苛々《いらいら》するんだろ)

楽しい雰囲気壊されたとはいえ、ここまで怒る理由はない。少なくとも今のシャルルに思い当たる節は見当たらなかった。

(何だかモヤモヤする……)

心の中にある黒いもの……シャルルはそれが何か分からなかった。人はそれを『嫉妬^{しと}』と言う。

「部屋に戻って休もう」

シャルルは方を落としながら、寮に戻った。

所変わってここは龍の昼寝スポット……もとい、生徒会室。

「………」

「不機嫌そうね？」

「いきなり連行されてきたら、そりゃ不機嫌にもなります」

「あら、ごめんなさい」

自分が悪いなんて雀の涙ほど思っていないのだろうに……この人は。

「――わざわざ生徒会室まで連行した以上それなりの話ですよね？」
気持ちを切れ変えて本題に入る。

「勿論」

二人の表情が戦士のそれになる。

「先日のクラス対抗戦襲撃事件。あの無人機の一通りの解析結果が

出たわ」

「結果は？」

スタンド・アローン

「あなたの睨んだとおり、独立稼動、自立行動のシステムが搭載されていたわ。只、戦闘のせいで電装の一部が破損していたから詳しい構造解析は出来なかったわ」

「――電装系に過負荷をかけるような攻撃はして“なかった”はずだが……」

「――機体制御に関するパーツには証拠隠滅のための細工がされていた可能性があるわ。只これも破損が酷くて確証はないけど」

「パーツの出所は？」

「ネジ一本まで調べたけど全くダメね。完全なオーダーメイドか。もしくは個人で作り上げたか」

「前者は兎も角、後者は非現実的だ。IS開発にどれだけ掛かるか分かっているんですか？ 小国の国家予算クラスですよ」

「そうよね……」

「使用されていたコアは？ 照会すれば、何処に配分されたコアか分かるはずです」

「――例の無人機に使われていたコアは未登録のものだったそうよ」
「……未登録」

ISのコアは全世界で467機しか存在しない。コアを作れば話は早いのだが、現在の技術力ではコアの製作は愚か構造解析も出来ない。コアを作ろうにもその構造や材質、製造過程等は完全なブラックボックス化しており、全く分からないからだ。

この世で只一人、ISのコアを作り出せる人間がいるが……。

（まさか……な）

「ん？ どうかしたの？」

「いえ……学園としてはこれからどうするつもりなんですか？」

「当面は様子見ね。少ししたら学年別トーナメントもあるし。ただ、外組織からの圧力あるわね。情報を提供しろって」

「……でしょうね」

「そういった事は学園長が対応しているから私達が気にする事ではないわ。問題は今回のような事がまた起きる事……」

「警戒だけはしておいた方がいいと？」

「そういうこと」

「分かりました。留意します」

「で、話は変わるけど……」

楯無は先程とは違う年相応の女の子の表情に変わる。

「龍君、今度面白い物に付き合ってくれない？」

「は、何で？」

「だってシャルル君の時はOKしてたじゃん」

そう言われると言い返しにくい。

「はぁ、シャルルの方が先約——なので、非常に心苦しいですが、お断りします」

「あぁん、龍君のいけず……」

「用件はこれだけですわね？ 俺は疲れているんでもう帰りますよ」

「ああ、ちょっと待って」

楯無は胸元から一つのデータディスクを取り出した。

（どんな所に隠し持っているんだよ……）

「あの無人機の解析結果よ。他の人に見せちゃダメだからね」

「分かっていますよ」

「それとあなた宛に不知火財閥からパーツが届いていたわ。あなたの研究室に運んでおいたから」

不知火財閥からと言う事はレイラからのものに間違いないだろう。

（やっと届いたか……）

「分かりました。では楯無会長、失礼します」

「またね。あっ、デートの事は考えておいてね？」

生徒会室を後にする。

（面白い物からデートに格上げされたな……）

楯無からのお誘いは正直なところ嬉しいが、先約がある以上、それを反故にするわけにもいかない。

「ま、会長には世話になっているし……」
今度外出した時にでも何か贈り物を買ってこよう。
そんな事を考えながら龍は寮に戻った。

寮への帰り道で千冬とラウラが言い争う声を聞いた。“言い争う”
というよりもラウラが一方的に話しているようだが……。

二人の会話が聞こえる位置に隠れて様子を探る。

「教官、また本国で私にご指導を……！」

「……………」

「ここではあなたの実力を半分も発揮できない。お願いです、教官
！」

「しつこいぞ、ボーデヴィツヒ」

ラウラの必死の説得も千冬の前では意味をなさないようだ。

（ラウラ・ボーデヴィツヒ……）

彼女の言動から見て、千冬を崇拝しているのは間違いないだろう。

（彼女にとって“織斑千冬”と言う存在は絶対的なんだろうな）

会話の節々から感じられる彼女の心理……千冬に対しての憧れ……。

だが、千冬はそれに答えようとはしないだろう。

「この連中は教官が教えるたる人間がいるとは思えません。危機
管理に疎く、ISをファッションか何かと勘違いしている！ そん
な者のために教官が貴重なお時間を割くなど……」

「そこまでしておけ、小娘」

「あっ」

「15かそこらでもう選ばれた人間気取りか？ 暫く見ない間にえ
らくなったものだな、ボーデヴィツヒ」

「わ、私は……」

「寮に戻れ、私は忙しい」

それだけ言うと、千冬は校舎に戻っていた。ラウラは下を向き、

唇を咬んでその場に只立っていた。

「……………」

龍は物陰から体を出した。

「随分と千冬さんにご執心なんだな、ドイツ軍の犬^{ラウラ}」

「き、貴様、いつから!？」

すぐさま、警戒態勢に入るラウラ。

「落ち着け、偶然通りがかっただけだ」

嘘は言っていない。

「一つ助言しておくが、千冬さんはドイツに戻る気なんか全くないぞ」

「な、なんだと……」

全身の毛が逆立っている。まるで猫だ。

「貴様に何故そんな事が分かる？」

「お前と違って千冬さんとはそれなりに長い付き合いだからな。それに今のお前と違って物事を冷静に見ているから……かな？」

「龍・S・ラインフォード、貴様は何者だ？」

「だから言っただろう、しがない高校生だって」

「そんな見え見えの嘘が通ると思っているのか？」

隠し持っていたハンドガンを構えるラウラ。

「そんなベタな脅しが通用すると思っているのか？ おめでたい奴だな」

「……………」

パアッ!!

「これでも脅しと思うか？」

ラウラの撃った弾丸が龍の右頬をかすめて後の木にめり込む。

「お前が倒したのは俺ではなく、一夏じゃなかったのか？ 銃口を向ける先を間違えているぞ」

ラウラに銃口を向けられ、頬から血を流しても全く口調を変えない龍。その顔には余裕すら窺える。

「後、一つ言っておくが、銃口を向ける時は……」

パアッッン！！

銃声が鳴り響く。

カラン……。

地面、葉莢が落ちる。

「自分も撃たれる覚悟をしとくもんだ」

龍は隠し持っていた愛銃でラウラを撃った。もっとも擦れたのは髪の毛だけで龍のように怪我はしていない。だが、弾丸がかすれた時、ラウラの見事な銀髪が何本か切れて宙を待ったが……。

「喧嘩ならいくらでも買ってやる、ラウラ・ボーデヴィツヒ」
銃をホルスターに収める。

「——だが、一夏やシャルルたちに手を出すなら……」

龍の目が一瞬赤く変わる。

「——“殺すぞ”？」

龍がそういった瞬間、ラウラは周りが凍りついたような錯覚を覚えた。

純粹すぎる殺意……軍人であるラウラですら感じた事がない負の感情を龍は一瞬とはいえ見せ付けてみせた。

「じゃあな、ドイツの飼い犬」

龍がその場を去ってもラウラは暫くその場から動けなかった。

寮の自室に戻った龍。だが、部屋の中にシャルルの姿はいなかった。

（食堂かな？）

龍はシャルルが戻ってくるまでにシャワーを済ませておこうと思った。

バスタオルと着替えを持って洗面台のあるシャワールームへ入る。
ガラガラ……。

扉を開けたところで龍の動きが完全に止まった。

「……………」

中にはバスタオルを巻いたシャルルが立っていた。

いつもの龍だったら、恐らくこのような事態はまかなかっただろう。だが、アリーナでのいざこざに楯無との相談、そして先程のラウラとのやり取りで疲れていた龍はシャワールームにいたシャルルの気配に気づかなかった。

そして、シャルルも……。龍と別れてからというもの、心ここにあらずつといった状態だったせいで龍が帰ってきた事に気づかなかった。

「……………」

「……………」

だが、そこで疑問が生じる。シャルルは何故かバスタオルを体に巻いていた。まるで女がそうするように……。

その時、シャルルが巻いていたタオルが取れて足下に落ちた。

「えっ？」

龍の口から気の抜けた声が漏れる。だが、それも仕方ないだろう。なぜなら、龍の目の前に程よく膨らんだ胸が飛び込んできたのだから……。

第七話く新たな転校生く（後書き）

引越しや大学の入学式で中々更新できませんでした……

ご意見・ご感想があれば、ぜひお願いします。

第八話　シャルロットと龍

空気が重い……。

部屋の中はポットのお湯が沸騰する音しか聞こえない。

「……………」

「……………」

沈黙が続く。

それぞれのベッドに腰を下ろして、向かい合ってからどれぐらい時間が経っただろうか……。

龍は難しい顔をしながら腕組みをし、シャルルはバスタオルを頭にかけて全く目を合わせない。龍は目線を顔から下に向けた。そこには服越しでも分かる胸の膨らみがある。

（女……か……）

“シャルル”が“女”である事を強く感じてしまう。

（何で今まで気づかなかったんだよ……）

龍は心の中で己を罵倒した。

シャルルが女であると判明したのは、今から一時間と数十分前の事だ。

龍とシャルロットがシャワールームで出くわした時……。

「きゃっ!？」

女の子らしい悲鳴を上げてシャルルはバスタオルで再び裸身を隠した。

「……………」

未だに状況を理解できていない龍だが、目の前にいるのが“女の子”である事は何とか認識できた。

「す、すまない!!」

慌てて外に飛び出る。

「……………シャルル……だったよな？」

龍は己に問うてみた。

（ちよつと待て。まずは状況把握だ……）

ここは龍とシャルルの部屋……。これは間違いない。そして、シヤワールームで見た女は……。

「……やっぱり、シャルルだ」

先程見た顔は間違いなくシャルルだった。ここ何日かはずっと顔を合わせているから見間違うはずがない。

「……綺麗だったな」

はっ！？

龍は慌てて頭の中に浮んだモノを掻き消した。

「じ、事故とはいえ、裸を見てしまった……」

消そうとしても頭の中にこびり付いてしまうシャルルの女体……
華奢な肩に程よく膨らんだ胸、括れた腰、贅肉のない細くて長い脚……
滴り落ちる水滴が白い肌に当たって弾け、項うなじを滑り落ちていく。
龍は自分の頭を壁にぶつける。古典的な方法だが、少しは気が紛れた。

（と言う事は……）

現状を客観的に見るとシャルルは……。

「……女？」

そう考えるのが自然だが……。

「い、一応、ソフィアさんに聞いてみるか」

シャルルの周辺調査を頼んでいたのを思い出し、慌ててソフィアに秘匿回線を繋げる龍。通信をつなげるのに6回も失敗したのは秘密だ。

《な～に、急に？》

眠そうなソフィアの顔が携帯端末のディスプレイに映る。

「ソフィアさん、頼んでおいた調査の方は？」

《一応、調べは付いたわ………どうしたの、リユ？ 顔色が悪いわよ》

「い、いえ、少し心臓に悪いことがおきまして……」

《……そう》

ソフィアは眠そうな顔を一遍、面白い玩具を見つけた顔に変わった。

《大方、“彼女”の生まれたての姿でも見たんでしょ？》

「……」

龍は何も言わず、頭は伏せた。それを見たソフィアは自分の感が間違いでない事を理解する。

《意外とリ्यूも初心ね。女の裸の一つや二つでうろたえるなんて》

「ソフィアさん!!」

《昔は私やマリアと一緒にお風呂に入っていたのに……》

「何で今ここにそんな話を持ち込むんですか!？」

大昔の記憶を掘り返された龍は顔を真っ赤にして反論する。

《あの頃のリ्यूは可愛かったわ。今も可愛いけど》

「ソフィアさん……!」

《そういえば、あの頃はまだ私の事も良く慕ってくれていたわね》

龍の事なんて放っておいて懐かしさに浸るソフィア。

「今も慕っていますから、そろそろ本題に!」

《本題? そんなに聞きたいの?》

「ええ、ぜひ!」

《なら、昔の呼び名で呼んで頂戴》

「はあっ!？」

《いや、ならいいのよ》

「うっ……」

《ささ、言うなら早くね。私は疲れてるの》

「あああ、もう分かりましたよ! フィー姉!!」

やけくそ気味に叫ぶ龍。相当恥かしいのだろう。

《ふふ、本当に言ってくれるなんて、あなたって本当馬鹿正直よね》

「ソフィアさん!! そんな事よりも調査結果!」

《はいはい、全く冗談の通じない子なんだから》

ソフィアから報告を受け終わった所にシャルルがシャワールームから姿を現した。男ではなく、女として……。

それから一時間以上、互いに一言も喋らず、ベッドに座っていた。
「……………」

相変わらず、下を向いたまま身動き一つ起こさない。

「……………おい」
肩が跳ね上がる。

「……………はあ」

龍は溜め息を付くと、ベッドから簡易キッチンの方へ移動した。暫くすると紅茶のいい香りと甘い焼き菓子の匂いが漂ってきた。

「気分を入れ替えるなら、やっぱり甘いものだろう？」

用意した紅茶とクッキーを差し出す。

「別に責めるつもりはない。だが、真実は話してくれ。シャルル……いや、シャルロット・デュノア」

龍の問いかけにシャルロットは小さく頷いた。

龍の出した紅茶で一息入れたところで、シャルロットは口を開いた。
「た。」

「龍、まず始めて謝っておくね——騙していてごめんなさい」

深々と頭を下げるシャルロット。

「さっきも言ったが、責めちゃいない。俺が知りたいのはお前の口から語られる真実だけだ」

「うん……………」

「幾つか質問するが構わないかな？」

「うん、いいよ」

シャルロットの同意を取ってから龍は質問を始めた。

「性別を偽ってここに入ってきたのは……デュノア社の命令か？」

「うん、正確にはデュノア社の現社長である僕の父からの命令だけど……」

“父”と言った時、僅かにシャルロットの口調が変わったのを龍は見逃さなかった。

「——知り合いを通してシャルロットの身边を調べさせてもらったが……」

龍は言葉が続けるか一瞬悩んだ。それを感じたのかシャルロットが先に口を開いた。

「無理して言わなくていいよ」

乾いた笑みを浮かべるシャルロット。

「僕はね、龍……父の……父の愛人の子なんだ」

シャルロットはまるで他人事のようにそう言った。龍の脳裏に先程ソフィアと話したときの会話が蘇る。

あの時……。

「——本当なのか？」

思わず、龍は聞き返した。

《この場で冗談を言えるのはマリアぐらいだと思うけど？》

「……」

《彼女は現デュノア社長の妾の子。数年前まで愛人だった母親と一緒に暮っていたようね》

ソフィアは過去形でそう言った。

「……」

《察しの通り、彼女の母親は既に亡くなっているわ。その後、すぐに彼女はデュノア……父親の元で軟禁暮らし。当然ね、もしマスクミやメディアに彼女の存在が知られたら、デュノア社は格好のネタにされる》

「だが、今シャルル……シャルロットはIS学園にいる」

《感の良いあなたなら、おおよその見当は付くでしょう？》

「……………」

龍は何も言わず、下を向いた。

「龍…?」

「あ、すまない。続けてくれ」

シャルロットの呼びかけで龍の意識は現実世界に戻って来た。どうやら、かなり深く考え込んでいたようだ。

「じゃあ、シャルロットがここに来たのは?」

「お母さんが亡くなった時にね、父の部下がやってきたの。で、色々検査とかしている内に僕のIS適正が高い事が分かって非公式でISのテストパイロットをやる事になったんだ」

ソフィアの言っていた事に間違いはなかった。

「それも父親の命令か?」

「うん。でも父とは殆どあった事がないんだ。直接会ったのは二回くらい。話し事は三回かな。普段は別邸で暮しているんだけど、一度だけ本邸に呼ばれた事があるんだ。あの時は酷かったなあ。本妻の人がね、僕を見た瞬間殴ってね、『この泥棒猫の娘が!』って怒鳴りつけてね。お母さんも酷いよ、せめて一言言ってくれていたら、あんなに戸惑わなかったのに……」

愛想笑いをするシャルロット。乾いた笑みと覇気のない声……今の龍ができる事は彼女の話を最後まで聞く事だけだった。

「それから少し経ってからかな、徐々にデュノア社の経営に影が差してきたのは」

「――幾ら、世界第三位のシェアの誇る『ラファール・リヴァイヴ』を持っているとはいえ、所詮は第二世代」

「うん、その通り」

「確か、EUは統合防衛計画『イグニッション・プラン』を進めていたな」

セシリアが前にその事を話しているのを思い出した。

現在、イグニッション・プランは次期主力機の選定中であり、現在トライアルに参加しているのはイギリスのブルーティアーズ型、ドイツのレーゲン型、イタリアのテンペスト？型の三機。参加時期の関係で若干イギリスがリードしているが、未だにどこの機体が正式採用されるかは分らない。

不知火財閥でも時雨とファーンの後継機開発を進めており、試作量産機が出来次第、EUやアメリカなどに売り込むつもりでいる。だが、フランスは……。

「うん、フランスはそこから除名されているから。第三世代の開発は急務なんだよ。国防の意味もあるけど、第三世代の技術でアドバンテージを取っておかないと……」

「他国に国益を持っていかれるな」

「うん、第二世代での開発でも遅れをとっていたデュノア社はフランス政府から予算をかなりカットされているんだ」

「その上、イグニッション・プランで不採用になれば、予算全面カット」

「それだけじゃなく、IS開発権すら剥奪されかねない」

IS開発はとにかく金食い虫だ。IS開発に関わる多くの企業は国からの支援を受けている。ISは国力や経済力そのものを表す。そのため、国家もIS開発に躍起になるのだ。自国の価値を高めるために。

企業は自身の利益と経済基盤を得るために……。

国家は政治的・経済的強みを得るために……。

今や、それが世界の常識となっている。

「デュノア社でも第三世代の開発は進めているんだけど、中々形にならなくてね」

「なるほど、話が見えたよ。シャルロットを広告塔にして注目度を集めようってわけか」

「うん、でもそれだけじゃないんだ」

シャルロットは龍から視線を外すと、どこか苛立ちを含んだ声を

こう続けた。

「同じ男子なら、日本で発生した得意ケースと接触しやすい。可能であれば、その使用機体とパイロットのデータを取れるだろうって」
「――追いつめられた企業は面白い事を考えるものだな」

シャルロットが言っている事……それは可能であれば、『織斑一夏』と『白式』をデータを盗んでこいと言う事に他ならない。そして、その対象には龍も含まれている。

「一つ確認するが、時雨のデータを盗んではないかな？」

龍の口調は今までにないほど強いものだ。龍自身も企業に属する者として、テストパイロットとして時雨のデータを死守しなければならぬ。

「大丈夫、何も盗んでいないよ。それにあの人も“可能であれば”としか言っていないかったし」

どうやら、シャルロットの言っている事に嘘はないようだ。

「――龍、本当にゴメン。謝って済む事じゃないのは分かっているけど」

「いいさ、別に。時雨のデータも流出していない事が分かったし、そもそもお前を罰するつもりなんか毛頭ない。それに……」

龍はシャルロットの顔に手を伸ばした。

「そんな顔で泣かれたんじゃ、怒る気も出ないさ」

龍の指先がシャルロットの瞳に溜まった涙を掬い取る。

「えっ？」

シャルロットはそこで自分が泣いている事に気づいた。

「泣きたいなら、泣け。ここに居るのは俺だけだ。周りの事なんて気にしなくていい」

「……………」

「それに、この事でシャルロットが責められる事はないし、シャルロットに罪があるわけでもない」

「……………」

シャルロットは何も言わず、龍の服を掴んだ。

「――ゴメン、ちょっと間だけ胸貸して」

「――好きにしろ」

シャルロットは龍の胸にすがり付くと、肩を震わしながら嗚咽をこぼした。

（随分と気障な真似をしたものだな……）

シャルロットは龍の服を強く掴んでいた。体を押し付け、涙をこぼしている。

（……でも）

龍は右手を頭に左手を背中に回してシャルロットを抱きしめてやった。

（今のシャルロットを放っておけなかった）

シャルロットは泣いた。龍は何も言わず、抱きしめた。彼女の嗚咽は小さく部屋の外まで聞こえ事はなかった。

数十分は経ったか、龍はシャルロットを軽く抱きしめ、胸を貸していた。既に嗚咽は止み、部屋の中は静まり返っていた。

「……落ち着いたか？」

「う、うん……」

泣き止んだシャルロットの瞳は赤くなっている。

「顔が真っ赤だな」

「あう……」

それに負けないぐらい顔が赤く染まっていた。

（は、恥かしい……）

感情に任せて泣いて、龍に胸を借りて、抱きしめてもらって……。
（穴があったら、入りたい！！）

「さて、そろそろ放してくれると助かるんだが……いろんな意味で」

「え、ゴメン！」

慌てて龍の膝の上から離れる。

「少しは気持ちが軽くなったか？」

「うん、龍ゴメンね」

「こう言うときは謝辞よりも礼じゃないか？」

「そうだね、ありがとう、龍」

「……」

龍はシャルロットから目を外した。

「――無意識だよな、無意識に決まっている」

「りゅ、龍？」

「いや、何でもない。気にするな」

「で、でも……」

「何でもない」

有無を言わせない龍の迫力にシャルロットは黙り込むしかなかった。

その後、龍は涙でぬれた服を着替えるついでにシャワーを浴び、シャルロットは濡れタオルで目元を冷やした。

「しかし、“親”といっても色々いるんだな」

シャワーから戻って来た龍は心底不思議そうにそう言った。

「えっ？」

「親って奴は子を大切にするって思っていたからな」

「普通はそうだと思うけどね……。僕は“あの人”を父親とは思っていないけど」

「血の繋がりがあっても親としては認めない……。か。そうだな、俺もそう思うかもしれない」

二人の間に重い空気が流れる。

「ねえ、龍のお父さんとお母さんってどんな人？」

シャルロットは龍に両親の事を聞いてみた。場の空気を変えようと言う意図もあったが、龍の両親がどんな人かという興味もあったからだ。

「ああ、両親ね……」

龍は目を泳がせた。

「優しい人？」

龍は言いよどむ。シャルロットは自分が聞こうとしている事が龍にとってある意味残酷な事だと気づかなかった。

「……………」

龍は沈黙を破った。

「……………いないんだよ」

「えっ？」

シャルロットは一瞬龍が何を言っているのか分からなかった。

「俺の家族構成を知っているか？」

「う、うん」

「俺には姉と祖父しかいない。それも二人とも義理のな」

「少し長い話になるけど、俺の話を聞いてくれるか？」

そう言うのと、龍はゆっくりと語り始めた。

「俺には血の繋がった両親は愚かその親族もない」

「ど、どうして？」

「今から順に話すから聞いていてくれ」

シャルロットは黙って頷いた。

「不知火財閥は自社でプライベート・ミリタリーを保有している。

ま、簡単に言うと戦争屋を内で経営しているんだ」

「PMC（民間軍事企業）のこと？」

「ああ、博識だな。シャルロット」

博識なシャルロットは不知火財閥内にある系列企業『SSS——不知火・セキュリティ・サービス』の事を知っていた。要人護衛や兵站の代行、国家に雇われての汚れ役を引き受けている民間軍事企業。SSSもそうだったPMCの一つだ。

「でも、それいったい……………」

「まあ、聞け」

龍は続けた。

「そして、不知火財閥……………正確には不知火・源一郎個人のものだが、まあ、ちょっと風変わりな孤児院がある」

「孤児院？」

「元々はSSSの関係で親を失った子供を引き取るための施設だったらしいんだが、今は裏の世界で生きていた奴なんかも引き取っているんだ」

龍は自分の携帯端末を取り出すと空中に画像データを投影し、それをシャルロットに渡した。画像には風情を感じさせる建物、そしてその前に並んでいる子供たちが写っていた。

「俺もそういった――表の世界からあぶれた者として孤児院こじに拾われた」

「……………」

写真には子ども頃の龍らしき子が写っていた。

「流石に驚いたか？」

「う、うん……………」

シャルロットはそう返すので精一杯だった。龍にかける言葉が浮ばなかったのだ。

龍は懐かしみながら話を続けた。

「俺がこの孤児院に引き取られたのは大体…………12年くらい前だったかな？　気づいたら、俺は孤児院内にある病室のベッドの上で寝ていて、それを姉さんは面白そうな顔をしながら覗き込んでいたな」
今でも鮮明に思い出せる、始めてマリアと出会ったあの時…………。

目を覚まして、何が何だか分からない龍に、マリアが掛けた第一声…………。

『あなたは今日から私の弟よ！！』

出会ったその瞬間から姉弟きょうだいとなった…………強制的にされた。始まりこそ強引だったが、マリアとの出会い、そして彼女の弟となれた事は今や龍にとってかけがえのないものとなっている。

「お姉さんってマリアーヌ・ラインフォード？」

「ああ、俺も姉さんも同じ孤児院出身だからな」

「えっ!？」

「まあ、姉さんも好き好んで表沙汰にしていないし、知らなくても無理ないか」

シャルロットは心底驚いた顔をしている。普通に考えれば、織斑千冬と同じ『ブリュンヒルデ』の名を冠され、『双璧』と並び証されるマリアが孤児院出身だと言われても信じ難いだろう。

「ま、大雑把な話はこういうことだ。その後、姉さんは『ブリュンヒルデ』となり、自立。その時に俺を弟として勝手に戸籍登録したんだ。で、今度は“偶然”に俺もISが操縦できることが判明して……色々面倒になるのを避けるために国籍上、不知火源一郎あのクソじいの孫になっただけ

「……………」

「——おい、シャルロット」

「なっ……なに!？」

「——大丈夫か？ 俺の言っていた事理解できたのか？」

「え、えくと、龍が孤児で」

「ああ」

「孤児院で暮っていて、姉さんのマリアーナさんとも一緒に暮らしている」

「それだけ分かっていたら、問題ないな」

龍は満足したのか、それ以上の確認はせずに首に掛けていたバスタオルで髪の毛の水気をとり始めた。

「話で分かっている通り、俺は随分と変わった人生を送ってきた。だが、俺は一度も孤児である事も孤児院で暮らしていた事を恥と思つた事はない。寧ろそれでよかったとも思っている」

「えっ?」

「あそこは——俺には一生なかったはずの“家族”を……“心”をくれた。だから、俺はあそこで暮せてよかったと思っている」

その言葉には何か強い思いが感じられた。

「生まれは選べない。だけど、それからの生き方はそいつ次第だ。」

負い目を感じながら生きるもよし、闇の世界でのたれ死ぬもよし、前を向いて生きるもよし」

「前を向いて……」

「俺が言えるのはこれぐらいだ」

龍とシャルル……シャルロットがお互いの身の上話をした翌日、二人は仲良く朝食を取っていた。

「でだ、シャルロット」

「あ、龍。人前でそっちの名前は……」

「ああ、そうか。そうだな、シャルル」

龍はうっかり“シャルロット”と呼んでしまった。幸い、まだ朝早い時間だった事と周りに他の生徒がいなかったので聞かれる事はなかった。

「そっちは……その、二人っきりの時に呼んで」

「ああ、分かった。で、話を戻すが、シャルル。お前は今の内に身の振り方を考えておかないとまずい」

「身の振り方？」

「俺は他言するつもりはないが、いつまでも隠し通せる事じゃないだろう？」

龍の視線がシャルルの胸部に注がれる。

「……っ!？」

慌てて胸を隠すシャルル。

「——龍のエッチ」

「ちょっと待て！ 俺はそういう意味で見ていたわけじゃ……!」
龍の声に周りの生徒が振り向く。ここで周りの注目を集めてはこの話を続けられなくなる。龍は咳払いで誤魔化すとシャルルに向き直った。

「俺が言いたかったのは、まあその事もだが……デュノア社がやらした事が表沙汰になれば、シャルルの身も危なくなるって事だ」

「あっ……」

「このIS学園は外部からの干渉を受けない独自の治外法権地域だが、それでも完全に干渉を受けないわけじゃない。IS学園は日本政府との関係上事を大きく出るのは難しいし、日本は外交力がない。大国からの圧力を受けたら、どうなるか分かったもんじゃない」

「俺が世話になっているSSSの人がデュノア社の動向を探っているが、今の内に打てる手は打っておいた方がいい」

「うん……でも、どうすれば……？」

「安心しろ、少し厄介な性格をしているが、信用に足る人物を知っている」

そして、昼……。

「なるほどね、“シャルル君”じゃなくて“シャルロットちゃん”だったのね。納得納得」

「何が納得なんですか、楯無会長？」

所変わってここは生徒会室。虚が出したお茶を飲みながら、龍と楯無、そしてシャルロットは今後の事を話し合っていた。

「気にしない気にしない。それよりもシャルロットちゃん」

「は、はい！」

本名を呼ばれたシャルロットの肩が跳ね上がる。

「あなた自身はどう思っているの？」

「えっ？」

「このまま学園（こい）にいたい？ それとも全てを語ってデュノア社を叩き潰したい？」

「個人的には、デュノア社を叩き潰したんだがな」

「龍君には聞いていないでしょ。どうなのかしら、シャルロットちゃん」

「……」

一瞬視線を下に逃がしたシャルルだが、次の瞬間には視線を上げ

た。

「僕は学園がくえんにいたいです」

「あなたの父親——デュノア社の社長に復讐ふしゅうしたいとは思わないの？」

「恨んでいないと言えば、嘘になります。でも、だからってあの人を責めても僕の思いが晴れる事はありません」

「じゃあ、どうするの？ このまま全てを隠し続けるの？」

「——分かりません。でも、学園にいれば、その答えが見つかるかもしれない」

「そう……」

楯無は満足した顔をする。

「あなたの気持ちは分かったわ。この学園にいるかぎりあなたは学園の生徒、そして生徒会長として私は全生徒を何者からも守るわ」

「あ、ありがとうございます！」

「気にしないで生徒を守るのは私達の義務よ。ね、龍君」

「俺はそんな大層なものを背負ったつもりはありませんよ」

龍は関係無しといわんばかりの態度をとる。

「あら、あなたもちゃんと自覚しておかないと……」

「龍は守ってくれるの、僕を？」

シャルロットが下の方から覗き込んでくる。

（…………シャルロット、お前はもう少し女としての自覚を持ってくれ）

シャルロットの美男子……もとい美少女にそんな顔で見詰められたのでは、青春真っ只中の健全な10代の狼たちがジツとしてられるわけがない。龍は己の理性で溢れてきた劣情を抑える。

「……その気がないなら、昨日を内に全てをバラしているさ」

「うん、ありがとう、龍」

花の咲いたような綺麗な笑顔……流石の龍も言葉を失った。

「龍君——♪」

龍が向き直っていると、微笑んでいる楯無がいた。ただし……。

（か、会長……怒っているのか？）

全身から発せられる負のオーラが龍に襲い掛かってくる。

「この後、学年別トーナメントのことで少し手伝って欲しいんだけど、いいかしら？」

「か、構いませんが……」

「うん、お願いね。それじゃ、悪いけど“部外者”のシャルル君は生徒会室から出てくれないかしら？」

「え、でも龍は……？」

「ああ、俺は生徒会メンバーだからな」

「えっ!？」

「そこまで驚くことか？」

「はいはい、この話はここまで。それじゃ、シャルル君。状況に何か変化が起きたら呼ぶからね」

そう言うのと、楯無はシャルルを部屋の外へ押しやった。

「……………」

「……………会長、もしかして怒っています？」

「なんでそんな事を聞くのかしら？」

「——いえ、なんでもないです」

ゴゴゴツと負のオーラを噴出している楯無。今の彼女に何を言っても無駄だろう。いや、それ以前に下手に話しかけたら、確実に滅される。

「ゴホン……で、相談事とは会長？」

「さっきも言った通り、あと少しで学年別トーナメントでしょう？」

「そうですね。でも今のところトラブルも何も起きていなかったはずですが？」

生徒会メンバーとして龍自身もトーナメントの準備に終われる毎日を送っていた。大方の用意は既に終わり、細かいところを詰めるだけとなっていたはずだが……。

「それがね、このタイミングで学園側からストップが入って。ルールが一部変更されたのよ」

「マジですか？ もう殆ど予定繰り上がっていますよ」

「私も一応意見はしたんだけどね。織斑先生がどうしてもって……」
「千冬さんが？」

「そう」

学年別トーナメントは各学年ごとに行われるトーナメント方式の試合だ。しかし、今回は千冬の意見により、“表向き、より実戦的な試合を行う”という名目で、出場条件を二人一組ツーマンセルとしたらしい。

「なるほど、用はこの前の襲撃対策ということですか……」

「察しが良くて助かるわ。織斑先生は先日のような事が起きるのを警戒しているのよ」

「確かに二人一組なら、緊急時互いを補いながら戦う事ができる。だが、それをするためにはそれ相応の訓練と信頼関係がないと無理です」

連携をとりながらの戦闘は個々の操縦技術や戦闘技能だけでなく、共に戦うパートナーとの信頼関係が重要になってくる。勿論、連携をとる上でそれ相応の技術は必要だが、いくら技能が優れていても互いの信頼関係が築けなければ、本当の意味で背中を預けて戦う事は出来ない。

（練度もない只の生徒が一人二人増えたところで、あの無人機には勝てない）

先日の無人機の性能は既存のISとはある種一線を引くものだった。複数の砲門に巨体を動かすだけの大出力主機、分厚い物理装甲、優れた独立稼動システム……。独立稼動以外は既存の技術でもある程度は再現できる。しかし、それらを全て持った機体に仕上げるのは並大抵のことではない。

（結局、SSSの方でも足跡は見つからなかったしな。もしも“無人機”が……コアが他勢力で開発されたのだとしたら、世界のパワーバランスは崩壊する）

そうなれば、半世紀前に起きた対戦を遥かに上回る戦争になる。ISが生み出された事により、世界のバランスは著しく悪化した。

いつ何の切っ掛けで限界を来たしてもおかしくないほどまでに……。事実、あの襲撃事件以降、各国からIS学園に対して情報開示と狙われたと思われる“織斑一夏”の引渡し要求があった。そして、単機でレベル4の遮断シールドを突破し、あの無人機に致命的なダメージを与えた龍にはIS委員会からの出頭命令が降りた。不知火財閥からの圧力によって取り下げられはしたが……。その不知火財閥にも龍・S・ラインフォードの個人情報の開示と身柄の引渡し、専用IS『時雨』の詳細なデータの開示要求があった。

(クソジジは一切応じる気はないんだろうな……)

龍の脳裏に顎鬚を蓄えた老人の姿が蘇る。

「龍君、考え事？」

「あ、すいません。でも、千冬さんには悪いですけど、愚策ですね。付け焼刃もいいところだ」

「でも、出来る事と云ったら、それぐらいしかないのも事実よ」

「……そうですね。他の変更点は？」

「他は特に無しね。ルール変更のほうも先生方がやってくれるから、私達は特にやる必要もないし」

「後は当日に備えておくぐらいですか」

「そうね」

「先日の事を踏まえると、一夏が狙われる可能性が高いか……」

「龍君も狙われる可能性大よ？ あなたもISの操縦が出来るんだから、狙われる理由は十分あるし」

「俺は大丈夫です。自分の身ぐらい自分で守れますよ。それよりも一夏の方が問題ですよ、自分の身一つ守れないで他人を守ろうなんて……理想論もいいところですよ」

「あら、否定的な意見ね」

「他人を守りたいなら、まずは自分の力だけで生き残れるようになってからにしろ！……そう俺は教わりましたから」

「いい言葉ね」

「そうですね」

そう答えると龍は席を立った。

「すいません、会長。時雨の調整をしたいんで」

「ああ、この前届いていたパーツの事？」

「はい、少々大掛かりなものになりそうなので、今の内にやっておかないとトーナメントに間に合いそうにないんで」

「大掛かり？」

「外部装甲と武装の4割強を変更するといえば、意味が分かると思います……」

「本当に大掛かりね。一人でできるの？」

「時雨は各部をモジュール化しているんでそれ程大変ではありません。ただ問題は変更後の仕様をフィードバックする作業が……」

レイラから届いた新造パーツは時雨の大部分の仕様変更を必要とする。龍の言うとおり、時雨は各部をモジュール化しており、仕様変更がしやすいようになっていて。だが、それはあくまでハードの話であり、時雨の持つ超高機動を司る機体制御——ソフト面は仕様変更による精密なフィードバックが必要とする。

「お姉さんが手伝ってあげましょうか？」

「会長が？ 整備科でもないのに？」

「それでも専用機を自分で組み上げているから、腕は確かよ？」

（自分で言うようなことじゃないだろう）

しかし、楯無が自身で専用機を作り上げているのには驚いた。龍自身も一人で時雨の調整や武装変更をしているので似たようなものだが。

「後、虚にも頼んでおくわ。あの子も整備科のエースだから」

「虚先輩も？」

「腕は私が保証するわ。私もあなたの専用機——時雨の機体を見てみたいし」

「……」

正直なところ、この申し出はかなりありがたい。だが、機密情報の塊である時雨の整備を手伝ってもらうことには抵抗がある。

（時雨は第三代機でありながら、特殊武装を一切積んでいないからな。その代わりに“アレ”があるんだが……）

アレが外部に漏れるのは避けなければならない。

「大丈夫よ、私も虚も人に言いふらすようなタイプじゃない事ぐらい分かっているでしょ？」

「それは分かっていますけど……」

「はい、決定ね。さっそく今日の放課後から始めましょう」

「――俺はまだ返事をしていませんよ」

龍の声は鼻歌を歌いながらISの資料に目を通す楯無に届く事はなかった。

第八話くシャルロットと龍く（後書き）

ご意見・ご感想があれば、宜しくお願いしますm（
）m

第九話　ブルー・デイズ／レッド・スイッチ

シャルルや楯無と話したその日の放課後。

ここはIS学園内にある第四整備室。龍が日頃“研究室”やら“ラボ”と呼んでいる部屋に龍・シャルル・楯無・虚の4人が集まっていた。

「それじゃ、記念すべき第一回『龍君の時雨をバラバラに分解しよう』を開始しま〜す♪」

パチパチ……。

龍以外は何故か全員拍手をしている。

「会長、何であなたが仕切っているんですか？」

「いいじゃない、そんな細かい事」

（ダメだ、あの人に任せたら、マジで時雨がネジ一本まで分解される）

龍の第六感が危険を告げている。

「龍……」

「あ、どうした、シャルル？」

「僕がいない間に一体何の話をしていたの？」

シャルル——シャルロットは冷たい眼差しで龍を睨む。

「いや、普通にトーナメントの相談をして。会長が勝手に整備に参加すると言ってきたぞ……」

「ふう〜」

「——怒っているのか？」

「何でそう思うの？」

「……い、いや、なんでもない」

「そう♪」

笑みを浮かべるシャルロット。だが、その目は笑っておらず、絶対零度のように冷たい。

（俺、何かしたのか？）

その問いかけに答えてくれるものは誰もいない。

「ささ、龍君。早く時雨を展開して♪」

「はいはい、分かりましたよ」

ここまできたら、もはや悟りの境地……。足掻いたところで彼女には勝てない。

「これが不知火君の専用機ですか…」

「確か、正式名称は『アイギス・ハイマニューバ・カスタム』だったかしら」

「正確にはアイギス・ハイマニューバ・カスタム・高機動戦闘型ですけど」

「長いね……」

「そうだな、俺もそう思うよ。だから愛称で俺は呼ぶようにしているんだよ。そっちの方がカッコイイしな」

喋りながらも龍はコンテナのロックを解除し、中の換装ユニットに時雨を接続した。

「よっと……」

時雨を接続したままにして、龍は時雨から飛び降りた。

「まずは外装と量子変換インストールしている後付武装、後幾つかの初期武装も下ろします」

コンテナの中から次々と作業用アームが飛び出てくる。

「セキュリティのロックはもう外してあるので各部の端末を開いて各モジュールを分離します。手伝ってください」

「分かったわ。虚は足回りをお願い。シャルル君は左腕ね。私は右腕」

「はい」

「分かりました、お嬢様」

「となると、俺は胴と背部か」

各々持ち場に分かれて作業に入る。

「ねえ、龍」

「なんだ？」

「僕に時雨の調整の手伝いなんてやらせていいの？」

「別に秘密を守ってくれれば、それで構わない。それに正直なところ一人じゃとてもじゃないけど間に合わなかったからな、逆に助かった」

「なら、良かった」

「それに他にメリットもあるしな」

「メリット？」

「あとで教えるさ」

それだけ言うのと龍は作業に集中した。

一時間もしない内に、時雨の分解作業は完了した。

「随分と細身な姿になったわね」

外部装甲と初期装備の殆どを取り外された時雨は随分と細くなった。足回りは姿勢制御用のマルチ・クラスタージェット以外なく、時雨の特徴であった両肩のタクティカル・ウィザードも取り外されている。

「この状態でも調整と武装化で十分戦えるんですけどね」

「この状態で？」

「時雨は元々開発中止となっていた軍用第三世代IS『アイギス』の再開発したものだ。かなり手直しをしているが、当初の開発コンセプトは今もこうして残っているんだ」

「そのコンセプトは？」

「『他の追従を許さない超スピードで、敵勢力下に侵入。大火力を持って敵主力及び敵施設を無力化。そして、圧倒的な機動力で他のISを排除する』……で、コンセプトです」

「無茶苦茶ね」

「でも、その一つは実現してます」

「先程の高機動戦闘型ですね」

「はい、時雨はこの素体……ベータシックを基に外装を換装する事でこの無茶苦茶なコンセプトを実現しているんです。で、今回のパーツは……」

コンテナ内部から新たなパーツが姿を現す。

「『大火力を持って敵主力及び敵施設を無力化』です」

分厚い物理装甲に、内蔵された複数のミサイルベイ、レーザー機関砲、グレネードランチャー、プラズマ砲、さらには大口径荷電粒子砲まである。

「時雨自慢の機動力とトレードオフになりますけど、複数の重火器と強固な物理装甲が売りの『強襲重武装型――パンツァ』です」

「『戦車^{パンツァ}か、言い得て妙ね」

「これもモジュール化されているので、各部に接続するだけでいいです。後の最適化は実戦でやるしかないのです」

「分かったわ。じゃ、早いこと終わらせましょうか。そろそろ日も暮れてきたし」

龍たちは手際よく時雨に新たな鎧を身に付けさせる。日が暮れる前には全ての作業を終え、解散の運びとなった。

「それでは先に失礼します」

「龍、先に戻ってるね」

シャルルと虚が部屋に戻る。龍は細かい調整のため、楯無はその手伝いでまだラボに残っていた。

「すいません、つき合わせちゃって」

「いいわよ、気にしないで。興味のあった龍君のISもじっくり見れたから、逆に良かったし。私も専用ISにちよっと手間取っていいね。参考になったわ」

「それは良かったです。そういえば、会長はいつたこの代表候補生なんですか？ 日本？」

「違うわ。私は自由国籍権を持っているから、ロシアの代表なの。ISもそっちからの支給」

「ロシア…？ そういえば、ロシアの代表候補は今まで見た事がなかったな」

「いつも見ていたじゃない♪」

「知らなかったら、見ていても意味がないかと……」

そんな事を喋っている内に日は完全に沈み、流石にこれ以上は……と教師からのストップが掛かり、今日のところはお開きとなった。「今日はありがとうございました。おかげでトーナメントに間に合いそうです」

「そう、良かったわ。手伝いが必要だったら遠慮なく言いなさいな」「ご心配なく、後は自力でやって見せますよ」

廊下を歩く二人。その時、他の整備室から一人の生徒が出てきた。

「あっ……」

眼鏡をかけた小柄な女子生徒がこっちに気づいて小さく声を上げる。

「……ッ……」

一瞬、顔を引き攣らせると彼女は幾分はや歩きでこの場から去った。

（……誰かに似ていたな）

隣の楯無を見ると、少し寂しそうな表情をしていた。

（……あ、そうか）

誰に似ていたのか、今ので気づいた。

「楯無会長には、妹さんがいたんですね」

「えっ？」

楯無が驚いた顔をする。

「顔付きを見れば、見当は付きます。それに双方の反応から浅からぬ関係なのにも察しが付きます」

「……意外と感がいいのね」

「人の表情には少し敏感なんですよ。昔から奇異な目で見られる事が多かったんで」

孤児である龍は昔からそう言った目で見られる事が多かった。自分が孤児である事を恥じた事など一切ないが、それでもそんな目で見られることには嫌悪感が持っている。

「あの子は簪^{かんざし}。私の妹よ」

「俺と同じ一年ですか？」

「ええ、四組よ……」

「そういえば、四組にも代表候補生がいるって聞いたな」

そこで龍は思い出した。前クラスメイトが話していた雑談でこんな事を聞いていた事に。

『四組の代表候補生ってまだ専用ISを持っていないんだって』

「……………」

先程楯無の妹が出てきたのは第二整備室。龍もかなり整備室には出入りしているが、いつも第二整備室は誰かが使っていた。

「こんな事を聞くのもなんですけど……仲悪いんですか？」

「う……」

楯無は困った顔をし、次にうな垂れた。どうやら、凶星のようだ。

「いつも飄々といっている会長も色々苦労しているんですね」

「飄々とは何よ。飄々とは……」

むくれる楯無。龍は不覚にもいつもと違う楯無の反応に可愛いと思ってしまった。

「まあ、詮索はするつもりはありませんけど、仲は戻したほうがいいんじゃないですか？」

「うう……それができたら、苦労ないわよ」

「俺も兄弟多いですから。そういった苦労は少し分かります。ま、全員は義兄弟ですけど……」

「……………」

「経験則で言わせて貰うと、仲を戻すのに、遅いも早いもありませんよ」

「……そうかしら」

「そうです」

不安そうな楯無を促し、龍は部屋に戻った。

翌日、シャルルを捕まえると、龍は調整中の時雨のテストを兼ねて、模擬戦を頼んだ。今のところ、シャルルが一番相手として不足

がないからだ。シャルルは快く引き受けてくれた。

「どう、時雨の調整は？」

「後は大型の武装を積むだけだな。それは一日で済む。問題なのはフィードバックの方だな」

「模擬戦なら幾らでも付き合うから。龍との勝負は勉強になるし」
「褒めても何もでないぞ」

アリーナの入り口に差し掛かるとき、爆音と地鳴りが響き渡った。
「わっ!？」

体制を崩したシャルルを支える。

「……………」

嫌な予感がする…。

「シャルロット、急ぐぞ!」

「う、うんっ!」

アリーナ内に入ると、模擬戦……というよりもルール無用の乱闘が起きていた。

「あの馬鹿ども…!」

アリーナでは、セシリアと鈴、そしてラウラがいた。構図としてはセシリア& a m p; 鈴対ラウラ。2対1だ。だが、そんな戦力差をもろともせず、ラウラは着実に二人にダメージを与えていく。

「おい、龍!」

後から一夏の声が聞こえる。振り向くと一夏、それに箒もいた。

「一体何が!？」

「見ての通り。沸点の低い馬鹿二人が返り討ちにあっているところだ」

ラウラは機体に備わっているワイヤーブレード四機を自由に操り、セシリアを牽制し、両腕のプラズマ刀で鈴と近接戦闘を行う。

（流石は軍隊仕込。ワイヤーブレードを同時にコントロールしながら、近接戦闘までするとは……）

龍は素直にラウラの戦闘技術の高さを評価した。通常、無人兵器や誘導兵器をコントロールしながら、自身も戦闘するのには高いス

キルが必要になる。無人機の機体制御に意識を集中するからだ。その集中を崩さずに、自身も戦闘するということは並大抵の事ではない。あのセシリアもBT兵器を使用する際は自身の戦闘は避けるぐらいだ。

「あっ!?!」

一夏が声を上げる。ラウラがセシリアと鈴の動きを封じた上でさらに追撃を与えている。

（まずいな……）

もう既に、セシリアと鈴のエネルギー残量は危険値に達している。これ以上削られたら、ISの装甲を維持できなくなる恐れがある。（これ以上傍観しているわけには行かないか……）

流石に、パイロットの生命が危険晒されているのを黙ってみておくわけにはいかない。

「一夏、遮断シールドを斬れ」

「斬れってどうやって?」

「零落白夜があるだろ。あの馬鹿を助けるぞ。ついでにあの犬ラウラにも躰しっけをする」

「おう!」

「シャルル、あの馬鹿どもを回収してやってくれ」

「うん、分かった!」

一夏がISを展開、同時に零落白夜を発動させる。龍もISを展開するが、両脚と両腕の部分展開で済ませた。トーナメント前に手の内を晒すのを嫌ったのだろう。

「いくぞっ!」

零落白夜の必殺の一撃が遮断シールドを両断。同時に龍は瞬時加速イグニッション・ブ。肘のプラズマ・ブーメランを抜き取ると片方をラウラ、もう片方をワイヤーブレードに向けて投げた。

「! 貴様はっ!?!」

ラウラの顔に動揺が走るが、すぐに切り替え、龍と距離をとる。そこに狙い済みましたように飛んで来るブーメラン。だが、そのブー

メランはラウラの手前で急停止。全く動かなくなった。
そこに瞬時加速でやりこんできた一夏が切りかかる。

「馬鹿め、不要に近づいてくるとは……！」

ラウラが右手を突き出す。

「よくも二人を……っ!!」

「馬鹿、真正面から突っ込むな!!」

龍の静止もきかず、一夏はラウラの間合いに入り込んでしまった。
「なあっ!？」

一夏が驚くのも無理はないだろう。瞬時加速でトップスピードを出していた百式の動きが止まれば……。

「シュバルツェ・レーゲンの停止結界の前では、貴様なぞ無用の長物でしかない。消えろ!!」

右肩のレールカノンの標準が一夏に合わせられる。一夏の顔に恐怖が溢れ出す。

「一夏、さっさと後方に下がれ!!」

腰だめに装備された可変出力プラズマ砲『ランカスター』を連射。
続けて左腕の追加装甲内臓6連装レーザー機関砲^{ガトリングガン}『フリーズベルグ?』で追撃。反撃の隙を与えない。

光速で飛来するレーザー弾をラウラはシールドバリアとISの物理装甲で防ぐ。

「少しおいたが過ぎたな、ラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツ軍は飼
い犬の躰もできないようだ」

「龍・S・ラインフォード……!!」

ラウラが全身から敵意をむき出しにする。龍は全く動じもせず、
ラウラと向き合った。

「引け、ラウラ。今なら事を荒げないで済ます事ができる」

「だれがっ! ちょうどいい、只種馬に尻尾をするだけのメス豚ど
もの相手にも飽きていたところだ」

レールカノンの標準が龍に向けられる。

「勝負しろ、龍・S・ラインフォード!!」

砲口が火を噴く。

龍はISを完全展開し、左腕の追加複合装甲を構えた。

シャルルは一夏と共に負傷したセシリアと鈴をピットに運び込んでいた。今、アリーナは龍とラウラの戦闘が勃発しているので、生身の二人がいては洒落にならない事態になってしまう。

「セシリア、鈴。大丈夫か？」

「う……。一夏……」

「む、無用な姿を……お見せしましたわね……」

「良かった。二人とも意識はあるみたいだ。シャルル」

「とにかく、すぐに保健室に運ばないと、ISのパイロット保護機能も機能限界に達していたから」

その時、アリーナで爆発が起きる。直後、ピット内にも爆風と衝撃波が届く。

「龍——ッ——！」

ISを展開し、上空に飛び出る。

（龍は……！）

爆煙が立ち込めているせいで、龍の姿を確認できない。だが、数秒後、爆煙の中からISを完全展開した龍が飛び出てきた。それを追う様に四機のワイヤーブレード、そしてラウラが出てくる。

龍は三次元機動を描きながら、5方向からの動じ攻撃を回避し続けていた。勿論、その間も両腕の武器で反撃している。だが、手数の差でどうしても防戦一方になってしまう。それでも龍の顔に焦りは全く見えていない。

（凄……）

シャルルは暫く龍の戦いに魅了されていた。龍の専用IS『時雨』は現在強襲重武装型に換装している。

高機動戦闘型に比べ、強襲重武装型は物理装甲に富んでおり、重厚さが目を引く装備だ。ファストと違い、複数の追加スラスタが

換装され、主要な部分にだけ新たな大出力スラスタが増設されている。そのため、時雨の特徴であった全身のスラスタ・ブースターはかなり絞られている。さらに、各部に増設された純白の物理複合装甲には対レーザー・ビーム気化塗料コーティングが施され、少々の被弾では傷一つ付かない。さらに装甲内は内臓されたミサイルベイが複数あり、後付武器も含めた最大火力は並みのIS数機分に匹敵する。

だが、この装備は時雨のもっとも優れた機動力とトレードオフのもの。当人である龍もそういつていたが、時雨の機動力を犠牲に得たものである。だが……

（時雨の動き、前よりもいい）

龍ご自慢の超高機動ではないが、無駄のない流れるような機動。要所に装備されたスラスタを上手く使い分け、まるで流れに身を任せているような滑らかな動きを見せる。

だが、やはり未調整の部分が効いたのか、一瞬動きが鈍る。ラウラはその一瞬を逃さなかった。ワイヤーブレードを4方向から同時に叩き込む。龍の四肢がワイヤーで拘束される。

「これでもう動けまい!! 私勝ちだ!!」

「どうかな？」

余裕を見せる龍。ラウラは容赦なくレールカノンに示談を装填する。さらに発射間隔を限界まで絞る。これでは砲身が持たないが、大口径弾を最大五発まで連射可能となる。

「死ね!!」

ドガアアアッ!!!

立て続けに五回の爆発音。全て龍に着弾した場合、いくらパンツアの装甲といえど……。

「龍——っ!!」

シャルルは両腕にアサルトライフルをコール。龍の助けに入ろうとするが……。

《安心しろ、俺はそこまでやわじゃないさ》

龍からのプライベート・チャンネルが繋がる。

爆煙の中から龍の姿が現れる。時雨の前面に展開された5機の非^ア固定浮遊部位の装甲シールドが高出力シールドバリアを局地展開している。さらに肩には大型の主砲が展開されている。

「単発仕様のレールカノンで五発連射とは恐れ入った。だが、俺の方が一枚上手だったかな？」

龍は全くの無傷。

「……まさか、全弾……」

「ご想像通り、全て撃ち落とさせてもらった。爆風の殺傷効果範囲だったが、^{オート・ディフェンス・アーマー}防御機構のおかげで無傷だ」

龍はあの瞬で、浮遊部位のシールドとあの肩の主砲を展開し、ラウラが撃った大口径弾を全て撃ち落としたのだ。

「ならば、切り刻むのみ……！」

プラズマ刀を展開、ラウラは龍に切り込む。

「させないっ……！」

シャルルは両腕のアサルトライフルでラウラを牽制。その隙に龍はワイヤーの拘束から脱出。

「邪魔立てするなっ……！」

プラズマ刀が振り落とされる。だが、その一撃は割り込んできた意外な人物によって防がれた。

「やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

ISの実体剣……打鉄に装備されている日本刀型のブレードを持った織斑千冬が立っていた。

「織斑先生、お早いご登場で……」

皮肉めいた言葉を投げかける龍。

「龍、まさか……」

織斑先生の登場を読んでいたのでは……。

龍は口到人差し指をあてる仕草をした。どうやら、他言するなど言う意思表示らしい。

「模擬戦をやるのは構わない。だが、アリーナの遮断シールドまで

破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。この試合の決着はトーナメントでつけろ。いいな？」

「俺は構いませんよ。元々、喧嘩を吹っかけてきたのは俺じゃありませんし」

龍は時雨を収納する。

「ボーデヴィツヒ、お前もそれで構わないな？」

「は！ 教官」

「学校では織斑先生と呼べ。デュノアもお前もだ。ラインフォードを助けたいのならトーナメントでそうしろ」

「は、はい！」

「よし……以後、トーナメントまで一切の死闘を禁止する」

夕刻、龍たちは保健室にいた。

昼間の乱闘で負傷したセシリアと鈴の見舞いにきた龍とシャルル。しかし、お前らは馬鹿だな。大方安い挑発に乗せられたんだろ？」

「「うう……」」

押し黙る二人。凶星のようだ。

「偶然、間に合ったから良かったものの。もう少し遅れたら、その程度の怪我がすまなかったぞ。良くて病院送り、悪くて棺桶だ」

「あ、あれはちよつと油断しただけ……」

「そうです！ 次は後れを取ったりなど……」

「……」

龍は苛立った顔をしている。

「――あそこで俺達が助けに入らなかったら、どうなっていたか……良く考えるんだな」

二人は何も言えず、押し黙った。

「――兎も角、怪我人は怪我人らしく、ゆっくりしているんだな。その状態なら、トーナメントも無理だろうし」

「あっ！？」 勝手に決めんじゃないわよ！」

「トーナメントには参加しますわ!!」

「ダメですよ、オルコットさん、凰さん」

そこに山田先生が現れる。

「お二人のISのダメージレベルはCに達しています。ここで無理をさせると、後々重大な欠陥が生じる事になります」

「——だそうだ。ここは大人しくいているんだな、馬鹿×2」

「馬鹿とは何よっ!」

「そうです、心外ですわっ!!」

鈴とセシリアが抗議を上げるが、龍は完全に右から左へ聞き流していた。その耳に今度は地鳴りが入ってくる。

「織斑君————ッ!!」

「不知火君————ッ!!」

「デュノア君————ッ!!」

保健室に流れ込んできたのは大量の一年生。皆、目が血走っていて少々不気味だ。

「「コレ————ッ!!」」

一斉に突き出されたのは、一枚の紙切れ。

「え、え」と……『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦を行うため、二人一組での参加を必須とする。なお、ペアができなかった者は抽選で選ばれた生徒同士で組むものとする。登録期限は……』

「「「そこまでいいから————!!」」」

つまり、ここに押しかけてきた女子が言いたい事は……。

「「私と組もうっ!」」

「「織斑君!」」

「「不知火君!!」」

「「デュノア君!」」

群がる血に飢えた猛獣……もとい、女子達。その気迫といったら……人知を超えているかもしれない。シャルルは龍の後ろに回り、袖を掴んでいる。一夏も彼女らの気迫に押されてか、腰が引けてい

る。

「全員、静まれ！　ここは保健室だぞ！！」

龍の一喝でようやく保健室に落ち着きが戻って来た。

（面倒な事になったな）

楯無から詳しく聞いていたのである程度は覚悟していたが、これは……少し予定外だった。

（さて、どうやって切り抜けるか）

そこで、袖が引かれているのに気づいた。そこには困り果てた顔をするシャルルがいた。

「心配するな……」

シャルルにだけ聞こえる小声でそう呟く。

「悪いが、もう既に俺とシャルルは登録を済ませているんだ」

「えっ？」

シャルルが声を上げる。龍はポケットから登録用紙を出した。そこには龍とシャルルの前が記入されている。

「「えええっ！？」」

「と言うわけだから、俺達は無理だ。だが、一夏はまだフリ……」

「「織斑君！！！」」

「ちよ、龍っ！？」

一夏はそのまま女子達に拉致られていった。生きて会える事を祈っておこう。

「さて、これでトーナメントの問題も解決したな」

「ねえ、龍……」

「何だ？」

「僕……用紙に名前書いた記憶がないんだけど」

「ああ、俺も書いてもらった記憶はないよ」

そういうと、龍は手の平に隠していた三次元プロジェクターの電源を落とした。

「立体投影だよ。面白いぐらい騙されてくれたな」

龍はポケットから用紙を出すフリをして、実はプロジェクターの

スイッチを入れたただけだったのだ。後は画像に合わせて、手を動か
しただけ……。

「龍って時たま……黒いよね」

「それで助かったんだから、文句はないだろ？ それとも俺と組む
のはイヤか？」

シャルルは首を振った。

「うんうん、寧ろ嬉しいよ。ありがとう、龍」

シャルル……シャルロットは笑顔でそう返した。

保健室の二人に二三小言を言った後、龍はシャルルを連れて、部
屋に戻った。

「さて、いつまでも制服でいるものなんだし、着替えるか」

「う、うん……」

「ん？ どうし……」

そこで気づいた。シャルルは女の子である事に。流石に、男と一
緒に着替えるのには抵抗があるだろうし、龍自身も彼女の半裸姿を
見るような性癖もない。

「悪い、気が回らなかった。俺は外にいるから終わったら呼んでく
れ」

「だ、ダメだよ！ 龍が自分の部屋の前で待っているなんて、絶対
変に思われちゃう！」

シャルルの言うとおり、龍が部屋に入らず外で待っていたら、怪
しまれるだろう。

「分かった、じゃあシャワールームに引っ込んでいるから早めにし
てくれ」

龍はバスタオル片手にシャワールームに入ろうとする。

「い、いいよ、そんなに気を使わなくてもっ！」

その後姿を止めるシャルル。

「そ、そのお……い、一緒でも………」

「……………」

シャルルは耳まで真っ赤になりながらも龍の袖を離さなかった。龍は踵を返すとシャルルの前に立ち……。

「……アホか」

「イタアッ!？」

シャルルの額にデコピンをお見舞いした。

「冗談でもそんな事を言うなよ、もし、ここにるのが俺じゃない他の男だったら、襲われても文句言えないぞ」

「りゅ、龍……?」

「シャルロット、お前は女だろう? 男を誘うような真似は慎めよ」

「う、うん……」

シュンとなるシャルル。

「俺は少し出る。その間に着替えを済ませておけよ」

バスタオルを元の場所に戻し、代わりに携帯端末を持って龍は部屋を出た。

「……全く、シャルロットだけはまともだと思っていたのに……」
気苦労が増えそうな嫌な予感がする。

「——ま、それよりも先にやる事があるか」

端末の回線を開く。

「——久しぶり、クソ爺^{じじ}。唐突で悪いが、少し頼みたい事ができた」

学年別トーナメントまで後数日……。

第九話くブルー・デイズ／レッド・スイッチく（後書き）

ご意見・ご感想がありましたら、宜しくお願いします。

次話はどうとう学年別トーナメント！

頑張って書きます！！

第十話く学年別トーナメント（前半編）く（前書き）

長らく更新を滞納しましてすいませんでした。

この作品を読んでくださっている皆様には大変失礼な事をしてしまいました。

更新は以前よりも間隔が開いてしまう事が増えると思いますが、何とか続けてみますので、また読んでいただけると幸いです。

一部武装の名称を変更しました。

自動防御追加装甲

←

オート・ディフェンス・アーマー
自動防御追加装甲

第十話〈学年別トーナメント（前半編）〉

トーナメント当日……………。

龍とシャルルはピットで試合の準備とウォーミングアップをしていた。

「……………」

龍が難しい顔をしながら、時雨の機体制御システムの調整をしていた。ここ数日で十分なフィードバックがなされているので、そこまで心配する必要はないかもしれないが、新型の装備というのはちよつとした事で不具合をきたす事がある。

（最悪、ベーシックで戦うことも考慮しておくか）

そんな事態は正直起きて欲しくないが、念には念を……………の精神でいた方が何かあった時、対処しやすい。

「龍、どうしたの？」

「いや、機体の微調整をな。もう完了した」

龍も長椅子から立ち上がり、軽くストレッチを済ませる。

「しかし、凄いギャラリーだな……………」

外部モニターには、観客席を埋め尽くす生徒と外部から来た企業や政府の要人達。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認。一年でも優秀な人にはさっそくスカウトの話が掛かるからね。龍なんて色々な企業から声が掛かるんじゃないかな？」

「俺は最初ッから不知火財閥のテストパイロットだ」

「そういえば、そうだったね」

「そういえば、そろそろ対戦表の発表だったな」

「あつ、そういえば……………僕達、最初は誰と当たるだろう？」

「さあゝな。ま、気楽に行こうぜ。気張ったって、から回りするだけだ」

「うん」

その時、シャルルの後に人影が現れる。

「ひゃあっっ!？」

シャルルが悲鳴を上げる。

「ふむ——この触り心地なら、五年……いや七年といったところか」

シャルルの後には、杖を突いた白髪の老人が立っていた。その左手がワキワキと動いている。

「おい、クソ爺……」

龍がすぐさま、時雨の六連装レーザー機関砲『フレズベルク?』ガトリングガンをコールし、老人の頭部に押し付けた。

「色惚けも大概にしろよ、このエロ爺が……」

「ははは、相変わらずだな、龍よ。元気そうでワシは嬉しいぞ」

「り、龍……? お知り合い?」

「正直、こんな爺とは知り合いたくなかったがな……」

「ははは、相変わらず、よく喋る口だ」

老人は頭に銃口が突き付けられているにもかかわらず、平気で笑っている。

「龍、それぐらいにしときなさい」

「ソフィアさん……」

後ろから先日通信で話したソフィアが現れる。

「えっ? えっっ?」

状況が理解できていないシャルルは龍の袖を掴んで離さない。

「シャルル、落ち着け。二人とも俺の身内みたいな人たちだ」

「そ、そうなの?」

「自己紹介がまだだったね。わしはそこにいる愚孫の義祖父に当たる『不知火・源一郎』だ」

「シラヌイ…ゲンイチロウッ!？」

「シャルルも知っているとと思うが、『これ!』があのだ。不知火財閥の創設者だ。失望するだろ? どんな偉業を成し遂げた人間も呆けたら、只のエロ爺だぜ」

「かっかっかっ！ 否定はせんよ」

「否定しろよ」

「まあ、細かいことは気にせんでいいよ」

陽気に笑うエロ爺こと不知火・源一郎。それを見ながら頭を抱える龍。

「ゴメンなさいね。お爺様はこう言う人だから………出会いがしらの事故だとも思っておいて頂戴」

「は、はあ……」

ソフィアがシャルルの肩を叩く。

「あつ、自己紹介がまだだったわね。私はSSS所属のISテストパイロット………いえ、そこにいるあの子の姉貴分のソフィア・ベルクストレームよ。宜しく、シャルル君」

「あつ、シャルル・デュノアです」

ソフィアの暖かく柔らかい笑みに毒気を抜かれるシャルル。

「しかし、何で爺がここにいる？ ソフィアさんがいるのは護衛だからだろうけど」

「一つは時雨の成果をこの目で確認するためだ。あと………」

源一郎の目が朗らかな老人のそれから不知火財閥創立者のそれに変わる。

「各団体の出方を見にな。今年は皆が競って新型を出しているのだな、面白い駆け引きが見られそうだ」

ピット内に緊張が走る。シャルルがその気に当てられ、肩を振るわせる。

（ボケても不知火財閥の創立者か………）

「用向きは分かったが、今回は止めておく事をお勧めする」

「ほう、何故だね？」

「人が集まることにはトラブルが付き物だ」

「――」

源一郎が龍の瞳の奥、その中にある真を読み取る。

「――そうかい、なら老人は老人らしく見物でもしている事にす

るわい」

「ぜひ、そうしてくれ」

「うむ、ではな龍。お前の活躍を期待しているぞ」

「ああ、適当に頑張るさ」

源一郎はソフィアを連れてピットを出て行った。

「……えーと、何だったの？」

「……………さあな」

ピットを後にした源一郎とソフィアは外で待っていた“金髪碧眼の女性”と喋っていた。

「どうでしたか、あの子は？」

「少しは柔らかくなったかの。よい仲間も出来たようだし、一回りでかくなったように感じたわい」

「ふふ、そうですか」

「あなたは会いに行かないの？」

「ええ、行くわよ。千冬に渡すものを渡したら」

「やせ我慢は体に悪いわよ？」

「安心して頂戴。そこまで落ち零れちゃいないわ」

「ならいいけど……」

「お爺様を頼むわね、ソフィ」

「ええ、後で……」

アリーナ内に試合開始を知らせるアナウンスが流れる。第一戦目が始まるうとしている。

ここはアリーナ上空。

「まさか、一戦目で一夏を潰す事になるとはな」

「おいおい、俺は既にやられること前提か？」

「そうだそうだ、私達はやられないぞー！」

「ほ、本音……今は邪魔しない方が良かったと思うけど？」
第一戦目、その組み合わせは何と龍&シャルル×一夏&本音だった。

「俺は今回、どうしてもやっておきたい事があるんでな。悪いが、お前を勝たせてやるわけには行かないんだよ」

「俺だってやる以上は負けないさ」

「それにだ……」

「うん？」

龍の視線が一瞬シャルルに移る。

「……背中を預けている奴に情けない姿を見せるのも嫌だからな。悪いが、お前の株を落とさせてもらうさ」

「言ってる、前みたいにくと思うなよ」

「こっちの台詞だ。^{セリフ}今度は一振りも出来ない内に潰してやる」
火花を散らす男ども^{バカ}。

「おゝゝ、萌えているね」

「本音、漢字違う」

その姿を観察する美女と美男……訂正、美女二人。

試合開始のカウントが始まる。

「降参するなら今の内だぞ、一夏？」

「お前こそ、威張っていられるのは今の内だぜ？」

試合開始っ！

「うおおおおっ！！」

試合開始と同時に一夏が^{イグニッションブースト}瞬時加速。龍に肉薄する。

「シャルル、前哨戦だっ！ 抜かるなよっ！？」

「任せてっ！！」

^{イグニッションブースト}龍も瞬時加速で加速。後方のシャルルがワイヤーアンカーを発射。時雨と自機を繋げる、それによってシャルルのリヴァイヴも加速する。

龍と一夏が激突する。一夏の雪片式型を左肩に装備された新たな防御兵装——爆発反応装甲で受け止める。雪片と追加装甲が激しく

こすれて火花を散らす。

「龍、行くよっ!!」

後方のシャルルが慣性の法則によって龍に急接近。シャルルは激突の直前、地面に向かってスラスターを噴射。軌道を上に修正し、龍と一夏の頭上を通過。同時にワイヤーカット、重力アンカー発射、急減速すると両手にPDWを展開。本音のノーマル・リヴァイヴに斉射する。

「なっ!？」

「後に注意向けている暇があるかっ!？」

可変パワーウィングを全開運転。白式を押し出す。

「くっ!？」

一夏の顔に同様が走る。重装備型の今の時雨に押し合いで負けるとは思っていなかったのだろう。確かに今の時雨には前のような圧倒的な機動力は存在しないが、パワーウィングの出力に関しては前より75%推力が増量している。単なる押し合いでは時雨に軍配があるのは必然だ。

「ならっ!」

一夏は雪片を使って龍の突撃をいなす。そのまま、シャルルの背後を狙う。

「シャルルッ!」

「うんっ!」

シャルルは左肩の物理装甲で雪片を防ぐ。その隙を突いて本音がら空きの背後を狙おうとするが……。

「行け、自動防衛追加装甲っ!!」
オート・ディフェンス・アーマー

右肩の追加装甲が分離、4基のシールドポッドとなってシャルルの周りに纏わりつく。それらが独自にシールドバリアを展開、本音の攻撃からシャルルを守る。

「ゴメンね、一夏っ!」

PDWを投棄、変わりに両手に構えるは龍の後付武装の一つ大口ルハウンド径ショットガン。それを二丁構えたシャルルが不適に笑う。

「何で龍の武装をつ!!?」

「お互いの武器を交換したらだめなんて制約はないよっ!」

狼狽する一夏の腹部に連続で散弾が撃ち込まれる。

「ぐふっ!?!」

「おりむゝ!!!」

「本音、死にたくなければ、防げよっ!!!」

フリーナの地面にワイヤーアンカーを打ち込んだ龍が右肩の連射^{リユーナク}型電磁投射砲を構える。

「――貫くっ!!!」

120mm貫通徹甲弾が極超音速で撃ちだされる。

刹那、圧倒的な運動エネルギーを持った高硬度合金製徹甲弾がシールドバリアすら貫通して、ノーマルリヴァイヴの装甲^{にく}を抉り取る。龍はそれを確認しても引金^{トリガー}から指を離さない。

薬莖と小型ロケットモーター、そしてローレンツ力によって加速された貫通徹甲弾は余りの速度によって撃ち出された瞬間、一部がプラズマ化する。射線中には発生したプラズマによる眩い光輪が幾円にも連なっている。それはまるで空中に咲く虹色の光花のようだが、それは死の光とも言える。発生するプラズマは人体や電装に致命的とも言えるダメージを与えるだけでなく、砲弾が大気中を進む時に発生させるソニックブームは物体を軽々破碎する威力がある。勿論、ISの保護機能と優れた電装系なら、プラズマによる悪影響はほぼ0だ。だが、純粋な運動エネルギーによる破壊力はシールドバリアのキャパシティをオーバーしていた。

本音のリヴァイヴの絶対防御が発動。残量シールドエネルギーが急激に減少していく。龍はまだ砲撃を止めない。左肩の専用大型弾倉から次々とローリングされる砲弾によって連射型電磁投射砲^{ブリュナク}の砲撃は全く緩まない。リヴァイヴの装甲が次々と剥ぎ取られていく。

時間にして十数秒――しかし、永遠にも思えた砲撃が止んだ時、射線上の地面はソニックブームによって抉られ、その先の本音のリヴァイヴはその4割強の装甲が無残に剥ぎ取られ、飛んでいるのも

やっとの状態になっていた。

(半分は防がれたな……)

リヴァイヴの肩にある物理装甲が前で展開している。本音はあの激しい砲撃の中でも意識を保ち、龍の砲撃を不完全ながらも防いでいた。敵ながら天晴れだ。

「てめえっ——！！！！」

零落白夜を発動させた一夏が突っ込んでくる。

龍はハルバード型近接戦闘兵装をコール。雪片の刃を受け止める。そのまま、腰だめの可変出力プラズマ砲を構える。

「させるかよっ！！」

龍がランカスターを撃つ前に、一夏が瞬間加速を使い、龍を押し出す。

(こいつっ!?)

龍は心の中で毒づいた。一夏は純粋なパワーと雪片の切れ味だけで近接兵装ごと龍を切ろうとしているのだ。そうなれば、いくら強襲重装備型といえども、唯ではすまない。

「——シャルルっ！」

「うんっ！」

龍の思考を読み取ったシャルルがシールドポッドを引き連れている。

「どうしたっ、手も足も出ないのかよ、龍！」

「——手ならあるっ！！」

腰だめの可変出力プラズマ砲の砲口を一夏に向ける。

「なっ!?! この至近距離でぶっ放したらお前も——！」

「肉を切らしてなんとやらさっ！ この距離なら、プラズマの減衰なくお前を狙い撃てる！！」

腰だめの二砲口からプラズマの光が噴き出す。

放たれたプラズマ砲は龍と一夏を巻き込んで強烈な閃光と変わる。

その間も砲撃の音は鳴り止まない。

「おりむゝ!!! しらぬゝ!!!」

「本音、人の心配より自分の心配をしないとっ!!!」

シャルルがダメージ大の本音の止めを刺しにかかる。

「うっ?!」

痛む体に鞭を打ってシャルルに向かって牽制射撃をする本音。しかし、ISのダメージも大きく、照準がずれて牽制にもならない。さらにシャルルの周りにはシールドポッドが浮遊している。当たりそうな弾丸は全てシールドポッドが防御してしまうので、本音の行為は焼き石に水状態だ。

「ごめんよっ!」

左手のアサルトライフルをフルオートで正射。本音の動きを封じたところで右手に新たな武装をコール。それは全長3mはあろうかというほど長く、重厚的なボディをした対物ライフルだった。

対IS用ドラグノフ・アンチ・マテリアル・スナイパーライフル——GTI製の最新装備の一つだ。

シャルルは一専用高性能光学スコープ及び弾道演算装置をコール。エンジェル・サークル腰だめの重力アンカーを射出、機体の中に固定し、狙撃体勢を保持する。

「………」

次の瞬間、ライフルの銃口から対IS用徹甲弾が撃ち出される。

超音速弾は真っ直ぐに本音のリヴァイヴの胸部に命中。着弾の反動で本音の体がりヴァイヴごと後方へ吹き飛ぶ。同時にシールドエネルギーの残量もゼロとなる。

「……凄い」

対物ライフルの威力に驚愕するシャルル。威力だけなら現状のIS武装の中でもトップクラスの性能がある。

「あっ」

砲撃の音が止む。顔をそっちに向けると、装甲表面がボロボロになっている一夏の白式が膝を突いていた。そして、その前には純白

の装甲の塗装が剥げた時雨と龍が立っていた。ゲージを見ると一夏のシールドエネルギーは“0”……。

《試合終了、勝利『龍・S・ラインフォード』&『シャルル・デュノア』ペア》

「そ、そんな……一夏が……」

ピット内で龍たちの試合を見ていた箒は“愛しの一夏”があつさりと負けた事が信じられなかった。

「ふん、この程度の男と言う事か……所詮は只の種馬か」

「な、何だっ!？」

同じピット内で試合を見ていたラウラが興味無さげにそういった。「そうだろ? 戦闘開始から5分で制圧されるなど有象無象の存在以外の何だ?」

「き、貴様……っ!」

《これより、トーナメント第二試合を開始します。ピット内で待機している生徒はアリーナまで出てください》

「試合の前にもう一度言っておくが、私の邪魔だけはするな。もし、私の邪魔をすれば、貴様も“障害”として排除する」

「なっ!？」

それだけ言うと、ラウラはISを展開してピットを出て行った。

(くっ………)

組みが決まってからと言うものの、ずっとこんな感じで全く話が合わない。連携の話も一方的に『邪魔さえしなければいい』といい、連携をする気など端から無い様だし、こっちの意見を聞き得れる様子もない。

だが、それでも箒は優勝しなければならない。そうしなければ、一夏とは……。

そして、そのためにはラウラの戦力が必要不可欠だ。たとえば、気に食わなくとも——たとえば、その姿に同族嫌悪を覚えても——

たとえば、それが醜くても——勝たねばならない。

（そうだ、私のために……何としても）

勝たなくてはならない……龍と言う強敵を排除し、勝利を……

割り当てられた更衣室で次のトーナメントまで待っている龍とシャルルはISのチェックをしていた。

「ねえ、龍。良かったのかな？」

「何がだ？」

ISの調整の手を止め、龍は耳を傾けた。

「GTI社製の……龍の武器を僕が使っても……」

「いいんだよ、所有者である俺が許可したんだ、問題ない。それに強襲重武装型にはこれ以上重火器を詰めなかったからな、シャルルのリヴァイヴに乘せられて逆に助かった。そいづらもデータ取りしないと駄目だったからな」

今回のトーナメント戦で龍はシャルルと幾分ルール違反のような事をしている。先程の試合でも見せたGTI社製の武装の譲渡だ。勿論、ルール上に武装の譲渡に関する規制は存在しないので違反ではないが、通常専用武装を他社に譲渡するなど機密漏えい以外の何物でもない。また、武装が知られるという事は自分の戦闘スタイルを知られる事になる。そのため、普通の神経の持ち主なら誰もやらない。

「リヴァイヴの高い汎用性のおかげでGTI製の武装も詰めた。シャルルにやった高性能広角高感度カメラと戦術データリンク制御システムは役に立っただろう？」

「う、うん……」

オート・ディフェンス・アーマー

今回、シャルルは龍の防御兵装、自動防御追加装甲を遠隔コントロールするため、龍と同じ戦術データリンク制御システムを搭載していた。それだけでなく、龍は本社から寄越してもらった狙撃戦仕

様の高感度・高性能光学センサーや空力制御機能を付与されたセンサーアレイ、リヴァイヴの高い汎用性にものを言わせた大型対物ライフル等等……かなりシャルルのリヴァイヴを自分色に染め上げていた。

「で、でも……ライバル社の武装なんて……」

「気にするな、そっちも問題ない。デュノア社は不知火財閥に対して大きく出られない。“シャルロット”の事があるからな」

「うん……」

「それに二人で武装を共有化した方が緊急時代用が効く。いつもと違って僚機と組んで戦闘できるんだ。与えられた条件を最大限使う事に何の問題がある？」

「——龍は凄いね。普通はそんな事考えないよ」

「はは、確かに俺は変わっているかもな。まあ、俺がこんな“変人”になったのは姉貴らのせいだけだな」

「お姉さんたち？」

「ああ、マリア姉さんには色々くだらない事を仕込まれたし、ソフィアさんからは……色々精神的に鍛えられたし……」

思い返される子どもの頃の日々。毎日のように義姉のマリアに遊ばれ、ソフィアから弄られ……

ゾクッ!!

「りゅ、龍っ!？ ど、どうしたの、顔が真っ青だよっ!!」

「い、いや、何でもない……ちよつと黒歴史を思い出したただけだ」
今一瞬、殺気のようなものを感じた。

所変わって、ここは観客席……。

「……」

ソフィアから一瞬怪しいオーラが吹き出た。

「うむ……どうした、ソフィアよ？」

「いえ、ちよつと人の事を悪く言う“馬鹿な子”がいたような気が

して……………」

「そうかい……………」

美しい微笑を見せるソフィア。触らぬ神に何となら……………いや、触らぬ美女に何とやら……………源一郎は何も見なかったことにした。さすがに娘のように育ててきた子に殺されたくはない。

場所は戻って龍たちの更衣室。

「——すまない、シャルル。もう大丈夫だ」

「本当に大丈夫？ 保健室に行ったほうがいいんじゃない？」

椅子に座った青い顔をした龍をシャルルが介抱している。

「いや、“ファイ姉”もそこまで“黒”じゃないはず……………多分、もう大丈夫だ」

「ん？」

「気にするな、色々あるんだよ……………それよりも次の試合の方が問題だ」

「えっ？」

龍の視線がモニターに移る。シャルルもそれに習う。アリーナでは箒&ラウラのチームと他一年チームが試合を行っていた。

「——箒たちの方が圧倒的に有利だね」

「ああ——だが、箒自身の成果は殆ど含まれていないだろう。あれは殆ど“飼^{ラウラ}い犬”の仕業だ」

今の試合運びを見ても箒がやった事といえば、ラ代わりの囷や盾代わり、後は只の障害物だ。“連携”の“れ”の文字もない、只の力押しだ。力押しで二人を圧倒しているラウラの戦闘能力の高さには、改めて驚かされるが……………

「……………厄介なことだな」

「そうだね……………」

「おいおい本当に分かっていっているのか？ トーナメント表を見ろ」

「ん?.....あっ!」

トーナメント二戦目——表を見たら、次の龍の試合の相手チームは“箒&ラウラ”だった。

「.....あの犬には真実を見せ付ける必要があるからな」

「真実?」

「幻想にすがり付いているアイツを叩き起こすだけの事さ」

それだけ言うとな龍は表情を引き締めた。

（幻想にだけすがりついていてもいい事なんてないぞ、ラウラ………
…）

龍たちの第二戦目——箒とラウラチームとの試合がもうすぐ始まる………。

第十話く学年別トーナメント（前半編）く（後書き）

次は龍&シャルル対箒&ラウラ戦

できるだけ、戦闘シーンが栄えるよう頑張って書きます。

ご意見・ご感想がありましたら、ぜひ一言お願いします。

第十一話く学年別トーナメント（後半編）く（前書き）

一部武装の名称を変更しました。

アクセライザ・ディフェンス

自動防御追加装甲

←

オート・ディフェンス・アーマー

自動防御追加装甲

第十一話〈学年別トーナメント（後半編）〉

アリーナには、龍&シャルルチームと箒&ラウラチームが向かい合っていた。

「悪いな、あの一夏^{ばか}は俺が先に倒させてもらった」

「構わん、代わりに貴様を八つ裂きにするだけだ」

「ほう、中々過激な事を口にする……俺はそう簡単に狩れはしないぞ？」

「その減らず口を二度と開けないようにしてやる」

ラウラから溢れ出してくる殺意と悪意……だが、龍も引かずにご自慢の眼力と気迫でラウラを威圧する。

二人の無言のせめぎ合いは隣にいるシャルルや箒も身震いするほどの物だ。

試合開始のカウントが始まる。

双方、武装を構え、試合開始に備える。

（いいなシャルル？ ラウラの事は俺に任せてお前は箒の“排除”

と支援射撃に徹してくれ。今回は先勝の試合と違ってシールドポッ

ドを貸し出している暇がない。緊急時には、例の特殊戦闘機動^{スペシャルマニューバー}も使

う。タイミングは俺が指示するが、意識だけは張っておいてくれ）

（うん、機動計算とシミュレーションはしっかりやってあるから大丈夫。それよりも本当に一人で大丈夫なの？）

（舐めるな、それよりも頼りにしているからな。背中^{背中}は任せた）

（うんっ！）

…

……

………

《試合開始っ！》

ゴングが鳴った。先手を打ったのは龍。左腕のビーム^{フレンズベルグ}ガトリング砲と右手にコールした実弾型^{フレンズベルグ}ガトリング砲の両門による苛烈な遠距

離面制圧戦法をとった。

「バカめ、その程度の弾丸、私の停止結界の前では無意味っ!!」

ラウラが突き出した右手を中心に一瞬空間に揺らぎが発生する。

(アレがA I Cか……)

シュヴァルツェア・レーゲン

ラウラの鎧である黒い雨はドイツ製の試作量産型第3世代I Sだ。

第三世代の中には、オリジナルに近い特殊兵装が搭載されている場合がある。イギリスのティアーズシリーズのB Tや中国の甲龍の空

ブルー・ティアーズ シェンロン

間圧作用兵器等が典型例だ。そして、ドイツのレーゲンシリーズも

他のI Sとは一線を引く特殊装備を搭載している。

アクティヴ・イナード・キャンセラ

それがラウラの使う慣性停止結界——A I Cである。これはI S

パッシブ・イナード・キャンセラ

の浮遊・機体制御を司るP I Cをより発展させたもので、高エネルギー

ギーによって指定範囲内の空間に作用、指定空間内に入ってきた全ての運動を持った物体の慣性を奪い、停止させる……絶対的な防御システムだ。運動を持ったものなら理論上全て停止させる事ができる

るので、砲撃・爆風・粒子ビームなどでも彼女に届く事はない。

唯一光学兵器だけはある程度効果が認められるが、それもエネルギーレベルを上げ、指定範囲全ての空間を捻じ曲げれば、光学兵器すら通用しなくなる。

だが、これほど複雑で制御の難しいシステムを扱う事は並大抵の事ではない。使用者の正確無比な弾道・効果範囲予想、空間指定・空間作用の演算……それらを高度な戦闘中にやってのけるのは誰が考えても難しいと理解できるだろう。あの龍ですら、自身の能力で制御しきれるか疑問視したほどだ。

だが……彼女の場合は……。

「くっ!!」

光弾と実弾のスコールは全弾、ラウラのA I Cによって防がれてしまう。

(流星は軍隊仕込みっ、実力は折り紙つきだな!)

ラウラはドイツ軍の中でもエリート中のエリート、I Sの特殊部隊出身だ。この程度の攻撃、目を瞑ってでも出来るだろう。

ラウラは龍のガトリング斉射は防ぎながら、四機のワイヤーブレードをランダム射出。龍はすぐさまスラスターを点火、急後退しながらガトリング斉射を続ける。例え、防がれても攻撃を防いでいる限りラウラは動く事ができない。

だが、ラウラの操るワイヤーブレードは予想以上の速度と機動で龍に襲い掛かってくる。

「っ！」

龍は冷静に右肩の自動防御追加装甲を展開、四機のシールドポッドでワイヤーブレードの攻撃を防ぐ。龍の砲火が一瞬緩む。その隙を突いて、ラウラが近接戦闘の間合いに入ってくる。

「その鈍足では私の動きについて行けまいっ!!」

腰部に装甲からさらに二機のワイヤーブレードが射出される。四機のシールドポッドは残りのワイヤーブレードの防御に当てているのでこちらに回せない。

（ならっ!）

飛来してくるワイヤーブレードの片方を左肩の爆発反応装甲で、もう片方を右腕に内蔵された仕込み刀――プラズマ刀で弾く。

「強襲重装備型に近接装備がないと思ったら、大間違いだぜっ!!」
「だが、この手数なら防ぎきれまいっ!!」

ラウラのプラズマ刀振り下ろされる。片方のプラズマ刀は左腕の物理シールドで受け止められるが、もう片方は防ぎきれない。

「貰ったっ！」

ラウラのプラズマ刀が胴を完全に捕らえる。金属同士が擦れるような甲高い音が響く。

「っ!？」

「今のが実体剣なら俺は回避していたな。だが、刀身がプラズマなら俺にも手はある」

龍は胸部の物理装甲で完全にラウラのブレードを受け止めていた。
強襲重装備型

には何重にも耐レーザー・ビーム気化塗料コーティングが施されて

いる。このコーティングのおかげで龍は今もラウラのプラズマ刀を胸部装甲で受け止めていられるのである。

「なら、コーティング材ごと切り裂く！」

だが、それは単時間での話だ。幾ら優れた性能を有していてもコーティング材が全て融解してしまえば、丸裸になってしまう。

「悪いが、それは無理だな」

「そういうことっ！」

龍の背後から連装^{レイン・オブ・サタディ}ショットガンと重機関銃^{デザート・フォックス}を構えたシャルルが飛び出す。

「与えられた条件は最大限利用するものだけ、三流兵士っ！！」

「くっっ?!」

ラウラはすぐさま後方に^{イグニッションブースト}瞬時加速し、二人から距離を開ける。

「逃がさないっ！」

シャルルが追撃とばかりにデザートフォックスを斉射、龍もその後方からガトリング砲2門でラウラの進路を塞ぐ。だが、そこに余計な邪魔者が入ってくる。

「私がいるのを忘れてもらっては困るっ！！」

打鉄を纏った箒が近接ブレードを構え、突貫してくる。

「雑魚はすっこんでろ……」

龍はガトリング砲の斉射と同時に、腰だめの可変出力^{ランカスター}プラズマ砲を発射間隔0，5秒で連射、箒の突貫を苛烈な面制圧で抑える。

（シャルルっ！）

（うんっ！）

プライベート・チャンネルで一言を声を交わすと、二人は瞬時に行動に移った。シャルルは逆噴射^{スラストリバース}し、縦方向に半回転。その下を^{イグニッションブースト}瞬時加速で龍が通り抜ける。所要時間僅か1，5秒の早業だ。

さらに続けてシャルルは空中で重力アンカーを発射、体勢を固定し、対IS用ドラグノフ・アンチ・マテリアル・スナイパーライフル――AIS／SLー13を構える。

「がら空きだよ、箒っ」

計8基の電磁加速装置が展開、ローレンツ力と炸薬によって打ち出される口径20mm特殊徹甲弾が極超音速で箒に襲い掛かる。

「っ?!」

箒の顔が恐怖で引き攣ったものに変わる前に、超音速徹甲弾が打鉄の左肩浮遊アーマーを吹き飛ばす。

「うっ?!」

「まだだよっ」

反動で弾き飛ぶ箒。シャルルはライフルを収納すると、ブレード・スライサー近接ブレードをコールし、箒に追撃を仕掛ける。

シャルルが箒と戦闘している最中にも龍とラウラの激しい攻防は続いていた。

龍は左腕のフレンズベルグ?で牽制しつつ、右手にブレイズ・バレット複合銃、左手に3連装マシンガンビークハイヴを再コール。さらに腰だめの可変出力プラスマランカスタ砲を起動、計5門を越える火砲がラウラに照準を合わせる。

「ふふ、ただの火力だけで私が殺られるとでも?」

「舐めてかかると痛い目見るぞ?」

ラウラは肩のカノン砲を龍に向ける。

双方の火砲から激しいプラスマの輝きが噴出す。

龍はシールドポッドと自身の分厚い物理装甲を駆使しながら攻撃を防ぎ、尚も徹底的な面制圧を掛ける。ラウラも持ち前の優れた技量とAICで龍の攻撃を防ぎながら6基のワイヤーブレードと肩のレールカノンで龍を全方位から攻めていた。

だが、AICを持ったラウラの方が攻撃に集中できるせいか、徐々に火力押しをしている龍が防戦一方のかたになっていく。

「どうした、貴様の実力はこの程度なのかっ!!」

さらに激しさを増すラウラの攻撃。それに比例して削られていく龍のシールドエネルギー。だが、龍の顔に焦りは全く見えない。その様子を見たラウラがさらに感情を爆発させる。

「その余裕もこれまでだっ!!」

ランダム機動を描いて飛来したワイヤーブレードが龍の五体を縛り上げる。龍はシールドポッドを自身の周りに戻そうとするが、ラウラはそれをAICで拘束、龍から盾を奪い去った。

「これで前回の様には行かなくなったっ!!」

レールカノンの砲門が龍へ向けられる。

「…………ふっ」

龍が微かに笑みをこぼす。それがラウラの神経をさらに逆撫でした。

「死ねええええええ————ッ!!」

レールカノンが凄まじい咆哮がアリーナ中に響き渡る。

ここはピット内にある管制ルーム。

そこでは山田先生と千冬が龍たちの試合を傍観していた。

「ボーデヴィツヒさんの砲撃がラインフォード君に全弾着弾しましたっ!」

山田先生の悲鳴のような声がピット内に響く。スクリーンにはラウラの連続射撃を浴び続ける龍の姿がある。爆煙で機影は全く見えないが、飛び散る火花から殆どの砲弾が龍に着弾している事が分かる。

「あ、あれだけの砲撃を受けたら……………」

確かに……………。アレだけの砲撃をあのに至近距離で受け続けられ、ISどころか搭乗者である龍の身にも危険が迫る。いや、端から二人の戦いはどちらも相手を殺す気でやっていた。底から考えれば、あの程度の連続砲撃など、まだまだ温いものだろう。

（しかし、あの龍は…………わざとボーデヴィツヒの神経を逆撫でしているな。ボーデヴィツヒの本気でも見たいのか?）

今だ続く砲撃を眺めながら千冬は龍の真意を探っていた。

「お、織斑先生、これ以上は…………っ!」

「落ち着け、山田先生。奴のシールドエネルギーの残量をよく見ろ」
「えっ？」

慌てて山田先生が龍のシールドエネルギーの残量を確認する。

「え、えええ？！ 殆ど減っていない！！」

「恐らく、龍にはまだ隠し種があったんだろう。出なければ、わざわざ隙を見せて捕まったりはしない」

「わざと……？」

千冬は龍の戦いを見て、彼がわざとラウラの攻撃を受けていると肌で感じ取った。理屈や常識では説明できない戦士としての勘が彼女にそう告げている。

ここはゲストルーム。

「ほう、あのドイツのパイロット、中々過激な子じゃな」

「お爺様、目が怪しいです。私まで変人のように思われそうなので即刻止めてください」

「相変わらず、辛口じゃの、ソフィアよ」

「二度目はありませんよ？」

「ほほほっ、ワシがその程度の脅しに屈するとても？」

「——はあ、全く……」

「これで、龍も終わりだな」

「……」

箒と対峙しているシャルルは油断無く両手の火器を箒に向けていた。

「もう、私の勝ちが決まりだ」

余裕からか笑みを浮かべる箒、龍がラウラにやられたと本気で思っているのだろうか。

「——他人の力を借りてまで一番になりたいの、箒？」

「な、何のことだ？」

「他力本願で一番になって、それで一夏と一緒になるなんて……嫌じゃないの？」

「っ?!」

箒の顔に動揺が走る。まさか、試合中にあのシャルルがそんな事を聞いてくるとは思わなかったのだろう。

「私は嫌だよ、そんなの。そんな形で好きな人と一緒になれても……何も嬉しくない……何も……嬉しくない」

「そ、そんなことお前には関係ないだろうっ!」

「そうだね、自分の気持ちを真っ直ぐに伝えようとしなくて、他力本願の仮初の関係で満足しようとしている奴の事なんて、僕は知らない」

シャルルの目が光る。

「僕は違うつ! 僕は自分で……自分の言葉で……思いを“あの人”に伝えるっ!」

瞬時加速で一気に肉迫、箒との間合いを詰める。咄嗟に反応できなかった箒はそれに対応できない。

ブレット・スライサーで箒のブレードをいなす。そのまま、左手の一口径120mコンパクトバズーカ無反動砲を箒の下腹部に当てる。

「……思いで負けている箒じゃ、誰にも勝てないよ」

無反動砲の引金トリガーを引く。着弾……爆発……シャルルがその反動を使って箒から距離を開ける。

「それに……」

龍とラウラの方に顔を向ける。

「――龍はこれぐらいで負けたりしない、絶対に……」

爆煙から時雨が姿を現す。時雨は左肩の追加装甲以外殆ど傷付いていなかった。

「ば……っ?!」

明らかに狼狽した表情をするラウラ。ここからでもそれがよく分かる。

「……………惜しかったとだけ言っておこうか」

龍の周りには、無残にも変形した装甲板が何枚も転がっていた。

「……………爆発反応装甲っ!」

「流石だな、ご明察の通りだ」

龍は左肩の非固定浮遊部位である爆発反応装甲でラウラの砲撃を

防いでいた。

爆発反応装甲は二重の金属板の間に衝撃で起爆する爆薬を仕込ん

だ戦車などに搭載される補助装甲だ。反応装甲は弾が直撃した瞬間、装甲板内の爆薬が起爆し、外側の金属板を吹き飛ばす。簡単に言えば、砲弾を金属板ごと吹き飛ばし、直接的なダメージを防ぐ……：そういった特殊装甲なのだ。

だが、この装甲にも幾つかデメリットがある。この爆発反応装甲は一度使用してしまったら効果が無くなるという事、そして、正確に適切な角度で跳弾させなければ、十分な効果が発揮されない事だ。

しかし、龍はラウラの連続砲撃全てを的確な角度で跳弾させた。

代わりに爆発反応装甲は全て消耗しきったが、時雨本体へのダメージはほぼ皆無だ。

「さて、ここからは“俺達”の時間だ」

左肩の焼け焦げた装甲板がページ、その中から現れるのは大口径の荷電粒子砲——『ローエングリン・バスター』。

「強襲重装備型の真の力を見せ付けてやるっ!!」

背部の可変パワーウィングをフルブースト、時雨をアリーナの限界高度まで押し上げる。アリーナの遮断シールドに両足が着く。機体側のシールドバリアとアリーナ側の遮断シールドが干渉し合い、火花を散らす。龍はさらに重力アンカーとワイヤーアンカーを遮断シールドに打ち込んで機体を保持する。

「全ミサイルベイ、展開」

脚部・腰部・腕部・肩部・胸部・背部の装甲内臓型ミサイルベイ

の開放される。中には多数のマイクロミサイルの弾頭が押し込められている。戦術データリンク制御システムを起動、全弾頭に機動データを送る。

「パンツァ」の名が伊達や酔狂でない事を思い知らしてやる――ファーン3機分に匹敵する総火力、その身に受けるっ!!」

「燃えさかる流星群っ!!」

全身から吐き出される超小型弾頭ミサイル、それがスコールのうにアリーナ全体に降り注ぐ。

「この程度の攻撃、A I Cを使わずとも……っ!!」

降り注ぐミサイルを回避しようとするラウラ。だが、その彼女の周りに龍のシールドポッドが張り付く。

「っ?! これは……!」

ラウラの……正確にはシュヴァルツェア・レーゲンの動きが止まる。

「シールドポッドにはこう言う使い方もあるのさっ」

シールドバリアはエネルギー特性を弄ると、シールド同士で干渉し合い、強烈な反発力を引き起こすことがある。先程の龍の時雨と遮断シールド間で起きた火花がそうだ。

龍はシールドポッドの高出力ピンポイントシールドバリアでそれを再現したのだ。シールドポッドのバリアとレーゲンのバリアが干渉し合い、ラウラは思う通りに機体を制御できない。機動力を失ったラウラに龍の灼熱のスコールを回避する術はない。

まるで、絨毯爆撃のように降り注ぐマイクロミサイルのスコール。ラウラは勿論、箒も……シャルルも見境無く吹き飛ばしていく。

爆発の衝撃が観客席を襲う。遮断シールドによって直接的な被害は出ないが、弾着の爆音と粉塵だけで相当な迫力があつたはずだ。

「……」

全ミサイルベ이를閉鎖、機体を固定していたアンカーを戻す。

「全弾、止めたか……」

地上には、頭上に向けてA I Cを展開しているラウラの姿がある。

さらにその上にはマイクロミサイルが十数発静止している。

「だが、このタイミングのA I Cの使用が……最大のミスだ、ラウラ」

危なかった……。

かなりに際どいところだった。後、コンマ5秒遅かったら、A I Cで防ぐのは難しかっただろう。

（まさか、アリーナ全体に攻撃できるほどの火力を温存していたとは……）

周囲は無数のクレーターと粉塵で見えるも無残なものに変わっていた。だが、今の絨毯爆撃で無事だったのは、恐らく自分だけだろう。A I Cを持たない筈やシャルルに今の攻撃を防ぐことは出来なかっただろう。A I Cを持ったラウラですら今の攻撃は無傷ですまなかった。

「だが、これで邪魔者は消えた」

《どうかな——っ！》

（オープンチャンネルっ?!）

粉塵の中からシャルルが飛び出してくる。

「あの絨毯爆撃をどうやって——っ?!」

「それは一戦目で種明かしているよっ」

シャルルが無反動砲からキャニスター弾を発射。ラウラの足下が吹き飛ぶ。ラウラはA I Cの慣性停止をカットし、シャルルから距離を開ける。シャルルはさらに追撃とばかりにキャニスター弾を連発、ラウラを追い込む。

「アンティーク風情がつ、私の邪魔をするな——ッ!!」

《そのアンティークに足下をすくわれる気持ちはどうだ、ルーキー?》

上空に視線を向ける。ラウラの真上には連射型電磁投射砲を構えた龍がいた。

「お前も分かっていると思うが、A I Cにはある欠点がある」

「なに？」

A I Cは慣性停止をする物体、または空間を正確に認識し、その慣性を制御する……使用者の高い集中力がある。つまり、指向性が強すぎるためにA I Cは一对一でなければ十分な性能を発揮することができない。そして、今回の試合はツーマンセル制。通常の試合なら兎も角、この条件下では幾ら常人離れしているラウラでも手が対応できるものじゃない。

「A I Cは酷く脆い防御システムだ。パイロットの技術次第で“無敵の盾”にも“なべの蓋”にも変わるが……：相手が複数人の場合、A I Cはその効力を失う。当然だ、それが今のA I C……：そしてラウラの限界だからさ」

「これで私を抑えられたと本気思っているのか？ はっ、笑わせてくれる。危険度の高い貴様の電磁投射砲レールガンさえA I Cで封じれば、私を脅かすものはないっ！！」

「「どうかな？」」

龍とシャルルが同時に不敵な笑みを浮かべる。

「アンティークだからって、僕のリヴァイヴを馬鹿にしないでねっ！」

リヴァイヴの左肩の装甲がパージされ、その中から回転弾倉と一本の杭が現れる。

（そうだ、リヴァイヴには第二世代最強の破壊力を持つ——）

69口径パイルバンカー『灰色の鱗殻』——またの名を……。

『盾殺し』っ！？」

気づいた時にはもう手遅れだった。シャルルは十分ラウラの間合いに入っていた上、上空から強烈な火力を構えた龍がいる。

（たとえ、盾殺しを止められても、電磁投射砲で……！）

ラウラのその一瞬の迷いをシャルルは逃さなかった。

「はああああ————ッ！！」

「ッ？！」

咄嗟にラウラはシャルルのシールド・ピアースを止める方を選んだ。だが、パイルバンカーを止めるためには、その杭一点を正確に止める必要がある。距離に余裕があれば網目状にA I Cを張り、I Sそのものを止めるのだが、この至近距離まで近づかれてはそれでは間に合わない。

「雑魚があああ——ッ！」

A I Cを発動、シャルルの攻撃を防ごうと……。

その時、シャルルがほんの一瞬だけ笑みを浮かべた。それはまるで死刑を宣告する天使の容貌に似た——どこまでも美しく……そして、残酷で罪深い笑みだった。

ラウラの顔が始めて恐怖で引き攣る。A I Cの狙いが僅かに逸れる。

シールド・ピアースがラウラの下腹部に命中、同時にパイルバンカーの炸薬が起爆、杭が打ち出される。

「ぐううう……ッ?!」

体がくの字に折れ曲がる。凄まじい衝撃が腹から背中に抜ける。

シールドバリアだけでは防ぎきれず、絶対防御が発動する。残量エネルギーギーが急激に減っていく。

だが、攻撃はこれで終わらなかった。

「シャルル、上げろっ!!」

「うんっ！」

シールド・ピアースで串刺しにされたままラウラの体が上に打ち上げられる。シャルルが瞬間加速と炸薬の連続起爆でさらにその体を中に上げる。

「これで終わりだっ!!」

時雨の左肩にマウントされた大口径荷電粒子砲から電磁加速と収束を繰り返した荷電粒子が吐き出される。それは真っ直ぐに強烈な輝き放ちながらラウラの背中に命中した。

「————ッ!!!!」

ラウラから声にならない悲鳴が上がる。

「タイミングを合わせろよっ!!」

「うんっ!!」

イクニッションブースト

瞬時加速で急接近する龍とシャルル。その間にはラウラが挟まっている。ラウラは体を上下から押しつぶされる形で荷電粒子の直撃とパイルバンカーをその身に受けた。残量のエネルギーが一気に消耗される。

二人の意味が入れ替わった瞬間、ラウラの体が空中に放り出された。

(私が……負ける……?)

体中が痛い上、動かない。当然だろう、アレだけのダメージを受けたのだから……しかし……

(私は……負けるわけには行かないっ!)

昔のような“出来損ない”には戻りたくない。それに……
(敗北させると決めた。あれを、奴を完膚無きまでに叩き伏せると!)

溢れ出す感情、ラウラはそれを止める術を知らなかった。

(あの男はまだ動いているのだ。動かなくなるまで、徹底的に壊さなくてはならない。そうだ、その為には――)

力が――何者にも負けない、何者でも捻じ伏せる事ができる圧倒的な力を――っ!!

その時、頭の中に何かの声が響いた。

『――願うか……? 汝、なんじ自らの変革を望むか……? より強い力を欲するか?……』

(言うまでもない。力があるのなら、それが得られるのなら、私など――空っぽの私など、何から何までくれてやる!)

だから力を……比類無き最強を、唯一無二の絶対を――私によこせっ!!

Damage Level……D.

Mind Condition……Uplift.
Certification……Clea.

《Valkyrie Trace System》……………boot

そこでラウラの意識は途切れた。

第十二話く学年別トーナメント（後半編）く（後書き）

土日つぎ込んで仕上げました。

若干荒削り感ありますけど、一応形になりました。

次話で二巻を仕上げきる予定です。

第十二話　　思ひよ、届け

ラウラが地上に墜ちていく。

（ラウラの相手が箒ではなく他の誰かだったら……相棒がシャルルじゃなければ……正直この試合、どっちに転んでいた事か）

本音を言えば、ギリギリの勝負だった。博打と言ってもいい。

後半に使った降り注ぐ流星群をシャルルが避けてくれていなかったら、この試合に負けていただろう。ラウラと一対一の勝負で確実に勝てると明言できるほど自惚れてはいない。

（ま、シャルルなら真意を込み取ってくれると思っていたがな……）

先程の絨毯爆撃、通常ならシャルルも巻き添えを食っているはずなのにシャルルはまったく被弾しなかった。これは単なる偶然ではなく、龍の仕組みが引き起こした必然だ。

龍は先程のミサイルコントロールを戦術データリンク制御システムで誘導した。そして、シャルルも同様の制御システムを積んでいた。つまり、あの瞬間、龍がコントロールしていたミサイルをシャルルが戦術データリンク制御システムで誘導し、意図的に着弾位置を変更したのである。

勿論、自身に着弾する危険のあるミサイルだけの弾道を変えろというのは簡単なことではない。咄嗟の判断能力、機動制御、演算能力がなければできない芸当だ。

つまり、龍はシャルルの実力を信じ、シャルルは見事にその期待に応えて見せたのである。

「だが、賭けには俺達が勝った。そしてお前は負けたんだ、ラウラ……」

ラウラのシールドエネルギーは空前のともしみだ。

だが、その時ラウラに異変が起きた。

「ああああ————ッ！！」

空気を切り裂くほど叫びがアリーナに木霊した。それと同時に、シ

ユヴァルツェア・レーゲンにも変化が起きる。残った装甲が黒く変色し、液体金属のようにドロドロになり新たな装甲を形成していく。その間もラウラの絶叫は止まず、その表情は苦痛で醜く歪んでいる。「りゅ、龍……ッ！」

シャルルが動揺と恐怖で染まった顔をする。装甲が定まったものになっていく。それに比例してラウラの叫びも弱まっていく。だが、それが進むごとにラウラの表情がなくなっていく。眼帯が外れ、その下の

金色の瞳が露わになる。ラウラの瞳には虚ろで何も写していないように見える。

液体状だった装甲が一つの形に整っていく。そして龍はその姿に覚えがあった。

「ッ?! ライブラリーッ！」

時雨内に保存されているデータと比較検証する。その間も装甲は次々と形になっていく。無駄な装甲が無いシャープなボディ、日本の武者のような両肩の浮遊アーマー、腰だめにぶら下がった二門の電磁投射砲、2基の機動翼、スラストウィング右手に握られる一振りの刀、そして左手に握られる刃渡りが2m近く直線的な実体剣……。

「――双壁の！」

忘れもしない――シュヴァルツェア・レーゲンが変化したISの姿は嘗てモンド・グロッソ大会の決勝戦で世界を震撼させ、最強の称号『ブリュンヒルデ』の名を冠された……。

「暮桜とフレイヤっ!!」

「これは――ッ！」

流石の千冬も動揺を隠しきれなかった。

「お、織斑先生ッ! これは?!」

明らかに狼狽し、冷静さを失っている山田先生。千冬は彼女の慌てぶりを見て自身も少し動揺していたことを理解した。一度、心を

正し現状を確認する。

現在、ラウラのシュヴァルツェア・レーゲンにありえない現象が起きている。ISの装甲が変化し、別ものになる事は本来ない。だが、千冬には一つだけ覚えがあった。

（まさか、シュヴァルツェア・レーゲンにあのシステムが？　しかし、どうしてそんなものが……）

「動揺するのはいいけど現実を受け止めたら、千冬？」

独特な喋り方、この声の主は外国人のようだ。

ヴァルキリー・トレース
「VTシステム、まさか“双壁”の詳細なデータを持った組織があるとは驚きだけど」

「お前……」

「あなたが今やる事は別にあるでしょ、“黒のブリュンヒルデ”」
突如として現れた謎の声の主は僅かに微笑んでいた。

「ねえ、龍……」

「分からん、だが……」

新たな漆黒の鎧を纏ったラウラの顔に正気はない。そして、ゆっくりとこちらを向くと両手の得物を構えた。

「“敵”なことだけは確かだっ……」

龍は咄嗟にシャルルを蹴り飛ばし、自分が前に出る。敵の動きはまさに電光石火のごとく瞬時に近接戦闘の間合いに入り込む。

（速いっ！？）

イグニッションブースト

瞬時加速を使用するにしてもエネルギーをチャージするため、発動までのタイムラグが僅かながら存在する。だが、今の動きにそのような節は見られなかった。そしてこの瞬間移動にも等しい急加速を龍は知っていた。

ライトニング・ブースト

「瞬間光速ッ！」

嘗て“金のブリュンヒルデ”と称され世界を震撼させた義姉——
マリアーヌ・ラインフォードだけが唯一使えるイグニッション・ブ

ーストを越す瞬間加速である。

右手の日本刀が龍の左腕を切り落とさんと振り下ろされる。龍は咄嗟に左腕の物理装甲でそれを受け止めようとした、が……。

「ッ?!」

日本刀の刃はまるで紙か何かを切るかのように堅牢な複合装甲を切り裂く。龍は咄嗟に急速後退に間合いを取った。

「……おいおい」

左腕のガトリングシールドは無残にも両断されている。さらに装甲の内側にある腕まで切り裂いている。傷口からは血が滴り落ちる。
(あと一步踏み込まれていたら骨まで切られていた)

考えただけでぞっとする。

「なめているとこっちが殺られるな」

ガトリングシールドと背部の電磁投射砲ブリュナクをパージする。

「――ハアッ!!」

今度は龍から切り込む。ハルバード型近接兵装をコール。大振りの一撃がラウラの胴を捉える。だが、その一撃は日本刀の腹で防がれてしまう。龍は続けざまにハルバードの刃の反対側を使い連続突き、斬撃をハルバードの刃でいなし、棒術や槍術を合わせたような独特の戦法を披露する龍。

だが、その行き良いも最初のみ。徐々に龍が押され始める。

(クッ、流石は双壁のデータだ、強い! しかもコイツ、二種類の攻撃モーションをミックスした上にさらにアレンジを加えてやがる! 踏み込みと斬撃のタイミングが読めないッ!!)

しかも彼女が振るう武器もレベルが違う。右手の日本刀は千冬が使っていた雪片。そして左手には自身の義姉――マリアヌ・ラインフォードが使っていた最強にして最高の矛と盾『エスペランサー』。

(偽者でもやはり伝説の剣……か)

切られた頬から垂れる血を舐め取る。

「――なら」

再び加速してラウラの間合いに入り込む。

「ハアアッ!!」

ハルバードから放出された指向性エネルギーが衝撃波となってラウラを襲う。

(ここだっ!)

ランカスター

龍は腰だめの可変出力プラズマ砲を構える。だが、ラウラは龍の放った衝撃波をたった一撃でそれを打ち消し、龍よりも早く腰だめの電磁投射砲でプラズマ砲を破壊した。

「甘いッ!!」

ローエングリン・バスター

その隙に荷電粒子砲を充填、その砲口がラウラを捕らえる。
引金を引く。まさにその瞬間……。

「うおお——ッ!!」

アリーナの遮断シールドをぶち破った一夏がラウラに向かって突っ込んでくる。引金に掛かる指に僅かなためらいが生まれる。

「——え？」

荷電粒子砲が目の前で両断される。それだけでなく両手で構えていたハルバードも綺麗に両断される。それがラウラによるものだと認識した時には全て遅すぎた。

胸部を十文字に切り裂かれる。強襲重武装型の複合装甲が飛散し、

その下の肉から血が溢れ出す。

切られた……。

その直後、龍の体にレールガンが十数発打ち込まれた。

(俺は……)

背中から何かに激突する。龍の意識はそこで途切れた。

「龍……?」

シャルルは幻でも見るかのようにアリーナの外壁部の方に顔を向けた。そこには全身血だらけの龍が転がっていた。四肢は力なくぶら下がり、胸や額から夥しい出血をしている。
おびただ

「――ッ!!」

シャルルの中で何かが弾けた。

「許さないッ!!」

両手にサブマシンガンをコール。ラウラに照準を合わせる。ラウラは一夏を切り倒すとすぐさまシャルルに反応、急加速で自身の間合いにシャルルを入れる。シャルルは冷静にサブマシンガンを連射。4基の大型スラスターを巧みに使い、ラウラの攻撃を避けながら砲撃を続ける。

「このッ!」

コンパクトバスターカが火を噴く。撃ち出されたキャニスター弾がラウラの全身を吹き飛ばす。さらにシャルルは両手に大口徑^{ヘルハウ}ショットガンをコール、残弾全てをラウラに叩き込む。

「はあはあ……」

全身から汗が噴出す。

（龍はこのプレッシャーの中、あれだけの格闘戦をやって見せたの?）

「ハッ?!」

一瞬判断が遅れた。雪片の残撃がヘルハウンドごとシャルルの腕を切り裂く。

「うっ!」

咄嗟に切られた右手を覆う。だが、虚ろな瞳のラウラはそのままシャルルを地面に押し倒し、剣を振り上げた。

「――ッ!!」

恐怖で顔が引き攣る。二つの剣が鈍くきらめく。

（僕、死ぬの?）

剣が振り下ろされる。その時、自分の目の前に影が差した。

「えっ?」

「全く……“コイツ”にしても“お嬢様”にしても無茶が過ぎる」

「だが、なるほど……確かに“コイツ”が氣にいるわけだ。俺も肝っ玉が据わった女は嫌いじゃない」

「りゅ、龍——！」

パンツァの追加装甲を全て脱ぎ捨てた龍が不敵な笑みを浮かべて立っていた。

両手からプラズマ刀を形成して雪片とエスペランサーを防ぐ。

（この前以上に面白い状態だな。ククク……いいじゃないか、背中がゾクゾクするぜ）

龍には悪いが、この“獲物”は自分が狩らせて貰おう。この体ではいつまで戦えるか分からないが、それがまた状況を不利にして面白い。

（とはいえ……痛覚を止めていても出血が多過ぎる。時期に感覚が鈍ってくるな）

もって10分……いや5分といったところか。

「ま、この体を壊すわけには行かないか……さっさと片付けさせてもらうッ——！」

両手のプラズマ刀とスラスターに残エネルギー全て回す。

「ハアア——ッ——！」

高速残撃の嵐、体から溢れ出す血やダメージの事などお構いなしの無茶苦茶な攻撃。

（このまま押し切るッ）

ラウラのレールガンを切り落とす。ラウラの動きが一瞬鈍る。

ここだ——！

必殺の残撃がISの左手首を切り飛ばす。

「貰ったッ——！」

あと一手……その時、右脚から力が抜けた。

（チッ！ 限界かッ——！）

雪片の刃が龍の体目掛けて振り落とされる。

「させるか——ッ！」

一夏がその一撃を雪片式型で受け止める。

「龍、下がって！」

AIS／SL－13を構えたシャルルがラウラを狙い撃つ。放たれた超高速徹甲弾がラウラの両肩を貫く。

「ち、余計なことを」

だが、助かった。あのタイミングで二人が助けに入らなかったら、タダではすまなかった。

（せめて近接兵装があれば……）

その時、一振りの剣が龍目掛けて跳んで来た。

「ッ?!」

その柄を掴み取る。

「これは……」

見た事もない近接兵装だ。だが、何故か異様に手に馴染む。ISのデータバンク内にこの兵装のデータが存在した。

（ライフルブレード型複合近接兵装——『エスペランサー?!』）

飛んできた方向を見る。アリーナの隔壁上、金髪の長髪を靡かせながら去っていく後姿を見つけた。

「ああ、どういつもこいつもお節介が過ぎる！」

エスペランサー?を構える。

「一夏ッ、次で決まるぞ。俺に合わせろッ!!」

「おうっ！」

新旧伝説の武器が向き合う。

「うおおお——ッ!!」

一夏の雪片式型がラウラの雪片を弾き飛ばす。

「ハアアア——ッ!!」

高速の斬撃が漆黒のISを切り裂く。

「……………」

「……………」

エスペランサー?を払う。それと同時にラウラが漆黒のISから開放される。

「これで一件落着か……」

エスペランサー？を収納する。

「物足りなさはあるが、少し楽しめたか」

ピットから武装した教師部隊が突入してくる。気を失ったラウラも一夏に支えられている。今回の騒動もこれで片付いた。

太陽も沈みかけの夕方、今回の騒動の発端者であるラウラ・ボーデヴィツヒが意識を取り戻した。

「あ、うう……」

「気が付いたか？」

「……教……官？」

意識がはつきりとしてくる。周りの状況を確認する。自分がベッドに寝かされ、千冬がその横に座っている。太陽の位置から数時間は眠っていたようだ。

「私……は……」

「全身にかなり無理が掛かったようだ。全身打撲に筋肉疲労、あとは裂傷などのかすり傷だな。数日は地獄だが、まあ耐えろ」

ラウラは千冬が誤魔化している事に気づいた。

「何が……起きていたんですか？」

ラウラは痛む体を無理矢理起こして、ジッと千冬を見つめる。ラウラの赤と金のオッドアイが真っ直ぐに問いかけてくる。

千冬は少し困った顔をした後、「一応、機密事項なのだがな」と釘を刺し、ラウラに応えた。

「VTシステムは知っているな？」

「はい、モンド・グロッソの分門ヴァルキリー受賞者の動きをトレースするもので、確か……」

「そうだ、現在VTシステムはどの国家・組織でも研究・開発が禁止されている。それが何故かシュヴァルツェア・レーゲンに搭載されていた。巧妙に隠されていたがな？」

「……………」

「調べた結果、機体のダメージや操縦者の精神状態……特に操縦者の強い意志——願望がトリガーで起動するようになっていたらしい」

「願望……」

「現在、ドイツ軍にこの件について問い合わせをしている。近くIS委員会からの強制捜査が入るだろう」

千冬の話聞き終わったラウラは下を向きながら唇を噛んでいた。

「私が……望んだからですね」

あなたに——なる事を。

「ラウラ・ボーデヴィツヒッ！」

「は、はい！」

いきなり名前を呼ばれ、文字通り飛び起きるように返事をする。

「貴様は誰だ？」

「わ、私は……」

「誰でもないなら、今からお前が“ラウラ・ボーデヴィツヒ”だ」
「……」

「悩みたいなら悩み。時間は腐るほどある。お前は最低3年は学園に在学しなければならぬし、その先も人生は続いている。まあ、最悪死ぬまで時間はある。大いに悩み、小娘」

予想にもしていなかった千冬の励ましにラウラは何も応える事ができず、ただポカンと口を開けていた。

千冬は伝えべきことは伝えたのだろう、席を立ち病室を後にする。

「ああ、それから」

病室を出るところで千冬が足を止めた。

「お前は私にはなれないぞ。アイツの姉はこう見えて気苦労が絶えないからな」

背中を向けているので顔は見えないが、口元が笑っている事だけは容易に想像できた。千冬が去ってから暫くしてからかラウラは何故か無性におかしくなった。

「ふ、ふふ……はははっ」

笑いが止まらない。ああ、なんて人だ。言いたいだけ言って逃げるなんて。その上、アレだけの事言っておきながら後は自分で考えろなんて。

（自分で考えて、行動しろ……か）

完膚なきまでの敗北、完全な敗北、それでも何故か気分がいい。それが何故か心地よい。

（奴には礼を言わないとな……）

自分を圧倒した奴の姿が蘇る。

（いや、違うな。礼ではない……借りを返さなければならぬ）
自分に敗北を与えた初めての相手、奴に借りを返す。ラウラはそれを己に誓った。

（そう、ここから――）

ここから“ラウラ・ボーデヴィツヒ”は始まるのだから――。

夕方、シャルルはIS学園併設の専門病院の一室でいた。

「……」

部屋には心拍数や血圧を測る機械の音しかない。ベッドには全身包帯だらけの龍が寝ている。

「龍……」

その呟きに応えてくれない事は分かっているが、それでもどこか期待している自分がある。今すぐ龍が起き上がり、何もなかったかのように振舞ってくれる事を……。だが、現実はどこまでも残酷だ。龍が目覚める事はなく、起き上がる事もない。

「……」

医者話では出血と怪我の影響で数日は目を覚まさないそうだ。命こそ別状はないが、怪我の完治にはかなり掛かるとも言っていた。「あなたも怪我人なのだから無理をしていけないわよ、シャルル・デュノア君」

「えっ？」

病室に入ってくる長髪の金髪を湛えた女性。年齢は千冬と同じかその前後だろうか、金髪に青い瞳……欧州系の人であることは間違いない。

女性は真っ直ぐに龍のベッドまで来ると、彼の顔に掛かっていた髪の毛を攫い、かけ布団を整える。

「本当にこの子は……人の気も知らないで」

頬を撫でる彼女からは確かな愛情が感じられた。

「あ、あの、あなたは……？」

「ああ、そういえば自己紹介がまだだったわね」

「私はマリアーナ・ラインフォード。ここで寝ている龍の義姉よ。宜しくね」

「えっ、龍のお姉さん?!」

彼女が予想だにしない人であることが分かったシャルルは驚きで口が開いたままになる。

「あら、私の顔を知らなかったの？　それでもそれなりに有名だと思っていたのだけど」

「す、すみません……」

「ふふ、別に構わないわ。それにしても今回は私の愚弟が迷惑をかけたわね。弟に代わって謝るわ」

頭を下げるマリア。シャルルは慌ててマリアに頭を上げて欲しいと頼み込んだ。年上の相手に頭を下げられるのは悪いし、礼を言われるような事もシャルル自身したとは思っていなかった。

「迷惑だなんて……僕はただ何も出来ずに見ていただけで」

脳裏に焼きついている、血だらけの龍の姿……。あの時、シャルルは何も出来なかった。その後龍をやられた怒りでラウラとは戦ったが、結局はまた龍に助けられてしまった。

「あなたは龍の助けようと戦ってくれたわ。だから、そうやって自分を追い詰めるような事はしないで——私はあなたに感謝しているんだから」

「感謝？」

「ええ——龍を、弟を助けてくれてありがとう」
マリアは改めて頭を下げた。

二人は龍のベッドの横に椅子を並べ、ちょっとした雑談を始めた。
「龍が色々言ってたけど……あなたは聞いていた以上にいい子ね。
気に入ったわ」

「え、龍から聞いていたって……？」

「ふふ、そういえば、あなたは知らなかったわね」
「ん？」

話が見えない。シャルルは首を傾げる。

「本当は龍から伝えた方がいいのだろうけど、今は……ね」

「はい……」

「だから、代わりに私が話すわ」

そう言うマリアは先程までの優しい姉から引き締まった大人の女性
の顔になった。

「“シャルロット・デュノア”さん、あなたは本日を持ってデュノ
ア社から不知火財閥傘下GTIのISテストパイロットに移籍とな
りました」

「……………」

シャルルは一瞬マリアが何を言っているのか分からなかった。

「ど、どういうことですか？」

「あなたの立場は非常に危ういものであることを理解しているのか
しら？ 女性でありながら男性と偽り、デュノア社に他企業のIS
のデータを横流していた。IS委員会で制裁を受けてもおかしくな
いレベルよ」

「……………」

「私個人としてはデュノア社を蹴落とすいい機会だったから、この
まま傍観を決め込む気でいたけど……」

マリアの視線が龍に流れる。

「この子に感謝するのね。お爺様に無理を言ってあなたの身柄の保証をして貰ったんだから」

「え？」

「順を追って説明するわ。龍は私達のお爺様、つまり不知火財閥の創設者、今はご意見番だけど……不知火源一郎にあなたの事を相談したの」

「僕のことを？」

「さっきも言った通り、あなたの社会的立場は酷く脆いものよ。デュノアに何かあった時、巻き込まれて共倒れになることは明白」

「だから、龍はデュノア社からあなた——“シャルロット・デュノア”を引き抜くことを提案したの」

「勿論、デュノア社もそんな勝手を許さなかったわ。あなたの優秀さは折り紙付きなのは今日の試合でよく分かった。だから、あなたを引き抜く代わりにデュノア社の第三世代機を共同で開発する事を提案したわ」

「第三世代機の共同開発を？」

「ええ、共同開発の話を知ったら、デュノアはすぐ取引に応じてくれたわ」

「そう……ですか」

シャルルはうな垂れた。分かってはいた事だ。あの人は自分を娘だとは思っていないと……。それでもやはり……。

「あなたは会社のために売られた……端的に言えばこういう事よ」
売られた……そうだったそれだけの事だ。それだけの事なのに……何故かその言葉が頭にこびり付いて離れない。

「正直、反吐が出る話だわ。実の子を道具にするなんて……」

「いいんです。僕とあの人の関係は最初から親子でも何でもないですから」

「私も……そして龍も本当の家族は居ないわ。だからこそ“家族”の大切さも知っている」

「龍もそう……だから、あなたの事は放っておけなかったのだと思

う」

龍の頬を撫でるマリアの口調は先程までとは打って変わって穏やかなものになっていた。

「私やこの子がやった事は決して褒められるものではないわ。理由はどうかあれ、あなたの事をネタにデュノアと取引した、その事実に変わりはない」

「でも、一つだけ心に留めておいてほしいの。私も龍も決してあなたから感謝して欲しくてやったわけじゃない事を……私達はただ切っ掛けを作っただけという事を」

「切っ掛け……」

「それだけは覚えておいて……」

言い終わるとマリアは席を立った。

「さて、私はそろそろ戻るわ——だから、いい加減狸寝入りは止めなさい、龍」

「えっ?!」

「——何でわざわざ言うんだよ」

龍は両目を開け、首だけマリアのほうに向ける。

「姉を出し抜けると思ったら大間違いよ」

龍の額にデコピンをお見舞いするマリア。

「それじゃ、シャルロットちゃん。愚弟をお願いね」

「は、はいっ!」

マリアは含みのある笑みを浮べ、病室を後にした。

病室に残された二人。何となく気まずい雰囲気が二人の間を流れていた。

「——怒っているか?」

「え?」

上半身を起こし、龍はジッとシャルルの目を見てそういった。

「今回の件、お前の意志とは無関係に話が進んだ」

「うん、そうみたいだね」

「だから、お前はその事を怒っていないのか？ 憎んでいないのか？」

「……………」

「もしそうなら、好きなだけ罵声しろ、殴ってでもいい。シャルルにはそれだけの権利がある。そして俺にはそれを受ける責任がある」
龍はただ真っ直ぐにシャルルを見た。シャルルは少し視線を下に向け、心の中で考えてから顔を上げた。

「何をしてもいいんだよね？」

「ああ、好きにしろ」

「じゃあ……」

龍は来るであろうものに備える。

ギュー——ッ！

だが、来た衝撃は予想とは全く異なるものだった。

「——しゃ、シャルル？」

「————ありがとう、龍」

シャルルの両手が龍の背中に回る。龍はそこで始めて自分がシャルルに抱きしめられている事に気づいた。

「おい、シャルロットっ！」

「それでも怒っているんだよ。でもね、それ以上に嬉しかった」

シャルロットの抱擁に更なる力が掛かる。

「だ、だからね龍……………僕は……………」

「……………」

「龍？」

シャルルは首を傾げた。何故か龍は額に汗を掻きながら必死で何かに耐えるかのような顔をしていたからだ。

「シャルロット……………俺、肋骨を折ってんだけど」

「えっ？」

龍は試合中、暴走したラウラの攻撃により、肋骨と右脚を骨折していた。シャルロットは嬉しさの余り

、すっかりもその事を失念していたのだった。

「わあっ！ ご、ゴメン！！」

慌てて龍を開放する。

「――感謝されるのは嬉しいが、俺が怪我人である事だけは忘れな
いで欲しかったよ」

「ゴメンなさい……」

シュンとなるシャルロット。それを見た龍は彼女に「もう気にす
るな」と言い、怒っていない事を伝える。

「ああ、シャルロット一つ確認する事があった」

「なに？」

「これからシャルロットの立場はデュノア社から依頼を請けたGT
Iがテストパイロットとして“貸し出している”というものになる」
「うん」

「で、これからどうしたい？」

「どうて……？」

「このままデュノア社でテストパイロットを続けるのか、もしくは
GTIで仕事をするか……普通の生活に戻りたいのか」

「……」

「普通の生活がしたいのなら俺から爺に相談する。お前はどうか
いんだ？」

「僕は……デュノアのテストパイロットを続けるよ」

「いいのか？ 今の今までお前の事をこき使ってきたクソ共だぞ」

「それでも僕がテストパイロットをやめたら……」

「関係のないデュノア社の社員まで迷惑が掛かるって？」

「うん」

「甘いな」

「そうかもしれないね……」

「いいんだな？」

「うん……少なくとも今はそれでいい」

「分かった……シャルロットが納得しているならそれでいいさ」

龍は体をベッドに預けた。どうやら無理をして体を起こしていたようだ。

「あ、ねえ、龍のおじいさんの連絡先教えてくれない？」

「連絡先？」

「うん。ちゃんとお礼がしたいから」

「マメだな」

龍はシャルロットに口頭で連絡先を伝える。

「少し疲れた、俺は寝る」

「うん、お休み」

5分もしない内に龍は眠りに付いた。それを確認したシャルロットは張っていた気を緩める。

「はぁ……言えなかった」

悔しいような、腹が立つような……でもホッとしたような顔をするシャルル。

「――でも」

龍の横を独り占め出来た。今はそれでよい事にしよう。

「龍、本当にありがとう――」

夕焼けで染まった病室で2人の影が重なる。

三日後、龍は見事病院からの脱獄……もとい退院に成功した。

勿論、医者の説得（脅し）をした上での退院なので何の問題もない。

「やっぱり歩きにくいな」

杖を突きながら龍は教室に急いでいた。先日の騒動で肋骨だけでなく、右脚の骨にもヒビが入ってしまったので現在龍は片足で歩いている。そのため、この杖が必要不可欠になっている。因みに左腕も着られた傷が思いのほか深かったので、こちらも包帯でグルグル巻きの上首か下げれている。

通常の倍以上の時間をかけて龍はやっと教室に着いた。

「すいません、遅れ……ま……」

「龍、もう大丈夫なのっ?!」

シャルルが龍に気づいて近づいてくる。

「――シャルル、何でそんな格好をしているんだ?」

龍の指差す方向には……シャルル（女装バージョン）の姿があった。いや、元は女だから女装と言う表現はおかしいが……。

「ふふ、改めてこれから宜しく願います。シャルロット・デュノアです」

「は、はは……」

ニコリと笑顔を見せるシャルロット。片や顔が引き攣る龍。

勿論、この後クラス中から尋問と言う名の地獄を龍がみたのは言うまでもない。

第十二話く思いよ、届けく（後書き）

やっと二巻終了。次は三巻突入！

第十三話〈レイン・メーカー〉

清々しい朝、気持ちよく起きてよい一日を初められそうなそんな日。

「のわあああ——っ!!」

その清々しい一日は隣部屋からの耳障りで不快な男の悲鳴でぶち壊された。

「——またか」

ムクリと体を起こす。その顔を見たら、彼が非常に不機嫌である事が分かるだろう。

「このままだと他の部屋にも迷惑が掛かるか」

壁に立て掛けた杖を取ると、龍は体を起こし部屋を出た。

「全くまた不法侵入か……」

隣部屋のドアの鍵穴には金属で削れたような後がある。典型的なピッキング痕だ。

「ここまでして入るか」

その執念は凄し……。

「て、感心している場合ではないか……」

ドアを開けて中に突入する。

「おいっ、一夏! 朝っぱらから……」

「おお、お前も組み手の練習をするか」

部屋に入ってみるとベッドの上で一夏の腕を締め上げる裸のラウラがいた。

「——一夏、幾らお前が発情期真っ只中とはいえ、そこまで節操無しだったとは」

男の風上にも置けない危険物、汚物、核廃棄物……e t c。

「そ、そんな事言っていないで助けろっ!!」

「さて、俺は何も見えていない、見えていない」

一夏に背を抜ける龍。

「お、おい！ 助けろよ！！」

「――タダ：で人は動かないんだよ、一夏君」

「うう……じゃあ朝食で」

「この前も助けてやったよな？」

「ぐう……それじゃあ昼も」

「ま、お前は助けてもらった恩義をその程度としか思っていないらしいしな」

「ああ分かったよ！ 3食全部奢る、だから助けてくれ！！」

「よし、交渉成立だな」

踵を返す。

「ラウラ、とりあえず体を隠せ」

「ん？ 何故だ、夫婦と言う者は包み隠さずというのが鉄則ではないのか？」

「ああ、それは否定しないが、人によってその基準に差異はあるだろう」

「ああ」

「一夏の場合、肌着を着ているぐらいが丁度いいんだよ」

「成る程……」

納得したのか納得しなかったのか分からないが、とりあえず一夏から離れてくれた。

「おい、さっさと服を着ろ」

後を向いたまま龍がラウラを促す。

「服は部屋だ」

「……………」

どうやら、ラウラは夜な夜な素っ裸で一夏の部屋まで行き、そのままベッドに潜り込んだようだ。

（常識離れし過ぎにも程がある……）

頭痛を覚えながらも龍は手近のシーツを掴んでラウラの裸姿を覆う。とりあえずはこれで凌げる。

（早く身元引受人に渡さないとな……）

「い、一夏、いるか？ 折角だし朝食でも一緒にしようかと思ったのだが……」

その時、扉の向こうから箒の声が出た。

（しまった、鍵を掛け忘れた……）

このままでは、箒が中に入ってくるのは必死だ。

「ラウラっ、一夏に抱きつけ」

「何故だ？」

ラウラは首を傾げる。

「箒から一夏をもぎ取る良いチャンスだ」

「分かった」

すぐさま一夏のベッドにダイブする。よしこれで偽装工作完了だ。

後は……。

「隠れるか」

バスルームに引っ込む。数秒後、箒が部屋に入ってきた。

「一夏、入るぞ。早く支度を……」

箒の声が途切れる。

「なっ」

「無粋な奴だな、夫婦の寝室に土足で上がるとは……」

「夫婦……ッ！」

「ち、違うだ箒！ これは……」

「そうだな、寝室ではなく、“愛の巣”だな、一夏」

「あ、“愛の巣”……ッ！！」

きつと箒の髪の毛はメデューサのように逆立って波っているはずだ。見なくとも手に取るようにその光景が目に見え浮かぶ。

（一夏、お前が一人に決めないからこうなったんだから……）

本当は龍が仕込んだ事だが、その事実を箒は知らない。それにこう言った事は真実よりも相手にどう見えているかが重要である。

（グッドラック、一夏……）

胸で十字架を切る。

「わああ——？！ バカ、止める箒！！」

「えええい!!　そこに直れ、成敗してくれるッ!!」

何かを叩き割る音と碎ける音、そして一夏の悲鳴が聞こえてくる。

「頃合いか」

バスルームから抜け出す。

「ラウラ、行くぞ」

「むっ、一夏の放ってか？」

「ボコボコになった所でお前が一夏を助けてやったら高感度UPだぞ。どうせ、今日一日は箒は一夏に近づかないしな」

「なるほど…」

「ほら、さっさと行くぞ」

ラウラの首根っこの掴んで部屋の外に運び出す。

（まるで猫だな……）

ラウラⅡ猫……結構的を射ているような気がする。

「ラウラ、また一夏のところに行ってたの？」

「ああ」

「『ああ』、じゃないだろう」

龍はため息をつく。

「シャルロット、毎度毎度すまない」

「い、いいよ、早起きには慣れているし」

龍はラウラをシャルロットに引き渡す。

「ラウラ、せめて服ぐらいは着ておけ。女の嗜みだ」

「なんだ、一夏が羨ましいのか？　なんなら今度はお前のベッドに行こうか」

「えっ?!」

「何焦っているんだよ……」

いきなり大きな声を上げたシャルロットを龍が不思議そうに見る。

「な、何でもないよ」

しかし、態度や目の配り方が何かあると言っている。

「そうだな、一度でも俺を負かしたら考えてやってもいい」

「そうか、なら今は遠慮しておこう」

クスリと笑うラウラ。その顔が千冬とダブる。さすがは師弟、こういったところも似ている。

（それにしても随分と丸くなったのもだな）

勿論、それはラウラの事だ。先日の学年別トーナメントが終わってからラウラの態度は急に軟化した。さらにラウラは学年別トーナメントの翌日、クラスの中でいきなり一夏の唇を奪う暴挙をやらかった。一夏ハーレムの箒たちはそれを見た瞬間修羅に落ちたが、ラウラのA I Cによって全て鎮圧されている。まあ、当然だろう、彼女たちの実力では束で掛ったところで返り討ちになうのは明白だからだ。

（一夏の惚れたのはまあいいが、何で俺にまでこいつは好感を持ったのかね……）

龍が退院した後、ラウラは龍のもとを訪れ、先日の謝罪と今度こそ実力で勝つ事を高々と宣言した。それ以降、ラウラとの関係は以前のような劣悪なものから友人のそのようなものになった。

（ま、嫌われるよりは遥かにいいが…）

色々話をしている中でラウラは当初感じていたような人物でない事がよく分かった。千冬の教育がよかったのか元来よりの性格なのかは分からないが、性根はかなりいい。軍人なので少々堅物ではあるが、それでもラウラはいい奴だ。同室となったシャルロットも良好な付き合いをできている辺りがいい証拠だ。まあ、シャルロットが世話焼きというものがあるが。

「じゃ、シャルロット、迷い猫^{ラウラ}を頼むぞ」

「りゅ、龍！」

「ん？」

「きよ、今日……一緒に買い物に行かない？」

「今日か……」

顔を赤く染めがらシャルロットが龍の返事を待っている。

「……悪い、今日は外せない用事があるんだ」

「そ、そう…」

目に見えて暗くなるシャルロット。

「今度時間があるときにな」

悪いとは思うが、今日は都合が悪い。

「二人ともそろそろ部屋に戻れ。今日は休日だし、まだ朝早いしな」
「うん…」

「シャルロット行こうか」

部屋に戻る二人を見送った後、龍は踵を返し寮の外に出た。

「――さて、急ぐとするか。“彼女”は時間に厳しいからな」
学園外への移動手段であるモノレールの学前駅を目指す。

二度寝する気も慣れず、シャルロットはいつもよりも早く朝食を取っていた。そこでボロボロの一夏と一緒にになったシャルロットは一夏から買い物の誘いを受ける。

「俺も水着まだだったから丁度よかったよ」

「そう……良かったね」

モノレールに揺られながら二人は今市街地に向かっていく。

（はあ……龍と行きたかったのに）

シャルロットは今朝、龍と水着を買いに行こうと思っていた。

（うう……龍の馬鹿）

女物の水着がないシャルロットは龍の好みを聞きながら品定めをしたかった。

「はああ……」

気は進まないが、一夏から男の子の好みが聞ければ少しは龍好みのものが手に入るはずだ。

「はあ……」

シャルロットは本日何度か目のため息をつきながら車窓から海を眺めた。

市街地最寄りの駅に着いた二人を四つの怪しい目が追っていた。

「ねえ……」

「なんですの……」

怪しい視線を送るセシリアと鈴は隠れるように二人を観察する。学園で一夏とシャルロットを見かけた二人は二人の仲を警戒してこんなストーリー紛いの真似事をしている。実際には二人の心配するような仲ではないのだが、そこはそれ……恋する乙女は何とやら好きな男が他の女と仲良くしていれば、穏やかな気持ちではいられないのは仕方のないことだ。

「アレ……見える？」

「ええ、手を握っていますわ」

「そうか。やっぱり白昼夢でも幻でもないんだ」

笑顔を見せる鈴、しかし目と背後から修羅が現れている。隣のセシリアも同様だ。

「よし！ 殺そう！！」

鈴が利き手の装甲を部分展開する。

恋をしていれば周りが見えなくなるのはいた仕方ないとはいえ、市街地のだ真ん中でISを無断使用するというのは幾らなんでもやり過ぎである。ISの武断使用は場合によると停学……最悪の場合は退学ということもある。

一個人が有するには余りに強大過ぎるISの操縦者には、ISの高い操縦技術だけではなく、モラルや信念も必要である。しかし……。

「なら、私も助太刀しますわ——！」

「行くわよ——！」

B T四機を展開するセシリアに、双天牙月を構える鈴。通報だけ済まされるような状態ではない。下手をしたら外交問題ものだ。だが、肝心の二人はまったくその事に気づいていない。

どうもこの二人にはモラルや道德の概念が欠如しているように見える。

「ほう、面白そうだな。私も混ぜてくれないか？」

最後からいきなり声がかかる。

「ラウラさんっ?!」

「あんた、いつからいたのよ!!」

「そんな事は些細なことだ。それよりもいい加減ISを収納した方がいいぞ」

「ど、どうしてよ...?」

「お前たちは今IS学園の校則に大きく反している。これが公になれば良くて停学、悪くてIS所有権剥奪だ」

さーと二人の血の気が引く。

流石の二人もこの事の重要さは理解できらしく、大人しくISを収納する。

「これで先日の貸し借りは無しだ」

「はあ、それってアンタが私たちをボコった時の言ってるの？」

「そうだ」

「こ、こんな事で許される事だと思ひ？」

「まあ、許せ」

「許せてアンタね……」

鈴の眉間に皺と血管が浮き出る。かなりご立腹のようだ。あれだけボコボコにされた事をこんな事で済まされたらそれは怒りたくなるのも分かるが…。

「そうか。では一夏を追いかける。私はこれで失礼するでしょう」

「ちょ、ちょっと待ちなさい。待ちなさいって言ってるでしょ!」

一夏の追おうとするラウラの肩を掴む鈴。

「なんだ？」

「未知数の敵と戦うときは情報収集が先決。そうでしょう？」

「ふむ、一理あるな。ではどうする？」

「ここは追跡の後、お二人の仲が如何なものなのか見極めるべきで

すわ。違いまして？」

「なるほど。同感だな」

三人の視線がエスカレータを下る一夏の背中に集まる。かくしていつの間にか変な結束力の生まれた彼女たちによる追跡トリオが結成されたのだった。

その頃、龍は一人、シャルロットやバカトリオが来ているショッピングモールの中央にある休憩場に向かっていた。このショッピングモールは駅と直結した非常に規模の大きいモールでその全長は1km近くある。その中央には一階から最上階まで続く吹き抜けがあり、その空間を利用した大きな休憩場がある。

「中々いい雰囲気だな。ここを指定するなんていいセンス持ってるよ」

休憩場には背の低い木も植えられ、さながら林にいるような錯覚を覚える。龍は丁度木陰が出来ているベンチに座ると買ってきたペットボトルをベンチに置いた。

「5分遅刻よ」

「こっちはこんな有様なんだから少しは留意してくれよ」

「怪我が遅れる理由にはならないわ。間に合うように来るのが礼儀よ」

「ごもつとも…」

横から手が伸びてきてベンチに置かれたペットボトルの一つを取っていく。

「午〇ティーのストレート。ソフィアさん好きでしょう？」

「——こんなもので私が許すとても？」

そう言いながらもソフィアはペットボトルの口を開け、紅茶に口をつけた。

「どうぞ」

来る途中で買った女性が喜びそうな可愛らしいデザインのクッキー

ーをソフィアに差し出す。

「――まあ、いいでしょう」

どうやらご満足頂けたようだ。

「――怪我の調子はどう？」

「――医者の見立てでは後1ヶ月は安静だそうです。勿論ISの訓練も厳禁です。まあ、したくても“時雨”はオーバーホール中ですから何もできませんし」

先日の学年別トーナメントで時雨は最新の強襲重武装型が大破しただけでなく、ベースック本体にもいくつか大がかりな修理が必要な破損が出来てしまったため、現在GTIのメインラボでレイラがオーバーホールも兼ねて修理している。

「話によると今回の改修でまた新兵装を装備するらしいです」

「レイラはIS本体よりも武装やOSの開発の方が好きだからね」
紅茶とクッキーを食べ終えたソフィアが口を開く。

「――先日、“FFR-31”がロールアウトしたわ」

「！ ロールアウトはまた先だったんじゃない？」

「最近何かと物騒になってきたから……有事の際の保険にね。数日中にも私の所に“スーパースルフ”が来る予定よ」

「“スーパースルフ”ですか。余り大それた事したらIS委員会も黙っちゃいませんよ」

「その点は問題ないわ。私もお爺様も馬鹿じゃないし」

「ならいいんですけど……」

「あなたも……時雨と飛べるのは後少しになるわ」

「……」

龍は何も答えない。

「――新型ISの開発タイムスケジュールは前倒しが決定している。
“FA-2”のロールアウトも早まったわ。リヴァイヴの件もあるし……」

「機体制御システムは完成したんですか？」

「レイラが徹夜して仕上げてくれたわ。最もこれから機動データを

収集してデバッグや調整をしないと駄目だけど」

「リヴァイヴの件は？」

「とりあえず、強化モジュールで次の機体まで繋げる予定。何とか臨海学校までにロールアウトさせるそうよ」

「間に合いますか？ 時雨の調整もありますし」

「さあ、そればかりはレイラの頑張り次第ね」

「間に合えばいいですけど」

そう呟くと龍はベンチから立ち上がった。隣に座っていたソフィアも立つ。

「さあ、これで仕事は終わり。これからプライベートな時間よ」

そう言うソフィアは龍の腕に手を回し、恋人のような真似をする。

「――ソフィアさん」

「堅物なのは変わらないわね。今はプライベートよ、プライベート」
♪

「――フィー姉」

「あなたもどうせ暇なんだから“紳士”らしくエスコートなさい」

龍は逃げられないと悟ったのかため息をつく、大人しくソフィアをエスコートする。

「久しぶりの日本だし、買い物ぐらい付き合いなさい。あなたとこうやって過ごすのも久しかったし」

「分かりましたから腕を開放してください」

龍の講義をやんわりと受け流すソフィア。どうやら開放する気はないらしい。龍は再びため息をつく。しかし、その表情はいつものそれよりも柔らかかった。

一夏とモールを歩いていいしたシャルロットは人ごみの向こうを歩く龍の後ろ姿を見つけた。

「えっ?!」

「ん？ どうした、シャル？」

シャルロットがいきなり声を上げたので一夏が首を傾げる。

「う、ううん。何でもない」

だが、シャルロットは動揺を隠しきれない。

（ど、どうして龍があんな美人と……）

先ほど見た龍の隣には背の高い美人の女性が居た。

「……………」

龍は先約があると言っていた。先ほど見た女性の事を考えると、龍の約束の相手は彼女となる。

（も、もしかして…………彼女？）

あんな美人が相手では勝ち目が無いのでは…………？

（そ、そうだよね、龍はカッコいいし…………いてもおかしくないよね）
一瞬見えたただけだが、確かにこの目で見た。

（…………でも）

龍が消えていった方向を見る。

お似合いのように見えた…………自分が邪魔できるような隙なんて無いぐらいに…………。

「でも……」

シャルロットの脚が止まる。

「ん？ どうした、シャル？」

「え、えくとゴメン一夏！」

両手を合わせて頭を下げるシャルロット。

「今日外せない用事があったのを思い出したの！」

「お、そうか。こっちは気にしなくていいぞ」

「うん、ゴメンね、一夏！」

それだけ言うとしシャルロットは龍の後を追いかけた。

「…………そんなに急ぎなのか？」

一夏は一人首をかしげた。

龍とソフィアは恋人のように腕を組みながらショッピングを楽しんでいた。

「フィー姉……」

「――分かってるわ」

二人はショッピングを楽しみながらも警戒心を解いていなかった。

「付かれていますね」

「ええ、何人かしら……」

「分かって聞いていますね？」

「大丈夫よ、ここで読み間違えてもお小遣い削ったりするから」

「削るんですか？　てか、それ以前俺フィー姉から貰っていませんけど……」

「マリアに言って削らせるわ」

「――不憫な姉さん」

ソフィアはマリアが最も苦手とする相手だ。中は決して不仲ではなく仲のいい姉妹同然なのだが、いかんせんソフィアは少々口が強い……というか上手い。あの不知火源一郎ですら口喧嘩で勝った事が無い。

（また高級フランス料理店とかで奢られるんだろうな、姉さん……）

「で、何人？　当てればマリアの事も問題ないし」

ため息をつく龍は後ろ側に意識を集中した。

「――単独ですね、余り腕も良くないです。気配の消し方がお粗末過ぎます」

「――60点」

辛口な評価だ。

「まだまだ青いわね。“そこまでしか読めない”なんて」

まるで教師が生徒を見るような目をするソフィア。龍は馬鹿にされたような気がしてならない

「……………」

「あら、文句でもあるのかしら？」

「……いいえ、別に」

微妙な間……ソフィアは龍が少なからずその評価に不満があるのを感じ取った。

「技術的面なら80点よ。でも総合で見たらある一点が欠けているから」

「だから60点？」

「いじけないの、もう……まだまだ子供ね」

「まだ16ですから」

まったくその通りだが、不満たらたらな口調で言っでは説得力の欠片も無い。

「そんな事よりも誘い込まなくていいんですか？　今の俺じゃあ足手まといだし」

「なら袖の中にナイフを隠すのは止めなさい。怪我人は怪我人らしくね」

「それは無理です」

「じゃあ怪我人とはカウントしないから——次の角で誘うわよ」
「分かりました」

「あれ？」

龍たちの後をつけていたシャルロットだが、急に二人を見失ってしまった。

「どこに行ったんだろう……」

辺りをウロウロする。しかし二人は見当たらない。

（見失っちゃったかな……）

諦めようか考えた時、奥の路地に入っていく龍の後姿を見つけた。

「あっ」

慌ててその後を追う。少し待ってから路地に入る。

「あれ、いない……」

路地には龍の姿は無かった。もしかしたら奥に行ったのかも……

シャルロットが足を踏み出そうとしたその瞬間。影からいきなり何かが出てきた。

「――探し人は私かしら？　それとも」

「――俺か？」

「え？」

一瞬の出来事だった。気づいたらシャルロットはこめかみに銃口を、首筋にナイフの刃を押し当てられていた。

付けていた相手の首筋にナイフを押し付け、拘束する。

「何で俺達を付けて……た……」

龍の言葉が途切れる。暗闇でよく見えなかった相手の顔がぼんやりと見えてくる。

「じゃ、シャルロット？」

付けていた相手……それはシャルロットだった。

「はあ……やっぱりね」

シャルロットの事を分かっていたのかソフィアは少し呆れ顔をしながら銃口を下ろす。龍もナイフを袖の中に戻す。

「フィー姉、分かっていたのなら何で言わなかったんだよ」

「だって面白くないじゃない」

「面白いかどうかで決めないでくれ……」

龍は頭を抱える。気づけなかった自分もアレだが、知っていて何も言わないソフィアもソフィアだ。

「それよりもあなたは何でこんな事をしたのかしら？」

「え？　え、え……」

お茶を濁すシャルロット。普通誰かを付ける理由なんて人様には言えないようなものだ。だが、ソフィアは追及の手を緩めない。

「あなたの視線はよく感じたけど、どちらかと言えば龍のほうばかり見ていたわよね？」

「うっ?!」

言葉を詰まらせるシャルロットにソフィアは耳打ちをする。

「私も女だからね、分かっちゃうのよ……あなたの気持ちかね」
「……ッ!!」

シャルロットの顔が真っ赤になる。ソフィアはそれを見て「初心ね」。リユーには勿体無いぐらい」だと話の読めないことを言う。

「リユー、あなたは彼女の相手をしてあげなさい」
「何でそうなる？」

話が読めていない龍はどうしてソフィアがそんな事をいうのかその真意を読み取ることが出来なかった。

「はあ……あなただって昔から気づかいは出来ても、こういった事に鈍いところがあるから」

嘆かわしいと悲しそうな顔をするソフィア。龍は何故か馬鹿にされたような気がしてならなかった。

「兎も角、これを気に仲を深めるのもいいでしょ。私もそろそろ戻らないといけないし」

「時間が迫っているならそう言ってくれよ、フィー姉」
「今度からそうするわ」

ソフィアは龍の頬に軽いキスをする、悪戯っぽい顔になった。
「シャルロットちゃんが可愛いからって襲っちゃ駄目よ。女の子が繊細なんだから」

「んなことするか!」
ソフィアは大人な女性らしい妖艶な笑みを浮べ去っていった。

「——たくっ」
龍は左手に握らされた“もの”に視線を落とした。

(本当の用件は先に終わらせておけよな、フィー姉の馬鹿……)
今はいない姉貴分のソフィアに文句を言いながら、それをポケットの中に押し込む。

「さて……」
「……」

振り向くとそこに真っ赤な顔をして呆然としたシャルロットが立

っていた。

「……………」

「…イタッ!」

龍は無言でシャルロットの額にデコピンをお見舞いする。

「人の話を聞いているのか?」

「ご、ゴメン」

シャルロットは胸の前で手をモジモジさせながら龍の顔色を伺う。

「ねえ、さっきの人って龍の……彼女?」

「はあ? 何言ってるんだ、お前」

何故そういう考えにたどり着くのか分からない龍は首を傾げる。

「お前も一回会っているだろうが。俺の姉貴分で今シャルロットが籍を置いているSSSのテストパイロットをやっている……」

「あつ、ソフィアさん」

思い出したようだ。

「で、でも腕を組んだりとか……」

「スキンシップの一つだ」

「き、キスしたりとか……」

「フランスでもあるだろう? 挨拶代わりのキスが」

「うう……」

どうやらシャルロットはソフィアとのショッピングを見て、恋人とのデートと勘違いしたようだ。

（端から見たらそう見えたのか……?）

当人である龍はまったくそんな事を思った事はなかったが、他人から見たらそう見えるのかもしれない。ソフィアは10人いれば10人とも美人と言うぐらい美しい容姿をしている。その肢体も実に良く、その豊満な胸は男の誰もが羨むものだといっても過言ではない。そんな美人を連れて歩いていたら恋人のように見られてもおかしいのではないだろう。そして多くの恨みを買ってもいっても不思議はない。

「……………とりあえずだ、シャルロットの思っているような関係じゃ

ない。そもそも俺とフィー姉は姉弟だ」
きょうだい

「う、うん。ゴメンね、勘違いしちゃって」

「別に構わないが……」

何となく気まづくなる。龍は何とか話題を逸らそうとネタを考えた。

「――今からじゃ遅いかも लेकिन、買い物でもするか？」
「え？」

「ここに1人でいるって事は今日俺を買い物に誘うつもりだったんだろう？俺も今はフリーになった訳だし、シャルロットがいいなら今からそれに付き合っても……」

「い、いいの!？」

「あ、ああ……」

顔を赤くしながらも嬉しそうな顔をするシャルロット。余程嬉しかったのかその場で軽くジャンプしている。

(……そこまで嬉しいか?)

龍はシャルロットがそこまで喜ぶ理由が分からなかった。

(……まさかな)

龍は頭に浮んだ可能性をもみ消した。彼女にそんな気持ちがある事が信じられなかったからだ。

「――時間が勿体無い。行くならさっさと行くぞ」

「うん!」

横に並ぶシャルロット。龍は無性に居心地の悪さを感じた。

買い物デートを始めた二人が行ったのは夏物の服が売っているコーナーだった。

「――で、俺を付き合わせたかった理由はこれか？」

「う、うん……」

龍の目が白いものに変わる。龍が連れて来られたのは何と女性水着の売り場だった。

（し、視線が痛い……）

明らかに周りから奇異な目で見られている。男である龍にはかなり居づらい空間だ。

「や、やっぱり嫌だよね……ゴメンね、無理矢理連れてきたりして……」

龍の無言と態度を気にしてかシャルロットが腕を引っ張って売り場から離れようとする。

（約束したのは俺だからな……）

口約束でも約束だ。シャルロットが買い物を一緒にしたがっているのは先程の事からよく分かっている。

「最後まで付き合うから……できるだけ手短に頼む」

「う、うん！　ちよっと待ってて」

シャルロットは水着売り場の方に入っていく。シャルロットには悪いが、売り場の外で待たせて貰おう。男の自分が長時間女性専用売り場においては変体扱いされても文句は言えない。

「水着か……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～」

シャルロットを待っている間に買っておいてもいいかもしれない。

「……いや、買い損になるだけだな」

先日の負傷がまだ治っていない状態で海水浴など不可能だ。医者の見立てでは完治にまだ掛かるらしいし、そもそも骨折した状態では泳ぐ事も出来ない。

「まあ、仕方ないか……」

今回は致し方ない。それに臨海学校の本来の目的は海水浴でも遊びでもない。隔離された場所で新型パッケージの運用テスト及びより実践的な訓練等々……ISの共同公開と実践テストが本来の目的だ。ISについての技術は公に公表することが義務付けられているのでIS学園でもこういった公表の場を用意しておかなければならないのだ。

（IS学園から離れた場所で一斉に新型パッケージのテストか……何か起きてもおかしくないネタだな）

ここ最近連続して起きたIS学園の襲撃とISの暴走事件……。

（あの“無人機”……結局現在も出所は不明。そして先日のシュヴァルツェア・レーゲンに仕込まれていたVTシステム……ドイツ軍は知らんの一点張りだが、もしそれが本当だったのなら）

仮定の話だが、関連性は捨てきれない。

（だが、どうにも解せない……）

仮に同一犯の犯行としてもこれだけの騒動を起こす理由が読めない。

どんな事象でも理由が存在する。しかし、二つの事件からその理由を読み取る事はできない。

（IS学園に喧嘩を売る……それは実質世界に喧嘩を売っていることと同じだ。それだけの大事を起こす理由は……そこからどんな利益が得られる？）

現状のISは冷戦時代の核兵器のようなものだ。保持するだけで自衛と同時に「いつでも敵国を攻撃できるんだぞ」と無言の圧力をかけることができる“強力な兵器”。それを一個人もしくは組織が手にした場合、世界のパワーバランスは崩壊する。事実IS学園の事件が公になると同時にIS開発の予算を増額や軍備増強の流れが生まれた。もうすでに崩壊の兆しは出ているのだ。

（だからこそ、爺さんもレイラも新型機のロールアウトを前倒しにしたんだろうな）

まだ見ぬ新型機のカタログスペックは龍も見ただことがある。あれは今までのISとはある種一線を引く機体に仕上がっている。

「龍——っ、ちょっと来て！」

「今行く！」

（色々考えたってどうしようもないか……）

今はシャルロットとの買い物を楽しむ事にしよう。

：

……

……

売り場に戻った龍を待っていたのは水着を片手に吟味するシャルロットだった。

「ど、どれがいいかな？」

「……」

（付き合うとは言ったが、まさか水着を選ばされるとは…）

正直逃げ出したい境地だ。しかし生真面目な龍は約束を放棄するというのがどうにも出来ない。つまり……。

「ねえ、あんな所に男がいるわよ」

「どうせ彼女の水着選んでいるんでしょ。ああ、お熱い事で……」
「でも結構彼イケてない？」

「もう売れちゃっているなら無理でしょ。確かにいい男だけど」

耳に入ってくる周囲の女性の話声……そしてマシンガンのように無数に飛んでくる奇異な視線……龍はこれらと戦わなければならなかった。

「——とりあえず試着してみてください」

「うん！」

シャルロットが試着室に消えたところで龍はため息をついた。

（正直きついな……できればさっさと逃げ出したい）

こうなればシャルロットにできるだけ協力してさっさと水着を選んでもらおう。それしか脱出の術はない。

「りゅ、龍……着替えたよ」

カーテンが開く。シャルロットが来ているのは白のビキニタイプの水着だ。

「後何着あるんだ？」

「えーと、これ足して3着」

「悪いが残りも着てみてくれ。比較したい」

「うん」

シャルロットは再び試着室に引っ込む。2着目の水着は青を基調とした胸元にリボンと腰のパレオがついた水着。ビキニではあるが、先ほどの白よりも露出は控えめだ。3着目はビキニとワンピースの

中間だろうか背中は見えているが、前は上下繋がっているタイプの水着だ。基調の色は黄色。

「……………」

ビキニもシャルロットのスタイルなら見劣りする事はないだろうが、彼女のイメージと少し合わないような気がする。かといって2着目はパツとしない。

「3着目かな」

露出は多過ぎず基調もシャルロットに合っている。一番シックリ来るとでも言えればいいか。

「3着目だね、分かった」

他の水着を戻しレジに向かうシャルロット。

「おい、あくまで俺の意見だぞ、シャルロット自身はどうなんだ？」

「どれにしようか迷っていたところだったから、それに龍が選んでくれた水着だし」

顔を赤く染めながらシャルロットはそう言った。

「……………」

不意打ちとはいえ、今の笑みは反則過ぎる。

（たく…………俺は恋する乙女か）

自分の初な反応を叱責する。水着を買い終えたシャルロットと合流した後、すこしモールの中を散策することになった。特に買うものはないが、見ているだけでもそれなりに楽しめる。

「あ……………」

「ん？ どうしたの？」

「ちょっと寄り道していいか？」

龍が足を止めたのはアクセサリーショップだった。

「いいけど……………」

「ちょっと“姉さん”にな。色々迷惑かけたし……………女性の好みはよく分らんから見立ててくれないか？」

「うん、分かった。買うのはネックレスとか？ それともブレスレット？」

「そうだな……余りチャラチャラしたものは二人とも好きじゃないだろうし、ブレスレットの方がいいかな」

シャルロットが龍の言った好みを基に並べられたブレスレットの中から似合うであろうものを見つけ出す。

「じゃあ……こういうたのがいんじゃないかな？」

シャルロットが進めてきたのは銀色をしたリングに青い宝石のようなガラスがはめ込まれたブレスレットだった。細かい細工が施されており派手ではないが大人な感じの品のいいブレスレットだ。

「ふーん、こういったのが女性の好みなのか……」

「参考になって何よりだよ」

「ちなみにシャルロットならどういったものが好みなんだ？」

「僕の？」

「比較にな」

シャルロットは再びケース並んだ中から自分の好みのブレスレットを選ぶ。

「これ……かな」

選んだブレスレットは先ほどと同じ銀色だが、こちらには花を模かたどった細工がされている。

「なるほどな……ちよっと一人で選びたいから待っててくれるか？」

「うん、分かった」

シャルロットが離れたところで龍は店員を呼んでケースの中から“二つのブレスレット”を購入した。

「悪い待たせた」

「ううん、気にしないで」

店を出たところで龍はシャルロットの頭の上に一つの箱を置いた。
「え？」

その箱を手を取ったシャルロットが声を上げる。

「今日の詫びと選んでくれた礼だ」

箱を開けると中には先程シャルロット本人が選んだブレスレット

が収まっていた。

「いいの？」

「いないのか？」

首を横に振るシャルロット。

「なら貫つとけ。ほら行くぞ」

「うん！」

ブレスレットをしたシャルロットが横に並ぶ。龍は少し恥ずかしさを覚えながらもシャルロットの横に並び歩いた。

第十三話くレイン・メーカーく（後書き）

マーズです。最近PCの調子が悪くって世代交代しました。

今話、何故か会話文だけなのに字数が13万字突破……。

でも、今回は結構楽しくスラスラ書けたので良かったです。内容も自分なりにうまくできたと思っていたりします。

次話は臨海学校！ 次は箒や一夏たちにも光を当てなければ……。今回もメインは龍とシャルロットになってしまったので他のキャラにも喋らす機会を作ろうと思っていますが……。なかなか思い通りにいきません。

ご意見・感想がありましたら、是非一言お願い致します。
ではまた次話更新の時に……。

第十四話くオーシャンズ・イレブンく

「海だ——ッ!!」

誰かが上げる。それに反応して車内の女子たちが一斉に窓の外を見る。

「——着いたのか？」

曲を聞きながら仮眠を取っていた龍が目を覚ます。

「龍起きた？」

「ああ……」

眠そうな声を上げなら龍は耳に付けたヘッドホンを外し体を起こす。

「あ……」

車窓の外には地平線の向こうまで続く海が広がっていた。

「——いい景色だな」

「うん、話によるとビーチも広くて眺めがいいそうだよ」

「そりゃ、楽しみだな」

龍は珍しく心が弾んでいた。

「あ、でも龍……」

シャルロットの視線が右足に注がれる。

「ま、仕方ないさ」

龍は先日の怪我がまだ治りきっていなかった。骨折した右脚や胸骨はまだ完全に癒着していないのだ。そのため、龍は今回海水浴は楽しむことが出来ない。

「一応治ってはいるんだが、癒着したばかりだから余り負荷をかけるな言われているからな」

「残念だね」

「なに、機会はまたあるさ……そろそろ着くぞ」
バスが旅館の駐車場に止まる。

バスを降りた途端、千冬からの号令で全員が整列する。

「ここが今日から3日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「よろしくお願いします」」

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気がありますね」

毎年、IS学園はこの旅館で臨海学校を行っている。そのため、この女将さんとはすでに馴染みだそうだ。

「あら、もしかしてその男の子が噂の……」

「はい、もう一人いますが……ラインフォード、何をしている早くこっちに来い！」

「……片足を不便していることを忘れていませんか？」

バスから全員降りるのを待ってから降りてきた龍は少し不満げそうな顔をする。龍は杖を突きながら千冬の元まで移動した。

「今年は男子がいるせいで浴場の振り分けが難しくなっちゃってしまい、申し訳ありません」

「いえいえ、それにしても二人とも男らしくってしっかりしてそうじゃないですか」

「いえ、こっちはまだマシですが、愚弟の方は……ほら、挨拶をしろ、馬鹿者」

一夏の頭が千冬に押さえつけられる。龍もギロリと千冬に睨まれる。

「お、織斑一夏です。お願いします」

「龍・S・ラインフォードです。3日間よろしくお願いします」

「あら、ご丁寧にも、女将の清州景子です」

女将さんは綺麗なお辞儀をする。自然と龍も頭が下がった。

——気品と品格のある女性だ。どこぞの鬼畜シスターズとは大違いだな。

龍は心の中でそう呟いた。一体誰のことを言っているかは名前を聞かなくとも察しが付く。

「そうそう、織斑先生。先発の先生はすでに到着していますよ」

「先発？ そんなのは聞いていませんが……」

千冬が首を傾げる。その時、旅館の中から一人の女性が出てきた。腰近くまである金色の長髪が動きに合わせてふんわりと広がる。海のように深く透き通った碧眼からは確かな知的さが窺える。

「――げっ」

露骨に嫌そうな顔をする龍。

ニコリ――。

女性が可愛い笑みを浮かべた瞬間、右手から光る何かが飛んできた。ナイフ……と脳が認識する前に体が動く。回転して飛んでくるそれを左手が捉える。周りの女子や旅館の従業員ですら突然の出来事に言葉を失う。

「――いきなりナイフを投げるなんてマナーがなっていないですよ、姉さん」

「あなたが露骨に嫌そうな顔をするからでしょう」

龍が投げ返したナイフを受け取る“マリアーナ”。

「――マリアーナ、何故お前がここにいる？」

千冬がいぶしがけに尋ねる。

「あら、IS学園の教師としてに決まっているじゃない」

「そんな冗談が――」

キレ気味の千冬が詰めようとするマリアーナがその顔に何かを突き付けた。

「これを見ても冗談だと思う？」

「……」

突き付けたのはIS学園の教員が待つ身分証明書だった。

(なるほど、堅物な千冬さんには効果てきめんな方法だな)

大方、あのエロ爺が裏で糸を引いているのだろう。現IS委員会ともプライベートで深い関係を持つ不知火・源一郎だ。多方面に“お願い”を通すのもさして難しい事ではない。

「さてピカピカの一年生諸君、これからしばらく臨時教員としてあ

なたたちを“教育”することになった私はマリアーヌ・ラインフォードです。宜しくね」

暫しの無音の後……。

「「「キャアア————ッ！！！」」」

そしていつも通りの歓声が轟いた。

「——面倒な事になった」

龍の呟きは騒ぎ出す女子たちによってかき消されていた。

結局騒ぎの起こしたマリアーヌは千冬に連行されながら旅館の中に消え、騒ぎが止まらない女子たちは山田先生が止めることとなった。しかし、興奮が醒めきれない女子たちは全く先生の言うことを聞かない。いい加減いらしていた龍がドスの聞いた声で制止してようやく女子たちも静けさを取り戻した。

「やっと一息入れられる」

旅館のホールにあるソファに腰を下ろして龍は深いため息をついた。因みに女子たちは部屋に荷物を置き別館の更衣室で水着に着替えている。が、龍は怪我のため眺めのいいこの場でのんびりと過ごしている。

「いい御身分ね、私は千冬にこってり絞られたのに」

「どうせ、のらりくらい避けて逃げてきたんでしょ」

「心外ね、ちゃんと言いくるめて逃げてきたわ」

——大差がないのでは？

そんな疑問が頭を過ったが、口にはしなかった。マリアにしろソフィアにしろ龍は口で勝ったことが無い。言うだけ無駄というものだ。

「さて、怪我の方はどう？」

「骨の癒着がまだ完全じゃないから大事を取って安静にしていると
言われている」

「——そう」

マリアが横に腰を下ろす。その時、すうと何かが渡された。

「レイラから言付けよ『もう壊すなよ!』——らしいわ」

渡されたのは待機モードの時雨だった。待機モードの設定を弄ったのかグローブは同じだが、さらにチェーンが巻きつけられている。「流石はレイラ。この短時間で時雨を改修するなんて」

「この前あったら目に隈が出来てたわ。後でお礼をしなさいよ」

「分かってる」

待機モードの時雨をポケットに押し込む。

「後これ。彼女に渡しておいてくれない？」

ひし形をしたアクセサリが渡された。真ん中にエメラルドのよな輝きがあるガラスがはめ込まれている。

「——量子変換された武装パッケージ？」

「お見事。試作されたラファール・リヴァイヴ用のバージョンアツブパッケージよ。カタログスペックなら後期第3世代機にも劣らないスペックがあるわ。勿論パイロットの腕次第で無用の長物になる可能性もあるけど」

「あいつなら使いこなしますよ。設計はデュノア社ですか？」

「元はね、でもそれじゃ物足りないからってレイラがかなり弄ったわ。はつきり言って初期のコンセプトは形骸化しているわね」

「——大人しく作り直したと言った方がいいのでは？」

「そうでもない」とデュノア社の顔が立たないのよ。表向きリヴァイヴの開発はデュノア社がメインでやっている事になっているから」

「——なるほど」

先日のデュノア社との契約によりシャルロットはこちらのテストパイロットに、そして実質リヴァイヴの所有権は不知火財閥が握ることになった。正確にはリヴァイヴの所有権はデュノア社——フランスが保有しているのでこの表現には語弊があるかもしれないが、デュノア社は不知火財閥に対して大きく出ることはいらない。下手にこちら側の機嫌を損ねれば折角の共同開発の話も無くなってしまう

う可能性があるからだ。

さらに不知火財閥は今契約の中にEUでの市場協力も結んでいる。要はEU内でのGTI社製商品の売るための市場を提供しろということだ。

「遅かれ早かれデュノア社は潰れますね」

「ええ、例え第3世代機の開発が上手く言っても今回の騒動で出た損失を補うのは難しいでしょう」

シャルロットには悪いが、デュノア社の将来は明るくない。先日
の事件は大きく公表されはしていないが、それでも世論の反感を買
った。そしてその煽りによってフランスも大きな痛手を受けている。
まあ、シャルロットの性別隠蔽には政府レベルでの干渉が無ければ
成立するはずが無いので自業自得だが。

「信用を失うデュノア社を救済した不知火財閥……か」

それが世論の見方だ。

「お爺様はそこまで読んで契約話を振ったんでしょね」

「いい性格をしてるよ、あのエロ爺」

龍の脳裏に、ホホッと笑うエロ爺こと不知火・源一郎の顔が浮かぶ。

「さ、暗い話はこれぐらいにしましょう。折角ゆつくりできるんだし」

そう言うとき MARIA はその豊満で柔らかそうな胸に龍の頭を押しつけた――ゴホン、抱き込んだ。

「――MARIA 姉さん」

「はあ、久しぶりのリユー君♪ 相変わらずの抱き心地」

頭を抱き込む腕に力が入っていく。いや、頭が締め上げられていく。

「この前会うまで全く会う時間が無かったし、あなたはあなたで全く連絡を寄越さないし……心配したんだから」

龍の頭部から“ミシ……ミシ……”や“ボキ……バキ……”という音が聞こえてくる。

「ね、姉さん……死ぬから」

「——えい♪」

ボキッ！

不吉な音がホールに響いた。

「——はっ！」

ソファから飛び起きる龍。首に不自然な痛みがある。

「——気絶していたのか」

周りを見渡してもマリアの姿は見当たらない。時計を見ると10分ほど意識を失っていたようだ。

（まさか姉さんがあそこまで怒っていたとはな……）

触らぬ神に何とやら……：：～
後はもう少し気を配った方が身のため
の样だ。外を見てみると女子たちが楽しそうに海水浴を楽しんでいた。どうやら各々楽しく満喫しているようだ。

「ま、暇だし。少し行ってみるか」

ソファから腰を上げる。

海岸線に出てみるとこちらを見つけた女子たちが群がってきた。

「あ、ラインフォード君！」

「一緒に泳がないの？」

「こんな状態だからな」

「え」

「残念だね」

「ま、俺のことは忘れて楽しめよ。明日から本格的に訓練が始まるんだしな」

「うん、じゃあまたね」

女子が散ったところで砂浜のど真ん中にあるパラソルを目指して足を進める。だが、足を進めようとするすると右手の杖が砂地にめり込んだ。

「ま、少しぐらいなら……」

右脚に少し体重を逃がす。龍が久しぶりの砂浜を楽しみながらパラソルまで来てみるとそこには不機嫌そうなセシリアがいた。

「何だセシリア。そんな不機嫌そうな顔をして」

「あら、龍さん。てっきり旅館の方で休んでいるかと」

「向こうにいても暇だしな、場所借りるぞ。後適当な話で誤魔化そうとするな、見え見えだ」

龍はセシリアが用意したのであろうパラソルの影に腰を下ろす。シートの上には中身の減ったサンオイルが転がっている。セシリアの体を見てるとオイルを塗った跡が見える。そして不機嫌そうなセシリア。その3点から龍はセシリアの不機嫌の原因を読み当てた。

「高がサンオイルの一つや二つでそんなに怒るなよ、セシリア」

「なっ?! わ、わたくしは怒ってなどおりません! 大体サンオイルの事は一夏さんと鈴さんが――」

「ほう、やっぱり一夏がらみか」
そこでセシリアは龍の簡単な誘導自問に掛かっていた事に気付いた。

「りゅ、龍さんッ!」

「だからそうキリキリするな。折角に海に来ているんだからさ」

「――そうですわね、では龍さん。代わりにサンオイルを塗ってくれませんか?」

セシリアは誘導尋問された腹いせかサンオイルの入ったボトルを龍に押し付ける。龍は少し考えるような仕草をするとそのボトルを受け取って……

「……………」

無言でセシリアの脇腹を捻った。

「いっ?!」

「人を誰かさんの代わりみたいに扱うな」

文句を言いながら龍はサンオイルを手のひらに広げる。

「――そうですわね、失礼な言い方でした」

「普通に言えばそれでいいさ」

「ではお願いできますか？」

「はいよ……」

龍は手に広げたオイルをセシリアの背中に広げていく。

「しかし、セシリアも随分と丸くなったな」

「そうですか？ わたくしは前から普通でしてよ」

——おめでたい奴め。

口にくそ出さないが、龍が初めて会った頃のセシリアは今以上に自尊心が高くそして鬱陶しかった。今でこそ落ち着いてはいるが、その本質に大した変化は起きていない。

（しかし、何でセシリアは一夏に好意を持ったのかね……試合はセシリアの勝利で終わったのに）

姉を持つ龍でも秋の空の様に移り変わる女心を読むことはできない。そこまで詮索する気もさらさらないが。

「そういえば、セシリアは“金のブリュンヒルデ”を崇拝してたな」

「崇拝ではなく、“憧れ”ですわ」

ムツとしたセシリアが後ろの龍を睨む。

「どちらにしても会いたいんだろ、姉さんに一声掛けておこうか？」

「えっ？ 宜しいの？」

「人の好意は大人しく受け取っておけ——ほら終了だ」

サンオイルが塗り終わった龍はセシリアの背中から手を離す。本音ではもう少し触っていたかったが、流石にこれ以上はセクハラの域だ。

「で、ではお願い致します」

「ああ」

手に付いたオイルを引き終えた龍はセシリアと並んで海辺を眺めていた。

「……ん？」

その時龍は少し沖の方で水しぶきが上がっていることに気付いた。この海岸は入り江のため余り白波が立たない。さらに1ヶ所だけ水しぶきが上がっていることから考えて、それを起こしているのは“

人”と考えられる。よく見ると少し先の方でもしぶきが上がっている。どうやら遠泳の勝負でもしているのだろう。

「元気なものだな」

そう呟いた瞬間、手前の水しぶきが大きくなったかと思えば、いきなり消えた。

「ッ！」

水しぶきがいきなり途切れたということは……。

「溺れている!?」

上着を脱ぎ捨てて。

「龍さん?!」

「沖で誰かが溺れている。セシリアは先生か姉さんと呼んできてくれ！」

左手に時雨を装着する。

（来い、時雨!!）

久しぶりのコール、時雨はいつも通り龍のイメージを具現化していく。左足と背部の可変パワーウィングを1基部分展開する。

「ブーストッ！」

龍は砂を吹き飛ばしながら海面を滑るように進む。展開から10秒で誰かが溺れたと思われるポイントまでたどり着く。龍は時雨のヘッドギアをコールすると海水の中をスキャンする。

（反応あり、やっぱりだ）

時雨を収納、龍はそのまま海中に飛び込んだ。ズボンやシャツが動きを阻害するが、それでも何とか態勢を整える。下を見ると見慣れたツインテールが目に入った。

（鈴ッ!）

溺れていたのは鈴だった。龍は潜水して鈴の腕を掴むと胸に抱き込んで海面に上がる。

「ぷはーッ！」

盛大に息を吐き出して新鮮な空気を肺に取り込む。

「鈴、しっかりしろ!!」

龍は鈴の体を支えながらその頬を叩く。しかし、反応が返ってこない。龍は鈴を抱き直すと右手を振り上げ、鈴の胸部を力いっぱい叩いた。

「――ごほっ！……けほ……っ！……」

鈴が大きくむせ上がる。どうやら今の一撃で気管に入っていた海水が吐き出たようだ。鈴は何度か大きくむせ上がった何とか呼吸も落ち着き、体の力も戻ってきた。

「い、一夏……？」

まだ朦朧としているのか鈴は龍のことを一夏と間違えているようだ。

「一夏じゃなくて残念だったな」

「……龍？」

ようやく意識がしっかりしてきた鈴は自分を抱き抱える龍の姿と自分の姿を見てようやく事態を飲み込んだ。

「あたし……溺れたの？」

「ああ、気付くのが遅かったら危なかった」

「おい、どうした？！」

と、そこに先を泳いでいた一夏がやってくる。

（何を今さらノコノコと……）

だが、龍は喉まで上がってきた言葉を寸前で飲み込んだ。フラフラの鈴に聞かせるべき言葉ではないし、今さら一夏を罵声しても何の意味もない。それにまずは鈴を陸にあげ、休ませなければ。

「鈴、掴まっている。時雨を部分展開して移動する」

「う、うん……」

「一夏そういうことだから先に行く」

「お、おう……」

説明も早々と終わらせると龍は時雨を部分展開し砂浜に移動した。砂浜ではマリアと医療キットを持ったシャルロットが待っていた。

「全……ISを私用で使うのはルール違反よ」

「人命が掛かっていたんだ。固い事は言わないでくれよ、姉さん」

「分かっているわ。それよりもその子は大丈夫？」

「海水を少し飲んだようだが、今のところは落ち着いている」

鈴を陸に下ろす。それをシャルロットが支える。

「大丈夫、鈴？」

「ええ、一応は…」

鈴をパラソルの下まで運ぶとマリアはテキパキとその容態を確認していく。

「龍こそ大丈夫なの？」

シャルロットが龍に声をかける。

「ああ、時雨を展開していたからな」

時雨を待機モードに戻した龍はシャルロットの肩を借りてパラソルまで移動する。

「とりあえずは大丈夫そうね。念のため旅館の方で休んでいなさい。体調が少しでも悪くなるようならすぐに誰かに言うように、いいわね？」

「は、はい……」

「龍は彼女の付き添いを、濡れた服も着替えた方がいいしね」

「分かった」

この場にマリアに任せ、龍は鈴を連れて旅館に戻った。

旅館まで戻ったところで龍は従業員に事の次第を説明して鈴を任せ、自分は部屋に戻って服を着替えた。途中、人参の形をした異様な物体を見つけたが、見ない事にして流した。

「さっきので怪しまれなければいいが……」

右脚の簡易ギブスを付け直す。実のところ、龍の怪我はほぼ完全に完治している。骨折していた肋骨や右足の骨も最新の医療用ナノマシンで治癒を促進したのもう普通に運動できる。それでもそう見せないよう偽装しているのには彼なりの考えがあるからだ。

（全く俺も疑り深くなったものだな……）

自分の考えに嫌気が刺す。龍は今回の臨海学校でまた何かが起ると踏んでいる。今までの事件を振り返ってもクラス対抗戦、学年別トーナメントなどどれも学園の大きな行事の時を狙って起きている。今回も同様に何らかの事件あるいは事象が起きて何ら不思議はない。そして龍にはそう思わしてくれるだけの材料があった。

龍は先日ソフィアから渡された“データメモリ”を携帯端末に接続する。

「約1月前、イギリスで開発されていたティアーズ型2番機が何者かによって奪取された……その1週間後、カナダの新型軍用ISが謎の組織によって奪取、襲撃を敢行した組織については全く不明、同様にイギリスを襲撃した犯人についても大きな情報はなし」

メモリの中には不知火財閥諜報部局が調べたIS奪取に関する情報が詰まっていた。そしてこれが龍が根拠とする最たるものである。

ここ数ヶ月、不知火財閥が確認しているだけでも4件、ISに関する事件が起きている。そしてその全てが巧妙に隠蔽され表沙汰になっていない。現在ISが占める戦力、そして外交力は計り知れない。そのISが他勢力に奪われるなど、周辺諸国から笑い物にされるだけでなく、その国の外交・軍事にも多大な悪影響が出てしまう。そのため、各国はISに関する情報を規制し、奪取されてもそれを公開しようとはしない。例えば手元にISが無くともそれが“外”に知られなければならないと変わらないからだ。

しかし、大国すら揺るがすISがこうもあっさりと、そして次々と奪取されている事態は軽視されていいものではない。

「不知火財閥も他人事^{うち}じゃないからな」

今のところ、秘密裏に行われているが、いつ大胆な行動に出るかわからない。ISを所持している限り、どこでもリスクは付いて回る。

「何も起こらなければいいが……」

着替えを終えた龍は気分転換も兼ねて海岸線沿いを歩きに出た。砂浜に戻っても奇異な目で見られるのは分かっていたので女子たちがいる方とは別の岩場が目立つ海岸沿いを龍は行ってみることにした。

「いい眺めだな」

適当な岩に腰を下ろす。

「さて、そろそろ人を付けるのは止めにしないか？」

龍が呟くと岩の陰から水着姿のシャルロットが現れた。

「ご、ごめん…」

「別に構わないが…何しに来たんだ？ 向こうで遊んでいる方が楽しいだろ」

シャルロットは何も言わず龍の横に腰を下ろした。

「僕はこっちの方が楽しい」

「……はあ」

二人は特に何かするわけでもなく、何も喋らずただ海を眺めていた。5分か10分経った時龍は持ってきていたアクセサリをシャルロットに手渡した。

「え？」

シャルロットは龍の突然の行動が理解できず少し動揺する。

「悪いが、シャルロットの期待しているようなものじゃない。それは量子変換されたリヴァイヴのアップグレード用パッケージだ」

シャルロットに渡したのは先程マリアから受け取った強化パッケージだった。

「ここだけの話、デュノア社の強化パッケージ『ガーデン・カーテン』をベースに改造した急造品だ。カタログスペックでは後期第3世代機クラスの戦闘能力があるが、代わりにかなりのじゃじゃ馬なセッティングになっている」

「じゃじゃ馬？」

「まず、防御機構『ガーデン・カーテン』は戦術データリンクと自動防御機構を合わせた自動防御追加装甲のアップグレード版に変更

された。その他に背部のマルチスラスターやスカート等も大きく仕様変更されている」

「もうデュノア社のパッケージじゃないね」

「そうだな、だが、それよりも大きな改造があったのは中身……ソフト関係だ」

「ソフト？」

「ああ、正式な戦術データリンクや高性能制御システムも今回パッケージ内に搭載されているだけでなく、パイロットのサポート及び複数の電子機器制御をするための試作支援コンピュータも搭載している。詳しいカタログスペックはそれをリヴァイヴにアップすれば見える」

「うん……」

シャルロットは少し残念そうにそう呟いた。どうやら龍からのプレゼントだと本気で思ったようだ。

「そういえば海にまで付けてきたのか、それ」

龍が指さす方向にはシャルロットの右腕に付けられた腕輪があった。それは先日龍本人がプレゼントしたあの腕輪だ。

「潮にやられたらあつという間に錆びるぞ」

「一応、保護フィルムで包んであるから。それに折角貰ったんだもん……」

大事そうにブレスレッドを抱き込むシャルロット。龍はそれ以上何も言わずボウと海を眺めていた。シャルロットも何も言わずその横に座って海を眺める。

「――暇だし、少し泳ぐか？」

「え？」

「幸い今泳ぐのには不便しないからな」

龍は雪風の左脚を武運展開して見せる。私用でのIS使用はルール違反だが、ばれなきゃ何も問題ない。

「シャルロットもその方が楽しいだろ？」

「うん！」

シャルロットが嬉しそうな顔をして海に飛び込む。龍はその様子を見て苦笑しつつそれに続く。

だが、龍は気付かなかった。自分たちを観察する視線に。

「……………」

異様に長い漆黒の髪の毛のせいで顔は分からないが、背格好から見て女性だろうか。彼女はジッと龍の後ろ姿を見ていた。

「……………」

彼女は龍たちに背を向けるとそのまま森の中へと消えていった。

「ん？」

何かを背に感じた龍は振り向いて周りの気配を探った。

（今……………微かにだが）

「龍、どうしたの？」

「——いや、何でもない」

周囲に誰もいないことを確認した龍はシャルロットの元に向かった。だが、龍の心の中では何故か先程感じた気配の印象が消えなかった。

第十四話くオーシャンズ・イレブンく（後書き）

どうも、マーズです。

第14話、龍の義姉『マリアース』登場。もっと普通な内容にするつもりが、何故か半分強はシリアスに……そして何より、海に来たのに色気が少ない……。

東さんの登場は次に見送りました。それよりも一夏がさらに空気化。それ以前に箒は今回N.O出演。だんだん可哀想になってきました。出さない自分が悪いのですが。

次は龍ではなく、女性陣に視点を合わせて書こうと考えています。そしてその後は箒の専用機登場。ああ、やっと彼女に日が当たる。

なんだか愚痴みたいな内容になってしまい、すいません。

今後の意見などがありましたら、感想のついでお書き下さい。

それでは、また次の更新の時に。

第十五話〈臨海学校の夜には〉

いろいろあった昼も終わり、今は夜。IS学園1年生たちは旅館の大宴会場で夕食を取っていた。

「しかし、高が学生如きにこれだけの海鮮盛りが出されるとは……」
どれも新鮮さ抜群の天然もの、特に鯛の刺身が絶品だ。

「こんなに美味しい刺身を食べたの僕、初めてだよ」

「俺だってそうだよ。てかシャルロット、生ものは大丈夫なのか？」
横で美味しそうに刺身を食べているシャルロットの様子を見る限り問題はなさそうだが、周りを見れば生の魚を食べることに拒絶反応を示している女子もいる。国によっては生の魚を食べる習慣などないし、宗教的な理由で食べれない子も多いからだ。

「うん、最初はちよつと怖かったけど、どれも美味しいよ」

どうやら刺身はシャルロットの口に召したようだ。

「本当に美味しいよね、IS学園も袖振りがいい事もあるね」

「ま、大人しく堪能しておくか、旨いものをタダで食べているわけだし……」

「りゅ、龍らしい意見だね」

龍の隣で苦笑いをするシャルロット。

「現実的と言ってほしいな……て、おいシャルロット。山葵わさびをそんなに入れるな」

隣では付け合わせの山葵を大量に箸で掴もうとしているシャルロットがいた。

「えっ、そうなの？」

「——いや、刺身の味を際立てる薬味みたいなものだから、別に構わないか」

「あ、そうなんだ」

龍の言葉を真に受けて刺身の上に大量の山葵を盛るシャルロット……その後に待っていることも知らずに。

（――面白そうだから何も言わないでおこう）

龍は喉まで上がってきていた静止の言葉を飲み込んだ。シャルロットは山盛りの山葵が乗った赤身を醤油に付け、それを口に運んだ。
「……ッン――！！！」

直後、シャルロットは目の見開き鼻を摘まんだ。大量の山葵が鼻から抜けたのだろう……その眼には涙が溜まっている。

「――言い忘れていたが、普通はこれぐらいで十分なんだぞ」

適量の山葵を赤身に乗せ、悶絶しているシャルロットを尻目に美味しく頂く。さらに香りのよいお茶を啜ってから龍は横のシャルロットに視線を移した。

「――すまん」

棒読みで全く誠意が感じられない謝罪。シャルロットはまだ鼻を摘まんで山葵と戦っている。

「――外国人は結構山葵が駄目な人がいるらしいが、シャルロットも例に漏れずの様だな」

お茶を差し出すとシャルロットはそれを受け取った。龍は一連のシャルロットの行動が面白すぎて笑いが堪えられなくなった。

「――はあ……りゅーうー！」

やっと立ち直ったシャルロットが龍を睨みつける。

「だからスマンと言っているだろう。で、初めての山葵はどんな味だった？」

「あ、味より鼻に何かが受けるような感覚の方が……」

「ま、こんな刺激物外国にはそうないからな。でも適量なら刺身の味が良くなるんだぞ？」

「うう……」

シャルロットは警戒しながらもう一度山葵を刺身に寄せ食べてみた。

「ふ、風味があっているね……お、美味しいよ……？」

一度強烈なのを経験したからかシャルロットは先程の様な醜態は見せず、作り笑顔まで見せてくれた。が、余り美味しそうには見え

ない。それでも美味しそうに見せる辺り彼女らしいというか何というか。

（超模範的な優等生発言だぞ、シャルロット……）

「シャルロット、無理に美味しそうに見せなくてもいいぞ。苦手なら苦手でもいいだろう？」

「で、でも折角出してくれているのに……」

苦手だけど食べなければ出してくれた人に悪い……何とも彼女らしい意見だ。そんな彼女に龍は少し苦笑いをして視線を周りに逃がした。

ふと部屋の隅で一人食べている筈が目に入った。彼女はクラスメイトと“楽しそう”に談笑しながら夕食を取っていた。剣道を習っていたせいなのか彼女の性格がそうさせるのかは分からないが、食べている時でも姿勢を崩さず背筋が伸びている。黒髪に浴衣姿も実に合っていて日本の美——大和撫子とでも証すべきか。

しかし、“1人”で食べてるとは珍しい事もあるものだ。普段は死骸に群がるハイエナのように、何が何でも一夏の周り張り付いているのに。一夏に視線を向けてみれば何故かセシリアに刺身を食べさせていた。筈の方を再び見ていると、まるで獲物を狙う猛獣の様な目で一夏を睨んでいる。しかし馬鹿な一夏は全く気付いていない。（——一夏と喧嘩した……その線は薄い。馬鹿な一夏が自分から距離を空ける筈がない、となれば……）

龍は赤味噌の味噌汁を口にしながら筈を観察した。クラスメイトの女子と会話を終えた筈が食事に戻るが、会話をしていた時の様な笑みは消えていた。

——何かある。龍の直感がそう告げた。

「——いいな……」

隣から羨ましそうな声が漏れる。視線を横に向けると一夏とセシリアのやり取りをジッと見ているシャルロットがいた。

「……」

（ま、さっき苛めたこともあるしな）

「…シャルロット」

「何、龍？」

振り向いたシャルロットの目の前に刺身を差し出す。

「――して欲しいんだろ、あいつ等みたいに？」

「えっ？」

何を言われたのか分からなかったシャルロットは首をかしげた。

すぐに龍の言葉の意味を理解し顔を赤くした。

「な、何のこと？」

「ああ、そうか。俺の“気のせい”だったか……スマンスマン」
箸を戻そうとする。

「あ……」

シャルロットが声を上げる。

「――どうする？」

再びの問いかけ。

「うう……」

顔を赤くしながら葛藤するシャルロット。

「……意地悪」

上目づかいの上、涙の溜まった瞳……。流石にこれ以上は苛めすぎかもしれない。龍本人からしたらもっとやりたいのが本音だが。

龍はしょうがないと言いたげな顔をしながら刺身をシャルロットの口元に持っていく。

「ほら……あゝん」

「ん……」

シャルロットは赤い顔をして差し出された刺身を口にする。

「旨いか？」

「――うん」

顔を伏せたシャルロットはそういうだけで背一杯だった。

「あゝ！！ 不知火君、デュノアさんに――ッ！！」

と今を見ていた斜め前の女子が騒ぎ出す。

「いいな……不知火君、私も！！」

「私も私も——ッ！」

「ちょっと邪魔しないでよ！！！」

「あなたがどきなさいよ！！！」

あつという間に龍の周りに浴衣姿の女子が集まってきた。皆湯上りで肌が少し赤く、押し悶着のせいで浴衣が着崩れている。水滴が項に沿って流れ落ちるのは何とも言えない色気があり男心を攪る。

（しまった……不用意に変なことをしちゃったから）

龍は己のミスを痛感した。その間にもまるでひな鳥のような女子たちが群がってくる。普通の男なら喜ぶシチュエーション間違いなしだが、いかんせん龍は常人よりも自制心が強い。女体に囲まれても平静を何とか保っていた。しかしいつまでも耐えられるほど龍は聖人ではない。

額から汗が流れ落ちた頃、襖が行き良いよく開いた。

「あなた達、これ以上お口が滑るようなら裸で海岸を走らすわよ
30kmくらい」

龍の義姉で今はIS学園の臨時教師であるマリアヌ・ラインフォードがナイフをチラつかせながら笑顔でそう言った。さあ——と血の気の失せた女子たちが一斉に散らばる。

「そうそう、淑女たるものお淑やかにね。私いい子は大好きよ」

ナイフの刃があやしく光る。もはや注意や警告を通り越して脅しの領域だ。

「愚弟、あなたも口説くなら時と場所を選びなさい」

「姉さん、俺はそんなつもりはない」

「分かっているわよ。それと今の私は教師だからちゃんとしなさい」

「——了解です、ラインフォード先生」

「よろしい」

襖が閉じられる。先程とは打って変わって宴会場は静かな場に変わった。ある意味、千冬以上の権力を持っている……流石は龍の姉だ。

夕食を早めに終えた龍は昼間休憩に使っていたエントランスのソファに腰を下ろして改修が施された時雨のカタログスペックに目を通していた。

「おいおい……戦争でもおっ始める気かよ、レイラ」

それがカタログスペックを読んだ龍の時雨に対する第一印象だ。

（確かに開発コンセプトの事を考えると納得のいく装備だが……それでもやり過ぎた。総火力こそ強襲重装備型に及ばないが……高機動戦闘型を超える……）

龍は飛びなれた愛機に対して少なからず恐怖を感じた。

（今までの時雨が子供に見えてくるな……いや本来のスペックならこれぐらい想定範囲か）

今までの時雨は後発機のためのデータ取り、技術実証機兼技術実験機の意味合いが強かった。だが、今回の時雨はそのどちらでもない。紛れもない“本当の実戦仕様”だ。

（だが、これがあれば……）

カタ……。

足音が聞こえた。龍は素早く端末の空中投影をカットした。今他者に時雨の事を知られるわけにはいかない。

「――なんだ、鈴か」

「うん……」

現れたのは意外なことに鈴だった。鈴は無言で龍の隣に腰を下ろす。

「――調子はどうだ？」

龍は昼の事を気遣った。だが、鈴は何も応えない。

「――昼は……有り難う」

ポツリと鈴はそう呟いた。

「別に気にすることじゃない。それよりも大事なくて良かったよ。友人に死なれちゃ目覚めも悪いしな」

龍はわざと軽い口調でそう答えた。

「そ、そう……。べ、別にあたしが泳げないってわけじゃないからね！ あ、あの時は偶然脚を攣って」

「そうやって慌てているところを見るとどうも怪しいな」

「あ、あんたね……」

拳をプルプルと震わす鈴。どうやら小馬鹿にされたことが気に食わないらしい。

「それよりもこんなところに居ていいのか？ 折角臨海学校に来ているんだ“あいつ”のところにでも行ってこいよ」

「あ……うん……」

ストーンツと鈴はソファに腰を落とした。どうやら悩みの種は“そっち”の方らしい。

「何だ、また一夏と何かあったのか？」

「べ、別にそういうわけじゃないけど……」

鈴は言葉を濁す。

「言ってくれば愚痴を聞いてやることも相談に乗ることも出来るが、言ってくれなきゃ何も出来んぞ」

少々きつめの口調で龍はそう言い放った。傍から見れば龍の言い分は少し身勝手に聞こえるが、それが当人が通してきたやり方だ。そして鈴もそのこと理解している。だからこそ龍に相談している。

「――相変わらずね、アンタも……」

「人間、そう変わるもんじゃないからな。俺からしたら鈴もそう変わってないよ」

「――そうかも」

クスリと笑う鈴。少しはいつもの調子が出てきたようだ。

「――ちよっとね、昼間のことで」

「やっぱり溺れたところを助けてくれるのはあいつの方が良かったか？」

龍は単刀直入に鈴が話そうとしている話題の核心をついた。

「そ、そういうことじゃなくて……」

龍の言葉を否定する鈴だが、その後の言葉が出てこない。

（――この先は聞かない方が鈴のためだな）

話題を変えようかと思った時、龍の携帯端末に通信が入った。

（――マリア姉さん？）

「何か用か、姉さん？」

『――先生と呼びなさい、それよりもそこら辺に凰さんいるかしら？』

（鈴を探している？）

「ああ、近くにいますか？」

『――丁度いいわ、直ぐに千冬の部屋まで読んで頂戴』
「何でだ？」

『――来れば分かるわ、それとあなたも来なさい』

「――了解、5分で行く」

『――待ってるわ』

一方的に通信が切られる。

「鈴、すまないが相談は別の機会だ」

「え、どうしてよ」

「お呼びがかかった」

鈴を連れて千冬（教師）の部屋に向かう。

「――何をやっているんだ？」

「さあ……」

部屋の前まで来てみると箒とセシリアがドアに張り付いて、まるで隣部屋の“アレ”な行為を盗み聞きしている隣人のような下品な行動をしている。

（いや、流石に教師の部屋でそんな無謀なことをする筈がないか……）

山田先生の部屋ならまだしも千冬の部屋はマリアの部屋でもある。鬼の巣窟でそんな命知らずな真似を出来る奴を龍は知らない。

その間も箒とセシリアはその耳をドアに押し当て、さらに両目を

血走らせながら盗み聞きしている。

「――何かキモイわね…」

鈴が素直な感想を述べる。龍はそれに激しく同意したい気分だ。

「――あいつらがいたんじゃ中には入れないな……」

龍が棒読みでそうつぶやく。

「そうね……」

鈴もそれに棒読みで答える。二人は互いに頷くと足音を殺して二人の背後に回った。龍は携帯端末の拡声機能をONにして鈴にそれを手渡す。それを受け取った鈴は膝を曲げて二人の耳元に端末を当てる。鈴の口元が少しつり上がる。どうやら二人に対して悪戯が出来るのが楽しくて仕方がないようだ。

「――ワァッ！」

鈴の声が端末のスピーカーから増幅されて二人の耳に轟く。

「うわっ?!」

「きゃっ?!」

箒とセシリアの肩が跳ね上がる。

「「へブッ?!」」

その直後、ドアが開き二人の顔面を殴打した。

「あら、来てたのなら声をかけなさいよ」

「掛けづらい状況だったからな、姉さん」

龍がマリアの足元で鼻を押さえている馬鹿二人を指さす。

「ん? まあ、いいわ。あなた達も入りなさい」

マリアに招かれ、部屋の中に入る。中に入ってみると布団に横になった千冬と彼女の背中を指圧する一夏の姿がいた。

「――実の姉に何をやっているんだ、お前は?」

「変な誤解するな、只のマッサージだよ」

グイと千冬の背中を指圧する一夏。

「ふああッ!」

ツボでも押されたのか、千冬が艶めかしい声を上げる。視覚情報を断てば実の姉弟が○○（自主規制）チックな行為をしているよう

に聞こえなくもない。

（早とちりの馬鹿二人もそうだが、無自覚なコイツも万死に値するな）

勿論、龍とマリアは率先してそんなことはしない。少なくとも龍からは。

「リユー君……」

「俺にマッサージのスキルはないよ、姉さん。頼むのならその馬鹿にしておいてくれ」

「お姉さまとのスキンシップを取ろうとは思わないの？」

「――何がお姉さまだ、もうすぐいい年だって……」

刹那、龍の目に光る何かが映った。龍は咄嗟に首を左に振って振れを避ける。

カッン！！

木製の柱に深々と突き刺さるナイフ。勿論投げたのは龍のお姉さまことマリアアヌだ。

「――何か言ったかしら？」

キラリと手の中のナイフが怪しく光る。

「――いや、何も」

「――そう」

マリアはナイフを太もみに巻かれたベルトに収納した。龍と違い、マリアは手持ちのナイフを太もものベルトに指している。そのため出し入れの時、その美しく艶めかしい美脚を抜き出しにしてしまう。しかも今着ているのは浴衣。普段以上に色気が抜群だ。

箒やセシリアはその完成された美に羨望も眼差しを送り、ため息を漏らしている。鈴に至ってはかなり悔しそうだ。自分も体形とマリアを比較してしまったのだろう。

「ま、いいわ。残りの二人も来たみたいだし」

「二人……？」

ドアの方を見ていると浴衣姿のシャルロットとラウラが立っていた。二人とも一夏と千冬のを聞いていたためか少し顔が赤い。

「さてとこれで全員揃ったわね、千冬、そろそろ始めましょ」

「そうだな、一夏お前はもう一度風呂にでも入ってこい、部屋を汗臭くされては困る」

「んじゃ、そうする」

「リユー君もそうしなさいな。偶には男同士で語り合うのも悪くないでしょう」

マリアはやんわりとそう龍に声をかけた。

（――つまり、女同士で話をするから場を開けろってことか）

龍はそこからマリアの言いたい事を読みとった。

「――男と入る趣味はないが、まあ、偶には良いだろう。さっさと行くぞ、一夏」

「ちょ、待てよ龍」

龍は早々と部屋を出ていく。その後に着替えとタオルを持った一夏が続く。

龍たちが部屋を出て行ったところでシャルロット達は千冬とマリアからジューズという名の賄賂を受けていた。

「そういえば、こうやって千冬とお酒を飲み交わすのは数年ぶりね」

「初めてお前に無理矢理飲まれた酒の事は今でもよく覚えている」

「あなた、危なく急性アルコール症になりかけたっけ？ ホントあの時は大変だったわ」

「っ？！ それはお前が私に無理矢理酒を進め続けたからだろうが！！」

缶ビールを片手に昔話に花を咲かせる教師二人。そんな中取り残された生徒。因みに今はまだ勤務時間内扱いであり、勿論飲酒だと以ての外である。しかし、先程千冬とマリアから賄賂を受け取ってしまったシャルロット達はそれを糾弾することはできない。最も二人の豪快な酒の飲みっぷりと日頃とのギャップを感じて殆どが言葉を失っているが。

「さて、前座はこれぐらいにして肝心の本題に入りましょうか」

缶ビールを机に置いたマリアはまるで玩具を与えられた子供の様な顔をした。

「あなた達、リ्यू君と一夏君どちらが好きなのかしら？」

「「「えっ?!」」」

マリアの意外というか予想外の問いに全員が素っ頓狂な声を上げる。

「少なくとも篠ノ乃ちゃんと凰ちゃん、オルコットちゃんは一夏君狙いでしょ？」

「あいつのどこがいいのか、私にはさっぱりだがな」

3本目の缶ビールに口をつけながら千冬が愚痴る。

「弟に厳しいわね、千冬は」

「お前が甘すぎるんだ」

「あら、私だって厳しい時は厳しいのよ? あなたと違って飴と“

ナイフ”の使いどころが上手いだけ」

「そこは“ナイフ”ではなく“鞭”だろうが……で、お前たちあいつのどこがいいんだ？」

千冬が改めて聞き返してくる。

「わ、私は別に……ただ前より剣の腕が落ちているのが気に食わないだけで」

誤魔化すようにラムネを煽る筈。

「あたしはただの腐れ縁で、久しぶりに会った龍と一緒に構ってあげているだけだし……」

スポーツドリンクを飲み終えた鈴はその空になったペットボトルを転がしながらたどたく言う。

「わ、わたくしはただクラス代表としてしっかりやってほしいだけです」

セシリアがその目を吊り上げて少し怒ったような口調でそう言う。

「うんうん、それじゃ私がそれを誇張した上で一夏君に伝えておくわね」

「「言わなくていいですッ!!」」

素早くマリアの言葉を否定する3人。そんな3人の反応を見て「つまらないの……」とマリアは愚痴る。コロンとマリアの手から離れた空き缶が畳の上を転がる。また缶ビールが1本空になった。

「――シャルロット”ちゃんはどうかしら?”」

マリアが次の獲物とばかりシャルロットに食いつく。

「ぼ、僕は……龍の事がす……きです……」

顔を真っ赤にしながらシャルロットはポツリとその本音を漏らした。

「うんうん、やっぱりリュウ君がいいわよね、シャルロットちゃんは男を見る目があるわ」

酔いが回っているのかほろ酔い気分のマリアがその豊満な胸にシャルロットを抱き込む。

「ね、ね、リュウ君のどこが好き？」

「え、え……と……いざって時に助けてくれて、傍にいて……くれるところ……です」

プシューとシャルロットから湯気が上がる。どうやらオーバーヒートの様だ。

「やはり、デュノアはラインフォードの事が好きか……で、ボーデヴィツヒはどちらが好みなんだ？」

今まで一言も発していなかったラウラはびくつと身体を竦ませながら言葉を紡ぎ始めた。

「私は……一夏の事が好き……だと思います」

だと思……含みのある言い回しを見逃すほど二人は酔ってはいなかった。

「その言い方だと……リュウ君の事も少しは気にしているのかしら？」

「龍は……好きというか……」

ラウラは言葉を詰まらす。

「……強いて言うなら“憧れ”でしょうか」

「“憧れ”？」

「彼は……私と違って己の力に溺れず、“真の力”というものを私に見せてくれました」

「真の力……ね」

「私にとって龍は目標であり、超えるべき壁………みたいな存在です」

「でも、好きなのは一夏君なのね」

「は、はい……」

「どこら辺が良かったの？」

「強いところが、でしょうか……」

「いや弱いだろう」

自分の弟の事なのに千冬は何でもないようにそう言った。だが、ラウラは珍しく教官である彼女に食ってかかった。

「強いです……少なくとも私よりは」

「そうかね……」

「強さでいったらリュウ君の方が断然上ね」

うるさいぞ——と千冬がマリアの言葉を滅殺する。

「ま、強いかどうかは別としてあいつと付き合える女は得だな。家事は一通り出来るし、マッサージも上手い。お前たち、欲しいか？」

「「「くれるんですか?!」」」

「やるか馬鹿者」

箒やセシリア、鈴たちが心底残念そうにする。貰えたら本気で貰うつもりだったようだ。

「女なら奪うぐらいの気持ちでいないでどうする」

「同感ね、色恋沙汰の前にまずは女の磨きなさい、小娘のままじゃ相手も振り向いてはくれないわよ」

千冬とマリアは実に楽しそうにそう言い放った。

その頃、男湯では……。

「はあゝ、極楽極楽……」

「おっさん臭いから止めてくれ」

男二人、仲良く？露天風呂を堪能していた。

「しかし、千冬姉は皆集めていったい何をしようとしたのかな？」

「――馬鹿は知らなくていい事さ」

「おい、バカって俺のことか？」

「他に誰がいる……普通になんか女同士で恋話でもしているんだろ」

しれっと一夏の事を貶しながら龍は簡略に説明した。

「それよりもお前はもう少し自分の事を気にしろ」

「ん？ 何をだ？」

「度を超すと馬どころかISで吹き飛ばされて死ぬぞ」

「うん？ 言っている意味が分からないんだが……」

「――いつその事死んでくれ。そうすれば少しは俺の溜飲が下がる」

「苦勞しているんだな、龍」

「――てめえのせいだな」

頼むからその万死に値する鈍感を直してくれ……龍は心の中でそう叫んだ。因みに口にしないのはしても意味が無いことが分かり切っているためだ。

「俺は髪の毛洗ってくるけど、龍はどうする？」

「もうしばらく、この景色を堪能させてもらうさ」

この旅館自慢の露天風呂からは夜空と波間の景色が一望できる設計になっている。特に天井が無い分、晴れた夜空がよく見てついい首を上に向けてしまう。

「これで一人風呂なら格別なんだけどな……」

波間の音を邪魔するように聞こえてくる一夏の鼻歌。しかも微妙に音程がずれている辺りが余計腹立たしい。耳障りな雑音を無視しながら龍は凝った身体を解した。脚を骨折しているように見えるため片足歩きをしているのだからいつも以上に疲れるのは仕方がないが、どうにかならないものかと考えてしまう。

「明日何も無ければやつと普通の生活に戻れるんだが」

臨海学校は3日間を予定しているが、3日目は帰り支度と最後の自由時間だけで特に気にするようなことはない。問題は明日2日目なのだ。

「仕掛けてくるとしたら明日か……」

ちょうどISの実技演習及び各専用機の新型パッケージの同時性能試験、邪魔するには打って付のイベントだ。

「どうなる事やら……」

どうやら龍の悩みは入浴中も潰えないようだ。

第十五話く臨海学校の夜にはく（後書き）

どうもマーズです。

大学の合間を縫って書きました。

ただ前話同様余り面白い内容に出来ませんでした（汗）。

ただ、現在執筆を勧めている次話は力を入れた話を書こうと頑張っているのかご期待下さい。

後、本作とは全く関係ありませんが、今まで使っていなかった活動報告を今回から使用する事にしました。

実は今までこの存在知りませんでした（苦笑）

今話だけでなく雪風に関するご意見・ご感想がありましたら、一言
お願い致します。

第十六話〈シン・レッド・ライン〉

臨海学校の2日目、IS学園の生徒たちは早めに朝食を済ませ、全員ISスーツを着用し実習用のISや用具類の準備に勤しんでいた。因みに専用機持ちは各々準備があるため、普通の生徒とは別行動で浜辺から少し離れた岩場に集合していた。

（こんなところあるとはな……）

ちょうど龍たちが集まっている場所は三方を崖に囲まれた地形のプライベートビーチだった。外部から見られにくい地形に加え、それなりの広さもあるので全員でISを展開しても問題なく活動できる。まさ試験^{テスト}にはもってこいの場所だ。

（だが……解せない）

竜の視線が後ろに向けられる。そこには本来いる筈のない人物……篠ノ乃箒が立っていた。しかも着用しているISスーツはIS学園標準のレギュラースーツではなく各パイロットに合わせて調整されたオートクチュールのISスーツ。早い話、箒は“専用機持ち専用スーツ”を身につけ、“専用機持ち”が集まるこの場に立っているのだ。だが、彼女の専用機は無い。その上でこの場にいるとは言うことは。

（そんな馬鹿な、箒のIS適性はC程度の筈……専用機持ちになるのなら、最低でもBプラスはなければ——いや、それ以前に日本の代表候補生は既に決まっている。例えば箒に適性があっても席がない筈だ。それなのに）

そこに千冬とマリアがやってきた。

「全員しろっているな。それから篠ノ之……」

「はい」

「お前には今日から専用——」

「ち——ちゃ——んっ!!」

上から声が聞こえる。見上げてみると人の形をした何かが降って

きた。

「……………」

千冬は身体を1歩分横にずらした。直後、崖の上から落ちてきた物体が砂浜にめり込んだ――。

「トォーッ！」

だが、その物体はヒーローの様な決め台詞を言いながらくると一回転して着地して見せた。

「……束」

「ちーちゃん、おひさー！ さあ、ハグハグしよう、私たちの愛をたしかめ……ヘブツ?!」

千冬は猿のように飛びかかってきた束の顔面を片手で掴むとそのまま吊り上げた。

「ちーちゃん、痛い！ 痛いよ、指食いこんでる!!」

「だったら黙っていてくれ、お前がいると話がややこしくなる」

そう言う千冬は束を解放した。束の顔に赤い指の跡が付いているのはご愛敬である。

「やあ！」

「どうも……」

箒は務めて事務的に応答する。

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何人ぶりかなあ……大きくなくなってね、特に胸が」

「バァン!!」

「殴りますよ」

「な、殴ってから言ったー！ しかも木刀で殴った!!」

束が喚き出す。しかし、今のやり取りから二人の関係が浅からぬものだということも理解できた。

(束……箒と知り合い……篠ノ之……束……篠ノ之束?!)

「IS開発者“篠ノ之束”……」

「およっ？」

束の視線が龍に移る。箒から離れた束は龍を物珍しいものを見る

ような目で見ながら不敵に笑った。

「やあ、“もう一人の男性IS操縦者”——『君が龍・S・ラインフォード』君だね？」

龍は束の言葉の中に何かしらの含みを感じた。

「——数年前に行方を眩ました“稀代の天才科学者様”が、何でここにいる？」

「さあさあ、どうしてでしょ？」

それだけ言うと束は一夏の元に行き、「いっくん、久しぶりだね、箒ちゃんとイチャイチャしている？」などと場の空気を読まない質問をした。そして一夏は「まあ、適当にしています」などと言ってはならない言葉を口にする。勿論、その言葉を聞いた彼女たちが静かに怒り狂っていることにも気づかずにだ。

「うんうん、相変わらずだね、いっくんは」

一夏を弄り倒した束は続いてマリアに矛先を向けた。

「やあやあマリちゃんもお久！ 相変わらず巨乳……グベツ?!」
手をワキワキさせながら近づいてきた束にマリアは回し蹴りを鳩尾にたたき込んでやった。直撃を受けた束はそのまま砂浜に顔をめり込ます。さらにマリアは乱れた髪を後ろに回し、その美脚で束の頭を砂にねじり込むように埋めた。勿論、ヒールの先が食い込むようにだ。

「そ、それで頼んでおいたものは用意できたんですか？」

箒が躊躇い気味に……しかし期待した声で束に尋ねる。それを聞いた束は砂の中から華麗に飛び上がりポーズを決めた。

「うっふっふ、既に準備は出来てるよ、さあ大空をご覧あれ!!」
束に釣られて上を見てみると上空から猛スピードで降ってくる物体があった。

「——落ちるな」

刹那、落下物が砂浜に落着いた。

「ゴホゴホッ……一体何ですか?!」

「私が知るはずないでしょ！ ゴホッ！」

「爆撃か?!」

「ラウラ、落ち着いて……ゴホゴホッ!」

舞い上がった砂煙でシャルロット達が盛大にせき込む。龍は口元を押さえなが落下物に目を向けた。正八面体の構造物で表面には金属光沢がある。大きさは2mはあろうか砂浜に突き刺さるような状態で立っていた。

束がリモコンの様なものを操作すると突然突風が吹き、正八面体の構造物の中から紅色のISが出てきた。

「じゃじゃーん! これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿』!! 全スベックで現行ISを凌駕している束さんお手製のスーパーなISだよっ」

「これが——私の専用機……!」

箒が隠しきれない喜びを言葉にして表現する。

「さあ箒ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズを始めようか! 私が補佐するからすぐに終わるよん♪」

「……それでは、頼みます」

先ほどとは打って変わって冷静さを取り戻した箒が束を促す。

「堅いよ。実の姉妹なんだし、こうもつとキャッチーな呼び方で——」

「はやく、始めましょう」

「んゝまあ、そうだね。じゃあ始めようか」

束がリモコンのボタンを押すと、紅椿の装甲が割れて操縦者を受け入れる状態に移った。しかも自動で膝を落とし乗り込みやすい姿勢に変わった。

「箒ちゃんのデータはある程度先行して入れてあるから、後は最新のデータに更新するだけだね。さて、び、ぽ、ぽ♪」

コンソールを開いて各部にケーブルを接続する束。さらに空中投影ディスプレイを6枚同時に表示し、手元に空中投影キーボードを表示し、めまぐるしく表示される紅椿のデータを新たなデータに更新し直していく。

「近接戦闘を基礎に万能型に調整してあるからすぐに馴染むと思うよ。後、自動支援装備も付けておいたからね！」

「それは、どうも」

「んー、ふ、ふ、ふふー♪ 箒ちゃん、また剣の腕前が上がったねえ。筋肉の付き方を見れば分かるよ。お姉ちゃんは鼻が高いなあ」
しゃべっている間も束の手はまったく休まず、もの数分で最適化と微調整を済ませてしまった。

「ーはい、フィッティング終了、超速いね、流石私♪」

ケーブルをパージされた紅椿は先程よりも澄んだ…そして濃い真紅の色になっていた。微調整が施され正式に箒専用機となったからだろう。

周りにいる一夏やセシリア、鈴、ラウラやシャルロットも箒の専用機に興味津々の中……。

「……」

龍だけは険しい顔でいた。

（さっきのやり取りを聞いた限りだと、箒が篠ノ乃東に専用機を頼んだようだな……）

当の箒は紅椿がついに自分のものになった事が嬉しいのか笑みを浮かべながら紅椿の事を見ていた。

（ー行方不明だったはずの篠ノ乃東と連絡を取り合っていたという事は“前もって連絡方法を教えられていた”か“篠ノ乃東から掛けられてきた”のどちらかだな）

先程の二人のやり取りを思い返してみると、どうやら今回のことは“箒”から頼まれた事のようにだった。その事から考えて篠ノ乃東から連絡が来た線は薄いと言える。

（ーつまり、箒が望んで、専用機を用意してもらったって事か）
現状から考えてまず間違いないだろう。

（ー多少の自尊心はあるかと思っていたが……結局は他力本願か）
龍は舌打ちをした。今この場で起きている全ての事が気に食わなくて仕方がなかった。他力本願であるのにそれを自らの力のように

“勘違い”している筈も……自分のこと以外何も考えずに行動している篠ノ乃束も……それらに対して全く疑問を感じず肯定している、この場にいる者全員にも……。

「――反吐が出る」

抑えきれない負の感情が湧き出てくる。

「いっくん、ちょっと白式見せて。どんな成長をしているか私興味津々♪」

「は、はいっ」

「うん、じゃこっちに来て――後……」

束の視線が横に流れる。

「きみも見せてもらおうよ」

束の視線の先には龍が立っていた。当然、この場にいる殆どの者が束に見せる思ったが。

「――見せる義務も道理も無いですね」

龍はそれを冷めた口調で切り捨てた。

「――私はISを作った張本人だよ、そして君のISのコアも私が作ったの」

「ならあなたは、車を作っている人に全ての車の所有権があると言うんですか？ 天才と謳われている割には常識が欠如していますね。見ていて痛々しいですよ」

同情と軽蔑の眼差しを送りながら強い口調で龍は続けた。

「現在する全てのIS及びそのコアは国際法に則って国家に配分されています。つまりISの所有権もコアの所有権もそれを所有する国家に帰属します。そしてそれにはISのスペックデータも含まれています。生みの親だが高だかは知りませんが、法的にはこちらの所有物です。あなたの“命令”に従う理由は皆目ありません」

「……」

「そして俺にはGTI――不知火財閥の利益を守る義務がある。あなたが時雨の情報を他に流さないと誰が証明できるんですか？ 勿論、証明できるのならお見せしましょう。包み隠さず全てを、ね」

言うべきことを言い終えた龍は挑戦的な目で篠ノ乃束を睨んだ。

「……ふーん、そんな事言っちゃうんだ」

冷酷ささえ感じられる冷めた声……。一触即発のような緊張感がこの場を包む。だが、その緊張の糸は意外な人物によって解かれた。

「――龍、それくらいにしておきなさい」

今まで口を閉じていたマリアが穏やかな口調で諭す。

「ここで言い争いをしても仕方が無いでしょう。“こちら側”が譲歩することで丸く収まるならそれに越したことはないわ」

「……」

「あなたの心情は手に取るようにわかるけど今は止めておきなさい――無用な血を流す必要はないわ」

「――ちっ、分かったよ姉さん……見せればいいんだろう、見せれば」

マリアに諭され、ようやく龍は引いた。だが、納得はしていないのかその顔には不満が残っている。

「さっさと確認するのならしてください。俺も暇じゃないんで」

時雨の右腕を部分展開した龍はそれを束に差し出した。

「はいはい♪ じゃあ、いつくんも白式を出してくれる？」

「は、はい」

一夏も龍に習って白式を展開するが、龍と違いイメージや指向性が弱いせいか腕だけでなく肩まで展開してしまった。束は2機の装甲板を解放し、そこにケーブルを接続しパーソナルデータをディスプレイに表示した。

「んー二人とも不思議なフラグメントマップを築いているね。男の子だからかな？」

束の言ったフラグメントマップとは個々のISが戦闘データを蓄積していくことで形成されるパーソナライズの成長過程のことである。特に専用機の場合、同操縦者が長期間ISを操縦するためフラグメントマップが独特なものになる場合がある。

「束さん、そのことなんですけど。何で男である俺がISを使える

んですか？」

「ん？ んんどうしてだろうね？ ナノ単位まで分解すれば分かるかも知れないけどやってみる？」

「いい訳ないでしょ……」

「にやはは、そう言うと思ったよ。まあ、ISって自己進化するようにつってあるから成長の中でそんな事になっても不思議じゃないし、そのせいかな？ あははっ」

適当な事を言い勝手に納得する束。

「そういえば、君は気にならないわけ？」

束が隣の龍に質問を投げかける。

「何がですか？」

「男なのにISが使える理由……」

「別に、気にならないと言えば嘘になるが、特段気にしたことはない。ISが動く、その程度の認識で十分です」

「つまり、結果が全てってこと？」

「違いますよ、結果がこうだから在りのままを受け入れているだけです。仮に1秒後にISが使えなくなったとしてもそれは変わりません」

「ふんん」

一夏の白式の確認を終えた束は続いて時雨のデータ解析に移る。

「んん？」

「今度は何ですか？」

龍の目の前で束が首を傾げる。だが、束は龍の問いかけなど全く耳を貸さずにその細い指を走らせ、空中投影キーボードのキーを連打した。

「……………いっくんでもない君が…ね」

ポツリと束がそんな言葉を漏らした。彼女の指が高速で動いて何かを入力する。

「……一体何なんですか？」

「……うん、何でもないよ」

ディスプレイを閉じた束は興味が冷めたのかさっさと龍から箒の元へ移動した。

「さあさあ、箒ちゃん、紅椿のテストしてみよっか。調整は済んでいるから箒ちゃんのイメージ通りに動くはずだよ」

「ええ。それでは試してみます」

意識を集中する箒。次の瞬間には、紅椿は各部のスラスタを点火し天に舞い上がった。飛翔時の衝撃波で砂が巻き上げられる。紅椿は一瞬で上空300フィート程まで垂直上昇した後、まるで新型機の機動性能を見せつけるかのように凄まじい機動力で三次元高機動を披露した。

「どうどう？ 箒ちゃんが思っていた以上に動くでしょ？」

『ええ、ええ、まあ……』

（思っていた以上……だと？）

龍は束の言葉と箒の反応に一瞬言葉を失った。ISの操縦は既存の兵器と大きく異なり、パイロットの意識、特にイメージによってコントロールされる。これはイメージ・インターフェイスと呼ばれるシステムによりパイロットのイメージがISに伝わり、それに合わせて機体制御が行われるからだ。このシステムを利用して第3世代機では特殊兵装の制御を行っているが、言い返せばこれはパイロットが正しい知識を持った上で精密かつ高速なイメージングが出来なければ機体を制御することはできないことを指す。従ってパイロットのイメージングよりも機体の動きが先行する事はソフト面の問題により起きえない……。

「これならどんなに難しい機動でも楽々でしょ♪」

『はい、楽に制御できます』

はずだった。だが、今まさにISの常識を逸脱した事象が目の前で起きている。

（どういうことだ？ 高機動に慣れた俺ならともかく、高機動をまともにやった事もない箒が何故あそこまで複雑な動きが出来るんだ？）

高機動……特にその格闘機動は豊富な経験と培ってきた感覚がものを言う。龍も何十時間と、ISよりも劣る機体で音速下の訓練を積んだからこそ今のスキルを身につける事が出来た。

（あの機体には、パイロットのイメージングを補正するシステムか何かがあるのか？）

「じゃあ、刀使ってみようか！右のが『雨月』^{あまづき}で、左のが『空裂』^{からわれ}ね。武器特性のデータ送るよん♪」

データを受け取った箒が右手の雨月を構え、突きをしてみると複数のエネルギー弾が生成され放たれた。数十発の赤い光弾はそのまま真っ直ぐに突き進み、雲に風穴をこじ開けた。射程距離はサブマリンガンよりも多少マシな程度だが、たった一撃でアサルトライフルの斉射と同等の破壊力があるのは間違いない。

「うんうん、それじゃ次にこれ撃ち落としてみてね。いっくよ」
続けて束は16連装ミサイルランチャーをコールし、全弾発射した。

「箒——ッ！」

『——やれる、紅椿なら！』

その通り、箒は一夏の心配などものともせず、空裂^{からわれ}の一振りですべてのミサイルを撃墜して見せた。

「すげえ……」

「やるな」

一夏たちが箒の紅椿の性能に圧倒され魅了されている中……龍は冷静に、そして冷めた眼差しで紅椿を——箒を見ていた。

「お、織斑先生ッ！！」

そこに相当慌てた様子の山田先生が走ってきた。

「どうした？」

「こ、これをッ！」

持ってきた携帯端末を千冬に渡す。

「特務任務レベルA、現時刻より対策を始められたし……」

「そ、それが、ハワイでテストしてた——」

「しっ、山田先生、機密事項を口にするな」

「す、すいませんっ……」

「専用機持ちちは？」

「1名を除いて全員います」

「よし、分かった。山田先生は他の先生に連絡を」

「わ、分かりましたっ！」

山田先生が走り去った所で、千冬が手を叩いて全員を集めた。

「現時刻を持ってIS学園教員は特務行動に移る。専用機持ちちは全員集合しろ、それと……篠ノ之も来い！」

「はい！」

箒が下りてくる。他の者も急いで旅館に戻る中、龍は一人海の方を見ていた。

（特務行動……さっきの山田先生の慌てようから考えて…）

「――来たな」

それに応えるように待機モードの時雨の鎖が音奏でた。

「では、現状を説明する」

旅館の一室に集められた専用機持ち。部屋には複数のディスプレイがあり、簡易CICの様な状態になっている。そのくせ部屋は和室なので異様なミスマッチ感が否めない。

「約2時間前、ハワイ沖で試験稼働にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型軍用IS『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルが制御下を離れ暴走。試験空域より離脱したという連絡が入った」

千冬の言葉に一夏と箒を除いた専用機持ち全員が気を引き締めた。「その後の監視衛星による追跡により、福音はここから2km沖合を通過する事が分かった。時間にして約50分後、学園上層部からの通達により我々がこの事態に対処することになった」

「教員は学園の訓練用ISで作戦空域及び海域の封鎖を行う。よって今作戦は専用機持ちに担当してもらう」

千冬の言葉にこの場にいた全員が息を呑んだ。

「では、これより作戦会議を始める。意見の有る者は挙手しろ」

「はい」

逸早くセシリアが手を上げた。

「目標のISの詳細なスペックデータを要求します」

「分かった。ただし、これらは二カ国の最重要軍事機密だ。けして口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君らには査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる」

「了解しました」

大型投影ディスプレイに福音のスペックデータが表示された。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしのISと同じくオールレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だわ……しかもスペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから、向こうが有利……」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。新しい強化パッケージはあるけど、それでどこまで対抗できるか……」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルも分からん。偵察は行えないのですか？」

「偵察は無理だな。福音は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は時速1500km/hを越える。アプローチは一回が限界だろう」

「一回きりのチャンス……ということとはやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

山田先生の言葉に全員一が夏を見た。

「え……？」

一夏は「何で俺を見るんだ？」的な顔をした。事態を全く飲み込めていないようだ。

「あんたの白式の零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね。ただ、問題は――」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね」

「エネルギーは全部零落白夜に回さないと一発で落とせないだろうから」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるISでなければいけない。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう必要だ」

一夏を無視してどんな話が進んでいく。ようやく自分の置かれている事態を理解した一夏は慌てて立ち上がり抗議を始める。

「ちよっ、ちよっと待ってくれ！ お、俺が行くのか！？」

「「「当然」」」」

「ユニゾンで言うなよッ！」

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟がないなら無理強いはいはしない」

千冬の容赦のない言葉に一瞬腰の引けた一夏だが、プライドかすぐさま何でもないような顔をし「やります。俺が、やってみせます」と安易な答えを千冬に返した。

「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度が出せるのは――」

「それならわたくしのブルー・ティアーズが。ちょうどイギリスから強襲用高機動パッケージ（ストライク・ガンナー）が送られていますし、超高感度ハイパーセンサーもあります」

「オルコット、超音速下での訓練時間は？」

「20時間です」

「よし、それなら適任――」

「――異議有り」

突如出た声に千冬の言葉が遮られる。

「龍……？」

隣のシャルロットが声をかけてくるが、龍はそれを無視した。

「今作戦内容及び人選の変更を要求する」

龍の言葉にシャルロットは目を見開き、千冬は僅かにその目を細めた。

「――理由を聞こう」

「――説明する前に幾つか確認したいことがあります。まず一つ、今作戦の目標である『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルの止めると千冬さんは言いましたが、米国のオーダーに何らかの制約……もしくは要求はありましたか？」

「ISを止める……それ以外に何がある」

「その優先度は？」

ピクツと千冬の眉が動いた。龍の言いたい事が分かってしまったようだ。

「『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルの撃破は最優先事項……これに間違いはないんですね？」

「ああ」

「では『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルの撃破が最優先であり、“搭乗者の生死は今作戦に考慮しなくとも良い”――米国……学園上層部の意向はそういうことですね？」

龍の言葉にシャルロットが……そして自ら作戦に志願した一夏が息を呑んだ。

「――あくまで今作戦の目標は福音の撃破だ。それ以下でもそれ上でもない」

「俺が確認しているのは作戦内容ではなく今作戦をオーダーした米・学園の意向です。あなたともあろう人が話を逸らさないで欲しいですね、俺を失望させないでください」

「……」

千冬は何も言わない。

「――だんまりですか。まあ、いいです。次に先程そちらが提示した進路予想データですが、何を根拠に2km先と割り出したんですか？ 仮に福音が平均速度1500km/hで飛行していると仮定してもまだここから1000km以上離れた太平洋上に居る筈です。この先、進路を転進する可能も捨てきれないのでは？」

「……」

「そして、実働部隊の主戦力を専用機持ち……それも一番練度の

低い一夏を選択した点についても聞きたいですね。あなたは実の弟をむざむざ見殺しにするつもりですか？」

坦々と……しかし力の入った龍の言葉が部屋の中に響いた。

「――言いたい事はそれだけか？」

「――結局、何も言わずじまいですか……実戦を離れ過ぎて腕どころか思考まで腐ったようですね」

「お、おいっ！」

龍の漏らした“千冬への暴言”にとうとう堪忍袋の緒が切れたのか、自分の能力が不当に低く見られたと“勘違い”してか……激情に流された一夏の手が龍の首に延びた。

「まるで俺が何もできないような口ぶりで、しかも千冬姉の事を馬鹿にしやがって——ッ！」

⋮

「それに怪我人のくせに文句を付けるなよっ！」

「二夏、止めてッ」

一夏を止めようとシャルロットが手を伸ばすが、龍はそれを右手で制止した。

「その手を離せ、俺が話をしているのはお前じゃない」

そう言うた龍は“左手”で一夏の腕を捻り伏せた。

「ッ！？お前！」

「これはお前が経験してきた“生温いお遊戯”じゃないんだよ。すっこんでいろ——甘ちゃんが」

一瞬龍の声色が別人の様なものになつた。一夏は龍の変化に戸惑つたのか手を離し数歩後ろに下がった。いや正確には彼の覇氣に押されたと言ふべきか。龍は両手両足の簡易ギブスを外すと自力で立ち上がった。

「作戦の実働部隊は教員を中心に構成、専用機持ちを投入するとしても練度の高いラウラ・シャルロット・鈴・セシリアだけにしてバツクアップまたは予備戦力とするべきです。もしそれが気に食わないのなら――」

その時、襖を歩き良いよく開く音が龍の言葉を遮った。

「――我々不知火財閥の民間軍事会社“不知火・セキュリティ・サービス（SSS）”が今一件を引き受けましょう」

開いた襖から不敵な笑みを浮かべたマリアが出てきた。

「因みに今なら特別割引価格な上に、現場への速達デリバリー、トラブル処理のプロフェッショナルの3点セットが付いてくるわよ、千冬」

手慣れた様子で携帯端末をディスプレイに接続するマリア。ディスプレイにはSSSから回されてきた展開可能な戦力とその詳細データ、そして現在海上を巡航している福音と展開可能な部隊の位置を示したマップが表示された。

「日本に駐留しているSSS機動部隊と現在日本から300海里離れた海上でマニユールバーテストを行っているGTIの試作量産型ISを即時展開可能よ。料金はIS一機とテストの護衛を行っている直援の一個分隊を基本料金に、使用火器や部隊に合わせてベッドされるわ」

「――姉さん」

龍は驚いた顔でマリアを見た。

（何で姉さんが俺の仕込んで置いたSSSの機動部隊を全て把握しているんだッ?!）

龍は今回起きるであろうと考えていた不測の事態の対応策として、表向き新型のテストとして既に完成している試作量産型第三代軍用IS1機と即時展開可能な1個分隊、さらには日本のGTI支部に先日運び込まれたFA-2を予備戦力として確保していた。これはSSS所属のソフィア、そして一連の事件に危機感を持っていた不知火源一郎が龍の無茶な頼みを聞いてくれたからこそ実現できたものだった。そして今回の仕込みは全て外に漏れないように極秘裏に進められた。だが……。

（まさか、姉さんは俺の仕込みに気付いて学園の教員に……）

「詰めが甘いわね、愚弟。私にバレない様に事を運べる筈が無いで

しょう」

そう言うとマリアは龍に近づき、右手を振り上げ龍の頬を叩いた。
パンッ！！

乾いた音が部屋に響く。龍は打たれた頬を抑えながら義姉を睨みつけた。

「――馬鹿ね、あなた一人で何とかできると本当に思っていたのかしら？」

「どういう意味だよ、姉さん」

「――怪我の事を誤魔化していた事が何よりの証拠でしょう」
「……………」

龍は痛い所を突かれ押し黙る他なかった。マリアはそんな龍に一瞥をくれた後、千冬に対して強い口調で諭した。

「千冬、今は現場裁量で動く時よ、決めるなら直ぐに動かなければ……………」

「だが、決定打に欠ける」

「そ〜れ〜な〜ら〜♪」

いきなり天井が開き、何か降ってきた。

「とうっ！」

効果音を付けるならシュタツだろうか、見事に1回転を決めてディスプレイのど真ん中に立ちあがったのは篠ノ之束だった。

（厄介者が面倒なタイミングで……）

「ここ断然、紅椿の出番なんだよ！」

「なに？」

「紅椿のスペックデータ見てみて！」

数枚のディスプレイが千冬を囲むようにして現れた。

「紅椿の展開装甲を調整してほしいほいほいと。ホラ！ これでスピードはばっちり！ プラスいっくんも支援もカンペキ〜！」

ディスプレイには筈の専用機――紅椿のスペックデータがずらりと表示されていた。そしてそのデータをみた千冬は僅かに顔色を変えた。

「説明しましよーそうしましよー。展開装甲というのはだね、この天才の束さんが作った第四世代型ISの新型装備なんだよー♪」束がさらりとんでもないことを口にした。

（第四……だと……？）

現実味のない話に龍は逆冷静になったが、周りの……特に一夏などは驚きを声を上げる。

「はーい、ここで心優しい束さんの解説ーあ、いっくんのためのね。まず、第一世代というのは『ISの完成』を目標とした機体だね。次が『後付武装による多様化』——これが第二世代。そして第三世代が『操縦者のイメージ・インターフェイスを利用した特殊兵器の実装』。空間圧作用兵器にBT兵器、後AICとか色々だね。……それで第四世代というのが『パッケージ換装を必要としない万能機』と言う現在絶賛机上の空論中のもの。はい、いっくん理解できました？」

「は、はあ……。え、いや、えーと……？」

「うんうん、先生は優秀な子が好きだよー。それでね、この展開装甲は白式の《雪片式型》に私用されてまーす。試しに私が突っ込んで！？」

「「えっ？」」

この場にいる殆どの目が一夏に注がれる。いや正確には一夏の白式にだが。

「それで上手くいったので何と何と紅椿は全身を展開装甲にしてありまーす。システム最大稼働時にはスペックをさらに倍プッシュだ★」

右手でVサインを作る束。その姿はまるで自分が作ったものを自慢する無邪気な子供のそのようだ。

「ちよっ、ちよっと、ちよっと待ってください。え、全身？ 全身が雪片式型と同じ？ それって……」

「うん、無茶苦茶強いね。一言で言う最強だね」

最強……確かに話を聞いているだけでは今までのISとは一線を

引くようだが、性能の優劣とは本来カタログスペックだけで決められるものではない。

（だが、仮に紅椿が第四世代と言わしめるほどのスペックがあるのなら現軍事バランスは必ず崩壊する——）

それは当然の結果といえるだろう。そしてその先に待っているのは……。

「ちなみに紅椿の展開装甲はより発展したタイプだから攻撃・防御・機動と用途に応じて切り替えが可能。これぞ第四世代型の目標である即時万能対応機^{リアルタイム・マルチロール・アクトレス}てやつだね。にやはは、私が早くも作っちゃったよ——！！　はにゃ？　何で皆お通夜みたいな顔してるの？　誰か死んだ？」

「——束、言っただぞ。やりすぎるな、と」

「そうだったけ？　えへへ、つつい熱中したったんだよう。あ、でも紅椿はまだ完全体じゃないし、そんな顔しないでよ、ちーちゃん。いっくんも、いっくんが暗いと束さんはイタズラしたくなっちゃうよん」

手をワキワキさせながら一夏に迫る束。千冬がそれを出席簿で滅殺する。一度畳に沈む束だが、すぐさま復活し今までの話の補足説明を始める。

「まー、あれだね。今の話は紅椿のスペックをフルに引き出したら、って話だからね。でもまあ、今回の作戦をこなすくらいは夕飯前だよ！」

「——束、紅椿の調整にはどれくらいの時間が掛かる？」

「七分あれば余裕だね♪」

「千冬——」

マリアが非難めいた声を千冬に掛けた。だが千冬はそれを手で制した。それでもマリアは続ける。

「本気なの？　リスクコントロールの点から見てもあの子たちにはやらせるのは危険過ぎるわ——」

「織斑先生——っ！」

突然箒が立ち上がった。

「一夏と“私”なら、全く問題ありません、必ず成功させて見せます!!」

自身に満ち溢れた箒の声……そしてその表情。彼女はさらにこう続けた。

「それに私と一夏のISは“第四世代機”です、第三世代のIS程度に後れを取るなど、絶対にありません!」

自分の発言の補完か、機体性能差の点からも自分たちが出るべきだと固くない説明する箒。龍は直感的にそこに潜む危険を感じ取った。そしてマリアもどのような不安を感じたのだろう、感情を押し殺した声でもう一度だけ千冬に質問する。

「――あなたが何を根拠にこの選択をしたのか私には理解できないけど……その先に待っている結果に責任を持てないようなら止めておきなさい」

その言葉に千冬の眉間がピクツと反応した。

「――責任だと?」

「ええ、そうよ。あなたが思っているほど現実には甘くはないわ」

千冬は目を細め、微かな苛立ちを滲ませながら応える。

「私を誰だと思っている? 下らない質問をするな」

それを聞いたマリアは一度眼を伏せるとあっさりと身を引いた。これ以上聞くべきことはないのだろう。

「――そうね、下らない質問だったわ……… “貴女は、知らないものね”……」

最後に漏れたマリアの独り言……最後の言葉は余りに小さく弱々しいかったので千冬の耳には届かなかった。

「ちーちゃん、結局どうするの?」

マリアが場所を空けると同時に束が千冬を煽る。もしかしたら彼女はこれを見越していたのではないだろうか。千冬は一つ考えるような仕草をしてからこちらに向き直った。

「よし。では本作戦では織斑・篠ノ之の両名による目標の追跡及び

撃墜を目的とする。作戦開始は30分後。各員、ただちに準備に掛かれ」

パンツと織斑先生が手を叩いた。この場にいた教師たちがすぐさま準備にかかり、一夏や箒も周りの者から作戦に関するレクチャーを受ける。

そんな中、一人満足そうな笑みを浮かべている束がいた。そしてそれをジッと、殺意を込めて見ている龍の姿があった。

第十六話くシン・レッド・ラインく（後書き）

どうもマーズです。

自分で書いといて何ですが、
めっちゃ暗い！

龍君が最近黒くなっている気がします。
黒くしているのは自分ですが（苦笑）

さてさて第3巻もいよいよ後半戦、次話は時雨と福音の命を掛けた
死闘が――！
的な展開を頑張って書こうと考えているのでご期待下さい。

ではでは、またの更新の時まで m (_ _) m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9066q/>

IS《インフィニット・ストラトス》—雪風—

2011年11月5日00時07分発行